岩　比　田

——埼玉県大里郡江南村岩比田遺跡発掘調査報告——

1983年3月

岩比田遺跡調査会

序　　文

江南村は比企丘陵の北端に位置し，洪積台地には，県指定文化財の塩古墳群，踊る埴輪で名をあげた野原古墳群等尊い先人の遺跡が随所に埋蔵されています。江南村ではこれ等の文化財を大切に保存管理し，長く教材として活用したいと努力しています。

たまたま，昭和52年２月，県費単独板井土地改良圃場整備事業を進めるうち岩比田地区から縄文期より平安期にかけてのものと思われる土器の破片を発見したことから，県文化財保護課の協力を得て緊急発掘調査を行いました。

その結果，古墳時代から平安時代の集落が，いくつかの時代にわたり重なったものと思われ，平安時代，南北朝時代の井戸跡２ヵ所をはじめ貴重な出土品等，学術的に大きな成果をあげることが出来ました。特に平安初期の円面硯は本県では稀少の出土であり，この地に文字の書ける特定の人が住んでいたことが推測され，政治的に重要な場所で文化の中心地のイメージが強まりました。

私たちはこれ等の文化財に接し，先人の築いた偉大な文化と貴重な遺産に唯々頭のさがる思いです。願わくはこの尊い遺産を充分活用して，よりよい地域社会の建設に役立てて行きたいと存じます。

この発掘調査に当って，極めてご多忙の中にもかかわらず発掘調査を担当していただきました，県立歴史資料館副館長兼調査研究部長金井塚良一先生，学芸員高橋一夫先生をはじめ大東文化大，国学院大，東洋大の考古学専攻生，嵐山町考古学サークルの皆さま，並びにご協力いただいた県当局，土地改良事務所の方々及び地元の方々に深く感謝申し上げます。

昭和56年2月10日

江南村教育委員会教育長　小　島　孫　一

例　　言

1. 『岩比田—岩比田遺跡発掘調査報告書』は，1977年に，岩比田遺跡発掘調査会がおこなった岩比田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 岩比田遺跡の発掘調査は，大里郡江南村板井地区の圃場整備事業に伴う事前調査として実施された行政発掘である。江南村教育委員会と板井地区土地改良組合が，別稿のように岩比田遺跡発掘調査会を組織して発掘調査の主体となり，金井塚良一が，依頼されて担当者となった。
3. 発掘調査は，岩比田遺跡調査団が中心になっておこなったが，村当局並びに板井地区の方々から多大の協力をいただいた。
4. 発掘調査後の整理作業，又挿図・図版の作成等は，県立歴史資料館の御好意によって，県立歴史資料館の諸施設を利用しておこなった。なお整理作業と作図作業に従事した者は次のとおりである。

   小渕　良樹．植木　　弘．村上　光一．中村　和夫．小野美代子．田中　照子．辻沢貴美江．金井塚厚志．宮島　秀夫．新井　　端

5. 出土遺物の中，井戸状遺構から出土した木製品・植物遺体（ひょうたん）等は，元興寺文化財保存処理センターに依頼して，保存処理をおこなった。
6. 報告書の執筆は，発掘調査に参加した調査員が分担し，金井塚が全体を通覧した。
7. 編集は金井塚と小渕が担当した。
8. 岩比田遺跡調査会の構成は次のとおりである。

（岩比田遺跡調査会）

会　　長	小島　孫一（江南村教育委員会教育長）
理　　事	小田川喜栄（江南村板井土地改良区理事長）
	吉野　　博（　〃　副理事長）
	持田　宗昌（江南村文化財保護審議委員）
事務局	永田三千里（江南村教育委員会，次長）
	小沢　八郎（　〃　社会教育委員）
調査担当者	金井塚良一（歴史資料館副館長）
	高橋　一夫（　〃　学芸員）
調査員	小渕　良樹，伊藤　研志，植木　　弘
調査補助員	秋山　匡俊，新井　邦夫，太田　　勝，小山　利行，小久保隆義，菅野　政子，田島　洋之，中村和夫，村上　光一
	（大東文化大学考古学研究会）
	小沢　鈴子，吉野　てい，笠原　信子，志田　はな，志田　ぬい，宇治川静子，富岡秀子，小沢　繁松，小川　鶴芳，吉野　ふく，森　　憲吉，寺　山こう，寺山　政子，吉野てる子，宇治川さだ子，吉野　むら，飯島　その，関口よね子，権田ちよ子，佐藤　かね，小田川喜栄，大久保節子，吉沢　久二，飯島　政子，増田　つる
	（板井地区住民）

発掘調査協力者

塩野　　博（埼玉県教育局文化財保護課）
柿沼　幹夫（　〃　）
飯田　充晴（所沢市教育委員会）
中島規視生（　〃　）
嵐山町考古学研究サークル

目　　次

序　　文　　江南村教育長　小　島　孫　一

例　　言

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地……1

2　周辺の遺跡……2

Ⅱ　発掘調査の経過

1　発掘調査に至った事情……5

2　発掘調査経過（日誌抄）……6

Ⅲ　遺構と遺物

1　遺構の概観……13

2　竪穴住居址と出土遺物……14

第1号住居址……16

第2号住居址……17

第3号住居址……18

第4号住居址……24

第5号住居址……24

第6号住居址……26

第7号住居址……28

第8号住居址……29

第9号住居址……32

第10号住居址……34

第11号住居址……36

第12号住居址……37

第13号住居址……39

第14号住居址……38

第15号住居址……39

第16号住居址……40

第17号住居址……41

第18号住居址……42
第19号住居址……43
第20号住居址……45
第21号住居址……48
第22号住居址……49
第23号住居址……50
第24号住居址……51
第25号住居址……52
第26号住居址……53
第27号住居址……56
第28号住居址……57
第29号住居址……60
3　その他の遺構と遺物……63
1）土　壙……63
2）井　戸……64
3）柱穴群……66
4）溝……66
5）木製品……69
6）植物遺体（ひょうたん）……71
7）板石塔婆……72
Ⅳ　考　　察
1　出土遺物の検討……73
1）縄文時代の遺物……73
(1)　土器　　(2)　石器
2）土師器・須恵器……79
(1)　土師器　　(2)　須恵器　　(3)　時期区分
3）円面硯について……85
2　岩比田遺跡の形成……87
1）遺物による竪穴住居址の分類……87
2）古墳時代の集落……88
3）平安時代の集落……89
4）中世の遺構……89
5）岩比田遺跡の性格……90
付篇　ひょうたんの保存処理……91

挿　図　目　次

第１図　岩比田遺跡とその周辺……1
第２図　岩比田遺跡全測図……折込
第３図　第１・２・３号住居址……14
第４図　第１号住居址カマド……15
第５図　第２号住居址東カマド……15
第６図　第２号住居址北カマド……16
第７図　第３号住居址カマド……17
第８図　第１号住居址出土遺物（１）……19
第９図　第１号住居址出土遺物（２）……20
第10図　第２号住居址出土遺物……21
第11図　第３号住居址出土遺物……23
第12図　第４号住居址……24
第13図　第５号住居址……25
第14図　第６号住居址……26
第15図　第６号住居址出土遺物……27
第16図　第７号住居址カマド……28
第17図　第８号住居址カマド……29
第18図　第７号・８号住居址……折込
第19図　第７号住居址出土遺物（１）……31
第20図　第７号住居址出土遺物（２）……32
第21図　第９号住居址カマド……32
第22図　第９号住居址……33
第23図　第９号・10号住居址出土遺物……34
第24図　第10号・11号住居址……35
第25図　第11号住居址カマド……36
第26図　第10号住居址出土遺物（２）……36
第27図　第12号・15号住居址……38
第28図　第12号住居址カマド……39
第29図　第13号・14号住居址……折込
第30図　第16号住居址・第２溝……40
第31図　第16号住居址出土遺物……41
第32図　第18号住居址……42

第33図　第19号住居址……43
第34図　第19号住居址カマド……44
第35図　第18号・19号住居址出土遺物……45
第36図　第20号住居址東カマド……45
第37図　第20号・21号住居址……46
第38図　第20号住居址北カマド……47
第39図　第20号住居址出土遺物……47
第40図　第21号住居址出土遺物……48
第41図　第23号住居址カマド……49
第42図　第23号住居址出土遺物……50
第43図　第24号住居址……52
第44図　第24号住居址カマド……53
第45図　第25号住居址・第２井戸……54
第46図　第25号住居址カマド……55
第47図　第26号住居址……55
第48図　第27号住居址……56
第49図　第17号・28号住居址……58
第50図　第28号住居址カマド……59
第51図　第28号住居址出土遺物……59
第52図　第29号住居址カマド……60
第53図　第１土壙群……61
第54図　第２土壙群……63
第55図　第１井戸出土遺物……64
第56図　第２井戸出土遺物（１）鉢・すり鉢・焙烙……65
第57図　第２井戸出土遺物（２）板石塔婆……66
第58図　柱穴群……折込
第59図　第１・２・３号溝……67
第60図　土壙・井戸・表土出土遺物……68
第61図　第１井戸出土木製品（曲物）……70
第62図　曲物側板・想定復原模式図……71
第63図　ひょうたん実測図……71
第64図　板石塔婆拓影……72
第65図　表土出土縄文式土器（１）……74
第66図　表土出土縄文式土器（２）……75
第67図　縄文式土器実測図……76
第68図　縄文時代石器（１）……77

第69図　縄文時代石器（２）……78
第70図　須恵器坏口径・底径比図……80
第71図　ひょうたん……89
第72図　板石塔婆（１・２）の種字と紀年銘……93

図　版　目　次

図版１　1. 出雲伊波比神社
2. 出雲伊波比神社遠景
図版２　3. 遺跡全景（南から）
4. 遺跡全景（西から）
図版３　5. 第１・２・３号住居址
6. 第１号住居址カマド
図版４　7. 第１号住居址カマド
8. 第１号住居址遺物出土
図版５　9. 第１号住居址遺物出土状態
10. 第２号住居址カマド
図版６　11. 第２号住居址出土遺物
12. 第３号住居址カマド
図版７　13. 第４号住居址
14. 第４号住居址遺物出土状態
図版８　15. 第５号住居址
16. 第５号住居址カマド
図版９　17. 第６号住居址
18. 第６号住居址カマド
図版10　19. 第７・８号住居址
20. 第７・８号住居址カマド
図版11　21. 第７号住居址カマド
22. 第８号住居址カマド
図版12　23. 第９号住居址
24. 第９号住居址カマド
図版13　25. 第９号住居址カマド
26. 第９号住居址カマド
図版14　27. 第10・11号住居址
28. 第11号住居址カマド
図版15　29. 中央部住居址群
30. 第15号(左)・第12号住居址
図版16　31. 第12号住居址
32. 第12号住居址カマド
図版17　33. 第13（右），第14（左）号住居址
34. 第15号住居址
図版18　35. 第15号住居址カマド
36. 第１溝・第11号住居址・第25溝
図版19　37. 第16号住居址遺物出土状態
38. 西方遺構群第28号・第17号住居址
図版20　39. 第17号住居址
40. 第17号住居址カマド
図版21　41. 第19号住居址
42. 第19号住居址カマド
図版22　43. 第20号住居址東カマド
44. 第20号住居址北カマド
図版23　45. 第20号住居址遺物出土状態
46. 第21号住居址円面硯出土状態
図版24　47. 第23号住居址カマド
48. 第24号住居址カマド
図版25　49. 第25号住居址・第２号井戸
50. 第25号住居址カマド
図版26　51. 第27号住居址
52. 西方住居址群

図版27　53. 第28号住居址
54. 第28号住居址遺物出土状態
図版28　55. 第28号住居址遺物出土状態
56. 第28号住居址カマド
図版29　57. 第29号住居址カマド
58. 遺跡全景(西方より)
図版30　59. 第1土壙群・第2土壙群
60. 第1土壙群
図版31　61. 土壙
62. 土壙
図版32　63. 第1号井戸
64. 〃　ひょうたん出土状態
図版33　65. 第2号井戸
66. 〃　板石塔婆出土状態
図版34　67. 第1・2溝
68. 第1号号溝
図版35　69. 第4号溝
70. 第2号溝
図版36　71. 第3号溝
72. 発掘風景
図版37　73. 出土遺物(1)—須恵器
図版38　74. 〃　(2)—土師器
図版39　75. 出土遺物(3)—土師器
図版40　76. 〃　(4)—円面硯・支柱・焙烙
図版41　77. 〃　(5)—ひょうたん・板石塔婆・土錘
図版42　78. 〃　(6)—縄文土器・砥石・石斧

Ⅰ　遺跡の立地と環境

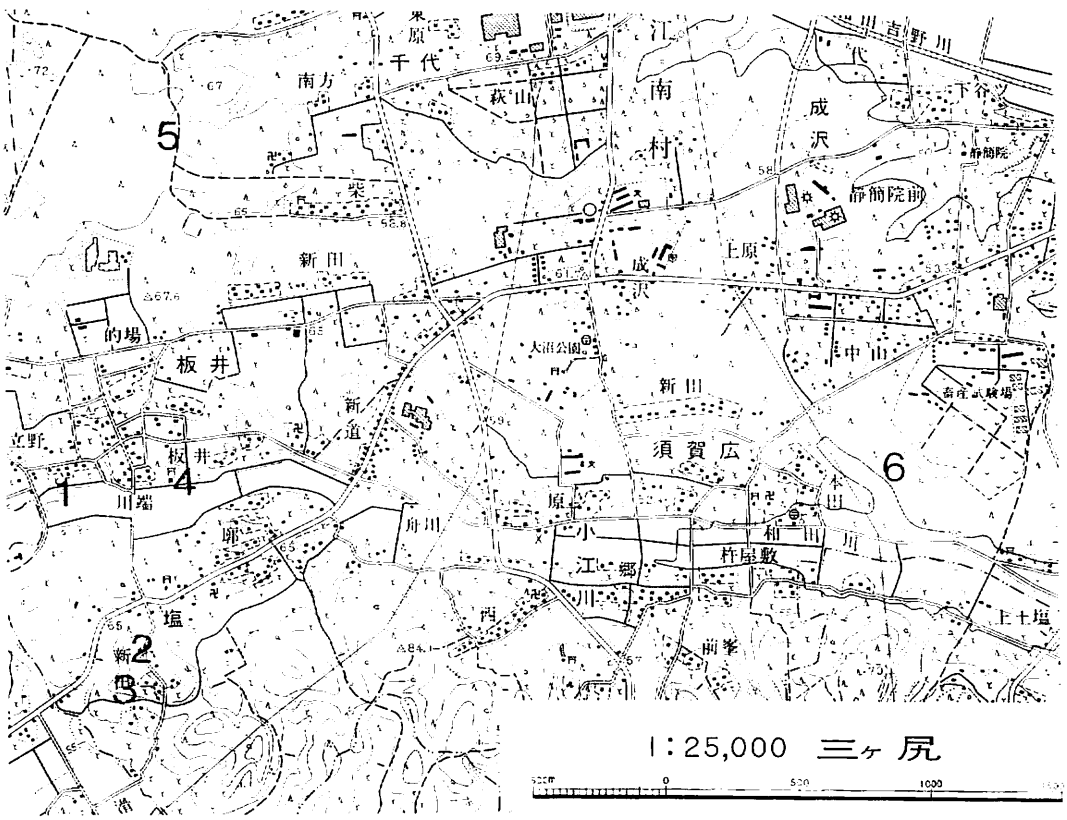
1. 遺跡の立地

岩比田遺跡は，埼玉県大里郡江南村大字板井字岩比田地内に所在する。

大里郡江南村は，荒川右岸に形成された広大な洪積台地（江南台地）上に占地している。台地の北側は，荒川の広い段丘面に漸移するが，南側は小江川（和田川）によって北部比企丘陵の小支丘から区画されている。岩比田遺跡はこの台地の南西端，台地の縁部が次第に小江川の沖積地帯に移行する，末端部分に形成されていた。

岩比田遺跡の範囲は，現状によって確実に把握することは困難であったが，土器片の分布によって想定すれば，台地の緩斜面上かなり広汎な範囲を占有していると推定された。おそらく内容は，更にいくつかの小単位に区分されるだろう。われわれが今回発掘調査した発掘区域も，実際は，台地の一部が小江川の沖積地に突出して，自然堤防状に残存した微高地上に所在する岩比田遺跡の一部だったのである。

発掘区域は，現状は，小江川によって洪積台地から隔離された独立した微地形を形成していた。



第1図　岩比田遺跡とその周辺

1 岩比田遺跡，2 塩古墳群，3 塩前遺跡，4 出雲乃伊波比神社，5 寺内廃寺，6 野原古墳群

われわれは発掘当初，あるいはこの区域は洪積台地とは形成を異にした独立地形で，遺跡はむしろ，岩比田遺跡から切り離して把握することが妥当であろうと考えた。発掘調査の結果微地形の実態が明瞭になり，しかも小江川の流路の変遷が，古老の伝承によって明らかにされて，この区域が洪積台地の緩斜面に連続する岩比田遺跡の一部であることが明確となったのである。

発掘区域は，北側小江川に接する箇所は，南方の水田面との比高は約50cmを測ったが，南側は次第に緩傾斜して洪積地に移行し，微高地と水田面との境は，地形的には全く認められなくなる。発掘調査によって，発掘区域の北側約半分の範囲からローム層が確認された。しかもローム層は，小江川によって台地から切断されていて，この地形も台地と連続していたことを明瞭に示していた。おそらく小江川は，古老の伝承のように，現在の微高地の南方を流れていたが，後に河川改修によって人口的に流路が変えられて，現在の流れになったのであろう。微高地の南側は，水田面に次第に傾斜して，先端は水田面との比高差がほとんど認められなくなる（第１図)。

2. 周辺の遺跡

岩比田遺跡が立地する江南村の台地上に形成された原始・古代の遺跡については，すでに江南村教育委員会が詳細な分布調査を実施している(1)。ここではこの報告を参考にして，とくに岩比田遺跡周辺の遺跡を観察し，岩比田遺跡をめぐる歴史的環境を概観しておきたい。

原始　岩比田遺跡周辺で確認された縄文時代の遺跡は，今のところ稀少であった。江南村教育委員会が実施した分布調査によっても，岩比田遺跡周辺に所在する縄文時代の遺跡は，塩前遺跡・宝光寺北裏遺跡の二遺跡にすぎなかった。しかも二つの遺跡は，いずれも土器片が散布するだけで，遺跡の内容は不明だったのである。二つの遺跡のほかに，あるいは今後縄文時代の遺跡が確認されるかもしれないが，現在の知見では，岩比田遺跡周辺では，縄文時代（弥生時代の遺跡も確認されていない）には，まだとりわけて大きな遺跡の形成は，進展していなかったと考えざるを得ない。

古代　古墳時代になって，岩比田遺跡の周辺では遺跡が増加する。1980年に江南村教育委員会が実施した遺跡所在調査によれば，板井地内には金山・永川・塩西・塩前遺跡等数ヶ所で遺跡が確認された。しかも，塩・板井地内に多くの古墳も築造されて，この時期に，和田川流域を中心にした岩比田遺跡周辺の活発な開発が推測されたのである。

岩比田遺跡周辺の古墳時代の遺跡の中で，発掘調査によってその性格が追跡されたのは，塩前遺跡であった。報告書によれば，塩前遺跡から検出された古墳時代の遺構は，竪穴住居址１ヶ所と古墳址二基にすぎなかったが，遺跡の立地とまた遺物の分布範囲を考慮すると，この遺跡はかなり広範な場所を占地していたと考えてよいだろう(2)。

塩前遺跡の発掘で，とくに注目されたのは和泉期に比定される竪穴住居址の存在であった。この発掘調査が，塩地内の農業用道路拡幅改良事業に伴う事前調査であったために，限定された発掘区域の中で，検出された竪穴住居址は４ヶ所にすぎなかったが，出土した土器によって，明瞭に和泉期と規定されている(3)。

和泉期の竪穴住居址は，従来北企地方では出土例が僅少であった。吉見町久米田遺跡・東松山市

五領遺跡C区等で，和泉式土器を出土する竪穴住居址が確認されているが，竪穴住居址群の構成や，この土器の存続期間等はまだ明確に把握されていない。(4)

塩前遺跡は，今まで不明な比企地方の和泉期の理解に，新資料を加えることになった。しかも遺跡の立地を考慮すると，ここには更に多数の，同時期の竪穴住居址が埋没している可能性も考えられた。塩前遺跡とその周辺は，今後の発掘調査の進展によっては，比企地方の和泉期の問題を解明する，最も重要な遺跡としてクローズアップされてくるにちがいない。

塩古墳群　塩地内の山林中に所在する塩古墳群は，「県内では珍らしい帆立貝式前方後内墳2基を中心」に，21基の古墳が密集する古墳群として，早くから注目されていた。1960年に県の史跡に指定されているが，指定の理由は，個々の「古墳が密集し」，しかも「帆立貝式の前方後円墳も県内では稀で」，「古墳群研究の資料として貴重である」と評価されたからであった。(5)

塩古墳群の形成は，個々の古墳の出土遺物が不明で，確実な築造時期が明らかではなかったが，帆立貝式の前方後円墳の存在と，密集する古墳の分布状況が主として勘案されて，6世紀前半と推定されていた。

塩古墳群にあたえられた以上のような評価は，その後多くの研究者に採用された。そしてこれがいわば塩古墳群の理解の定説として踏襲されてきたのであるが，最近，菅谷浩之・坂本和俊の両氏が，塩古墳群の精密な測量調査を実施し，その成果を基盤にして，2基の帆立貝式前方後円を前方後方墳，他の小円墳群は方墳の可能性が強いことを明らかにされた。これまでの塩古墳群の理解を止揚して，むしろ「前方後方墳と方墳群」という新たな解釈を提出されたのである。しかも出現時期を4世紀第四4半期と推定して，「今後の調査によっては方形周溝墓群として捉えられる」という従来の理解を根本的に否定する重要な見解も提示されたのであった。(6)

塩古墳群は，個々の古墳があまりにも近接しすぎていた。帆立貝式と想定された19号・20号墳も，仔細に観察すれば，むしろ前方後方墳と想定しておかしくない墳形であった。6世紀前半という時期比定も，「帆立貝式前方後円墳が存在する」という把握を前提としたもので，それ以外具体的な根拠となるものは存在していなかったのである。したがって，塩古墳群を初期古墳の系譜の中で問題意識的に再検討すれば，当然，従来の理解の不自然さは指摘できたはずであるが，それが進展しなかったところに，これまでの古墳研究の未熟さがあったと考えなければならないだろう。

菅谷氏と坂本氏は，このような従来の古墳研究の限界を見事に突破されて，塩古墳群の正当な理解を大きく前進させた。塩古墳群は両氏によって「6世紀前半」の「帆立貝式前方後円墳を含む古墳群」から，4世紀後半の方形周溝墓の系譜を継承する「前方後方墳と方墳群」と位置づけられたのである。最近，塩前遺跡や塩西遺跡等，塩地内で確認された五領期の竪穴住居址群や方形周溝墓群は，(7)塩地内の開発が意外に早かったことを次々に明らかにして，両氏の着眼の正しさを補完している。今後塩地内の調査が一層進展し，塩古墳群の分析が更に精緻になっていけば，塩古墳群は，北武蔵の古墳を，方形周溝墓の形成との関連の中で追跡できる，最も重要な遺跡として評価されてくるだろう。

出雲伊波比神社　岩比田遺跡の東方約500m距た微高地上に出雲伊波神社がある。社伝によれば祭神は武甕槌命である。別に大己貴命（『神名帳考証』・『神祇志料』・『大日本史』），天穂日命（『神

名帳考証』・菱沼勇『武蔵の古社』）を祭神とする説もある。文明年間に鹿島明神が合祀された。

『鹿島社由緒』は，板井の出雲乃伊波比神社が，古くは延喜武内社だったと伝えている。平安時代末期（久安３年）に長命寺の持社となり，室町時代（文明年間）に，長命寺の僧法印良恭が鹿島明神を合祀して以後鹿島信仰が盛行し，本来の出雲乃伊波比神社の社号も衰退したという。その後明治になって，神仏分離後次第に復興し，明治28年に再び社号が復活した。明治40年には神饌幣帛料供進の指定をうけている。『新編武蔵風土記稿』も，板井の出雲乃伊波比神社を，「神名帳に載る出雲乃伊波比神社なりと云。社地老杉の繁茂せるさま神古たれど，たしかなる。証拠もなく，口碑の伝のみなり」と記して，古くからこの神社が『延喜式神帳』に載る古社―延喜式内社，式内社として伝承されていたことを伝えていた。

江南村は，『和名抄』に区分された郡域では，男衾郡に属すると考えられてきた。原島礼二・梅沢太久夫両氏は，共に板井地内を男衾郡大山郷に比定されている。(8) この男衾郡には，『延喜式神名帳』に載る式内社が三社（小被神社・出雲乃伊波比神社・稲乃売神社）ある。この中，出雲乃伊波比神社は寄居町赤浜にも一社あって，板井と赤浜とどちらの出雲乃伊波比神社が式内社だったのか，今のところまだ判然としていない。(9)

註 (1)『塩前遺跡発掘調査報告書』江南村文化財調査報告書第３集・江南村教育委員会・1982.
(2)註(1)と同じ
(3)註(1)と同じ
(4)『吉見村史』上巻・吉見町・1978
(5)『埼玉県指定文化財調査報告書』埼玉県教育委員会・1963
(6)菅谷浩之『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町教育委員会・1984
(7)註(6)と同じ
(8)原島礼二『東松山市とその周辺の古代』東松山市市史編さん調査報告第13集・1978
梅沢太久夫「埼玉における古代窯業の発達」(2)『埼玉県立歴史資料館紀要』第２号・1980
(9)式内社研究会編『式内社調査報告』第11巻東海道６・皇学館大学出版部・1976

（金井塚）

Ⅱ　発掘調査の経過

1.　発掘調査に至った事情

江南村は，昭和51年度より板井地区を対象として，県費単独事業による大規模な圃場整備を推進してきた。板井地区は，すでに埼玉県教育委員会の遺跡分布調査によって，岩比田・永川・下板井を包括する江南台地の緩斜面一帯から，かなり広汎な範囲にわたって土器片が採集され，埋蔵文化財の有力な包蔵地と推定されていた。とくに圃場整備の該当区域に含まれた岩比田・永川にわたる地域は，台地の下，水田地帯と連接して，小江川の右岸に自然堤防状に残存した微地形であったが，表土から土器の断片が多く採集されて，この区域も岸地の緩斜面に連続する岩比田遺跡の一部であることが，充分推測されたのである。

岩比田地内の圃場整備事業は，この微地形を水田面まで削出して水田面積を拡張し，水田経営の合理化を図ろうとしたものであった。したがって，この事業が実施されれば，微地形の埋蔵文化財は当然消滅することになる。江南村教育委員会は，県文化財保護課の指導も受けて，善後策を事業の実施主体である板井地区圃場整備事業組合と協議したが，圃場整備事業は，板井地区の他の事業との関連があって計画の変更は全く不可能であった。しかも冬の休耕期間中に事業を遂行して，春の水田作業の開始までに完了するという厳しい実施期間の制限があり，事業期間の変更は許されなかったのである。

板井地区圃場整備事業組合との協議によって，岩比田地内の遺跡の保存が全く不可能と知った江南村教育委員会は，最終的には遺跡の現状保存を断念して，事前調査に踏みきらざるを得なかった。そして事前調査には優先して協力するよう整備事業組合に求めた結果，事業組合と板井地区住民が挙げてこれに賛成し，全面的に協力を申し合せてくれたのである。

板井地区圃場整備事業組合と板井地区住民の合意によって，事前の発掘調査の見通しはついたが，該当区域を限られた期間内で発掘調査することはかなり困難なように思われた。発掘区域は，20,000㎡という広い範囲であったし，しかも水田面と比高差があまりない微高地で，遺構の検出がかなり難かしい。遺構がもしも発掘区域全面に遺存していた場合には，春の水田作業の開始までに整備事業が終るよう発掘調査を完了することはおそらく至難なことだろう。折角事前調査に賛成し，全面協力を約束してくれた板井地区圃場整備事業組合と板井地区住民の御好意に対しても，発掘調査は限られた期間内に終了しなければならない。教育委員会は県文化財保護課の御教示を受け，県立歴史資料館の金井塚良一氏の指導を仰ぎ岩比田遺跡発掘調査会を組織し，３月４日からその後１ヶ月間にわたる発掘調査を開始したのである。　　（江南教育委員会）

2. 発掘調査の経過（日誌抄）

予備調査は，３月４日から６日まで行なわれた。この間に表土排除作業を行ない，遺構の分布状態をおおまかに捉えることができた。

３月７日（月）晴れ

午前10時，作業員30数名が現場に集合した。江南村教育委員会の立合のもとで，金井塚先生による本遺跡の説明が行なわれ，続いて作業に入る。作業は遺跡の東方区域で，一部ローム台地の露出した部分に集中し，グリッドの杭打ち作業を並行して行なう。グリッドはこの東方区域内に２m間隔で南北14m東西20mの範囲で設定した。遺構はこの範囲内で住居址が６軒確認された。東方より１～６号住居址とした。すべてカマドを持った竪穴住居址であった。

３月８日（火）晴のち曇

本日は２mグリッドの西側を西方に向けて遺構の確認作業を行なう。西方区域の約半分の表土を排除した段階で３軒の住居址のプランをほぼ確認し，又数軒の住居址が重複していると思われる遺構，その他南北に走る黒色土の溝，住居址とはまだ判断できかねる遺構も土壙状のピットを含め数ヵ所見出された。

遺物は土師器・須恵器に混って，打製石斧も数個発見された。

３月９日（水）晴れ

午前中に西方区域の表土排除作業を終える。新たな住居址らしいプランは見出されなかった。多くは土壙状，又は不定形の遺構であった。

午後より，東方の２mグリッド内の住居址の発掘に入る。１～４号までの住居址に，それぞれ人員を配分し撹土の掘り下げを開始する。２号住居址で10cm下げた段階で，土師器の一括出土があった。４号住居址では同じく10cm位下げた所から，須恵器と土師器の坏が出土した。

3月10日（木）晴れ

２ｍグリッドの南方部は，ロームの台地が南に傾斜し，黒色土に変わっている。本日はブルトーザーにて，この黒色土を排土し，その下の遺構の有無を確認したが，遺構及び遺物は全く検出されなかった。

昨日に続き，１～４号住居址の発掘を行なう。

１号住居址は，北西部の張出し部分がこの住居址よりも新しい住居址であった。2号住居址と称する。1号住居址は東カマド，２号住居址は北カマドであった。１号住居址と３号住居址の北と西の交叉する部分にも，それぞれカマドがあったが，どちらのものかはまだ不明である。１号住居址の東カマド付近からは，土師器が大量に出土，又，床中央部で須恵器の坏が出土している。

４号住居址は地山の傾斜の関係で，北半分の壁は失われていた。カマドは発見されなかった。

５号住居址は，東にカマドを持った隅丸方形の住居址で，床と壁溝を露出させたが，北壁西隅と西壁中央部を，それぞれの別の遺構によって切られていた。

６号住居址は，床をほぼ露出させた。北カマドで方形のプランであった。このカマドはすでに破壊されていた。又，床面西方部より壁に接して，径１ｍで50㎝ほど掘り込まれた貯蔵穴状の掘り込みが見出された。床面より，携帯用の小形の砥石が発見された。

又，新たに７号住居址の覆土排除作業に入る。

嵐山町の歴史研究サークル参加。

3月11日（金）晴れ

発掘作業に並行して，測量士が加わり，２ｍグリッドの西方に４ｍ間隔で南北20ｍ東西60ｍの範囲で新たにグリッドを設定した。

その間に，９号住居址と新たに７号住居址の作業に集中する。

６号住居址は，遺存状態が非常に良好であった。隅丸方形で掘方も深く，北壁中央にカマドを持っていた。中央部の床面近くより，土錘が発見された。

５号住居址は，南方の黒色土層で南と西の壁が確認されないため，北壁で床面まで下げ南方へ追う。カマドは北壁中央部にあるが，南方３ｍ位の所でも広い範囲で焼土があり，カマドの可能性が強い。

又，６号住居址の北１ｍの所から，２軒の住居址が複合して発見され，東側を７号住居址，西側は西カマドで８号住居址と称することにした。

午後からは，西方の４ｍグリッド内の，土壙状のピットの発掘を並行して行なう。遺物は須恵器・

土師器片と縄文土器片も若干出土している。

3月12日（土）晴れ

1号・4号住居址の，遺物の写真撮影を行なう。

1号住居址の北西部を切っていた住居址を，2号住居址と称する。

6号住居址は，グリッド杭を使って50cm方眼の遣り方を組み，平面図を作成し，南北の土層断面図を取る。10・11号住居址は新旧関係の確認にに主眼を置いて，切り合い部分にサブトレンチを入れたところ，床面は非常に浅く，土層面での新旧の確認は不可能であった。床面の切り合いから，11号住居址が10号住居址より新しいと判断した。8号住居址から掘り始める。

3月13日（日）曇

本日は作業を休みとし，学生のみで図面作成を行なう。

午後よりブルトーザーで，4mグリッドの西側の表土剝ぎを行なう。

土壙番号をイ～ルまで命名する。

4mグリッドは南東隅から北にA～E，西に1～15とし，B－1～8に幅1mでトレンチを設定する。

3月14日（月）晴れ

1号住居址は土層図を取り，残りの遺物の写真を撮る。5号住居址・6号住居址は，ベルトを取り除き，柱穴の検出作業に入る。

7号住居址は南壁付近が不明であり，焼土の範囲を追う。覆土中には多量の焼土が含まれており，浅い部分からの遺物の出土が非常に多かった。

9号住居址は土層図を取り，床面，壁，周溝を完全に露出させ，柱穴を検出する。

11号住居址は隅丸方形を呈し，床面は10号住居址を切っていた。

昨日設定したトレンチ内からは，B－5グリッドで，南北に走る幅約1mの深い溝，B－5～6にかけて，幅約3.5mのすり鉢状の浅い溝，B－7でB－5と同形態の溝が発見された。

3月15日（火）晴れ

2号住居址の，床面の検出作業を行なう。プランは長方形であった。

11号住居址は床を完全に露出させ，南西部コーナで貯蔵穴を検出する。

4mグリッド内のA—6～7にかけては，黒色土の溝の上に広範囲に焼土が散布し，遺物の出土も非常に多かった。ここを14号住居址と称する。

3月16日（水）曇

9号住居址は，平面図を取り終える。

10号住居址は床面を露出させ，柱穴を検出する。床面には，土壙状のプランが数ヵ所確認された。

4mグリッド内のA—6付近の焼土散布箇所は，A—7を走る溝の東面で落込みを確認し，覆土排除作業に入る。

4mグリッドの西側地区には，十字にトレンチを入れたところ，井戸が発見され，須恵器と伴に，ひょうたんと木材が多量に出土した。

3月17日（木）雨天中止

3月18日（金）晴のち曇

本日は，4mグリッド内の住居址の発掘作業に入る。

遺跡中央の北端にある12号住居址と，その西に近接する15号住居址は，共に床面の攪乱が著しく，凹凸が激しかった。15号住居址の南にある13，14号住居址は互いに壁を切り合い，その上2本の溝が床面を切って，A—7，C—6方向へと続いていた。

14号住居址の東側の，12号住居址と呼んでいた遺構は，摺り鉢状の浅い溝であり，黒色の埋土で16号住居址方向へと続いていた。16号住居址は，一部でこの黒色土の上に床が設けられていたらしいことが，土層図の作成で判明した。

B—5グリッドで見出した溝は，北方に続き，E—5付近で終っていた。1号溝とする。

B—7グリッドで見出した溝は，北方は13・14号住居址へと続いていたが，B—7内で立上がり，立上がり部分で集石が露出した。

14—Cグリッドの南方，4mグリッドの範囲外15m位南方で，数軒の住居址の床の一部を確認した。黒色土地帯であるため，プランは不明であり，トレンチを設ける。

4mグリッドの西側区域で，昨日発見された井戸からは今日更にひょうたん2個体分と井戸の枠板に使われていたらしい木材，木製

の器などが出土し，掘り終える。

又，今日よりこの地区の住居址の発掘を始める。17・18・19号住居址である。

17・18号住居址は撹乱が激しく，床の露出，土層図の作成も困難であった。17号住居址が西カマド，18号住居址が東カマドであった。

19号住居址は，北にカマドを持っていたが，小さな溝によって中央部が撹乱されていた。覆土は粘性が強く，焼土も多く含んでいた。床面は一面に焼土が覆い，その下から検出された。

3月19日（土）晴れ

4mグリッドの南方に，昨日設定したトレンチ内で，3軒の住居址の床を確認する。東から20・21・22号住居址である。

20号住居址は，本遺跡最南端に位置し，全く黒色土地帯の中に存在した。東西南壁はすでに失われていたため，床面でプランを追う。北壁と東壁付近で焼土があり，これがカマドとなりそうである。北東コーナー付近より，土師器の壺が，底部を欠損していたが，ほぼ完形で出土した。

21号住居址からは，須恵質の円面硯が半分に割れて，1個体出土した。

22号住居址からは，刀の鞘の責金具（青銅製）が出土した。

22号住居址の北方で，新たに床面の一部が検出され，ここに十字トレンチを設ける。23号住居址と称す。

A—8グリッド付近では，北にカマドを持った新たな住居址のプランが確認され，24号住居址と称する。

3月20日（日）

20・21・22号住居址のプラン確認作業に集中する。

20号住居址は，黒色土ではあるがバリバリの床とカマド，遺物範囲などから，プランの推定は可能であった。21・22・23号住居址は，プランの確認はほぼ不可能であった。

24号住居址は，今日より入ったが，撹乱が激しく，一部を除いて床の状態も悪かった。特に南壁の確認は困難である。

A—11，12グリッド付近で，25号住居址のプランが確認された。更にこの住居址の南壁を切って

掘り込まれた井戸が発見された。この井戸は，石組が施され，遺物は近世陶器が多く出土した。土層図を取り，第２井戸と命名した。

23号住居址の北方から26号住居址，17号住居址の東方から27号住居址が確認された。

５号住居址は，今日までに２軒の住居址の複合であるらしいことを突き止めた。

３月21日（月）

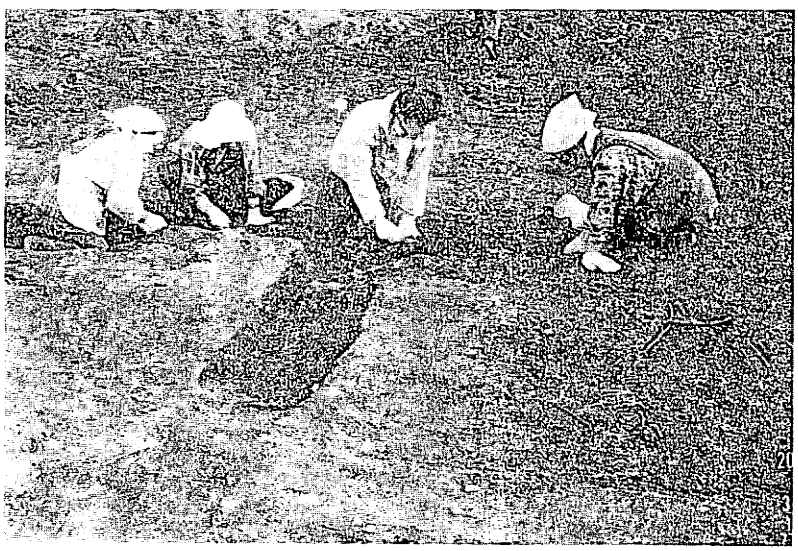
彼岸中日，作業休止。

３月22日（火）晴れ

13・14号住居址は攪乱が著しく，両者の切り合いの新旧関係の確認は困難であった。

25号住居址は，床面を露出させる。床面直上にて須恵器の坏が出土した。

26号住居址は，14—Ｂグリッドに，すっぽりと納まる小形の住居址で，西カマドであった。



第２井戸からは，今日新たに，板碑３枚，埴輪片，近世陶器などが出土し，掘り終える。

３月23日（水）

雨天中止

３月24日（木）

雨のち晴れ

朝のうち雨が残ったが，土層図の作成を行なう。

午後より，伊波比神社の社務所にて慰労会が行なわれた。

３月25日（金）晴れ

７号住居址の切り合いは，南の７号住居址が北の８号住居址を切っていたことが判明した。共に隅丸方形で，７号住居址は東カマド，８号住居址は北カマドであった。

15号住居址は，床を露出させると，土錘が１個出土した。カマドは，東壁で９号住居址により破壊されていた。

27号住居址の南から，28号住居址が確認された。隅丸方形で，西カマドであった。床面近くで土師器の坏が完形で出土した。

3月26日（土）晴れ

今日から遺構の測量に入る。

土壙を含め，すべての遺構の土層図を取り終える。

3月27日（日）晴れ

1号住居址を精査の結果，3軒の住居址を検出する。1号住居址を2号住居址が切り，2号住居址を3号住居址が切っていると思われた。

平面図，1・2・3・5・6・7・8号住居址を取り終える。

3月28日（月）晴れ

再び作業員を動員し，残った遺構の完掘を行なう。2号溝の西側で16号住居址西壁が確認され，同住居址北で，新たに29号住居址が確認された。

平面図，4・10・11・19，28号住居址を取り終える。

3月29日（火）曇

全遺構を今日で完掘し，発掘作業は本日にて終了する。

平面図，13・14・17・27号住居址を取り終える。

3月30日（水）曇のち雨

午前中，住居址の測量を行なう。午後より雨。中止。

3月31日（木）雨天中止

歴史資料館にて写真整理を行なう。

4月1日（金）晴れ

遺構の測量を1/50の縮尺で行なう。

4月2日（土）晴れ

遺構の測量を完了する。

4月3日（日）晴れ

遺構の写真撮影を行なう。終った住居址から，カマドの切開に入る。

4月4日～6日

カマドの切開作業と写真撮影を行なう。

4月7日（木）雨のち曇

午前中雨の残る中，残りのカマドの切開を行ない，午後3時，すべて完了し，本遺跡の発掘調査を終了する。

（植木　弘）

Ⅲ 遺構と遺物

1. 遺構の概観

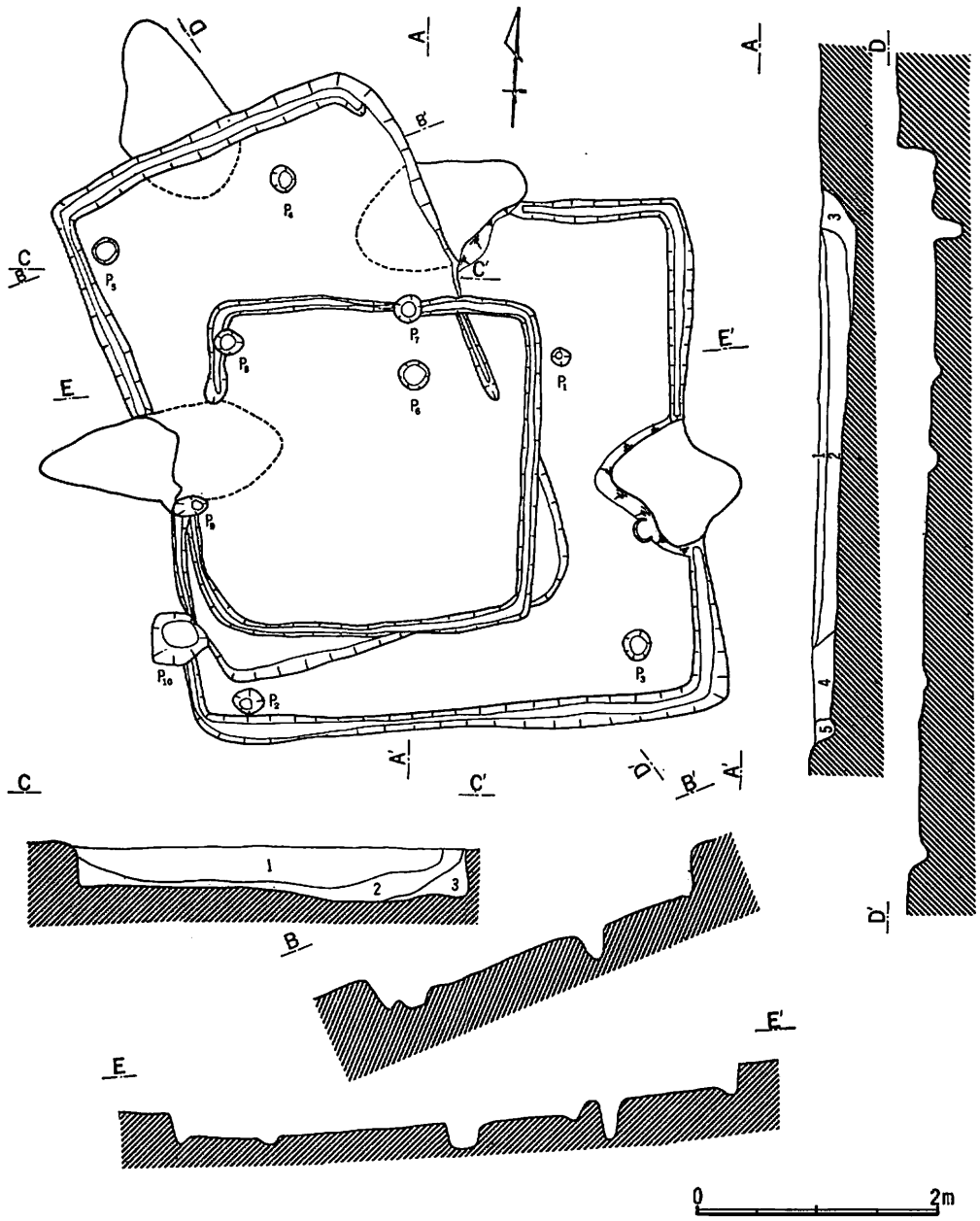
発掘調査は，小江川右岸の微地形全面を対象にして実施した。発掘範囲のほぼ全域に，２ｍ四方のグリットを設定して遺構を探索したが，確認された遺構はほとんど発掘範囲の中央部に集中し，東側と西側からは検出されなかった。又微地形の西側は次第に水田面に緩傾斜して，水田面との比高差は全くなくなっている。この区域では，遺構は水田面にまで伸展していたが，すでに水田耕作によって大方攪乱されていた。しかも湧水のため発掘調査が難行して，全容が確認できなかった遺構（竪穴住居址）もいくつかあった。

発掘調査によって，後述のように竪穴住居址29ヵ所，溝状遺構３ヵ所，井戸２ヵ所，土壙群２ヵ所，柱穴群１ヵ所と多数の遺物が出土している。竪穴住居址は，発掘区域のほぼ全面から出土しているが，東側が西側より密な分布を示していた。29ヵ所の竪穴住居址は，大別すると古墳時代――鬼高期・真間期と平安時代に分けられたが，竪穴の複合と出土遺物の検討によって，これを更に細分することが可能であった。竪穴はいずれもカマドを設備していた。竪穴規模は概して小規模であった。

竪穴住居址以外の遺構は，出土遺物が稀少で，時期の判定が困難であった。例えば溝状遺構は，発掘区域を南北に走行する水路状の溝であったが，溝内から溝の時期を知る確実な遺物は出土していない。平安時代の竪穴住居址を切って構成されていたために，ばくぜんと平安時代以降として把握せざるを得なかった。土壙群と井戸も時期は定かではない。井戸は土壙群とともに，最初は平安時代の竪穴住居址群に関わる遺構と想定したが，後に井戸の中から板石塔婆・内耳土器・貯蔵用ひょうたん等が出土して，中世の遺構と断定された。土壙群からは，遺物は全く出土していないが，板石塔婆や井戸等によって，中世にも，この微地形上に遺構が存在していたことを考慮すれば，中世の遺構であった可能性を，無下に否定するわけにはいかないだろう。

柱穴群は，発掘区域の西側から検出された。総数36ヵ所の柱穴が，東西約10mの範囲内に不規則に掘られていた。この区域が耕作によってかなり攪乱されていて，柱穴群全部を検出できなかったために，柱穴を中心にして建造物を復原することは不可能であった。出土遺物が皆無で，時期は不明であったが，柱穴群の中に遺存していた第18号住居址より後出（平安時代以降）と想定されている。（金井塚）

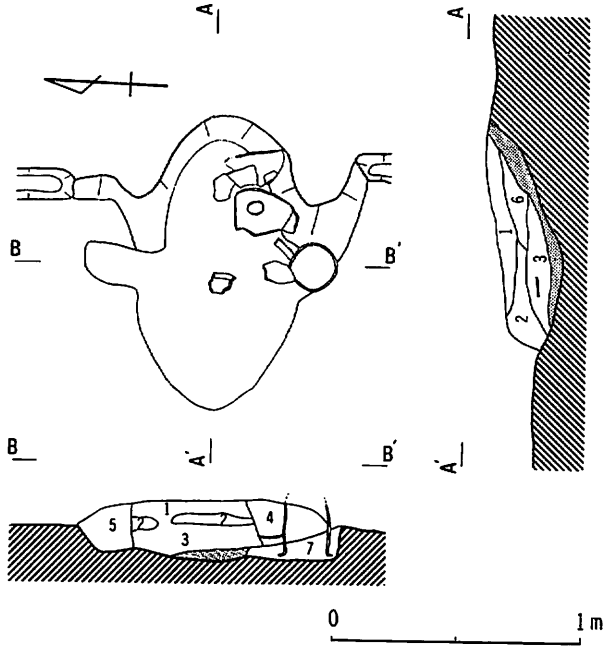
2. 竪穴住居址と出土遺物



第1・2・3号住居址土層

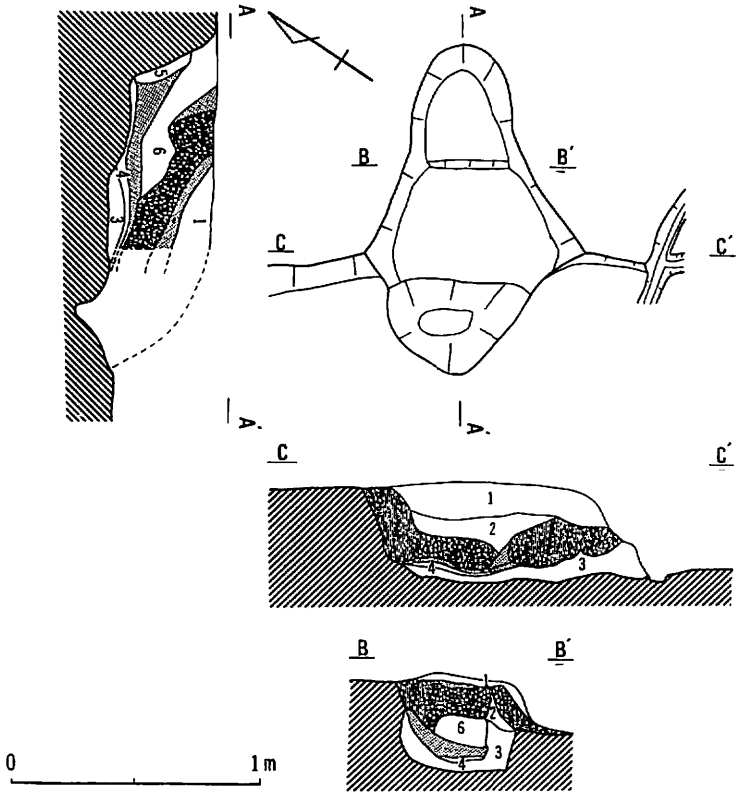
1層　暗褐色土　ローム粒子含む。
2層　暗褐色土　ロームブロック含む。
3層　粘土　焼土含む。
4層　暗褐色土　ロームブロック含む。
5層　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。

第3図　第1(右)・2(左)・3号(中)住居址 (1/60)



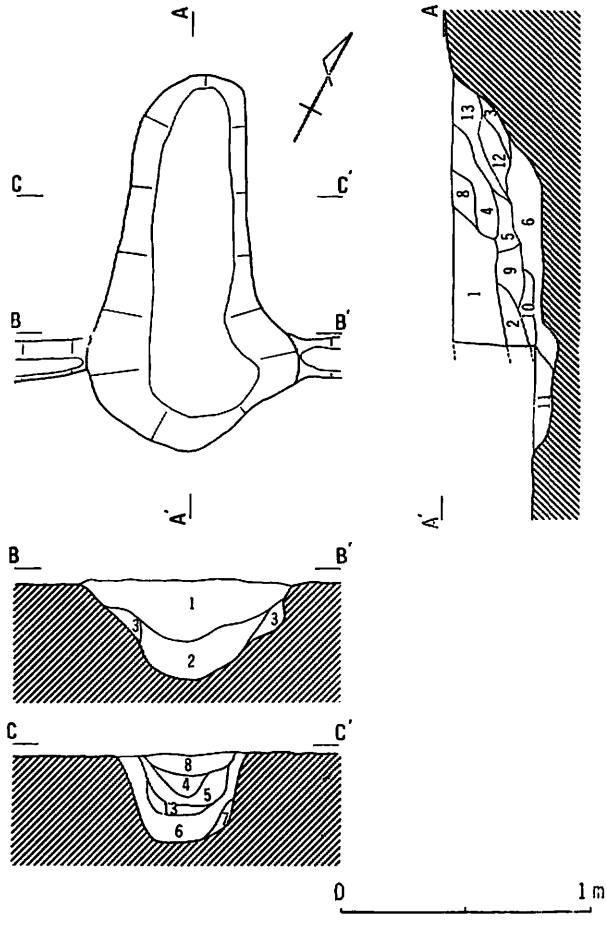
第4図　第1号住居址カマド（1/30）

1層　黒色土　大形黄色ブロックを含む。
2層　黒色土　1層に小形の黄色小ブロックを含む。
3層　黒色土　1層・2層に焼土ブロックを含む。
4層　黒色土　若干粘質に富む。
5層　黒色土　粘質弱し。攪乱の感じ。　} 袖
6層　暗褐色土・粘質に富む。
7層　大形ロームブロックが堅く踏み固められている（長甕を立てる為，踏み固められている）。



第5図　第2号住居址東カマド（1/30）

1層　暗褐色土焼土粒子と微量のローム粒子を含む。
2層　赤褐色土　1層に多量の焼土を含む。
3層　黒色土　多量に炭化物と焼土を含む（灰混在）。
4層　炭化物ブロック
5層　粘土ブロックと焼土粒子に多量にロームを含む。
6層　暗褐色土　焼土ブロックと炭化物を含む。



第6図　第2号住居址北カマド（1/30）

1層　暗褐色土　焼土・ローム粒子含む。
2層　暗褐色土　粘質でローム粒子・焼土・炭化物を含む。
3層　暗褐色土　ロームブロック含む。
4層　暗褐色土　焼土粒子・炭化物含む。
5層　赤褐色土　黒色土を含む。
6層　黒色土　焼土・炭化物・ロームブロックを多量に含む。
7層　暗褐色土　焼土含む。
8層　暗褐色土　焼土ブロック含む。
9層　黒褐色土　焼土・炭化物含む。
10層　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物を含む。
11層　暗褐色土　粒質で粘土・ロームブロック・焼土粒子含む。
12層　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物を含む。
13層　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子を含む。

第1号住居址（第3・4図）

本遺跡の最も東寄りに位置し，西側半分を2号住居址及び3号住居址に切られている。3軒重なった複合住居址である。

平面プランは東西4.45m，南北4.35mで隅丸方形である。壁体は床面よりほぼ垂直に立上り，平均15cmの高さで遺存していた。壁体基部には，幅20cm深さ10cmの壁周溝が，カマドと複合部を除く全てに見られた。形状はU字状を呈していた。床面はローム層を直接床としたローム直床であり，全体的に軟弱であった。柱穴は南東コーナーと南西コーナー付近から見つかり，形状はほぼ円形に近く，径20cm前後で，深さ20cm前後の比較的小さな柱穴であった。

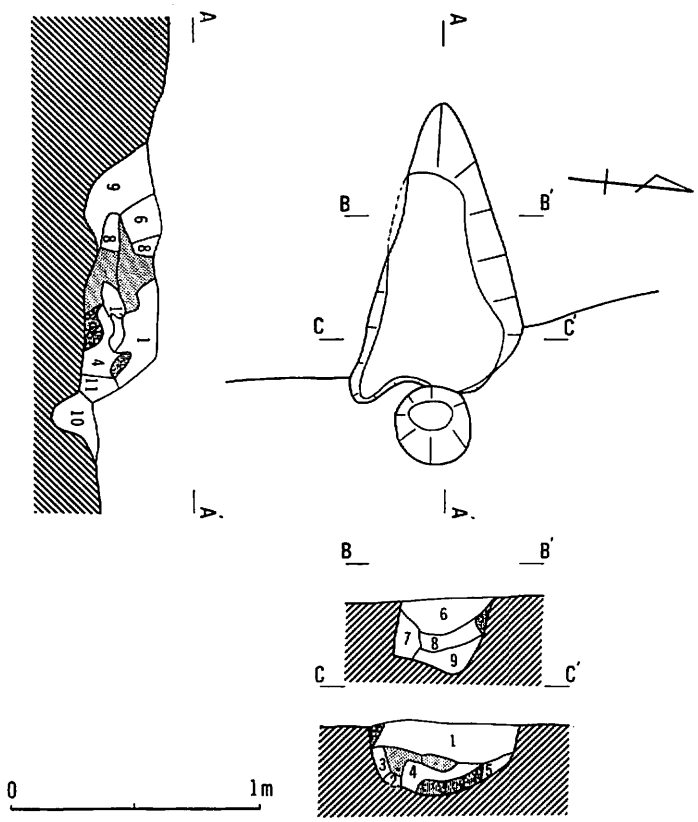
カマドは，東壁の中央部よりやや南寄りに位置していた。全長130cm，最大幅は袖の部分で，110cmを測った。カマドの粗形は単純にロームを削ったもので，最深部は床面より－11cmである。煙道はあまり壁から突出していない，単純な構造であった。勾配は比較的なだらかであり，構築は砂質粘土を使用していた。袖の構造は，右袖に土師器長甕を埋設し，補強してあった。

第2号住居址（第3・5・6図）

本住居址は，1号住居址を切り3号住居址に切られている。平面プランは，東西2.95cmで南側半分を3号住居址に切られているので南北は不明であるが，長方形を呈していたと思われる。壁体は床面よりほぼ垂直に立上り，平均40cmの高さで遺存していた。壁周溝は北壁基部と西壁基部にみられ，幅20cm深さ10前後であった。床面は黒色土を主体とし，ローム粒子を少量含んだ貼床構造であり，東カマド付近は固く踏み固められていたが，その他は軟弱であった。柱穴は，北西コーナー付近に検出された。形状はほぼ円形で，径20cm深さ25cm前後を測る。

カマドは北壁中央部と東壁中央部（？）にあり，前者は，壁下に壁周溝があるところからあまり使われず，東カマドに作り換えられたと思われる。北カマドは全長140cm，最大幅は壁の部分で90cmを測る。袒形の掘り方は，壁際で床面より10cmを測る。袒形底面はほぼ平坦で，煙道部もなだらかであった。横の断面形状は，U字状に掘り込まれていた。

東カマドは東壁中央部（？）にあり，全長130cmを測り最大幅は袖の部分で80cmを測る。カマドの袒形は単純にロームを削り，最深部は床面より－10cmを測る。勾配は焼成部ではなだらかで，煙道部で急に立上がる。袖の部分は，大部分破壊されていたが，袖の部分の構築は砂質粘土を使用し，厚さ15cmを測る。



第7図　第3号住居址カマド
（1/30）

1層　褐色土　焼土粒子含む。
2層　黄褐色土　炭化物を含む。
3層　黄褐色土　焼土を含む。
4層　黒色土
5層　黄褐色土
6層　褐色土　焼土ブロックを含む。
7層　暗褐色土　焼土粒子を若干含む。
8層　黒褐色土　焼土，炭化物を含む。
9層　黄褐色土　焼土，炭化物を含む。
10層　黒褐色土
11層　黄褐色土　焼土粒子を含む。
12層　褐色土　炭化物を含む。

第3号住居址（第3・7図）

1号住居址に，すっぽりかぶさった住居址である。2号住居址を掘り下げた時に，壁周溝がほぼ正方形で全周しているのを確認した。

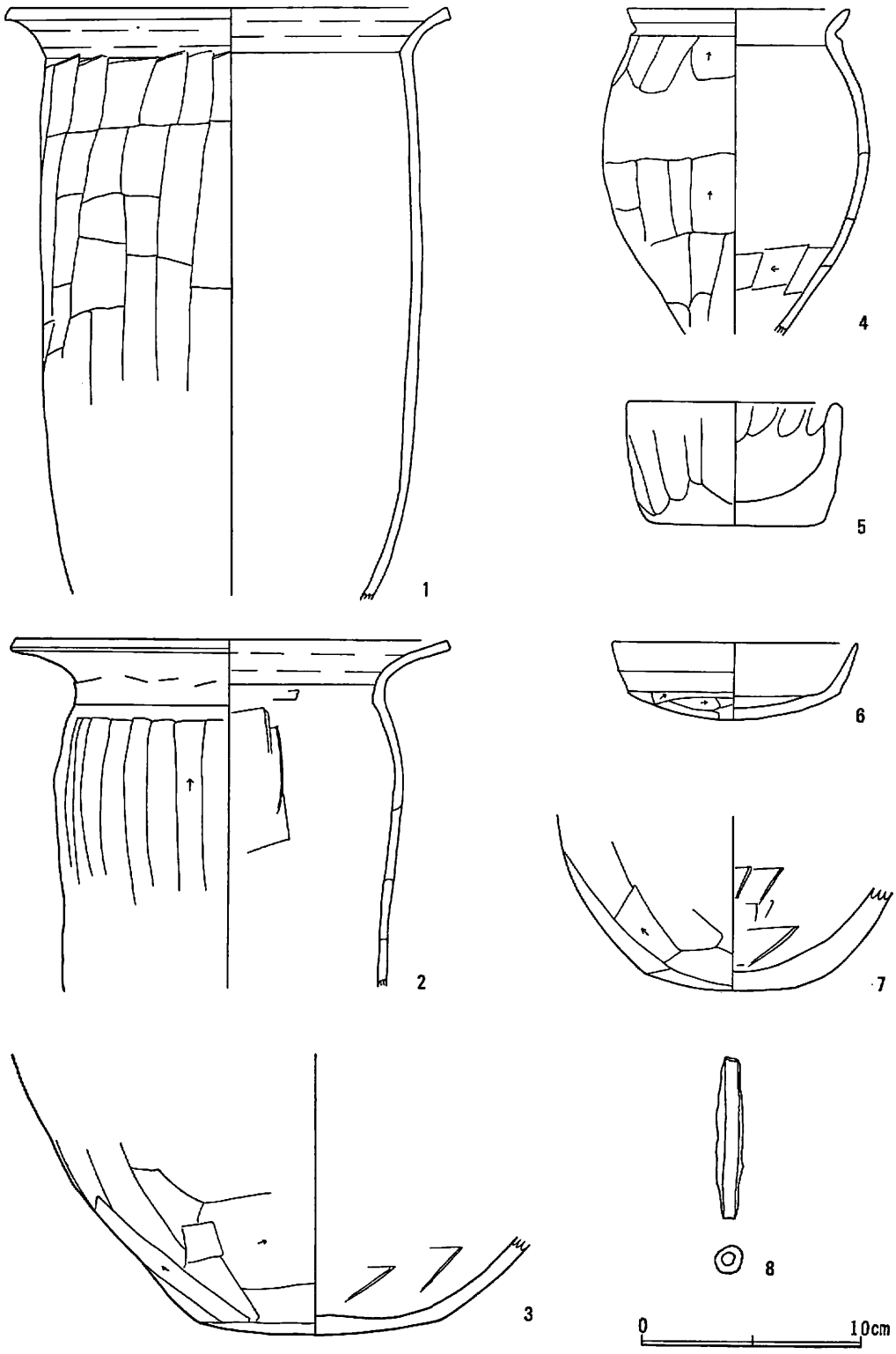
平面プランは，東西2.7m，南北2.8mで，ほぼ正方形を呈し，コーナーはやや隅丸である。壁体は，南壁と東壁だけ1号住居址の床面を切って，数cm残存するのみであった。壁周溝は幅10cm，深さは床面より－5cmを測り，カマドを除くすべてに見られた。床面は黒色土を主体とし，2号住居址よりもややローム粒子が多い貼床構造であり，カマド付近はよく踏み固められていたが，それ以外は軟弱であった。柱穴は，北東コーナーより100cmの所に1つみつかり（P 6），形状は円形で径20cm深さ22cmを測る。

カマドは2号住居址西壁の中央にあり，焼土が3号住居址床面までのびているので，3号住居址のカマドと判断した。全長130cm，最大幅は60cmである。最深部は床面より20cmを測る。

カマドの祖形は，単純にロームを削った程度で，住居址から70cm露出している煙道の長いカマドである。焼成部は比較的なだらかで，煙出部で急に立上る。構築は砂質粘土を使用していた。袖の部分は確認できなかった。（中村和夫）

第1表　第1号住居址出土遺物観察表（第8・9図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 20.0	口縁部外反，端部平坦，胴は張らず直線的で底部付近ですぼまる。	口縁部横ナデ，胴部縦方向の箆削り，内面横箆ナデ。焼成良，胎土砂粒含むがザラつかない。褐色。	⅔存　カマド左袖倒立
甕	2	口径 21.5	口縁が頸部より強く屈曲し外反する。端部は平坦。器壁は一様に厚い。胴部は頸部下でやや張るが，以下は直線的である。	粘土紐成形で幅2cmほど。口縁部横ナデ。胴部外面縦方向の箆削り内面横方向の箆ナデ。焼成良，胎土に異物をほとんど含まない。褐色。	¼存　床
甕	3	底径 11.0	平底に近い凸底より立上がり胴中位以上で張る器形である。	底部外面は箆により削り。胴下半は斜及び横方向の箆削り。内面は箆によるナデ。焼成良。胎土に砂粒含む。暗褐色。	⅙存　カマド
甕	4	口径 10.0	口縁部が短かく外反し直立する。胴中位に最大径をもつ。	口縁部横ナデ，胴部縦方向の箆削り，内面横方向の箆ナデ。焼成良，胎土に鉱物粒多く含む。燈褐色。	½存　カマド
手捏土器	5	口径 9.9 器高 5.6	器肉が厚く重量のある土器である。底部に木葉痕が残る。	指圧による整形。外面は縦方向のナデつけ。底部黒色，他は褐色。焼成良。胎土に砂粒多く含むがザラつかない。	完存　床
坏	6	口径 11.2	口縁部外斜，境明瞭，箆削りにより造り出される。口縁中程浅い沈線。	口縁部横ナデ，体部内面の上半にまで続く。体部外面右回りの箆削り。胎土に小石数個含む。焼成良，淡褐色，体部黒褐色。	完存　床



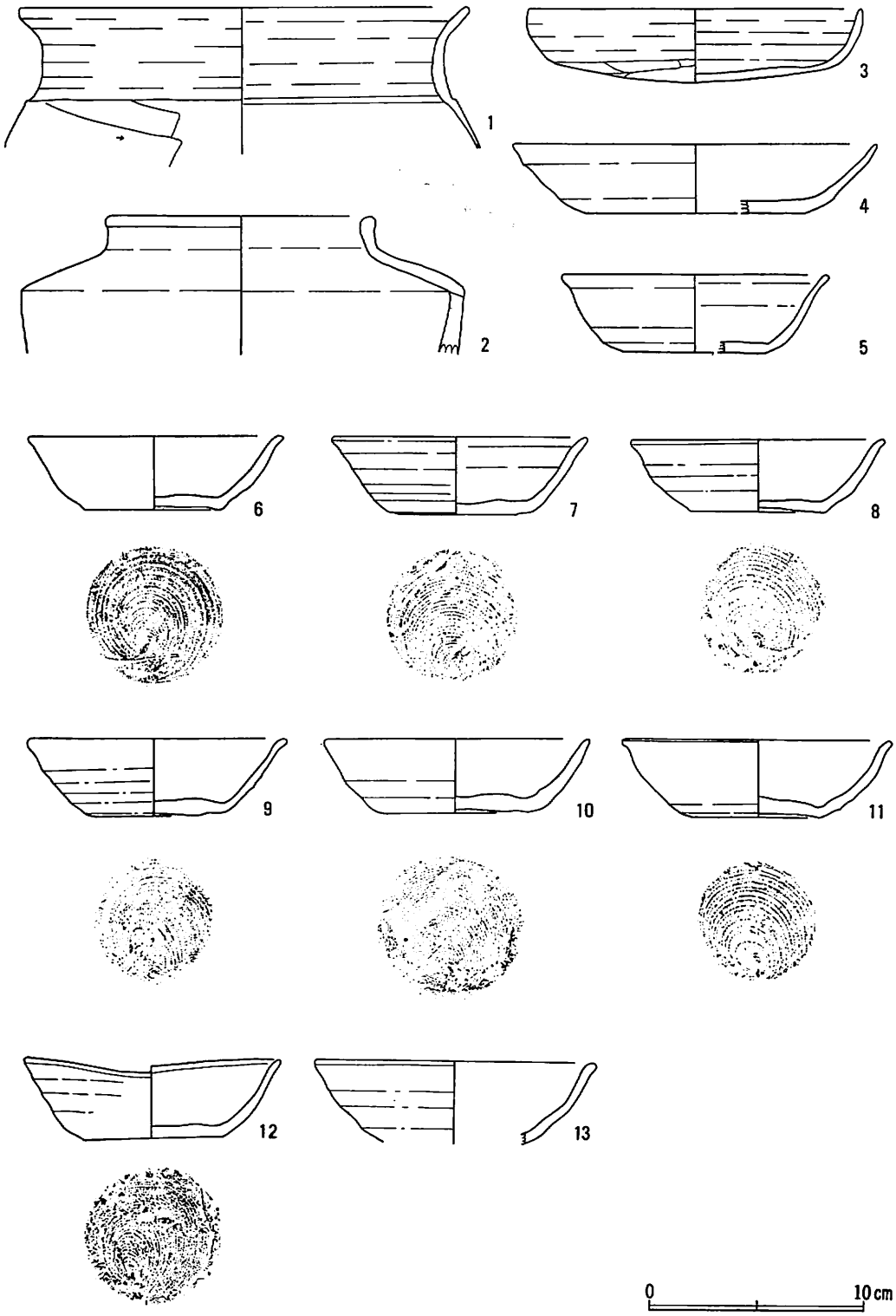
第8図　第1号住居址出土遺物（1）

第9図　第1号住居址出土遺物（2）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	7		小さな丸底の底部より内彎気味に立上がる。	外面斜位箆削り。内面横位箆ナデ，焼成良，胎土異物を含まない。暗褐色。	底部破片 床
甕	9	底径　13.0 現高　23.5	胴上半に最大径。底部平底に近い凸底。	底部は一方向の箆削り。胴部横及び斜の箆削り。内面は箆によるナデつけ。焼成良，胎土少量砂粒含む。外面淡褐色（黒斑），内面暗褐色。	½存　カマド ＋覆土

第2表　第2号住居址出土遺物観察表（第10図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径　20.8 （推定）	「コ」の字口縁。一回内斜したあと外反する。頸部は整形の異により段を有する。	口縁部横ナデ，胴部横位の箆削り。胎土に微砂含む。褐色。	口縁部破片 覆土
壺 須恵器	2	口径　12.6	口縁は直立。端部は丸く仕上げてある。肩部に稜を持ち内彎気味に底部へ移行する。	ロクロ整形。肩部に粘土紐成形による接合痕がみられる。焼成良。胎土2～4㎜ほどの長石含む。灰色。	口縁部½存
坏	3	口径　15.5 器高　3.4	口縁内彎。体部との境に箆削りにより稜を形成。	口縁部横ナデ，内面体部まで及ぶ。体部外面箆削り，方向は一定せず。焼成良。胎土に石英多く含む。茶褐色，外面黒斑。	½存　床



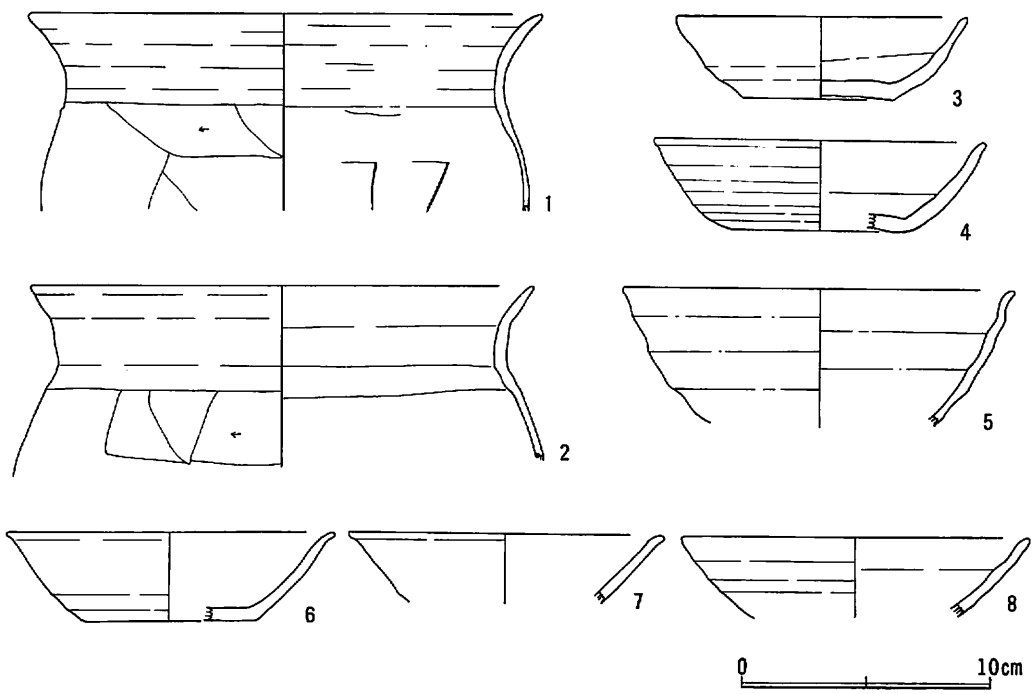
第10図　第２号住居址出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏 須恵器	4	口径 17.0 底径 10.3 器高 3.2	体部下部を丸く整形。	ロクロ整形。糸切り後外縁部箆削り。焼成良。胎土に白色糸状物質極少量含む。灰色。	1/3存 覆土
坏 須恵器	5	口径 12.4 底径 6.8 器高 3.6	内彎気味に立上り，口縁で強く外反する。体部下端は丸く仕上げている。	ロクロ整形，糸切り。焼成やや良，胎土に白色糸状物質含む。暗褐色。	1/2存 覆土
坏 須恵器	6	口径 11.8 底径 6.3 器高 3.4	体部下端がゆるく凹み底部が突出したように見える。体部中位が脹らみ，口縁部やや外反。	ロクロ整形，糸切り。焼成良，胎土に白色糸状物質含む。灰色。	完存 覆土 ロクロ右
坏 須恵器	7	口径 11.8 底径 6.2 器高 3.6	体部下位でやや張る。口唇内面摩滅。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質，長石含む。灰色。	2/3存 カマド ロクロ右
坏 須恵器	8	口径 11.8 底径 6.1 器高 3.2	内彎気味に立ち上がり口縁で外反する。底部上底。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質，1㎜程の長石を多く含む。青灰色。	完存 床 ロクロ右
坏 須恵器	9	口径 12.0 底径 5.0 器高 3.5	内彎気味に立上がり口縁は外反する。底部糸切り痕の部分わずかに突出，中央上底。体部下端丸く整形。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質，長石を多く含む。口縁下に粘土紐成形痕あり。灰色。	完存 覆土 ロクロ右
坏 須恵器	10	口径 12.3 底径 6.7 器高 3.5	やや内彎気味に立ち上がる。底部上げ底，内面の中央部が周囲より高くなっている。体部下端肥厚く丸く整形。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質多量に混入。灰白色。	2/3存 覆土 ロクロ右
坏 須恵器	11	口径 12.5 底径 5.8 器高 3.6	体部下端丸く，内彎気味に立ち，口縁部がゆるく外反。内面底部中央部突出。体部下端より1cm上に段あり。	ロクロ整形，糸切り。体部と底部の間に押圧あり。焼成良。胎土に白色糸状物質，小礫少量含む。灰色。	3/4存 床 ロクロ右
坏 須恵器	12	口径 12.0 底径 6.2 器高 3.8	極端にゆがむ。内彎気味に立ち上がる。口唇内面摩滅。器面ザラつく。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質含む。青灰色。二次火より部分的に茶褐色。	5/6存 カマド ＋覆土 ロクロ右
坏 須恵器	13	口径 13.0 （推定）	内彎気味に立上がる。	粘土紐成形痕が体部中位にみられる。ロクロ整形。焼成良。胎土に白色糸状物質含む。灰色。	口縁部破片 覆土

第3表　第3号住居址出土遺物観察表（第11図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 20.6	口縁部はゆるく外反。	口縁部横ナデ。胴部箆削り。内面頸部に指頭によるおさえあり。胎土に砂粒含む。褐色。	口縁部1/3存 カマド

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	2	口径 20.2	「コ」の字口縁，端部は薄く作られている。口縁が直立し外反する部分に沈線ある。	口縁部横ナデ，胴部←位の篦削り。胎土に砂粒含む。褐色	口縁部破片 カマド
坏 須恵器	3	口径 11.7 底径 6.0 器高 3.2	口縁部がつままれた様に薄くなる。体部中位で張らむ。	ロクロ整形，糸切り。	覆土
坏 須恵器	4	口径 13.3 底径 7.1 器高 3.7	内彎気味に立上がる。器肉厚く均一である。体部下端に糸による亀裂あり。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質含む。灰色。	¼存 カマド
坏 須恵器	5	口径 15.7	口唇下1cmで直立し端部で外反する。	ロクロ整形。胎土に小石，微砂含む。灰白色。	¼存 カマド
坏 須恵器	6	口径 13.1 底径 7.1 器高 3.6	内彎気味に立上がり口縁で外反。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に微砂少量含む。灰色。	½存 カマド
坏 須恵器	7	口径 12.6	口唇部で外反。	ロクロ整形。焼成良。胎土に長石粒子多く含む。灰色。	破片 カマド
坏 須恵器	8	口径 14.0	やや内彎気味に立上がる。	ロクロ整形。軟質。胎土白色糸状物質少量含む。灰色。	口縁部½存 カマド＋覆土

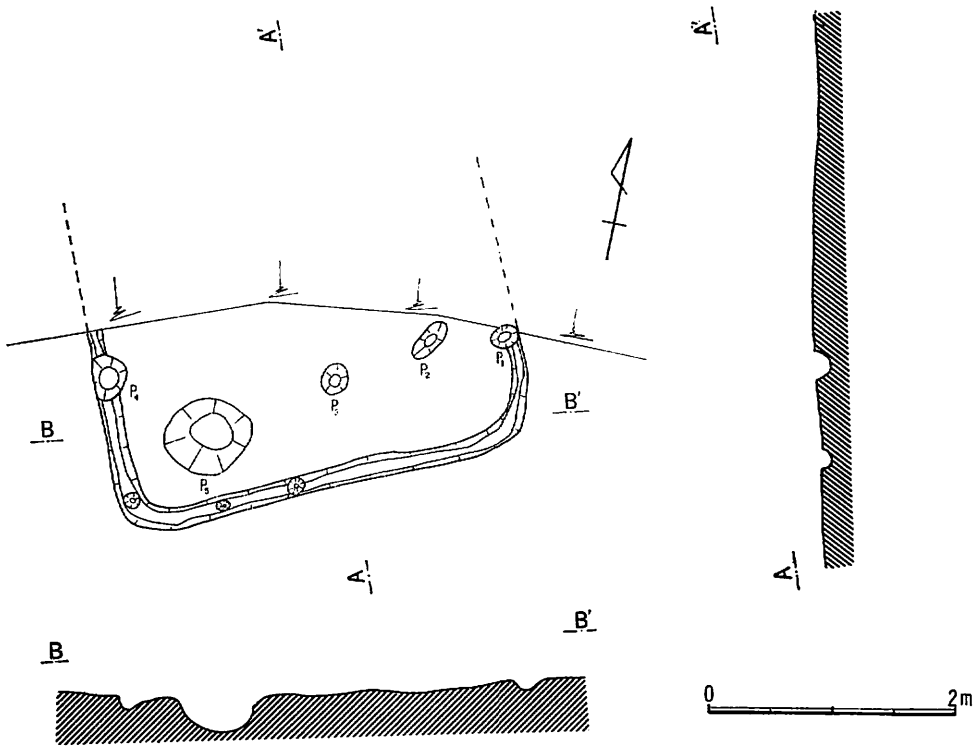


第11図　第3号住居址出土遺物

第４号住居址（第12図）

１号住居址の北側に位置している。平面プランは南壁で3.５m，他は北側が浸食され破壊されているが，隅丸方形と思われる。壁体は数cm残存するのみである。壁下には幅15cm深さは床面より10cm前後の壁周溝が，破壊部を除くすべてに見られた。床面はローム であり，撹乱によりきわめて軟弱であった。柱穴は，床面から３つ，壁周溝内から５つのピットが検出されたが，はっきり柱穴と断定できるものはなかった。カマドは不明だったが，南西コーナーより北側約 150cm の位置に，多量の焼土を確認したので，その付近にカマドがあることはまちがいないと思われる。

出土遺物は，南西コーナーより対角線上約50cmの所に，土師器甕片が出土した。（中村和夫）



第12図　第４号住居址（1/60）

第５号住居址（第13図）

本住居址は，発掘調査区域の東方に位置して発見された。現況は，北方の水田耕作地の境界に遺構の一部がかかり，すでに露呈する個所もあり，保存は良好でなかった。

プランの規模は，東西約4.15m，南北約3.85mを測り，ほぼ方形を呈した。

主軸方位は，N—81°—E であった。

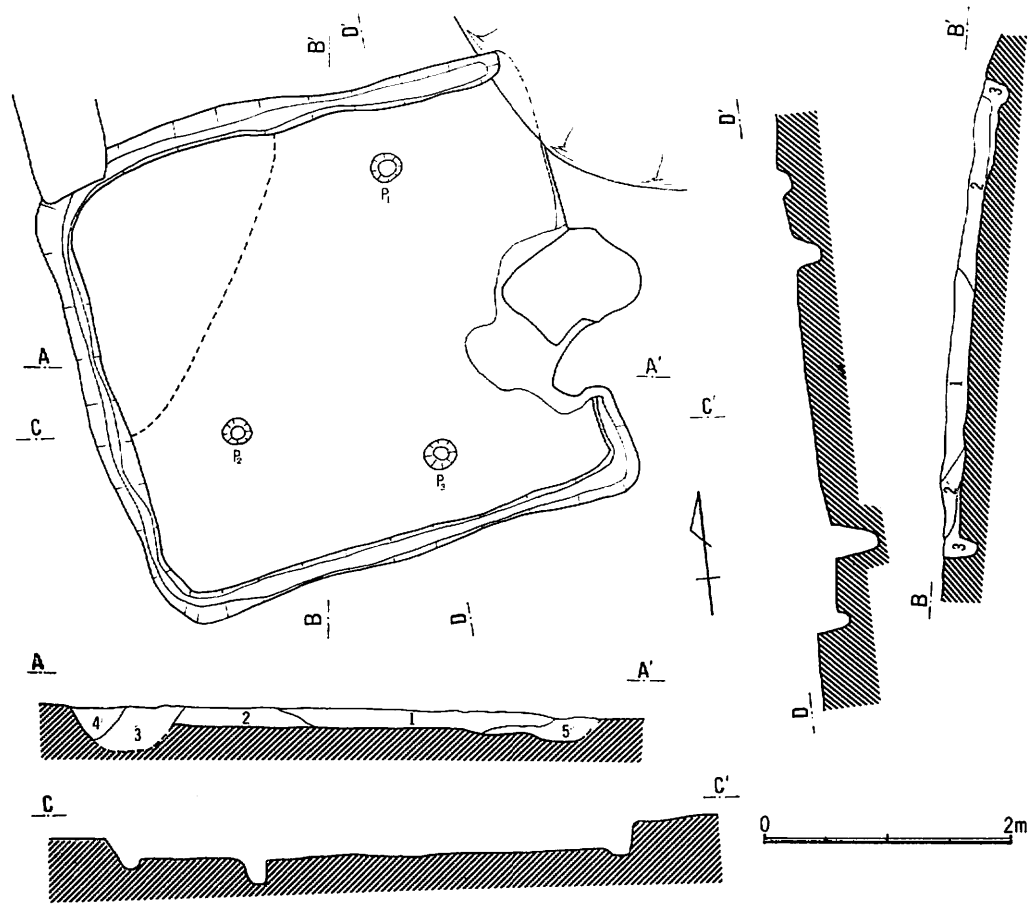
覆土は，すでに上層が損耗されており床面約15cmまでの堆積は，暗褐色土にローム粒子が含まれた層が大半を占め，一部に焼土粒子が微量含まれていた。

壁は，南壁が直下に掘り込まれ約20cmを床面上より測り良く保れていたが，東西の両壁体は北方

に行くほど消滅する傾向を示し，北壁体は，皆無であった。壁下には，U字状の平均幅15cmの溝が北東コーナーをのぞき確認された。床面は，南方半面が焼土や炭化物が散在し，固く踏みしめられていたが，北半面は軟弱であった。柱穴は，3本確認されており，東方2本の柱穴からすると西方の柱穴は，若干中央寄りの位置にあった。口径の平均幅は16cm内外，円形状であった。

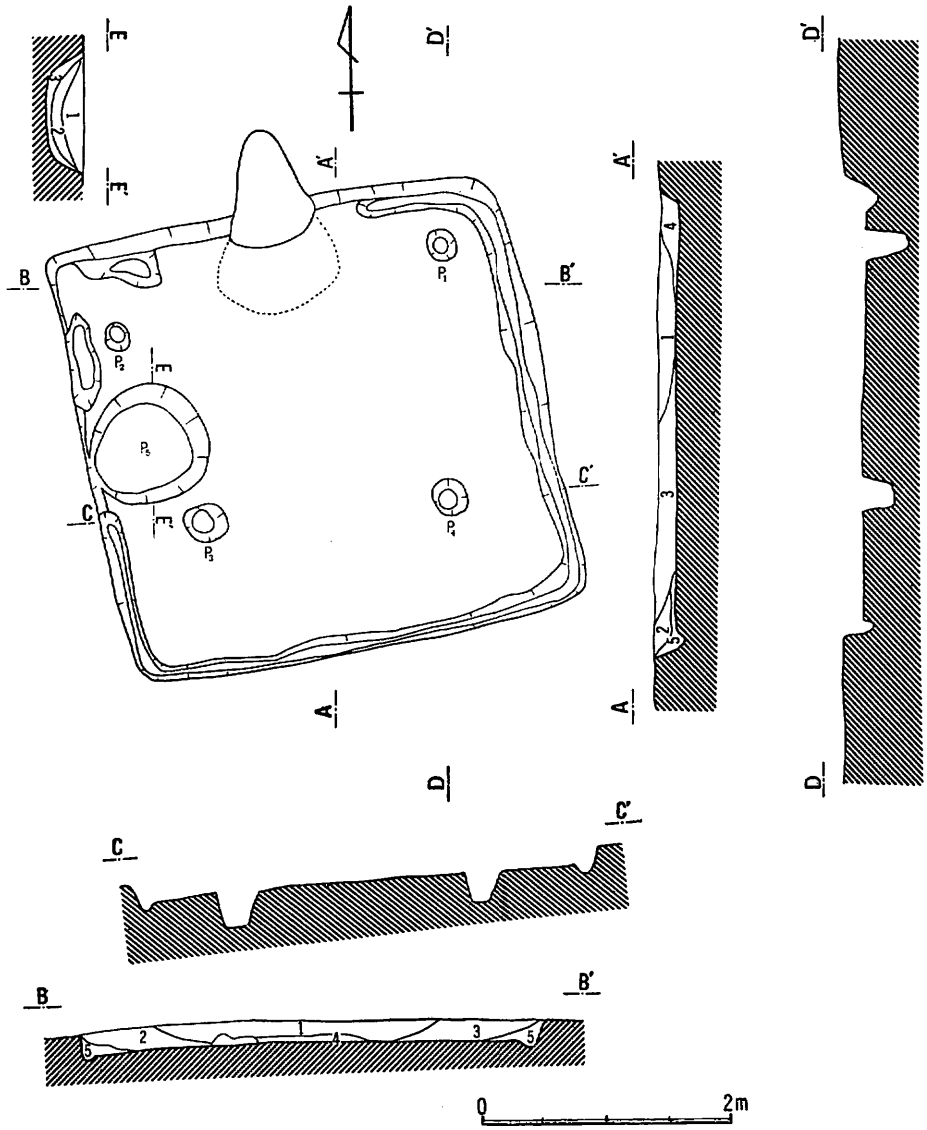
カマドは，東壁中央部に付設されており，北方は耕作による攪乱を受け，左袖は消滅していた。原形は多量に粘土使用が目立ち，床面に流出していた。規模は，全長110cm，最大幅約96.0cmを測定した。

粗形は，壁体を口径75cm内外の円形状に穿った上に，幅約23cmの鋭利な煙出部が，25cmほど張り出していた。東西の断面形にも，焚口底部が床面レベル約14cmと最深で，底部はそのままの様相で緩傾斜に煙道に向うが，煙出部は35度の急傾斜の立上がりを壇状に20cm高く変化を見せる。層位は底部土に，炭化物灰土が見られ，焚口より煙道に至るほど焼土ブロックが中層をベルト状に目立つ堆積を示した。最上層は，カマド構築の多量な粘土が全体を被覆し，右袖だけが，粘土塊により壁体に付置していた。　　（村上光一）



1層　暗褐色土　ローム粒子含む。
2層　暗褐色土　ローム粒子・焼土含む。
3層　暗褐色土
4層　暗褐色土　ローム粒子含む。
5層　暗褐色土　粘土質・焼土含む。

第13図　第5号住居址（1/60）



1層　暗褐色土。
2層　暗褐色土　黒褐色土とローム粒子含む。
3層　暗褐色土　粘土・ロームブロック・焼土・炭化物を含む。
4層　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子を含む。
5層　黄褐色土　暗褐色土を含む。

第14図　第6号住居址（1/60）

第6号住居址（第14図）

5号住居址の南約1m，1号住居址の西，約3mのこの微高地のやや南に傾斜したところに位置する。遺存状態は，南壁部付近で壁の立上りが明確でなく，北壁のカマドが撹乱されており，良好とは言えない。

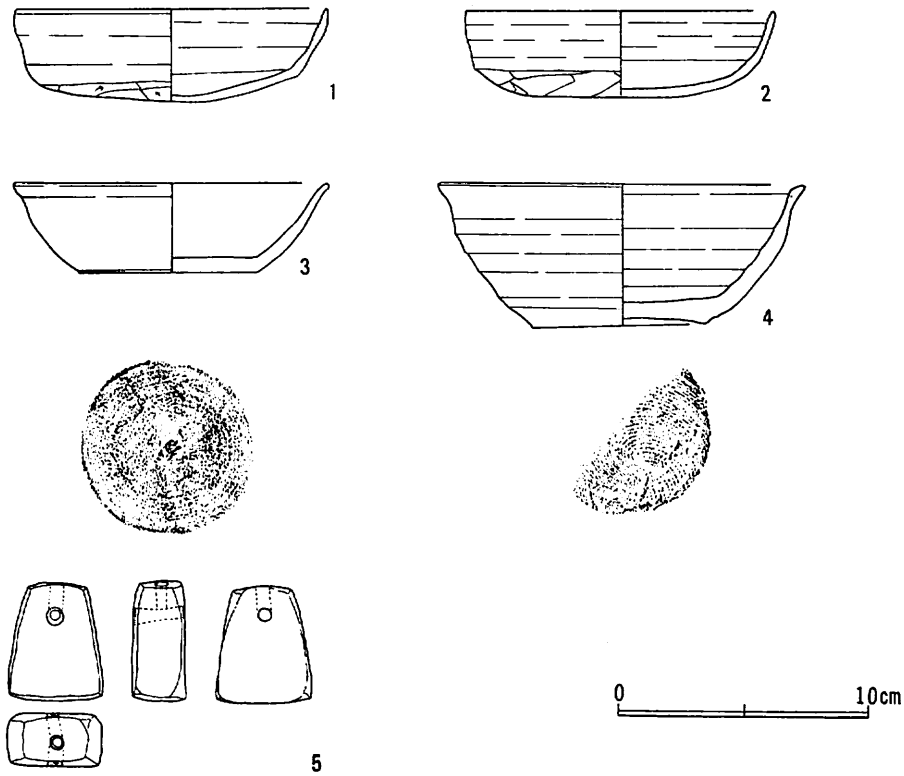
平面プランは隅丸方形を呈し東西，南北の径は3.5×3.5m，主軸方位はN—50°—Wであり，面積は約11㎡である。

壁高は確認面より南壁で18cm，北壁で15cmと非常に浅く，ほぼ垂直に立上っている。床は概して

平坦なローム直床で，良く踏みしめられている。カマド付近では焼成を受け，赤変していた。周溝は北西部で若干切れるが，カマドを除き全周していた。幅は4～14cm深さは8～12cm，柱穴は4本で，$P_1$25cm・－24cm，$P_2$25cm・－35cm，$P_3$20cm・－24cm，$P_4$30cm・－29cmであった。

西壁中央部から床面に径1m，－30cmの円形の大形のピットが掘込まれていたが，覆土の堆積はこの住居址の床面からであり，本住居址に伴った施設であったと思われる。

カマドは北壁中央部に設けられているが，何らかの攪乱を受け破壊されていて，粗形をとどめるだけであった。全長150cm，幅70cmであった。　　（植木　弘）



第15図　第6号住居址出土遺物

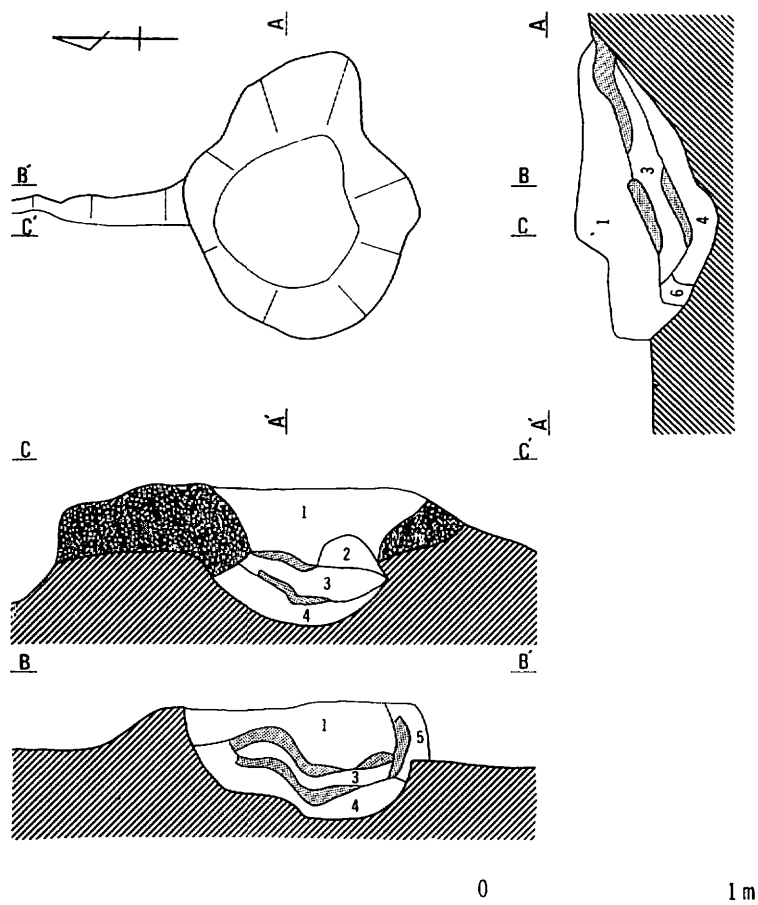
第4表　第6号住居址出土遺物観察表（第15図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 12.6 器高 3.7	口縁部と体部の境が不明瞭。平底風。口唇内側やや凹む。	口縁部横ナデ，下部指頭による調整。体部外面箆削り，内面ナデ。焼成良。胎土に鉱物粒を多く含む。褐色。	¾存　床＋覆土
坏	2	口径 12.6 器高 3.5	1と同形態。	1と同じ。	⅔存　床＋覆土
坏 須恵器	3	口径 12.5 底径 7.0 器高 3.6	内彎気味に立上がり口縁でゆるく外反する。底部内面にうず巻状にロクロ痕残る。	ロクロ整形，糸切り後全面回転箆削り。体部下端に糸切り痕残す。焼成良。胎土白色糸状物質少量，石英長石含む。灰白色。	¾存　床

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏 須恵器	4	口径 14.6 底径 6.8 器高 5.7	内彎気味に立上り，口縁部ゆるく外反。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質，小礫多く含む。青灰色。	¾存 床 ロクロ右

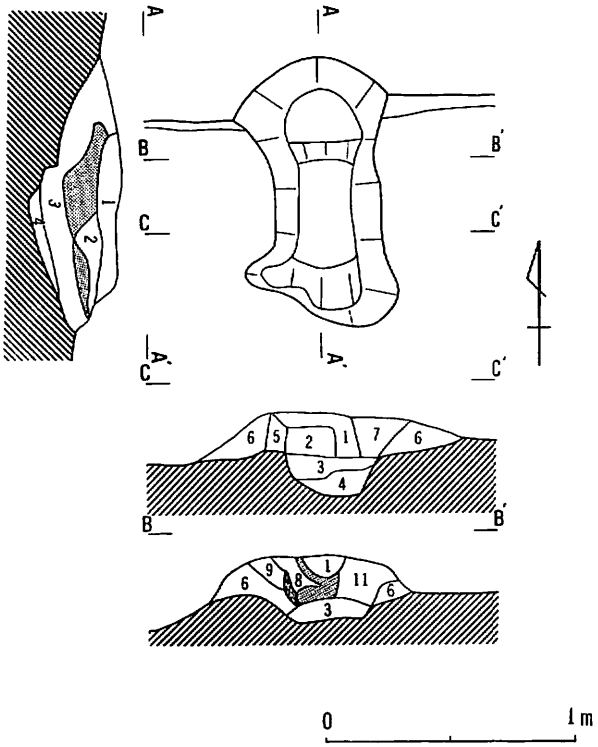
第7号住居址（第16・18図）

本址は，発掘区の東側の住居址群に位置する。この住居址より南にはローム層の堆積がなく，黒色土層中に生活面が認められた。本址は8号住居址と北側で重複しており，セクションによると本址が新しいことが確認された。主軸方位はN—80°—Eである。規模は東西が4.65m，南北が4.70m，床面積は21.85㎡で隅丸方形を呈する。壁高は遺構確認面より35cmを測り，ほぼ垂直に近い立上りを示している。壁直下に南側を除き壁溝が幅約20cm，床面よりの深さ12cmの規模で巡っている。床は黒色土の上にロームブロックを敷き貼床としており全体的に堅緻である。特にカマド前面が堅く踏みしめられている。柱穴は5ヵ所発見されたが，本址にともなうものはP_1～P_4と思われる。そのほかカマド前面に，土器片を多く含んだ焼土塊が堆積していた。床面も焼けていたために，住居の



第16図　第7号住居址カマド（1/30）

1層　黄褐色土　焼土を含み硬い。粘土質。
2層　暗褐色土　焼土ブロックと粘土粒子を含む。
3層　灰褐色土　灰・焼土粒子を含む。
4層　暗褐色土　焼土を若干含む。粘性あり。
5層　黄褐色土　焼土粒子を含む。粘土質。
6層　暗褐色土。



第17図　第８号住居址カマド（1/30）

1層　黄褐色土　焼土ブロックを含む粘土質。
2層　黄褐色土　焼土ブロック（大）を含み，堅くしまっている。粘土質。
3層　暗褐色土　焼土粒子を若干含む。
4層　黒色土　ロームブロックを含む。
5層　黄褐色土　堅くしまっている。炭化物を含む。
6層　黄褐色土　粘土質。
7層　褐色土　（ボソボソ）。
8層　暗褐色土　焼土のブロック，粒子を含む。
9層　褐色土
11層　褐色土　焼土粒子，ローム粒子を若干含む。

廃絶後に投棄されたものではないようである。性格は不明である。

カマドは東壁中央に位置する。全長1.25m，袖部幅1.60mを測る。遺存状態は良好だが，左側袖が一部北側に流れている。掘り方は平面が楕円形ですり鉢状である。構築材料は主に白色粘土で，天井部は黄褐色の粘質土で構築している。壁外への掘り込みは三角形を呈し，約50cmである。傾斜は約38度で，途中に段がある。セクション図によると，火床面は４層上面である。掘り方の面は使用されておらず，掘った後に暗褐色土を埋めて火床を形成している。最終的な煙道部には３層が相当し，傾斜は約28°とゆるやかである。燃焼部はB－B′によると壁体も焼けて焼土化しており，空間として復原が可能である。焚口は幅約50cmでゆるやかに燃焼部へと進む。器設部は，A－A′の３層上面の，焼土層の切れている所に位置するであろう。

第８号住居址（第17・18図）

本址は南側を７号住居址に切られており，全体の½ほどしか遺存していなかった。主軸方位はN－8°－Wである。規模は東西が4.5m，南北不明で隅丸方形を呈すると思われる。壁高は遺構確認面より20cmを測り，ほぼ垂直に立上がる。床はロームブロックを敷き貼床としており，堅緻である。柱穴は２ヵ所検出された。P1・P2，７号住居址内のP5も，位置的に本址の柱穴と推定される。

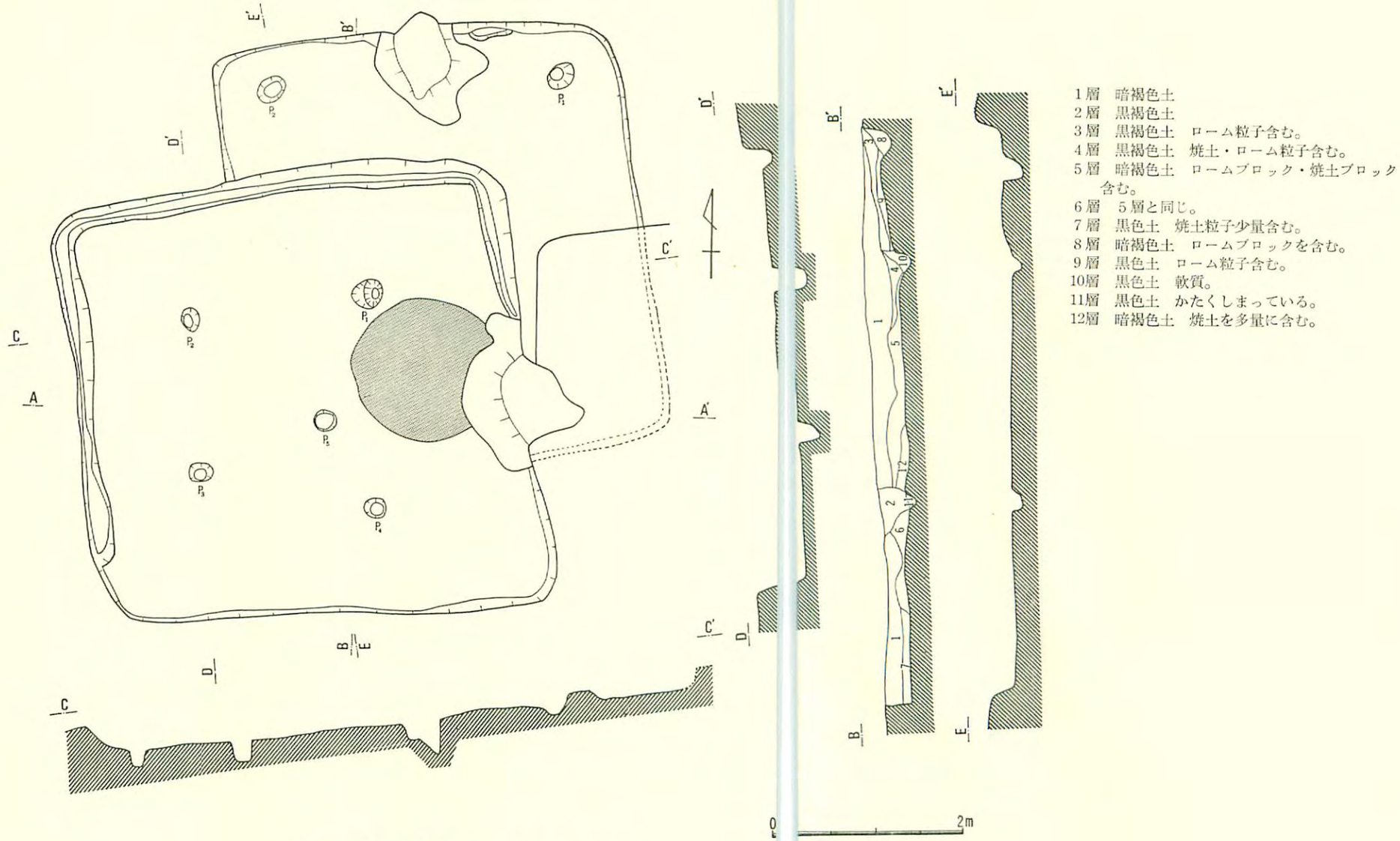
カマドは北壁中央に位置する。大部分が住居址内に構築されている。規模は全長1.10m，袖部幅0.90mを測る。遺在状態は良好である。掘り方は長楕円形で，焚口部は横に張り出しがついている。

焚口よりゆるやかな傾斜で掘り込まれ，煙道では段を持って立上がる。構築は袖部，天井部とも黄褐色粘質土で構築されている。壁外への掘り込みは，半円形に20cmほどである。焚口部幅は40cm，燃焼部幅は40cmで，火床面は4層上面である。煙道は，傾斜の30°ゆるやかな立上がりである。

（小渕良樹）

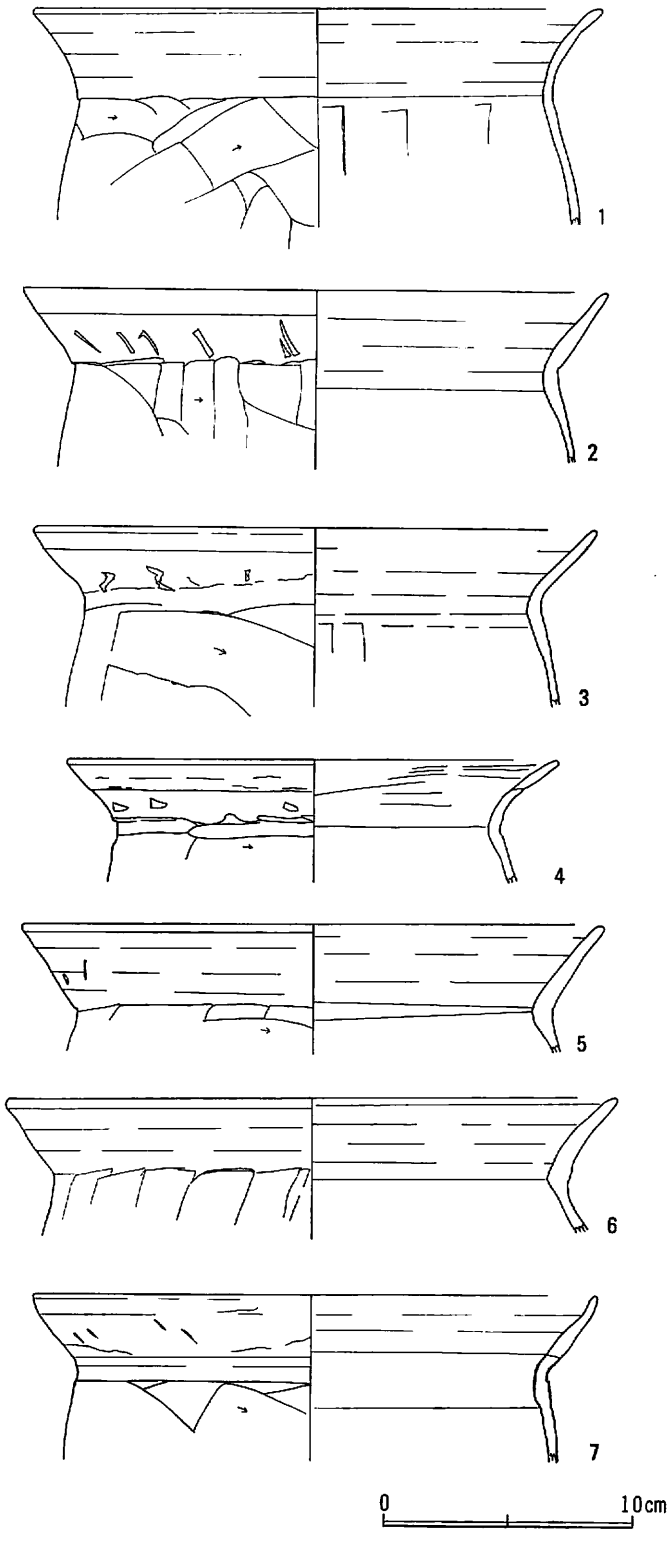
第5表　第7号住居址出土遺物観察表（第19・20図）

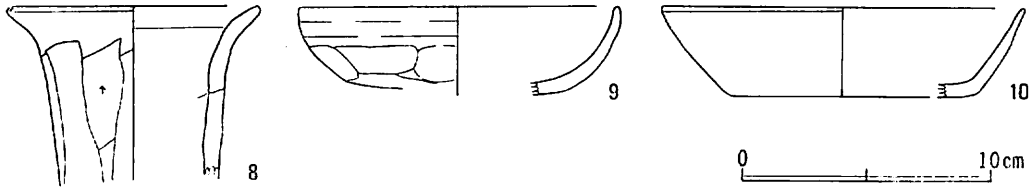
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 22.7	口縁部外反，なめらかに胴部へ移行。	口縁部横ナデ。胴部外面横方向の箆削り。内面木口状工具によるナデ。	1/4存　カマド＋覆土
甕	2	口径 23.5	「く」の字状口縁。口唇部を薄く仕上げ。胴部の削りの為に頸部に段あり。	口縁横ナデ，胴部横位の箆削り。口縁下部を箆削りにより切られている。胎土砂質。褐色。	口縁部破片　カマド
甕	3	口径 22.6	「く」の字状口縁，外斜し口唇部ゆるく内彎。	口縁部横ナデ，胴部横位の長い箆切り。褐色。	口縁部破片　カマド
甕	4	口径 19.8	「く」の字状口縁。口頸部削りによる段あり。	口縁部横ナデ，頸部に5㎜ほどの幅で押えあり。胴部横方向の箆削り。箆の先が口縁部をえぐり取っている。胎土砂粒含む。燈色。	口縁部破片　焼土内
甕	5	口径 23.4	「く」の字状口縁。	口縁部横ナデ，胴部横の箆削り。褐色。	口縁部破片　焼土内
甕	6	口径 24.4	口縁部外反。「く」の字状。	口縁部横ナデ，胴部→方向の箆削り。焼成良。胎土微細な鉱物粒含む。赤みかかった褐色。	破片　覆土
甕	7	口径 23.3	ゆるく外反し口唇部で内彎。	口縁部横ナデ。粘土紐成形による不整合あり。褐色。	口縁部破片
甕	8	口径 10.2	ゆるく外反する口縁より連続して胴部に移る。	口縁部横ナデ。胴部縦位の箆削り。内面未調整。	1/4存　覆土
坏	9	口径 12.8 器高 3.4	半球状の器形。	口縁横ナデ。体部外面箆削り，内面ナデ。焼成良。胎土異物少量含む。橙褐色。	1/3存　覆土
坏 須恵器	10	口径 14.5 底径 10.0 器高 3.6	ゆるく内彎気味に立上がる。口唇部を薄く仕合げている。	ロクロ整形，底部回転箆削り。胎土に小石含む。褐色，口唇下1cm。黒色。	1/3存　覆土



第18図　第7・8号住居址（左7住,右8住）（1/60）

第19図　第７号住居址
出土遺物（１）





第20図　第７号住居址出土遺物（２）

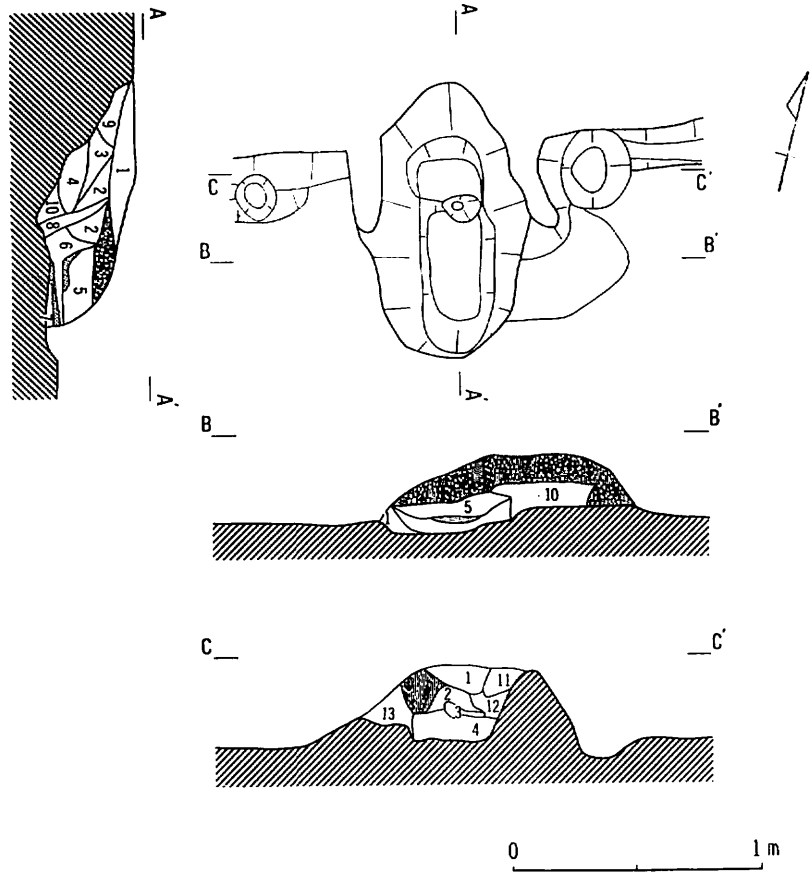
第９号住居址（第21・22図）

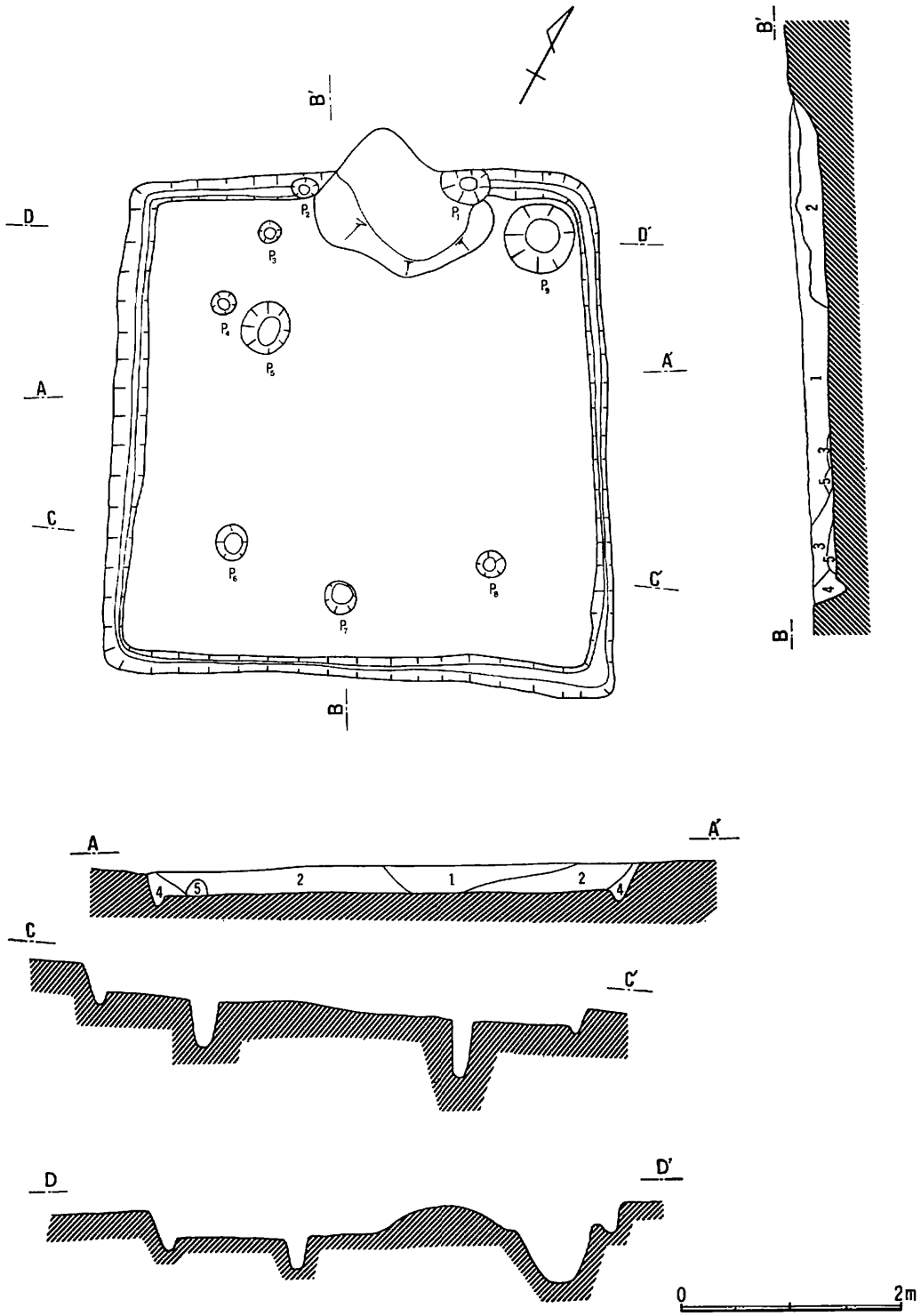
本住居址は10号住居址の南約１ｍ，この微高地の東より頂部に位置し，遺存状態は非常に良好であった。平面プランは，4.5×4.5ｍの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ—25°—Ｗである。床面積は約21～22㎡である。壁高は確認面より北壁で24cm，南壁で22cmでほぼ垂直に立上がっている。床は踏みしめられて堅く，平坦なローム直床である。周溝はカマドを除き全周し，Ｕ字状を呈する幅10～30cm，深さ８～15cmであった。柱穴は４本確認された。

$P_4$30×28cm・－29cm，$P_6$27×25cm・－49cm，$P_8$20×18cm・－30cm，$P_7$22×22cm・－36cm，$P_1$33×29cm・－42cm，$P_5$49×43cm・－31，このうち主柱穴となるものはP_5・P_6・P_8と思われる。

第21図　第９号住居址
カマド（1/30）

1層　暗褐色土　粘質で，大粒の焼土ブロックを含む。
2層　暗褐色土　若干のローム粒子を含む。
3層　暗褐色土　多量にソフトロームを含む。
4層　炭化物とロームブロックを含む。
5層　暗褐色土　粘質。
6層　炭化物を多量に含む層で，若干焼土を含む。
7層　炭化物と焼土。
8層　黒色土（灰）
9層　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
10層　暗褐色土　粘質で，焼土粒子を含む。
11層　暗褐色土　10層よりも炭化物が多い。
12層　暗褐色土　粘質で，若干の焼土と炭化物粒子を含む。
13層　暗褐色土　軟質。ローム粒子を含む（撹乱）。
14層　暗褐色土　ロームブロックを含む。



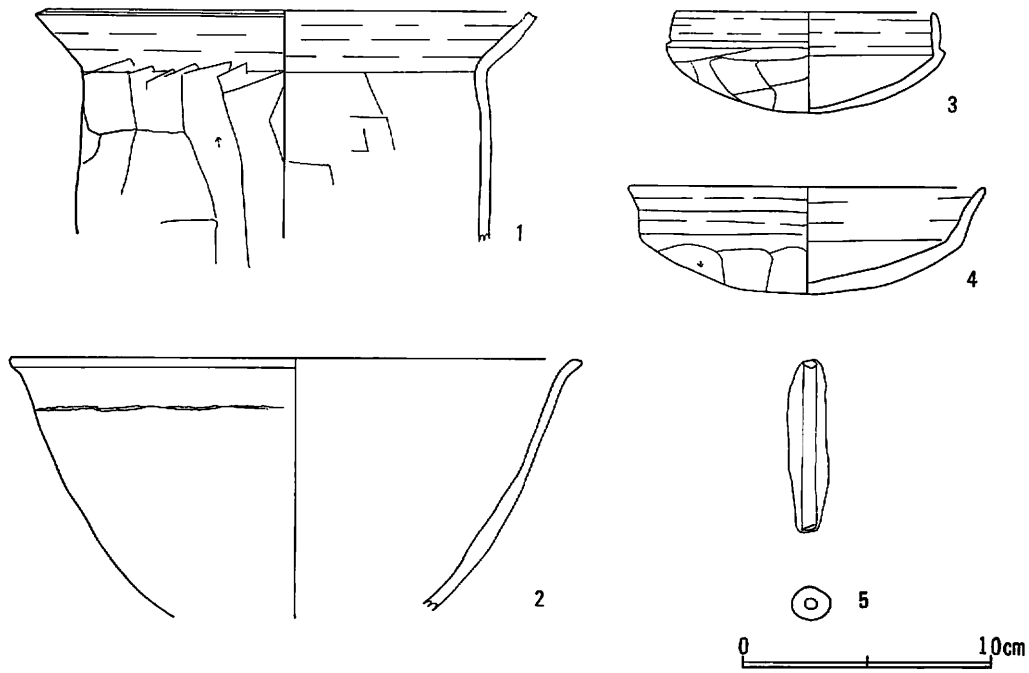


第22図　第9号住居址（1/60）

貯蔵穴（Ｐ９）は，北東部コーナーに検出された。円形で径60cm，深さ54cmである。この付近には柱穴は見あたらなかった。

カマドは全長110cm，幅90cmで袖は壁から造り出したローム袖を利用し，袖の両脇の周溝のとぎれる部分には西側で径20cm，東側で径30のピットがそれぞれ認められた。

焚口の幅は30cm，燃焼部は長楕円形で煙道部へと続き，ゆるやかに立上がる。



第23図　第９・10号住居址出土遺物（１・５第９号，２～４第10号）

第６表　第９号住居址出土遺物観察表（第23図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 20.0	口縁が「く」の字状に外斜，端部は平坦，中位張らむ。胴部は張らず直線的である。	口縁部横ナデ，胴部↑方向の箆削りで口縁部に削りカス付着。内面→方向のナデ。焼成良。胎土砂質。暗褐色。	1/6存　カマド

第９号住居址土層

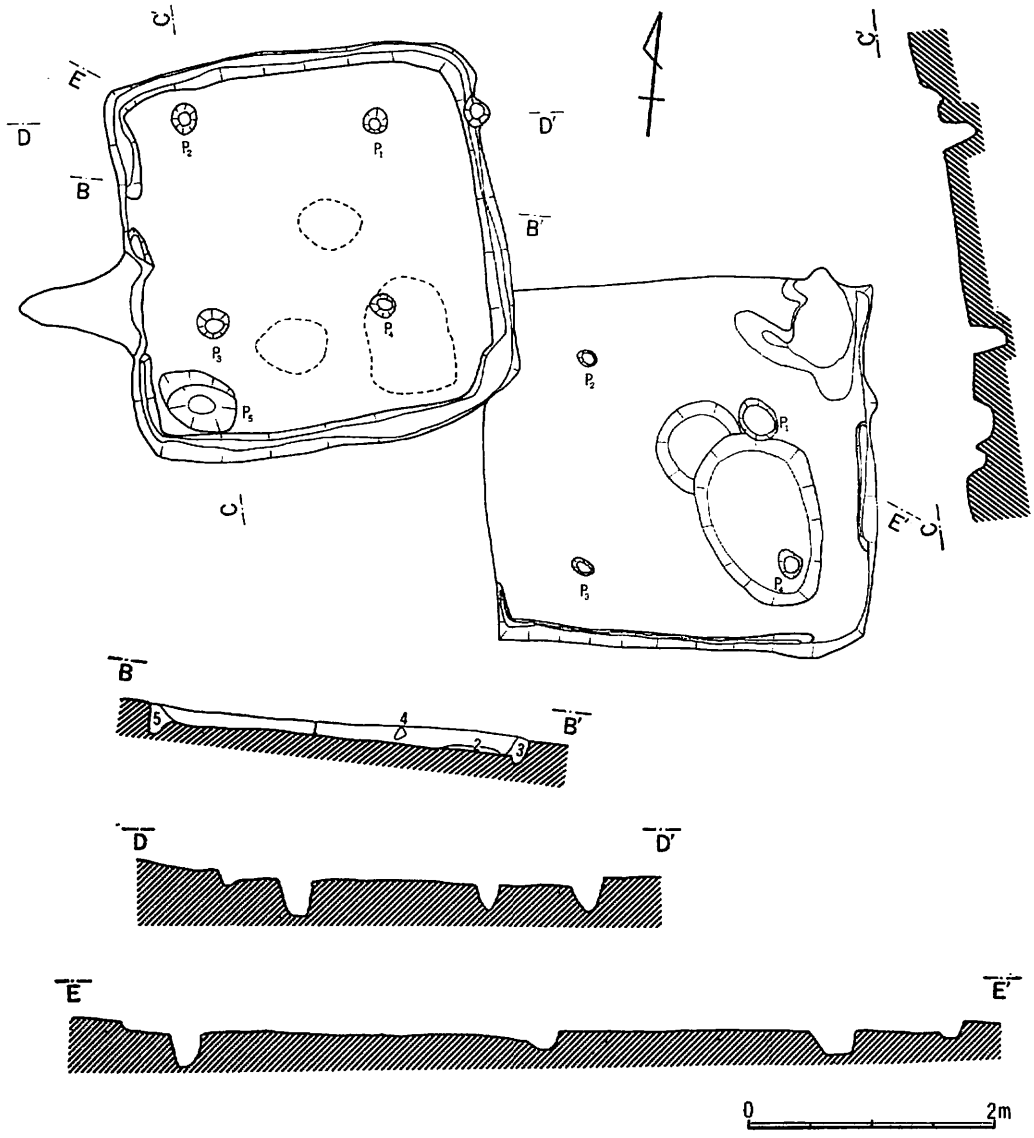
１層　暗褐色土　ローム粒子・黒色土含む。２層　暗褐色土　ローム・ブロック・焼土・炭化物含む。
３層　暗褐色土　ローム粒子含む。４層　黒褐色土　ローム粒子含む。５層　ロームブロック

第10号住居址（第24図）

本址は，発掘区の東側住居址群に位置する。全体に掘り込みが浅く，北壁はカマドの存在より推定したものである。また，11号住居址に北西コーナーを，土壙２基により中央部をそれぞれ床面下まで攪乱されており，遺存状態の非常に悪い住居址である。主軸方位はＮ－10°－Ｗ。規模は東西

3.17m，南北2.98m，床面積9.44㎡で隅丸方形を呈している。壁高は，南壁で遺構確認面より10cmを測る。壁溝は南壁下で確認され，U字状を呈し幅12cm，深さ5cmを測る。床面はローム ブロックを敷いて貼床としており，全体的に軟弱である。

カマドは北壁の東隅に位置している。焼土塊だけ遺存したのみである。



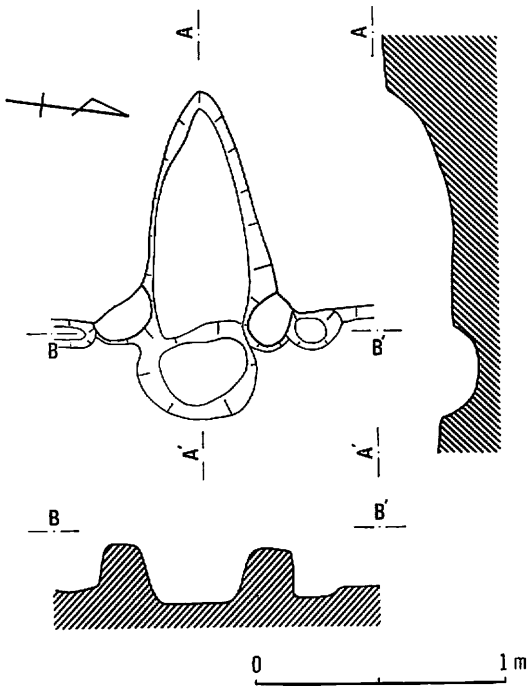
1層　暗褐色土　ローム粒子含む。
2層　暗褐色土
3層　粘土
4層　ローム ブロック
5層　黒色土　ローム粒子含む。

第24図　第10・11号住居址（1/60）

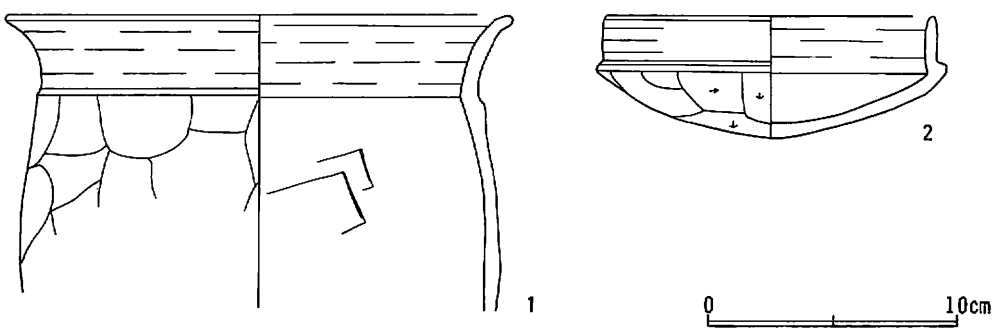
第11号住居址（第24・25図）

本址は，10号住居址の北西コーナーを切って構築されている。プランは東西3.12m，南北3.10mの隅丸方形である。ローム への掘り込みは浅く，8cm前後である。壁下には，カマド部分を除き壁溝が巡っている。幅10～15cm，深さ6cmのU字状である。床は，ロームブロックを敷いて貼床としている。全体に軟弱である。ピットは5ヵ所検出された。柱穴はP_1～P_4と思われる。P_5は貯蔵穴であろう。

カマドは西壁の中央やや南に位置する。ほぼ全壊していたが，構築方法についてはある程度の観察ができた。すなわち，主要部は壁外へ大きく張り出して構築されている。袖はローム層を掘り残しており，構築の際の計画性がうかがえる。（小渕良樹）



第25図　第11号住居址カマド（1/30）



第26図　第10号住居址出土遺物（2）

第7表　第10号住居址出土遺物観察表（第23・26図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	第23図2	口径 23.9	口縁部ゆるく外反する。胴部は丸味をもって底部に向い，底部は欠失しているが丸底となるだろう。	粘土紐成形で頸部に不整合がみられる。口縁部横ナデ，他は器表面が荒れており不明。胎土に黒色粒物質含む。焼成不良。赤褐色。	½存　床
坏	3	口径 10.4 器高 4.1	段明瞭。丁寧なつくり。口縁部内斜。	口縁部横ナデ。体部外面篦削り，内面ナデの後ミガキ。外面黒褐色，内面橙色。	½存　床

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	4	口径 14.4 器高 4.3	口縁部外反，境不明瞭。丸底。	器表面が荒れ観察不能。胎土に鉱物粒含む。焼成良。外面体部黒褐色，その他は淡褐色。	½存 床
坏	第26図2	口径 13.1 器高 4.9	口縁部やや内斜，段明瞭。底部やや尖がり気味。	口縁部横ナデ，体部内面まで連続する。体部子面箆削り。胎土に鉱物粒少量含むが良質。焼成良内面赤褐色，外面淡褐色。	¼存 床
甕	1	口径 20.2	口縁部ゆるく外反する。頸部に整形の違いによる段あり。	口縁部横ナデ。外面は器表面が荒れており不明，内面は横方向の箆ナデ。焼成良。胎土に黒色粒物質多く含む。暗褐色。	¼存 床

第12号住居址（第27・28図）

遺跡中央の最北端に位置する。表土が浅く，耕作による攪乱が著しく，遺存状態はきわめて悪い。

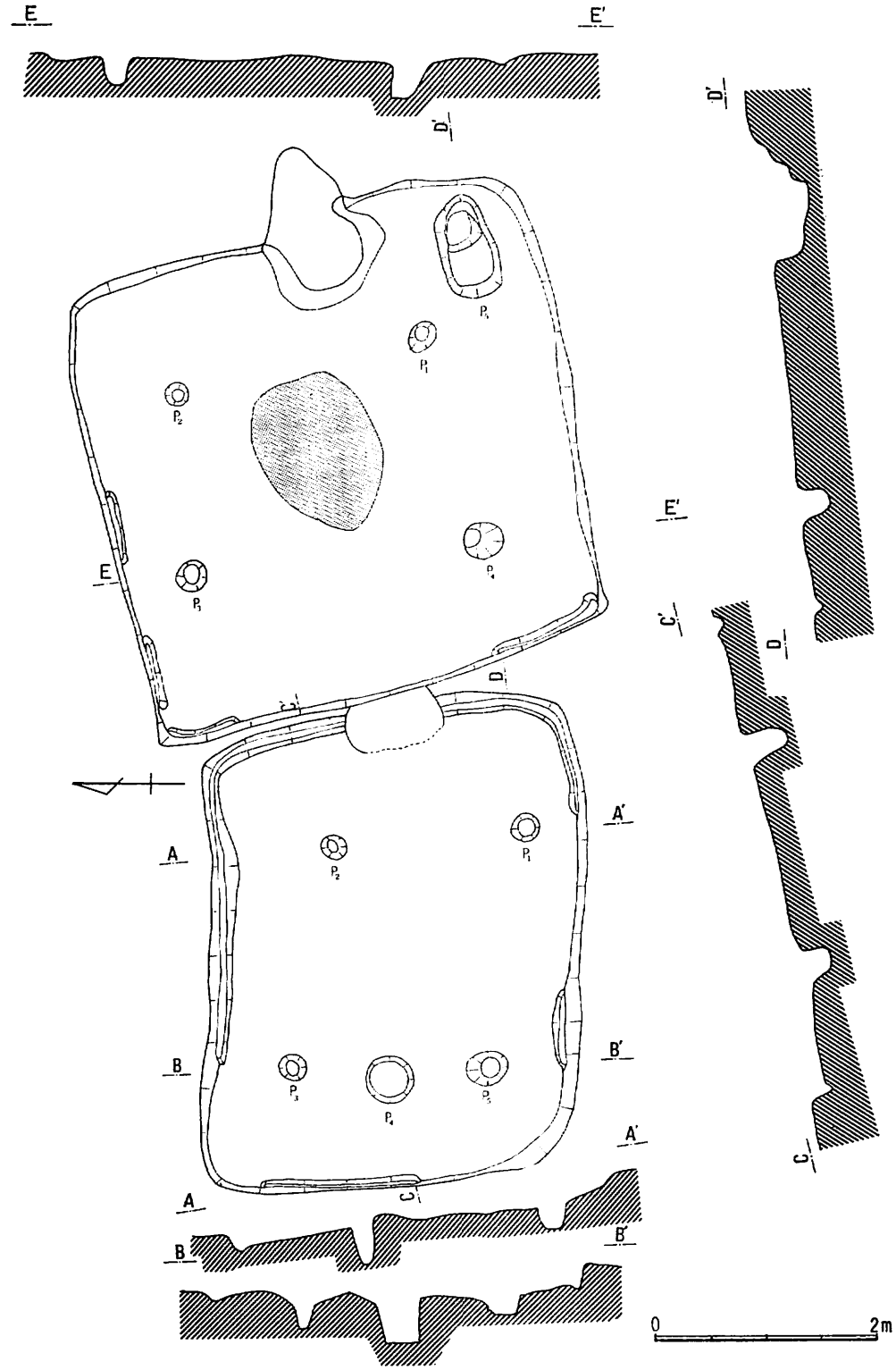
平面プランは，4.3×4.3cmの隅丸方形を呈する。主軸方位は北，床面積は約18㎡となる。壁は確認面より10cm以下であった。床は攪乱による凹凸が著しく，平坦で良好な部分はほとんど残っていなかった。床中央部で，径120cmほどの焼土散布が見られた。周溝は北・南壁で若干確認できた。幅は，5～10cm，深さは5～8cmであった。柱穴は4本で$P_1$25cm・－31cm，$P_2$20cm・－31cm，$P_3$23cm・－23cm，$P_4$27cm・－31cm。貯蔵穴は（P 5）南東部コーナーに設けられていた。52×90cm・－42cmの隅丸長方形を呈していた。

西壁を15号住居址東壁と接しているため，15号住居址のカマドの煙道部のプランが，西壁部から床面に認められた。15号住居址よりも時期が新らしい。カマドに細い攪乱溝が1本かすめている以外には，さほどの攪乱も受けていないようである。全長は130cm，幅90cm，焚き口幅90cmで，燃焼部は径60cmの皿状のピットがあり，煙道部へとゆるく上昇する。

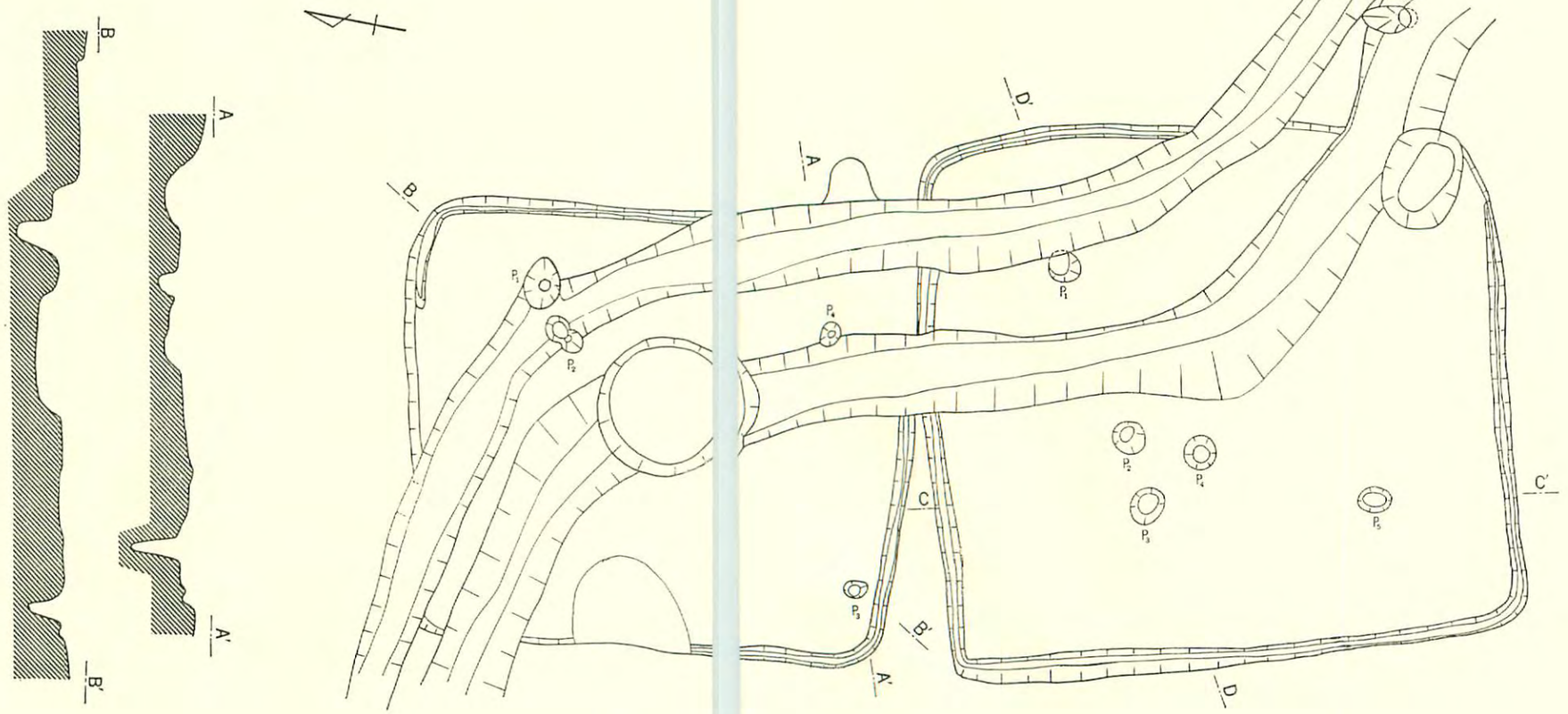
第13号住居址（第29図）

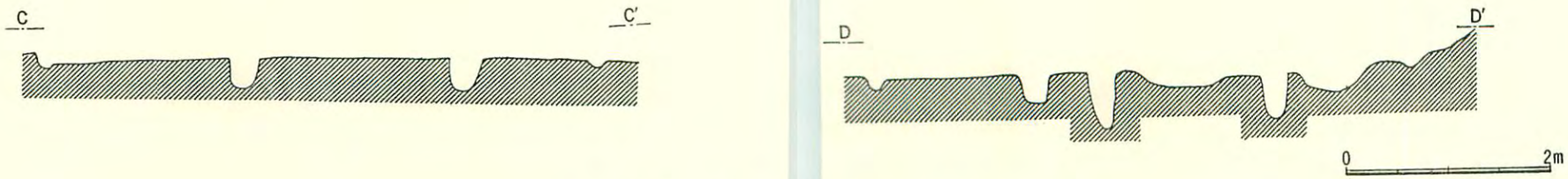
本址は，発掘区の中央に位置する。南側は14号住居址と重複し，中央には南北に走る2条の溝と2個の土壙により攪乱され，遺存状態が非常に悪い住居址である。主軸方位はN－85°－E。規模は東西4.20m，南北4.70m，床面積19.1㎡で隅丸方形を呈す。壁体は7cmと浅く，やや外斜している。壁下には，北西部を除き壁溝が巡っている。規模は幅15cm，深さは床面より5cmである。床面は概して軟弱であった。ピットは4ヵ所検出し，主柱穴はP_1・P_2・P_4と思われる。

カマドは東壁の南隅に位置している。溝により破壊され，壁外への凹みが一部残されていたにすぎない。



第27図　第12号（上），第15号（下）住居址（1/60）

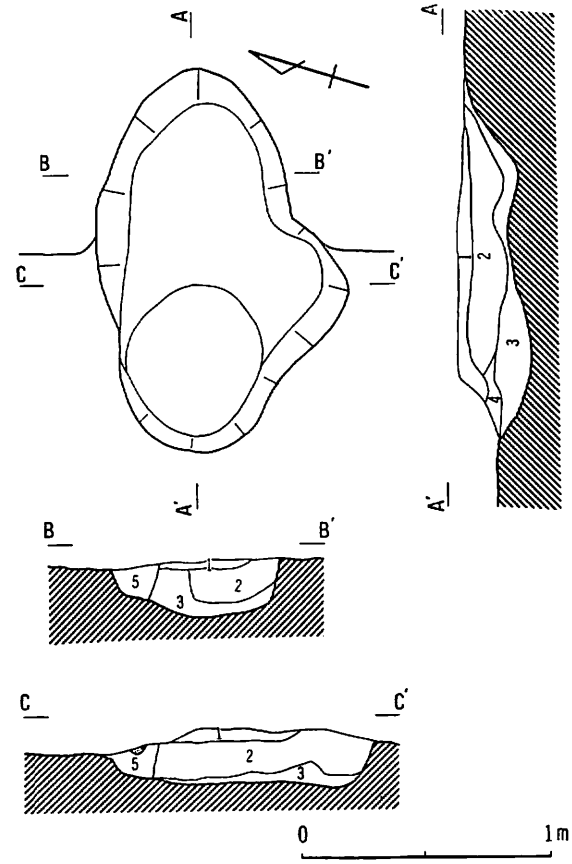




第29図　第13号（左），第14号（右）住居址（1/60）

第28図　第12号住居址カマド（1/30）

1層　赤灰褐色土　粘質で，粒状の焼土を含む。
2層　暗褐色土　粒状ロームと焼土，炭化物を含む。
3層　ロームブロックと暗褐色土にごく微量の炭化物，焼土を含む。
4層　暗褐色土　焼土の微粒子を含む。
5層　暗褐色土



第14号住居址（第29図）

発掘区の中央に位置する。13号住居址と２条の溝に撹乱され，非常に遺存状態の悪い住居址である。主軸方位はN—78°—E。規模は東西5.38m，南北5.60m，床面積30.12㎡で隅丸方形を呈する。壁体は北壁が５cm，南壁はほとんど検出されなかった。壁下には幅13cm，深さ８cmのU字型を呈す壁溝が南東隅を除き巡っている。床はほぼ平坦でやや軟弱である。ピットは６ヵ所検出された。柱穴はP_1，P_5が確実と思われる。東壁コーナーのピットは貯蔵穴であろう。

カマドは東壁のやや南に位置していたが，溝によって破壊された，焼土しか残っていなかった。

（小渕　良樹）

第15号住居址（第27図）

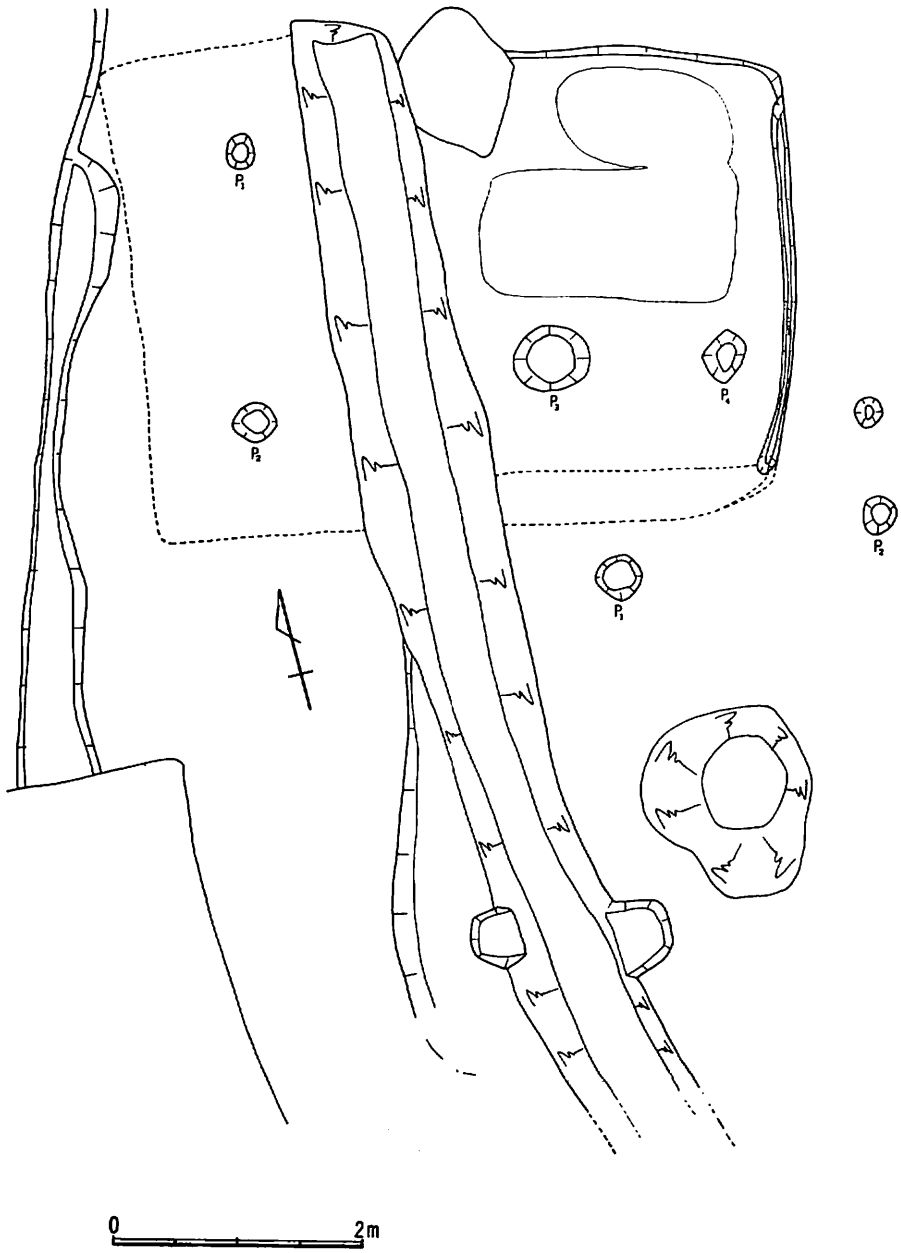
12号住居址の西側に，壁を接している。遺存状態は，12号住居址と同様，きわめて不良。

平面プランは南北3.4m，東西4.3mの隅丸方形を呈する。主軸方位は北。床面積は約14㎡となる。壁は確認面から10～20cmであった。床の状態は12号住居址と同様で，撹乱が著しかった。周溝は東壁と北壁は全周し，他は確認できなかったが，元は全周していたと思われる。幅は５～25cm，深さは４～10cm。柱穴は５本で$P_1$20cm・－24cm，$P_2$22cm・－37cm，$P_3$25cm・－18cm，$P_4$40cm・－36cm，$P_5$28cm・－19cm。

カマドは12号住居址に煙道部を切られていて，他も撹乱でほとんど原形を失っていた。壁からの煙道部のプランのみ確認する。

第16号住居址（第30図）

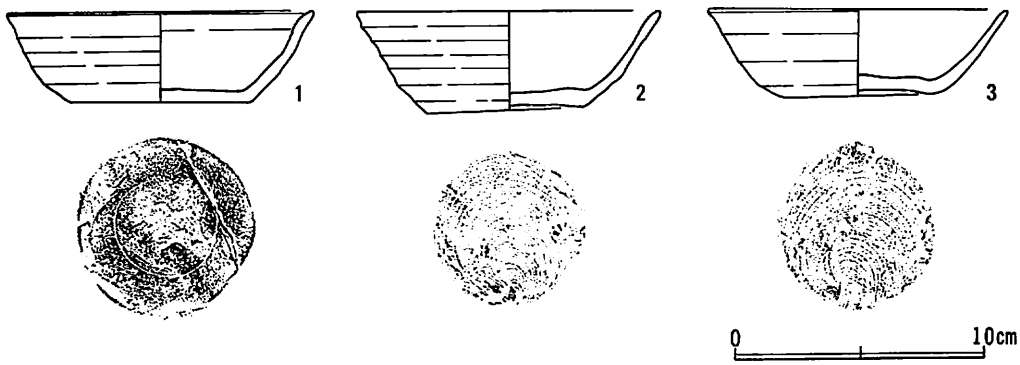
本住居址は，発掘区域南方のローム層を浸蝕した谷端部に位置し，遺構は黒色土層上面に検出されるため，トレンチの設定により確認調査を行なった。ここでは東西の黒色土断面に厚さ5㎝前後



第30図　第16号住居址・第2薄（1/60）

にローム・ブロックを含有するベルト層が観察され，同レベル上に，須恵器坏の完形品３点と焼土ブロックが検出されたので，本住居址の床面と認定し，存在を明示した。しかし遺構は，第２大溝やヲ号土壙などの後世の攪乱を受け，竪穴の全体を把握する事は困難であった。

カマドの位置は，焼土範囲の推定により西壁に付設されていたものと思われるが，規模形状は不明である。（村上光一）



第31図　第16号住居址出土遺物

第８表　第16号住居址出土遺物観察表（第31図）

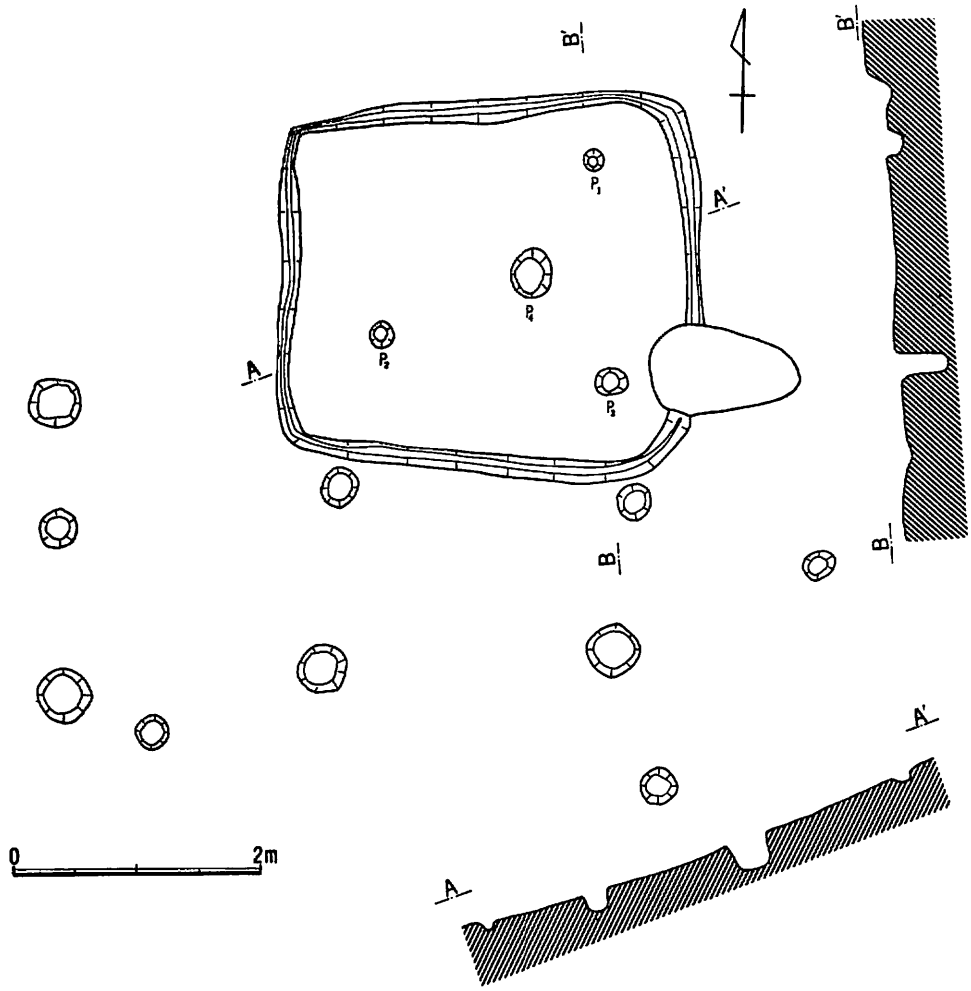
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏 須恵器	1	口径　12.4 底径　7.2 器高　3.6	内彎気味に立上がり口唇部外反。口唇部肥厚。底部内面にうず巻状にロクロ痕が残る。口縁部内側摩滅。	ロクロ整形，糸切り後中央に糸切り痕をわずかに残して回転篦削り。焼成良。胎土に白色糸状物質多く含む。灰色。	完存　床 ロクロ左
坏 須恵器	2	口径　12.2 底径　6.6 器高　4.1	ほぼ直線的に立上がる。やや上げ底。ロクロ痕明瞭。底部に３本の沈線が平行に走る。焼成前に置いた時の痕跡であろう。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質少量，長石含む。黒味がかった青灰色。	⅔存　床 ロクロ右
坏 須恵器	3	口径　12.1 底径　6.0 器高　3.6	底部より直線的に立上がる。底部上げ底。口縁数個所にゆがみ有。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に小礫多く含む。青灰色。	完存　床 ロクロ右

第17号住居址（第49図）

本住居址は，調査区域西寄りに発見された。竪穴は，ローム掘り込みが10cm前後と極めて浅く，保存は良好でなかった。

プランは，平均幅10cmの周溝が全周しており，東西に長い長方形を示した。規模は，東西約5.10m，南北約4.50mを測り，主軸方位はN—89°—Eであった。床面は，かなり凸凹がある軟弱なローム直床であった。柱穴は１ヵ所検出されたが，位置的，性格は判然としない。なおカマドの右方に，口径約60cmの貯蔵穴が施設されていた。

カマドは，西壁中央部に付設されていたが，かなり撹乱を受け，縦約90cm，横約59cmの範囲で焼土が散在していた。そのため性格規模を明示する事は困難であった。



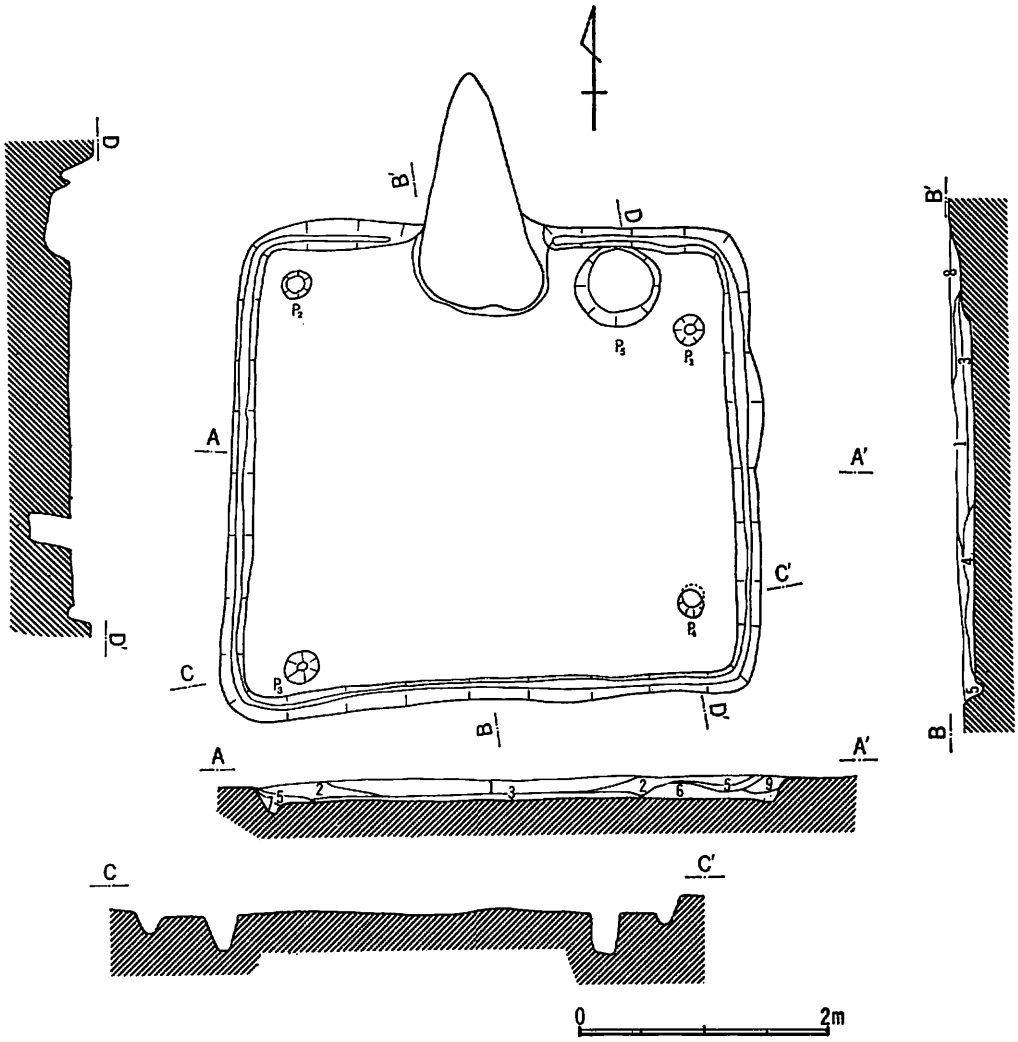
第32図　第18号住居址（1/60）

第18号住居址（第32図）

調査区の，最も北西にある住居址である。平面プランは東西3.4m，南北3.1mでほぼ正方形を呈していた。壁体は北壁だけが10cm前後で遺存し，他は数cm残存するのみであった。壁下にはカマドを除き幅15cm，深さは床面より5cmの壁周溝が全周していた。床面はロームで撹乱がはげしく，きわめて軟弱であった。柱穴は，北西コーナーを除く各コーナーから，対角線上に60cm位の地点に見られた。形状は円形を基調として，径20cm，深さは床面より15cm前後の比較的小さな柱穴である。中央部やや東寄りに径35cm，深さ25cmのピット4を検出したが，規模等からピット群に関連していると思われる。

カマドは東壁中央やや南に位置したが，撹乱により浅く，粗形を掘るだけにとどめた。形状はほ

ぼ楕円形で，焼土は比較的少なく，出土遺物はなかった。　　（中村和夫）



1層　暗褐色土　焼土・ロームブロックを含む。
2層　茶褐色土　焼土・ロームブロックを含む。
3層　粘土　焼土・炭化物含む。
4層　茶褐色土　焼土含む。
5層　暗褐色土　焼土含む。
6層　黒褐色土　焼土・ロームブロックを含む。
7層　暗褐色土　ロームブロック含む。
8層　黒色土。
9層　ロームブロック。

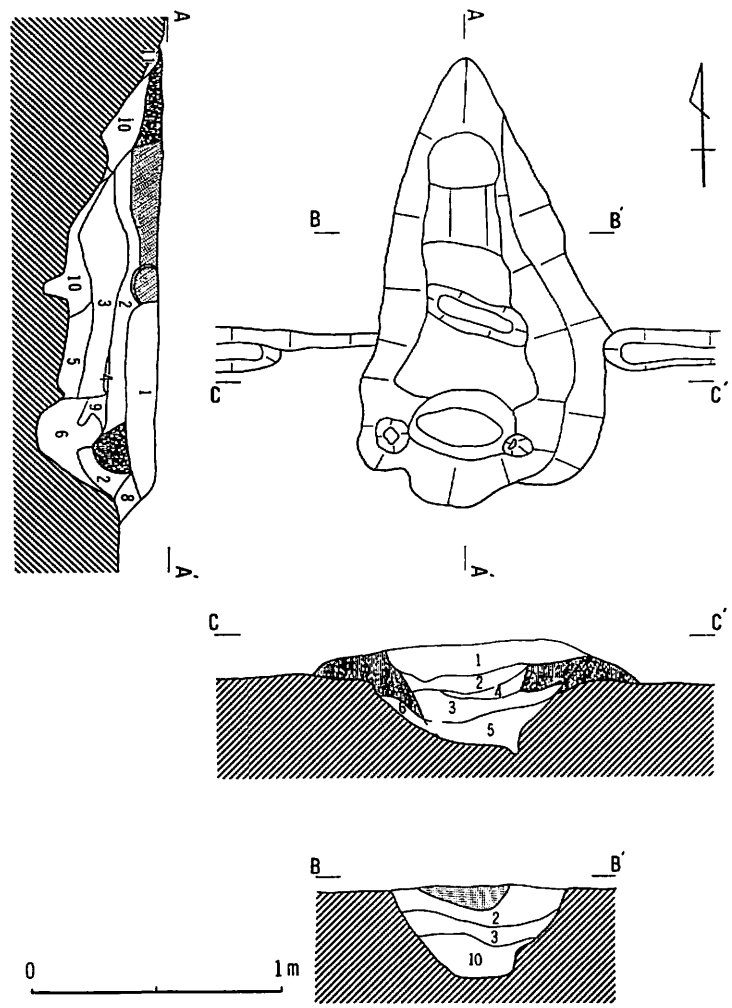
第33図　第19号住居址（1/60）

第19号住居址（第33・34図）

18号住居址の南約10mの所に位置し，発掘区最西端である。遺存状態は，カマドの煙道部に浅い撹乱溝が認められる他は，良好な方であろう。

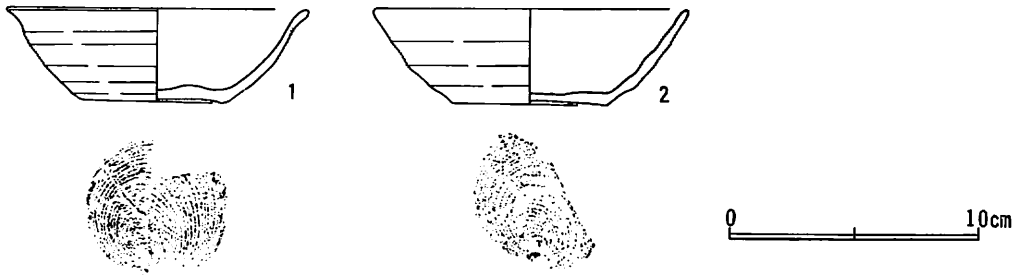
平面プランは東西4.2m，南北3.8mの規模で隅丸方形を呈する。主軸方位は北。床面積は約15㎡。壁は確認面より南西部では，地面はローム面の傾斜で5cm，他は15～20cmであった。床は一面に焼土が覆い，その焼土の下から堅いローム床が露出した。周溝は，カマドを除き全周していた。幅は12～30cm，深さは5～16cm。柱穴は4本，$P_1$25cm・－35cm，$P_2$24cm・－31cm，$P_3$23cm・－18cm，$P_4$26cm・－28cm。貯蔵穴は，カマドの東側に円形プランを呈し径68cm，深さ－16cmであった。覆土の堆積は，全般的に焼土炭化物が多く含まれており，床面直上に完全な焼土の層が認められた。あるいは火災を受けているのかも知れない。

カマドは北壁中央部に位置し，全長185cm，幅110cm，焚口幅40cm，両袖脇に一対のピットが認められた。燃焼部は径45，－20cm，その両脇には左が径15cm，右で径10cmのピットが掘られ，ゆるやかに煙道部へと上昇し，煙道部は60×110cmで，その先端近くに長方形のピット設けられ，段状に煙出し口へと立上がる。煙道部の根本の部分には，これと垂直に交わる幅60，－10cmの浅い攪乱溝が認められた。



第34図
第19号住居址カマド（1/30）

1層　暗褐色土　粘質で焼土粒子含む（溝の攪乱）。
2層　暗褐色土　軟質で焼土粒子を含む。
3層　暗褐色土　2層に大粒の炭化物を含む。
4層　炭化物に焼土を含む。
5層　褐色土　粘質でまばらに小粒のロームブロックと炭化物含む。
6層　黒色土　灰・炭化物を含む。
8層　ローム　焼土を含む。
9層　暗褐色土　ロームブロックを含む。
10層　褐色土　5層より炭化物・焼土が多い。
11層　暗褐色土　ロームブロックを含む。



第35図　第18号（左），第19号（右）住居址出土遺物

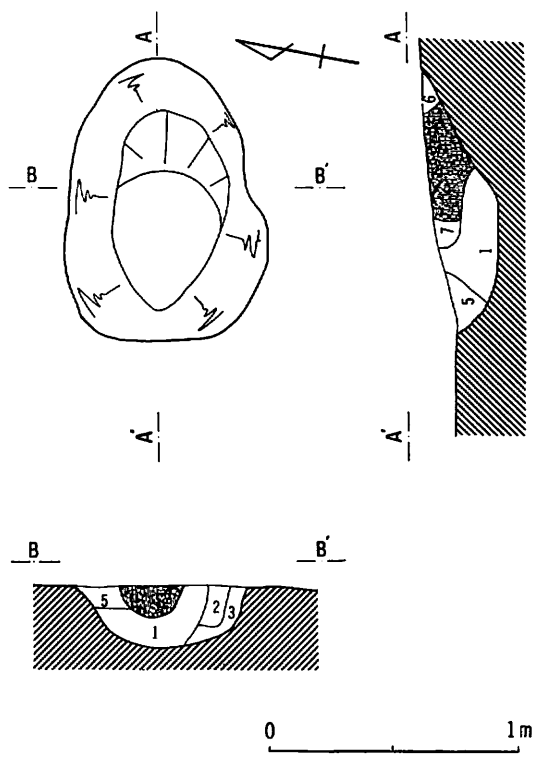
第９表　第18号・19号住居址出土遺物観察表（第35図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏 須恵器	1 19住	口径 12.1 底径 5.6 器高 4.8	底部より内彎気味に立上がり口縁で外反。器表内面荒れている。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に小石含む。白色。	½存　覆土
坏 須恵器	2 18住	口径 12.6 底径 5.2 器高 3.9	内彎気味に立上がる。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質含む。灰色。	½存　覆土 ロクロ右

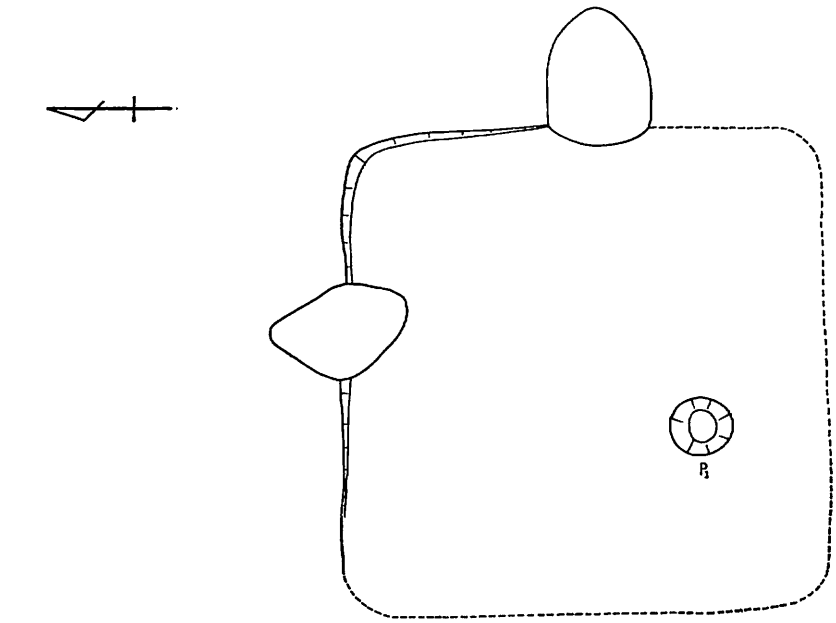
第20号住居址（第36・37・38図）

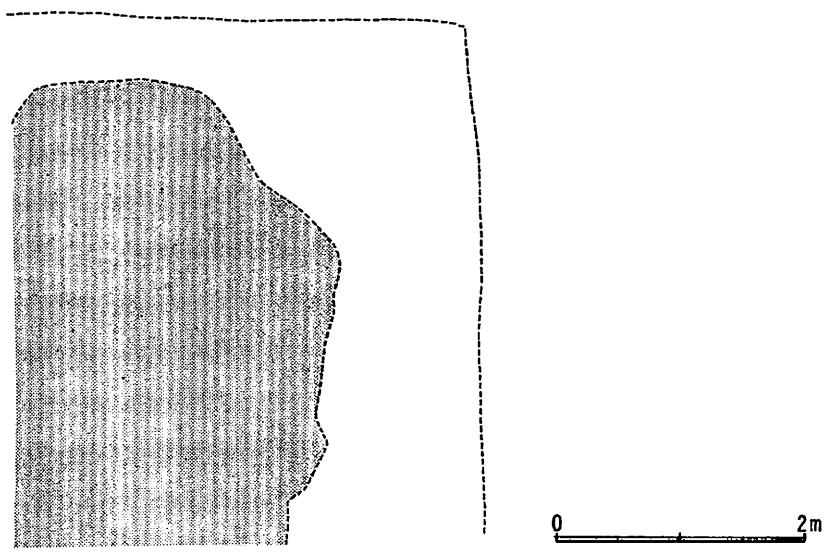
第２井戸の南約６ｍの所に位置し，元は水田地帯の黒色土の中に発見された住居址であるため，プランの確認，壁の立上がりを見極めるのに非常に難行した。

推定では４×４ｍの隅丸方形になると思われる。主軸方位は北。床面積は，約15．6㎡と思われる。壁は北壁の一部と北東部のコーナーが確認されたのみである。床は黒色土ではあるが，良く踏みしめられたバリバリのものであった。柱穴は１本のみ確認された。径45cm・－38cm。周溝は確認されなかった。カマドは，北壁と東壁に２ヵ所存在が認められた。遺存状態はどちらも不良である。北カマド全長140cm，幅80cm，焚口幅40cm，燃焼部は径60cmの円形皿状ピットで，煙道部は円形を呈し，ゆるやかに上昇する。東カマド，全長110cm，幅80cm，焚口幅30cm，燃焼部は楕円形でそのまま煙道部へと続いている。



第36図　第20号住居址東カマド（1/30）

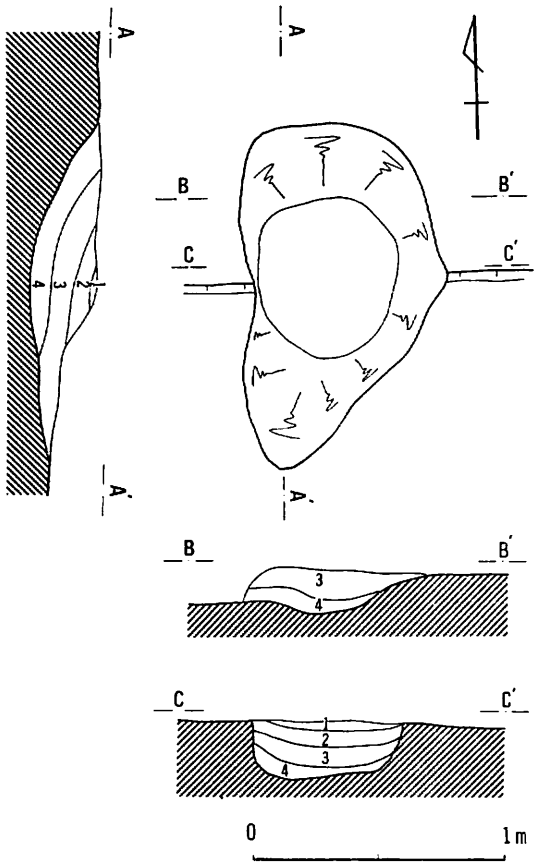




第37図　第20号（上），第21号（左）住居址（1/61）

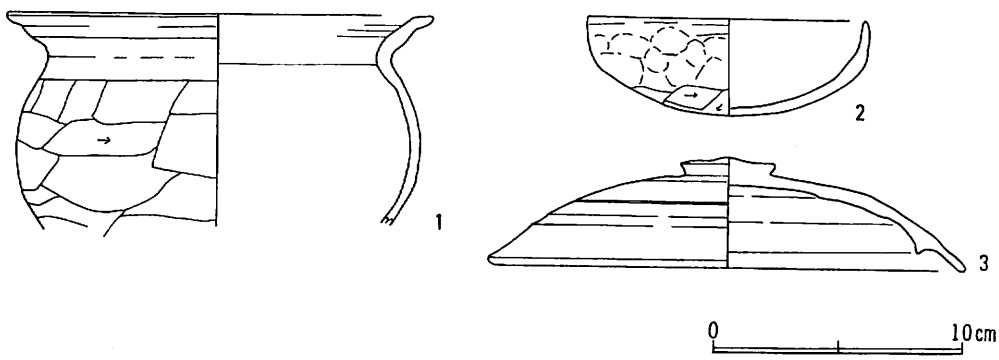
第20号住居址東カマド土層

1層　暗褐色土　ロームブロック・焼土を含む。
2層　褐色土　ロームブロック・焼土粒子を含む。
3層　黒色土　焼土粒子含む。
5層　黒色土　焼土含む。
6層　黒色土　焼土を多量に含む。
7層　黒色土　6層と同じ。



第38図　第20号住居址北カマド（1/30）

1層　暗褐色土　焼土微粒子を若干含む。
2層　暗褐色土　焼土，炭化物を若干含む。
3層　明黄褐色土　焼土を多量に含む。
4層　黒褐色土　焼土を若干含む。



第39図　第20号住居址出土遺物

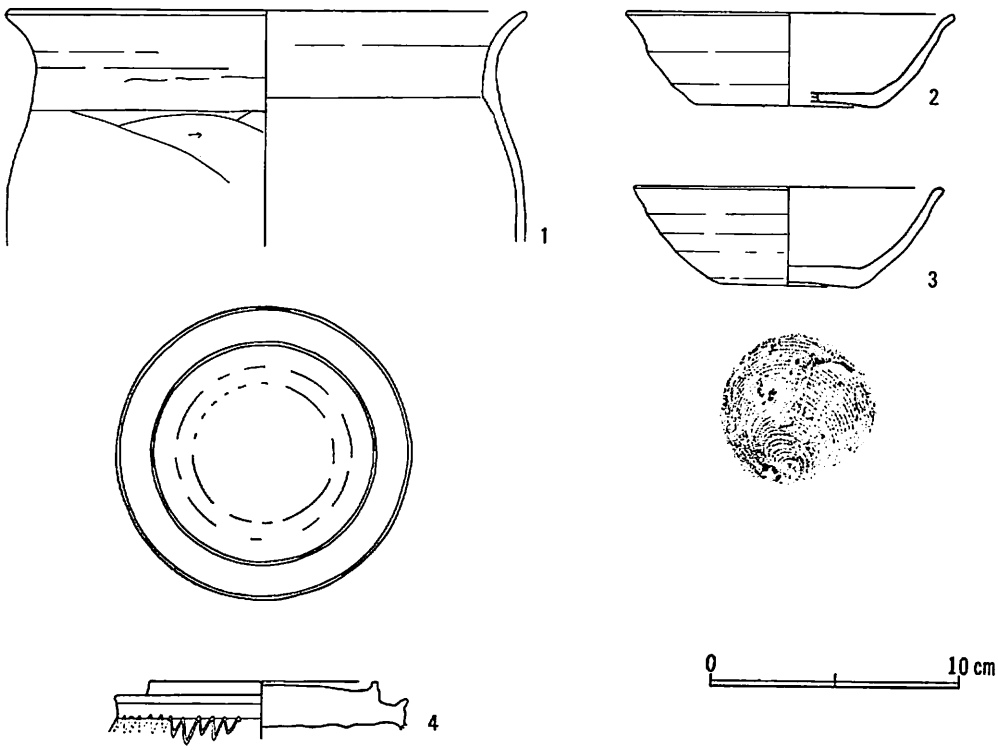
第10表　第20号住居址出土遺物観察表（第39図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 17.0	球体の胴部に中位に段をもつ口縁がつく。口唇上端は平坦。口縁部に強く外に屈曲をする。器肉が厚く重量のある土器である。	口縁部横ナデ，胴部は横方向の篦削り。内面横方向の篦ナデ。頸部下に成形の不整合を残す。焼成良。胎土に砂粒少量含む。赤褐色。	½存　床

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	2	口径 12.2 器高 3.9	半球状。口縁部内彎，器肉が厚くなる。	口縁部横ナデで体部内面に連続する。体部外面篦削り。胎土鉱物粒少量含むが良質。焼成良。内面赤褐色，外面淡褐色。	½存 カマド
蓋 須恵器	3	口径 19.0 器高 4.5	内面にかえりあり，断面三角形を呈する。口縁より下へは出ない。つまみは中央がやや突出。	ロクロ整形体。部に粘土紐成形痕と思われる亀裂あり。焼成良。胎土に長石粒若干含む。灰色。	¾存 床

第21号住居址（第37図）

20号住居址の西約1mほどの所に位置し，黒色土地帯に東西に入れたトレンチより発見された。焼土が一面に散布した床面の範囲のみが，唯一住居址としての証拠である。カマド・柱穴など，一切の施設は確認されなかった。



第40図　第21号住居址出土遺物

第11表　第21号住居址出土遺物観察表（第40図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 20.7	口縁部外反。頸部内側に稜を持つ。	口縁横ナデ。胴部外面横方向の篦削り。焼成良。胎土に砂粒含む。橙色。	½存 床

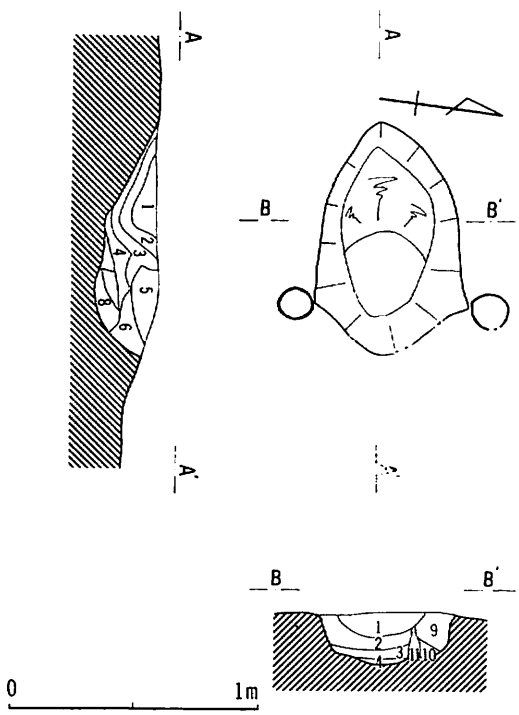
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏 須恵器	2	口径 13.3 底径 7.3 器高 3.7	内彎気味に立上がり口縁部外反する。底部上げ底。	ロクロ整形。糸切り。	破片 床
坏 須恵器	3	口径 12.4 底径 5.3 器高 3.9	内彎気味に立上がり口縁でやや外反。口唇部内側摩滅。	ロクロ整形，糸切り。焼成良。胎土に白色糸状物質，小石含む。灰色。	½存 覆土 ロクロ右
円面硯	4	外提径11.8 内提径 9.2	外提と内提に段差あり。陸部やや凸面をなし境をおかず海部に移行する。脚部はほとんど欠失し一部に篦描きにより波状が施される。	ロクロ整形，背面にうず巻が残る。暗灰色胎土に砂粒少量含む。	使用面完存 床

第22号住居址

21号住居址右4mほどの所で，21号住居址とほぼ同様の形態で発見された。床面には一面に焼土のうすい堆積があり，その下から堅く踏みしめられた，ローム床を確認する。しかし，住居址プランの確認にまでは至らなかった。21号住居址同様，カマド柱穴などの施設は確認されなかった。

第23号住居址（第41図）

本址は，発掘区のほぼ中央に検出された。付近はローム層の堆積がなく，黒色土中に生活面が検



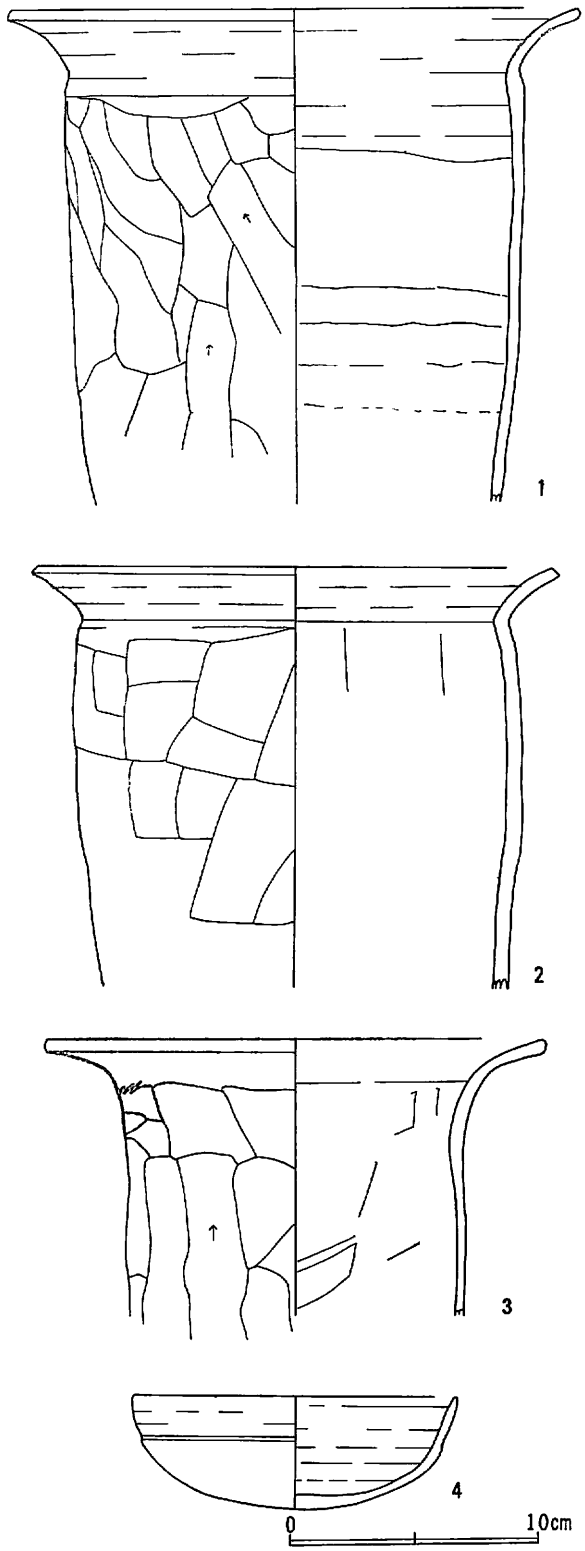
第41図　第23号住居址カマド（1/30）

1層　暗褐色土　焼土を含む。
2層　暗褐色土　粘質ローム粒子を含む。
3層　黄褐色土　粘土，焼土粒を含む。
4層　黄褐色土　粘質大。焼土，炭化物を含む。
5層　暗褐色土　まばらに焼土と炭化物を含む。
6層　暗褐色土　まばらに焼土と炭化物を含む。
7層　ロームブロック，炭化物，焼土。
8層　明褐色土　ローム粒子，焼土，炭化物を含む。
9層　暗褐色土　若干の焼土を含む。
10層　暗褐色土　ローム粒子と多量の炭化物を含む。
11層　黒褐色土　灰を含む。

出された。従って壁は確認できず，カマドとカマド前面の床しか検出されなかった。

床面は焼土，粘土を含む貼り床がなされ非常に堅緻であった。柱穴，壁溝はない。カマドは西壁側に設置される。袖に甕を倒立しで埋め込み，補強を行なっている。構築用土は，黄褐色の粘質土である。両袖の幅は0.9m，全長0.94mを測る。掘り方はすり鉢状を呈する。

出土遺物は，袖内の2個の甕，床面密着の坏等がある。　　（植木　弘）



第42図　第23号住居址出土遺物

第12表　第23号住居址出土遺物観察表（第42図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 23.2	口縁部外彎，端部は平坦で下端は丸く反転。胴部はほとんど張らずに直線的である。	粘土紐成形口縁部内外面ともに横ナデ。胴部外面は篦削り↓方向，内面は篦又は木口状工具による→方向のなで。焼成良。胎土砂質。淡褐色。	½存　カマド左袖
甕	2	口径 21.6	口縁部外反，端部は平坦。胴は張らず直線的。頸部に屈曲あり。	粘土紐成形。口縁部内外面とも横ナデ。頸部に竹管様の工具により一周沈線をつけている。胴部縦方向の篦削り，内面斜めのナデ。焼成良。胎土砂質，赤色粒子多く含む。褐色。	½存　カマド右袖
甕	3	口径 20.4	口縁部が大きく。外反する胴部は底に向って直線的に細くなる。	口縁部横ナデ。胴部篦削り。焼成良。胎土砂質。赤褐色	破片　カマド
坏	4	口径 13.0 器高 4.6	口縁部と体部との境に沈線が巡る。境不明瞭。丸底の底部より開き気味に立上がる。	口縁部横ナデ。器表面が荒れており整形は不明。胎土に砂を多く含む。焼成良。内面黒色，外面暗褐色，部分的に橙色。	½存　床

第24号住居址（第43・44図）

本住居址は，精査頭初より竪穴のローム層掘り込みが浅く，プランは判然とせず，北壁体に位置し確認されたカマドが，本住居址の存在を示唆した。

遺構は，カマド右方より若干壁溝が延びて消滅し，壁体のみ5cm高で北西コーナーの曲がりを見せる。これと対応する壁体が東方に遺存していたが，壁溝は検出されなかった，床面は凸凹の著しい軟弱なローム直床で，東方一部に土壙と浅い40cm前後の溝が走り，多大な攪乱を受け，遺存は最悪であった。そのため規模及び性格を明示する事は出来なかった。

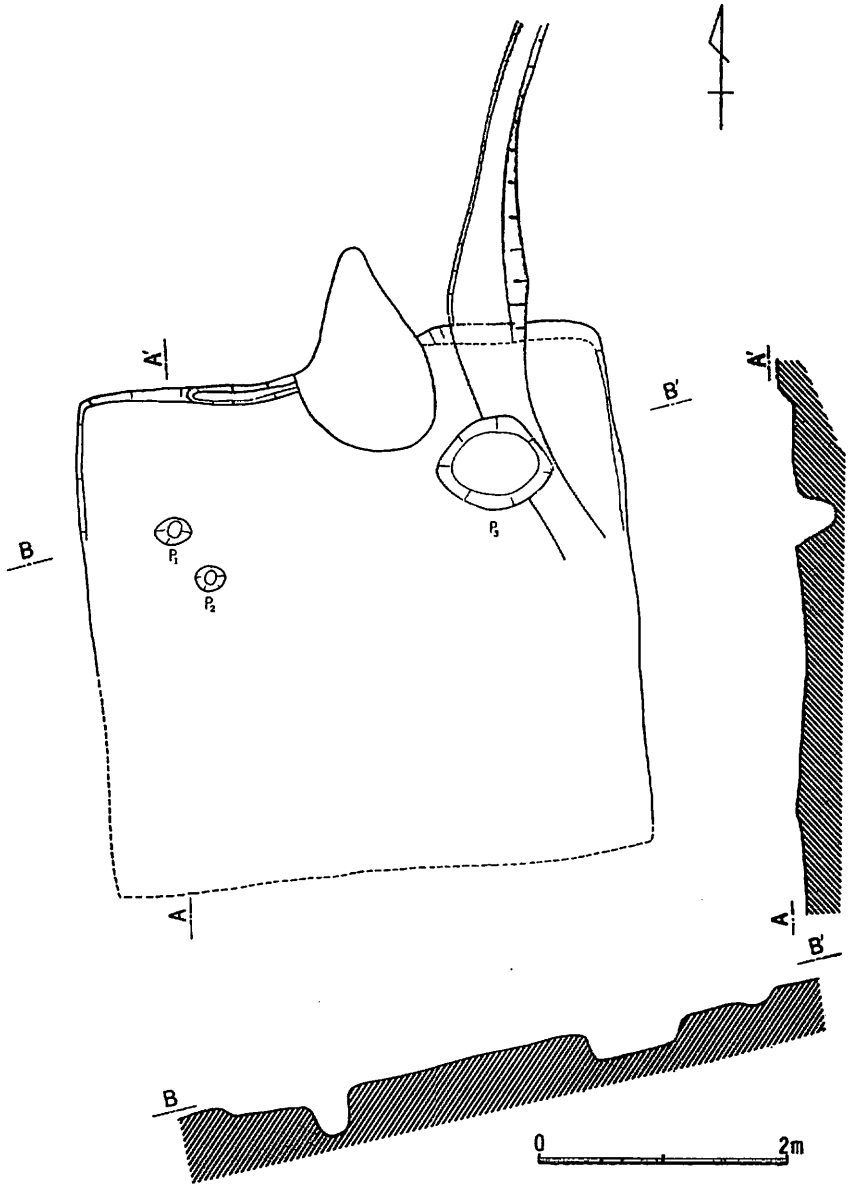
カマドは，北壁に付設されていた。規模は全長約175cm，最大幅約120cmを測った。

袖形の平面プラン全体は，煙出部が壁体より外に約100cmの張り出しを見せ，比較的長大であった。焚口部と焼成部は，床面を半円状に掘り込んで壁に接していた。南北を中軸とする断面形は，底部を描く線が折れ線グラフ状に鋭角的な歪みの激しい形状を見せる。

焚口部は，床面下約15cmと浅く緩傾斜に掘り込まれていたが，焼成部は急激な落ち込みで床面レベル下約35cmを測り，最深であった。底部はさらに3段階の歪みで，凹みの平面は正円状を示していた。煙出部は，焼成部底部より75度の傾斜で一挙にほぼ床面レベルまで再上昇し，約25cmほど突出していた。

カマド内部を包含する層位より，その構築を想定すれば，最底部に堆積する，焼土炭化物を一切含有しない褐色土層（8層）は，おそらく袖形を掘り込み後，貼り床状に後埋を行なったものと思われ，同質の褐色土は一般に使用される粘土に代わり，全体を被覆していた。その構築後の使用が，8層上層に見られる著しい焼土炭化物層で，最上層が落盤し褐色土に混り気が生じた事が観察出来た。

（村上光一）

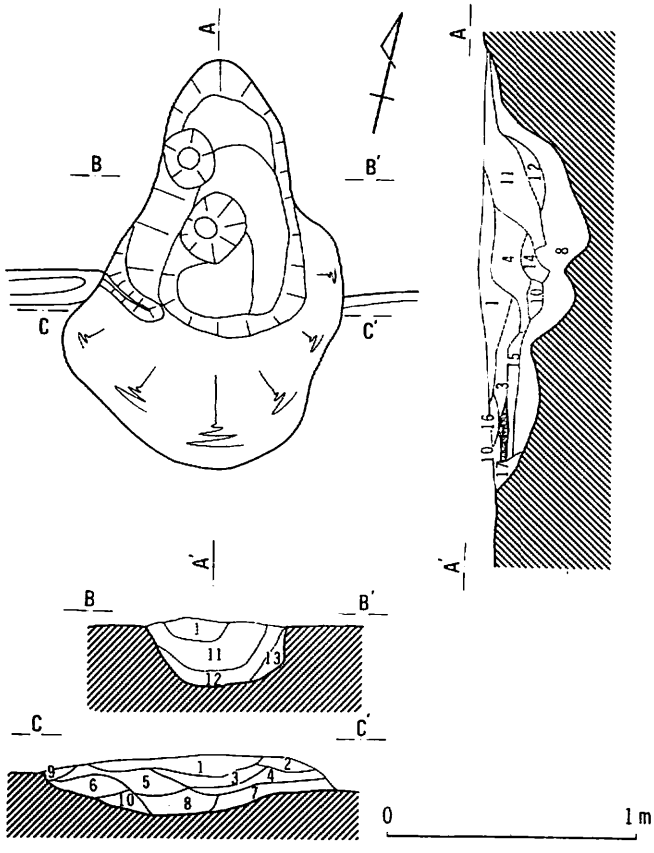


第43図　第24号住居址（1/60）

第25号住居址（第45・46図）

本址は，調査の西方の住居址群に位置する。第２号井戸と重複しており，それに切られている。

プランは隅丸方形を呈す。規模は東西4.75m，南北4.10mを測り，主軸はN—45°—Wである。ローム への掘り込みは浅く10cmで，床面は平坦であるが，概して軟弱である。ピットは３ヵ所検出されたが，柱穴となるかは位置的にみて無理であろう。壁溝は検出されなかった。南壁には井戸が重



第44図　第24号住居址カマド（1/30）

1層　暗褐色土　焼土・炭化物微粒子を含む。
2層　1層にロームブロックを含む。
3層　灰褐色土　及び暗褐色土粘質で，焼土ブロック炭化物を含む。
4層　暗褐色土　焼土と炭化物の粒子を多量に含む。
5層　暗褐色土　焼土粒子を少量含む。
6層　暗褐色土　粒状のロームと焼土を微量含む。
7層　暗褐色土　粒状のローム，炭化物，焼土を多量に含む。
8層　暗褐色土　ロームブロックを含む。
9層　灰褐色土　粘質で，ロームブロックを含む。
10層　ロームブロック。
11層　暗褐色土　焼土・炭化物を多量に含む。
12層　暗褐色土　焼土ブロック，炭化物，ロームブロックを含む。
13層　暗褐色土　ロームブロックと焼土を含む。
14層　暗褐色土　炭化物と焼土微粒子を含む。
15層　炭化物と焼土粒子。
16層　焼土に炭化物を含む。

複し，それに切られている。

カマドは北壁に所在する。やや中央より東に偏して構築される。規模は幅0.72m，長さ1.15mを測る。焚口は長方形に掘られ，煙道部は段を2ヵ所もつ。構築用土は暗褐色土であるが，上部はすでに削平され，カマド自体も完全に崩壊していた。

本址よりの遺物は，図示し得るものはない。

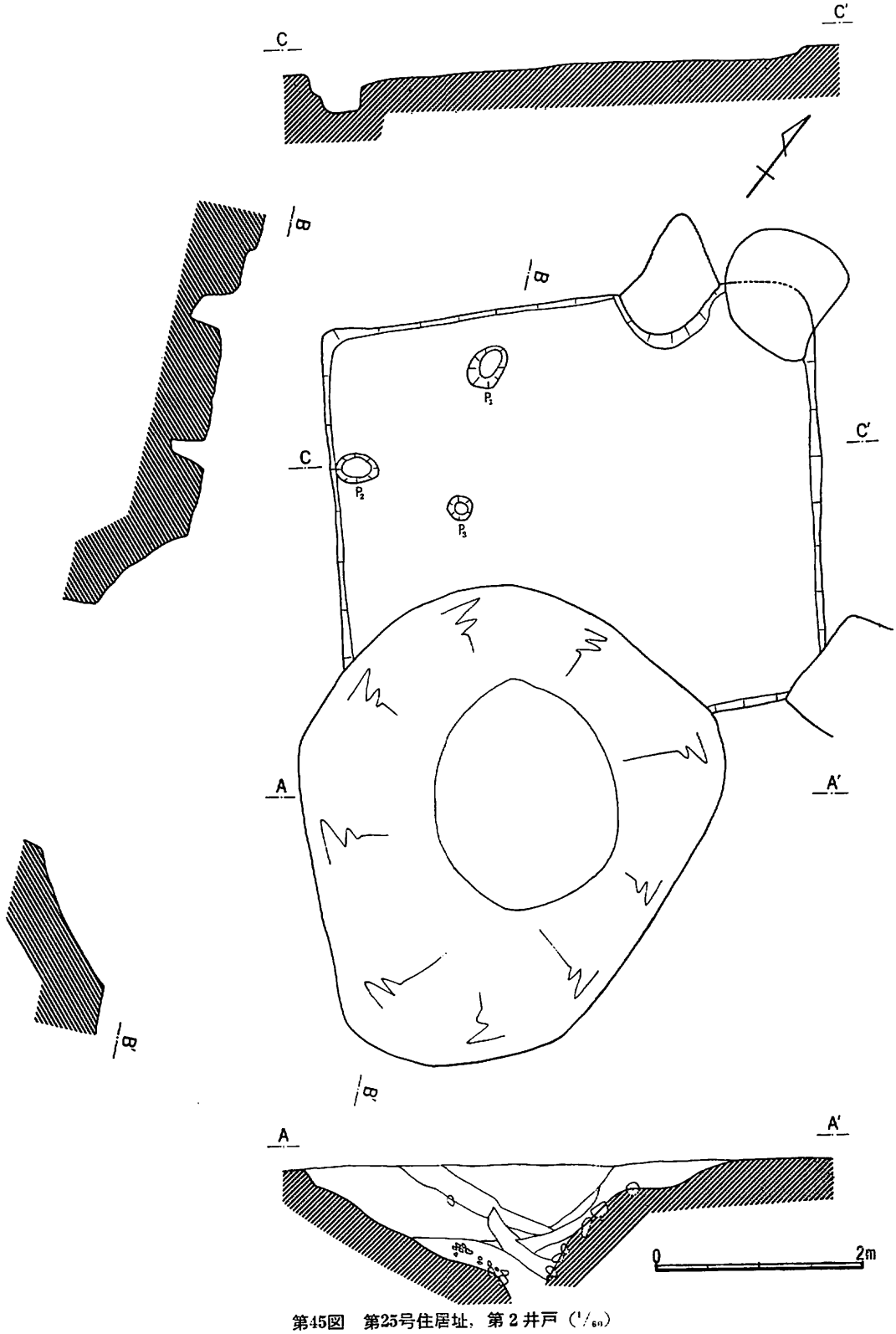
第26号住居址（第47図）

本址は調査区の西に位置する。ロームへの掘り込みが浅く，また土壙に切られ，遺存状態は非常に悪い。

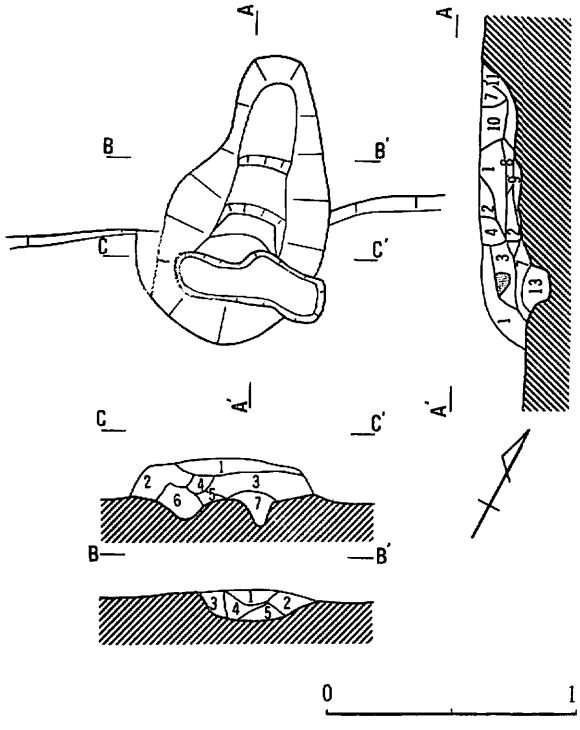
プランは方形を呈する。規模は東西3.10m，南北2.55mを測る。南壁に土壙が重複しているために，壁体及び壁溝は確認されなかったが，その他の部分に壁溝が巡る。ロームへの掘り込みは浅く，0.15mを測る。柱穴は4ヵ所検出された。P_1はややP_2に近づき，位置関係がややずれる。深さはいずれも40cm前後を測る。主軸方位はN—85°—W。

カマドは東壁に位置する。やや南壁よりにずれる。主軸は住居の主軸と合致せず，P_2をよけたのか若干北にふれる。既に上部は削平され，火床面の一部のみの遺存である。

遺物は少量の出土で，図示し得るものはなかった。　（小淵良樹）



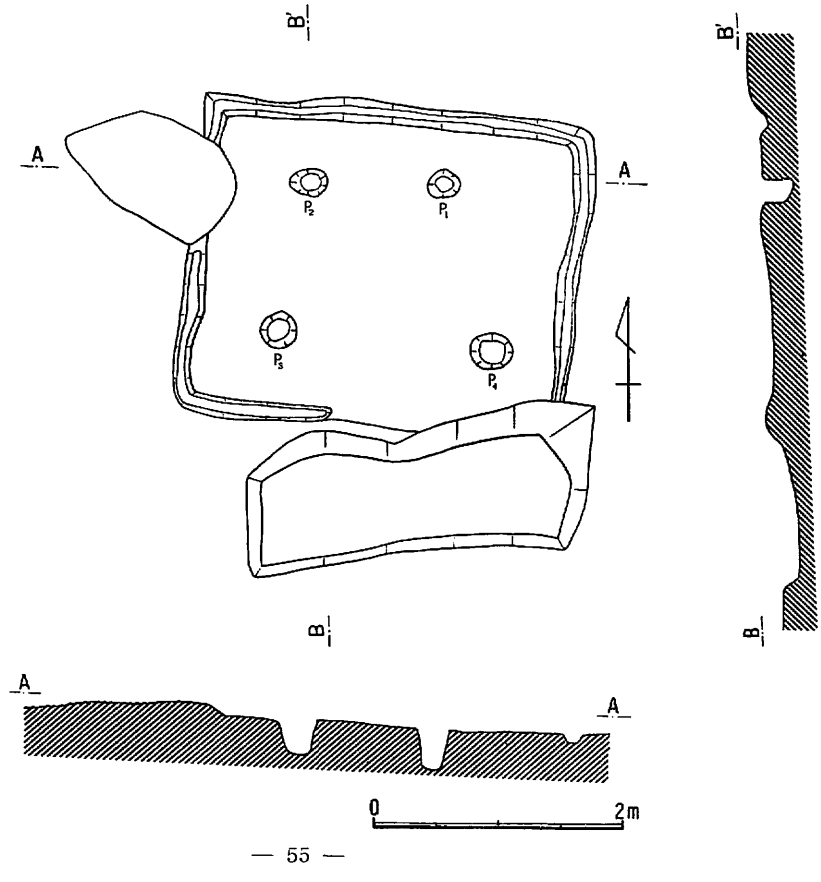
第45図　第25号住居址，第２井戸（1/60）

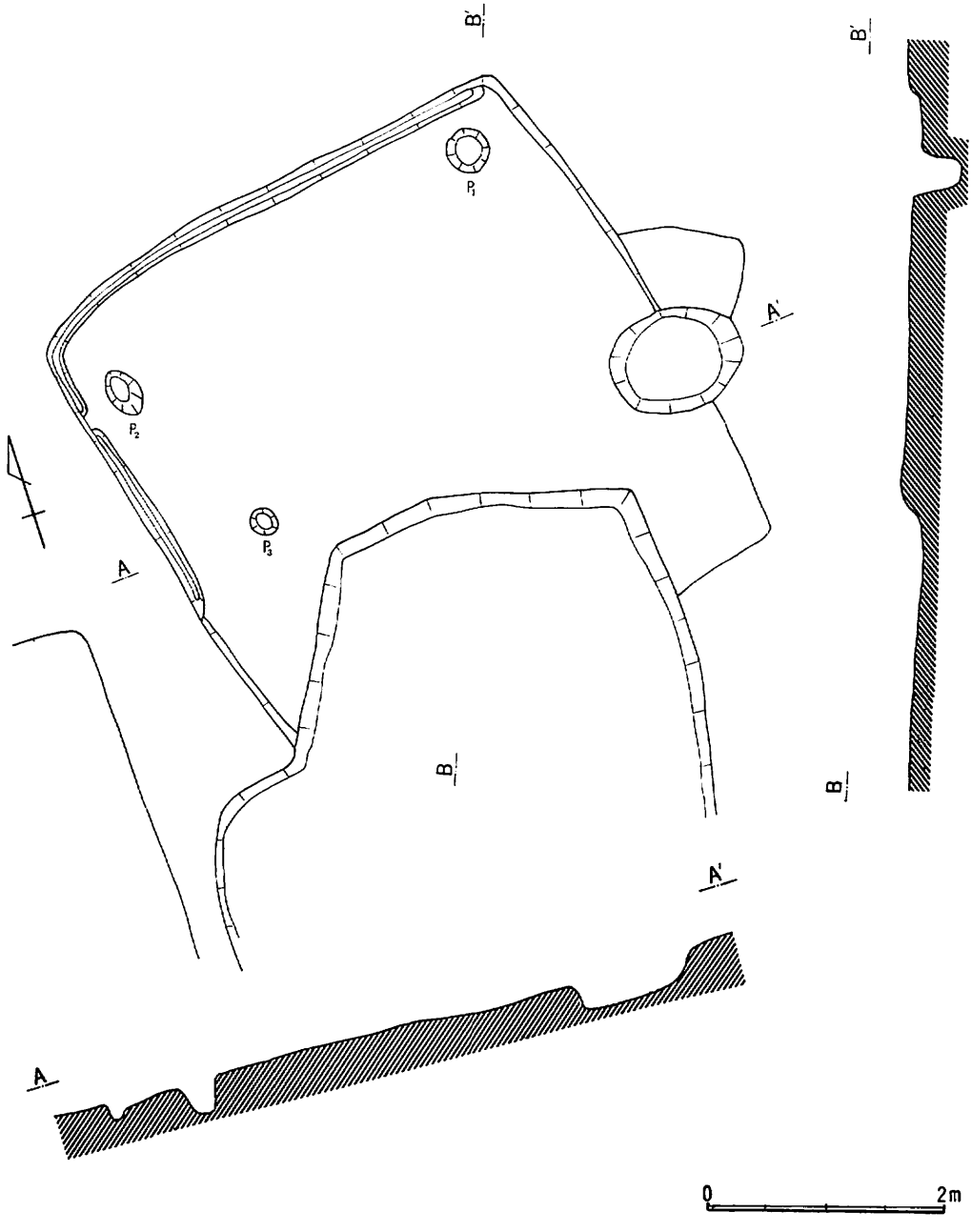


第46図　第25号住居址カマド（1/30）

1層　暗褐色土
2層　黄褐色土
3層　暗褐色土　焼土粒子，炭化物を含む。
4層　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含む。
5層　暗褐色土　炭化物を含む。
6層　暗褐色土　ローム粒子，焼土，炭化物を含む。
7層　暗褐色土　（フカフカ）
8層　暗褐色土　焼土粒子を含む。
9層　暗褐色土　ローム粒子を含む。
10層　暗褐色土　焼土粒子を若干含む。
11層　褐色土　ロームを多量に含む。
12層　暗褐色土　大粒の炭化物，焼土粒子を含む。
13層　暗褐色土　ロームブロックを若干含む。

第47図
第26号住居址（1/60）





第48図　第27号居住址（1/60）

第27号住居址（第48図）

本住居址は，17号住居址の北東に隣接して検出された竪穴である。遺構は，ローム層の掘り込みがほとんど床面レベルで浅く，壁体を遺存しなかった。さらに南半面に，大規模な撹乱穴が穿たれていた。

プランは，北壁下にU字状の平均幅16cmの周溝が，北西コーナー隅丸に曲がりを見せて，西壁下

に伸びている他は消滅していた。規模は，東西約4.60m，南北不明。主軸方位は，N—77°—Eであった。床面は，ローム直床で極めて軟弱であった。柱穴は，北壁両コーナーぎわに3.50mほどの間をへだてて比較的深い2本を検出し，ほぼ西壁寄りに1本，合せて3本を確認した。

カマドは，焼土と炭化物が10cmぐらいの厚さにローム面にめり込むように散在する範囲を，カマドと認定した。位置は東壁に付設されていた。現状は右方に土壙が穿たれ，著しく損じていた。

第28号住居址（第49・50図）

本住居址は，調査区域西方に位置して発見された。この辺は窪地地形で表土が厚く堆積していたため，トレンチの設定により検出された竪穴である。今回の調査中，東方密集地の住居址を除けば，西方では最も保存が良好であった。

プランの規模は，東西約3.50m，南北約3.45mで，コーナーは四隅ともに緩曲線を描く正方形を示した。主軸方位はN—87°—Eである。

覆土は，西壁に付設されたカマドを中心として，黒色土層中に焼土粒子の流出が顕著に見られる自然堆積層と，床面直上に薄い暗褐色土にローム粒子を含んだ2層を観察した。

壁は，床面より垂直に約25cmの立上がりを見せる。壁体の保存は良好で，壁下に平均幅10cmのU字状の周溝が，カマドの部分をのぞき全周していた。

床面は，カマドの周辺に灰・炭化物が散在し，バリバリに固く踏まれた黒色を示していたが，大半はロームブロックが目立つ軟弱な床面で，北壁下に土壙（マ号）が穿たれていた。

柱穴は，3ヵ所検出された。ともに配置は整然としていたが，南西コーナー際の柱穴は，口径が約45cmと比較的大きい。

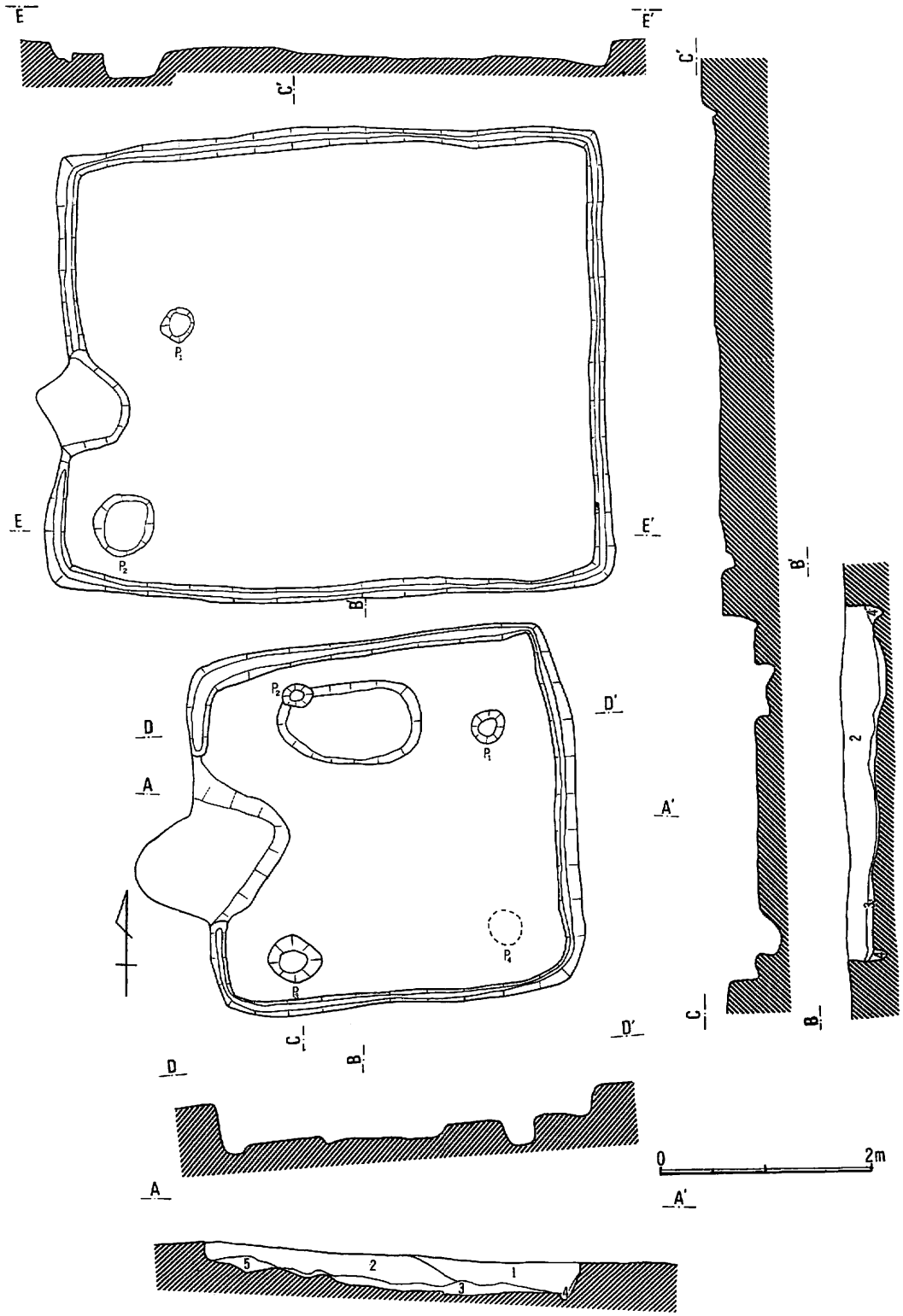
カマドは，西壁中央部に位置し付設されている。現形は，粘土塊を使用した袖部が全体を堅固にし，保存は極めて良好であった。

祖形規模は全長約110cm，袖を含めた最大幅は約114cmであった。平面形状は，壁体を幅約93cm屋外に55cmほどの掘り込みを煙道部としていた。底底部は卵形を縦に置いた形を示したが，煙出部を頂点とし中軸線を描くと，全体に北方にずれを感じさせた。特に多量な粘土を使用し構築した袖は，左右異なり，左方は壁体を延長するように接合されていたが，右方は壁体から舌状に床面上に突出していた。前面よりの断面形は，煙道部が右方の立上がりが直に対し，左方は緩傾斜を示している。逆に両袖間は，右方が若干立上がりが緩くなる。東西主軸の断面は，最深部が床面レベルより15cm約を測り，除々に40度前後の傾斜で煙道へ変化のない立上がりを見せた。

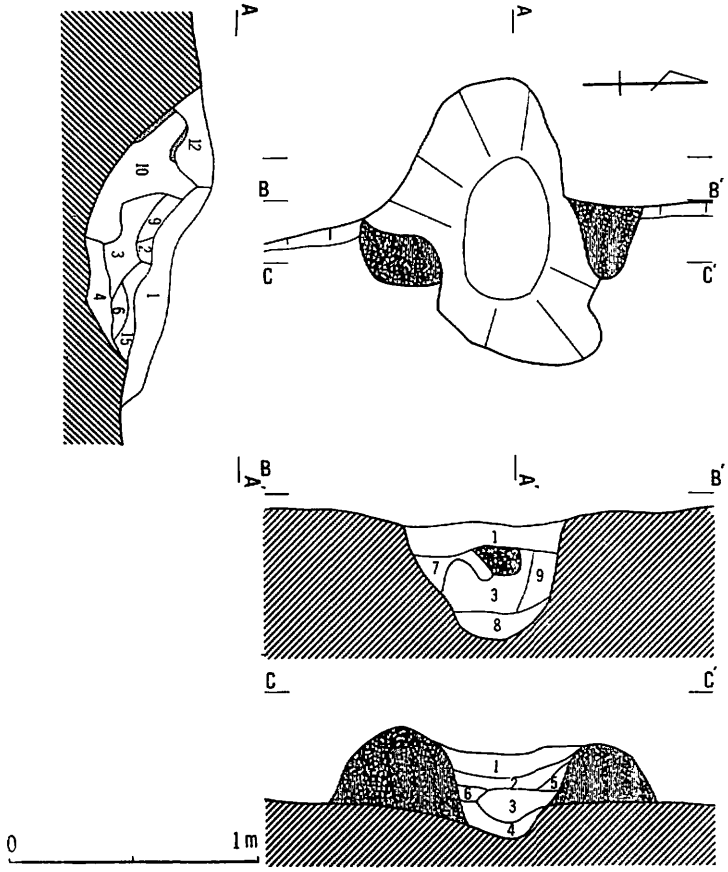
カマド内部の層位は，その構築において堅固な袖部が内部をそのまま包含し，土圧によるつぶれ状態を観察出来た。特に突出部の壁体土面は，原形の粘土使用が保たれ，焼成部10層から煙出部と思われる焼土ブロックが上昇している。両袖部間の層は，焚口部を含めて焼土，炭化物がまだら状に堆積を見せ，全体は粘質の不純物の多い褐色土により被覆されていた。

28号住居址土層

1層　黒色土　焼土粒子含む。
2層　黒色土　焼土粒多量・ローム粒子を含む。
3層　暗褐色土　ローム粒子含む。
4層　暗褐色土　ロームブロック含む。
5層　暗褐色土　3層より多くローム粒子を含む。

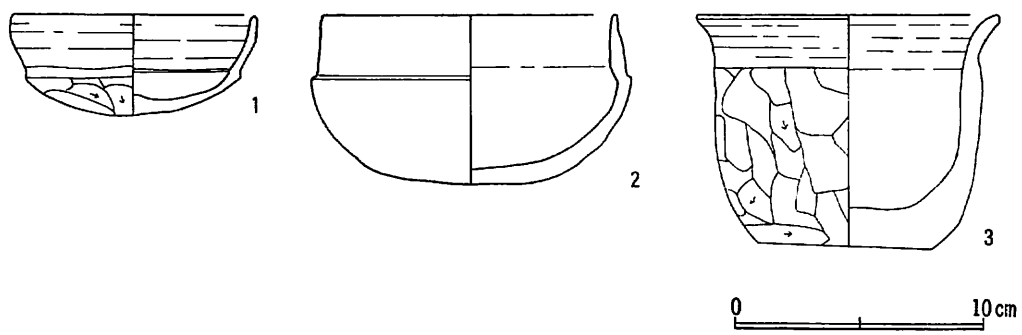


第49図　第17号住居址（上），第28号住居址（下）（1/60）



第50図　第28号住居址
カマド（1/20）

1層　褐色土　焼土・ローム・炭化物を含む。
2層　黄褐色土　焼土・炭化物・ロームブロックを含む。
3層　暗褐色土　焼土ローム粒子・炭化物を含む。
4層　暗褐色土　ロームブロック・焼土・炭化物含む。3層よりやや黄味が強い。
5層　黒褐色土　ローム粒子炭化物含む。
6層　暗褐色土　焼土ブロックを多量に，灰を含む。
7層　暗褐色土　焼土粒子含む。
8層　暗褐色土　焼土粒子・炭化物含む。
9層　褐色土　ロームブロックを多量に含む。
10層　黄褐色土　粘土質の焼土ブロックを含む。
11層　茶褐色土　焼土粒子を若干含む。
12層　褐色土。

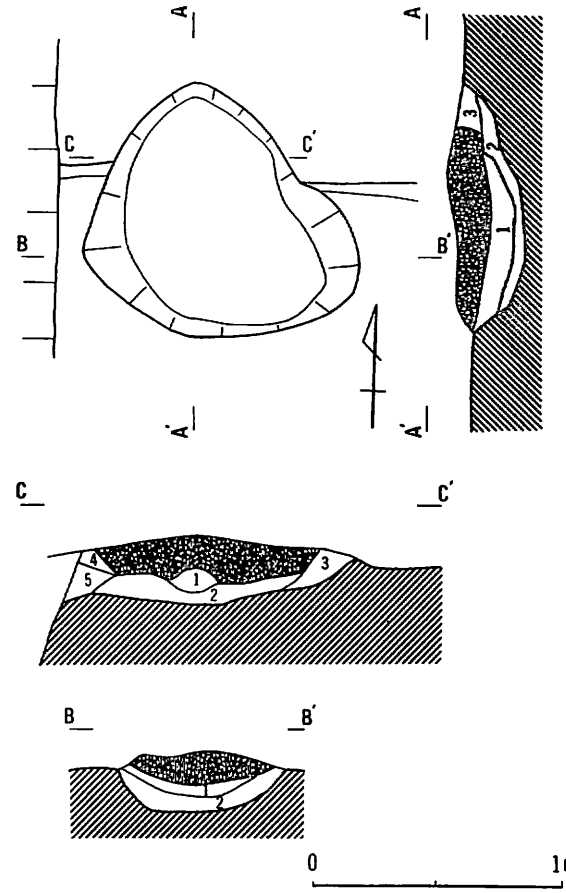


第51図　第28号住居址出土遺物

第13表　第28号住居址出土遺物観察表（第51図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径　10.1 器高　4.2	口縁部内彎気味。やや歪む。段明瞭。	口縁部横ナデ，体部外面篦削り，内面ナデ，橙色。胎土砂質。	完存　床
坏	2	口径　11.7 器高　6.8	口縁部内斜。段明瞭。底部若干凹む。	口縁部横ナデ。体部外面細かい篦削りの後ミガキ。内面篦ナデ。	完存　床

				の後ミガキ。光沢あり。胎土鉱物粒含む。焼成良。外面赤褐色，内面黒色。	
甕	3	口径 12.2 器高 9.3	口縁部が短かく外反する。頸部にゆるく段ができ胴部直線的に底部へ。底部の器肉は厚い。	口縁部横ナデ。胴部↗方向の篦削り，内面下部剝離。焼成良。胎土に砂粒含む。褐色。	完存 床



第52図　第29号住居址カマド（1/30）

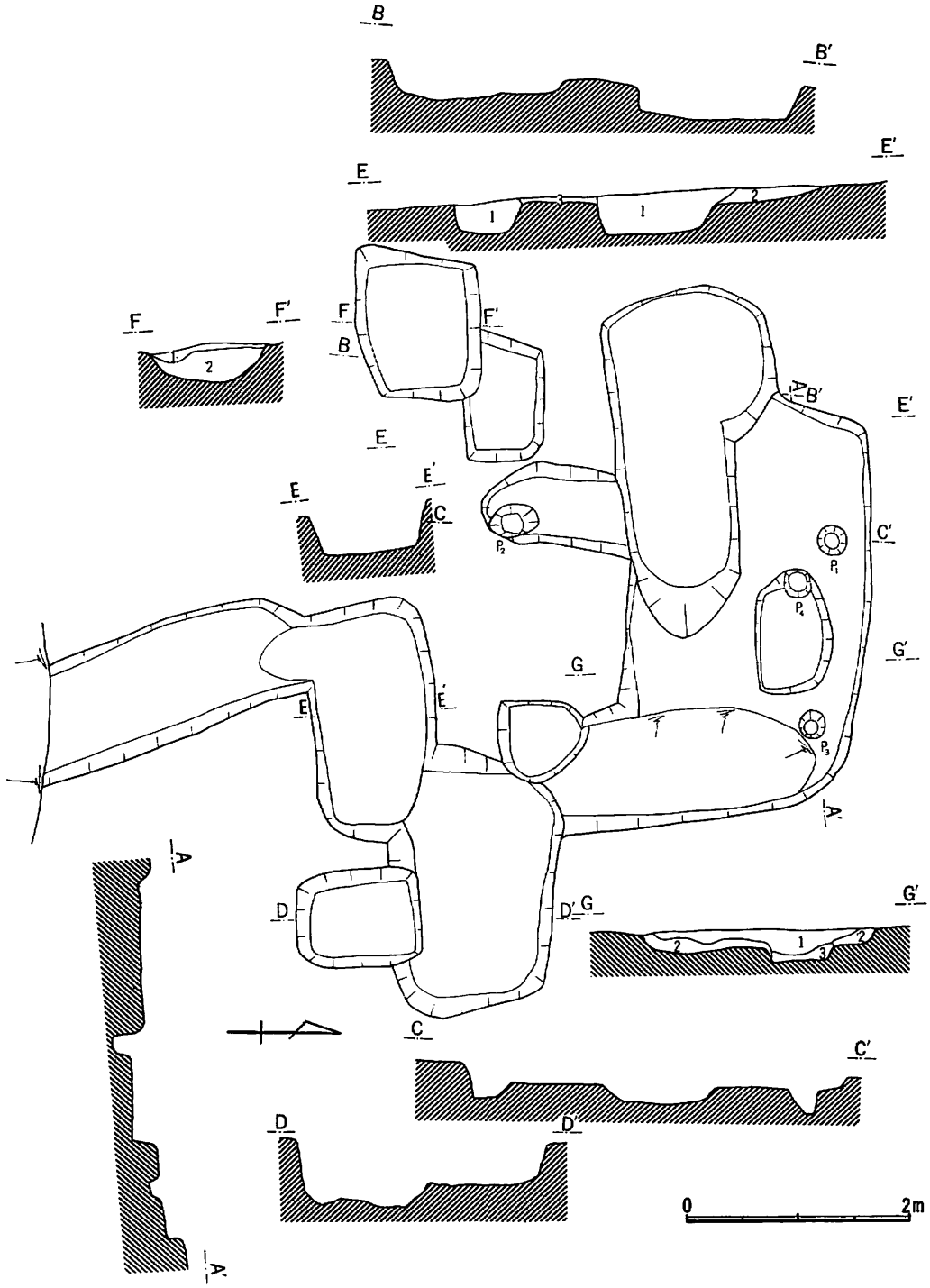
1層　暗褐色土　粘質。焼土と炭化物を含む。
2層　黒褐色土　ローム ブロックを含む。
3層　暗褐色土　ローム ブロックを含む。
4層　暗褐色土　焼土と炭化物を若干含む。
5層　黄褐色土　ローム粒子を若干含む。

第29号住居址（第52図）

本住居址は，No. 2の大溝が南北に遺構中央を縦断し，さらに土壙が穿たれ，竪穴のローム掘り込みが浅く，保存は最悪であった。

プランは，北カマドの位置から5㎝前後の壁体が東壁まで延びており，壁下にU字状の溝が検出された外は，大よその推定範囲が，西方2本の柱穴とやや固めのローム直床面の確認により成されたものであり，全く正確なプラン及び規模は，不明であった。

カマドは，北壁体に施設されていたが，左方を大溝が切断しているので，原形は全長のみ約98. 0



第53図　第1土壙群（1/60）

E—E′　1層　暗褐色土　ロームブロック含む。　2層　黄褐色土　ロームブロック含む。　3層　黄褐色土
F—F′　1層　暗褐色土　　2層　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
G—G′　1層　暗褐色土　ロームブロック含む。　2層　黄褐色土　ロームブロック含む。　3層　黒褐色土　ロームブロック含む。

cmを測った。

租形のプランは，ローム壁体を幅75.0cm，屋外に35cmほど突出させ，煙道部を穿っており，焚口部から焼成部は，卵形を横にした形状を示した。縦軸南北の断面形は，ちょうど中央が最深で床面より23.0cmを測った。底部はほぼ平坦面であるが，煙道部はやや傾斜をもち，階段状に立上がっていた。層位は，単純な3層を主体とし，均等な堆積状態であった。底部から灰土を基とする黒色土とロームブロック，中層が上部からの粘土層と焼土，炭化物が含まれる不純層。最上層は，カマド構築の粘土と中層より少量の焼土と炭化物が含有していた。これらの観察により，カマドの崩壊は，自然な土圧による押しつぶされた状態が想定された。（村上光一）

3. その他の遺構と遺物

竪穴住居址の他に，発掘区域から土壙群，井戸・柱穴群・溝状遺構等が検出された。土壙群と溝状遺構は発掘区域のほぼ中央から出土し，井戸と柱穴群は両側から発掘されている。土壙群と溝状遺構。柱穴群は出土遺物が皆無で，時期の判定が難しかったが，井戸は，出土遺物によって中世（南北朝～室町期）の所産と推定した。

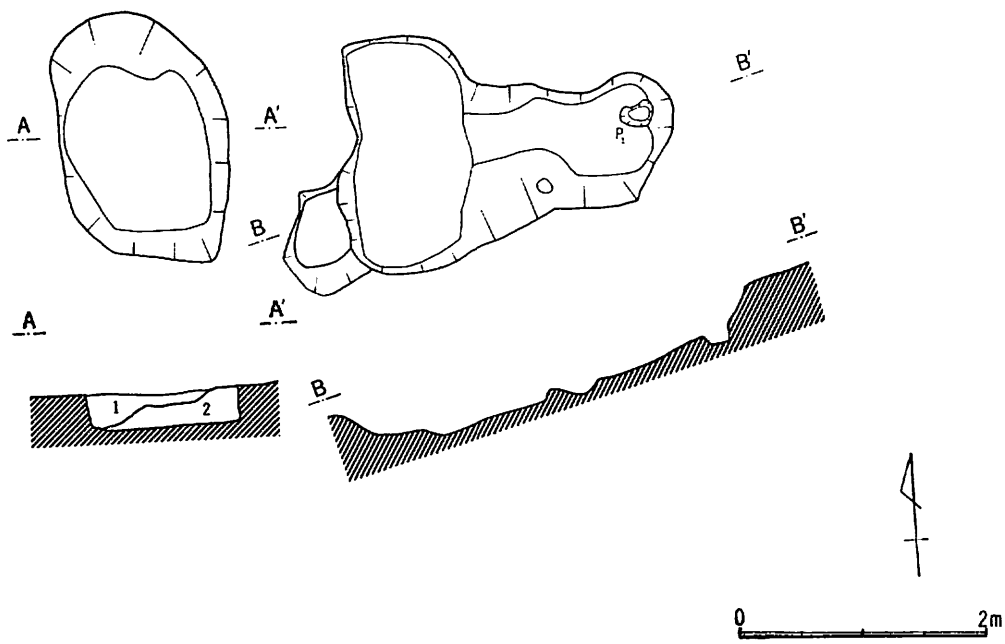
1） 土　壙

第1土壙群（第53図）

本址は調査区中央に位置する。方形の土壙が多数重複する形で検出された。プラン確認時点では不整形であったが，最終的に8基の土壙の重複と判明した。深さが浅いもの深いものとまちまちであり，新旧関係はつかめなかった。プランは長方形を基調として，幅の広さによって2つに分類できる。底面は概ね平坦，本址最大の土壙には床面よりピットが3ヵ所穿たれている。

規模は，重複部分の範囲が6.5×7.5mである。最大の土壙は2.2×3.5m，最小の土壙は0.9×1mである。深さは最大の深さで0.7m，最小で0.2mをそれぞれ測る。

立上がりは，いずれも急であった。遺物は皆無である。



第54図　第2土壙群（1/60）

1層　暗褐色土　ソフトロームを少量含む。
2層　暗褐色土　ロームブロック含む。

第２土壙群（第54図）

本址は，調査区中央に位置し，第１土壙群よりも北に位置する。土壙３基によって構成され，内２基が重複する。いずれもローム下の礫層まで掘り込まれ，底面の検出が困難であった。

規模は第54図左が1.4×２m，深さ0.3mを測り，右は東西に長い土壙が１×3.4m，南北に長い方が１×1.9m，深さは0.9mを測る。

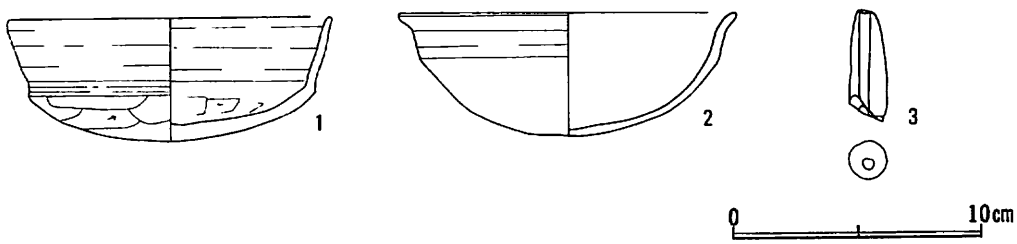
重複する土壙の，新旧関係は判明しなかった。出土遺物は皆無である。

２）井　戸

第１井戸

本址は，調査区西部にて検出された。直径２mの円筒状を呈する。途中で，出水のために，底面までは調査できなかった。

遺物は土師器坏２個，土錘が出土している。



第55図　第１井戸出土遺物

第14表　第１井戸出土遺物観察表（第55図）

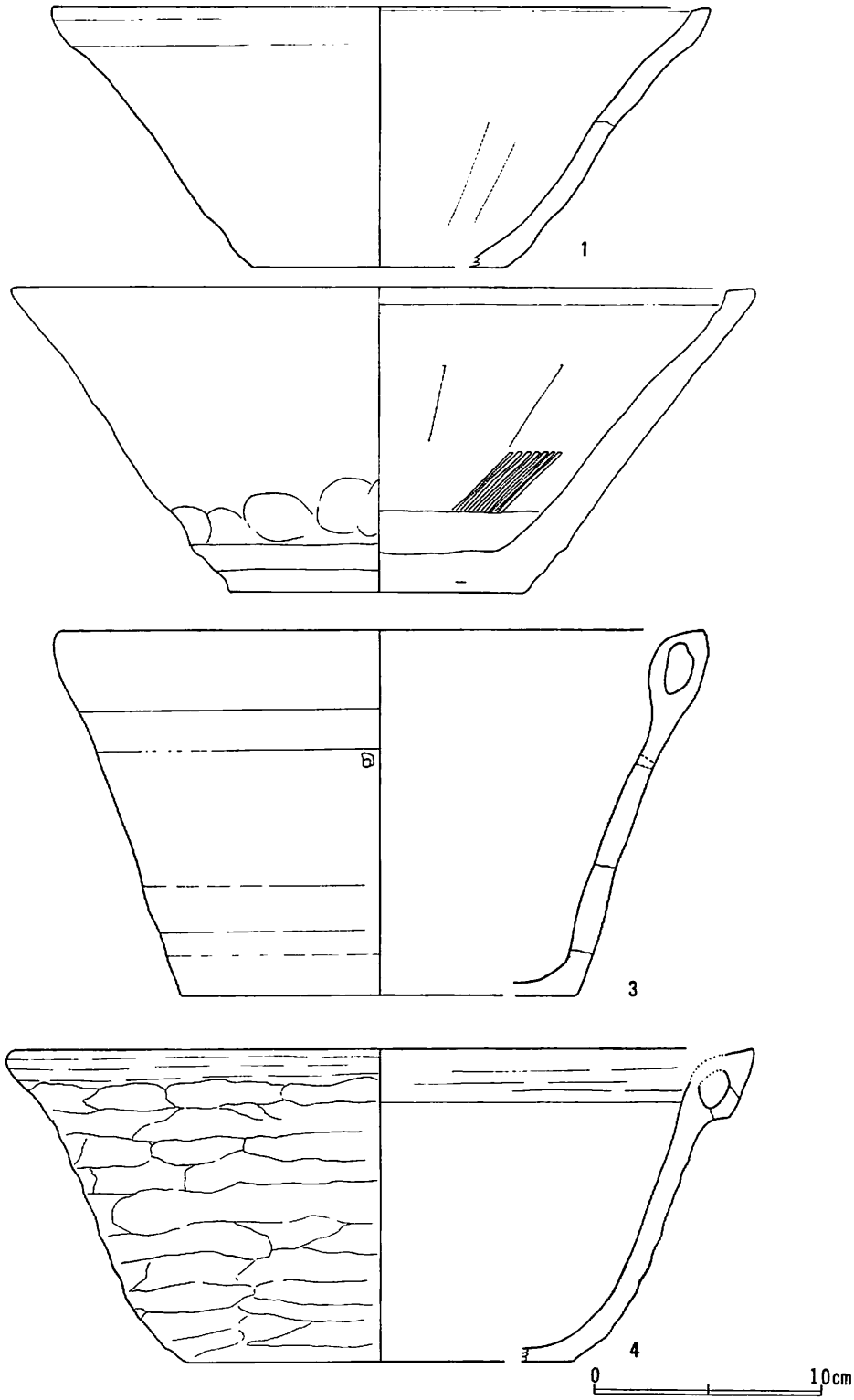
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 12.8 器高 5.0	口縁部やや外斜。形態整う。	口縁部横ナデ，体部外面篦削り，内面篦ナデ。胎土鉱物粒多く含む。淡褐色。	⅔存
坏	2	口径 13.6 器高 6.0	口縁部外反，端部は丸い。	口縁部横ナデ，器表面が荒れており観察不能。胎土砂質。焼成良。淡褐色。	⅓存

第２井戸（第45図）

本址は，調査西部のやや中央よりに検出された。第25号住居址と重複して，これを切って構築されている。

プランは概ね円形を呈し，径４mを測る。掘り方はロート状を呈し，径を細めて底面に至る。途中，出水のために底面までの調査は断念せざるを得なかった。肩部には礫多数が認められ，構造物の一部と思われる。

遺物は肩部より板碑，すり鉢，焙烙，鉢等が検出された。　（小渕良樹）



第56図　第２井戸出土遺物（１）―鉢・すり鉢・焙烙

第15表　第２井戸出土遺物観察表（第56図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	口径 29.0 器高 11.5	直線的に立上がり口縁部で直立する。端部は平坦。内面に２条の沈線あり。	器表が表れ整形不明。灰色。	破片
すり鉢	2	口径 32.4 器高 13.5	厚い底部より直線的に立上がる。口唇端部は平坦で内面が凹む。内面下部に７本単位で条線がつけられている。摩滅が著しい。	外面下部は指頭によるなでつけ，内面は篦によるナデである。胎土に砂極少量含む。底部内外面赤みがかった褐色，他は褐色。	½存
焙烙	3	口径 28.6 器高 16.2	やや外反しながら立上がる。把手は現状で１ヶ所。補修孔有り。	摩滅が著しく整形不明。胎土砂粒含む。灰色。	⅓存
焙烙	4	口径 32.6 器高 14.0	底部より内彎気味に立上が口縁部で外反する。端部は平坦である。把手は現状で１ヶ所である。	外面は指頭による横方向のナデツケ，内面はナデ。胎土に砂を多く含む。黒褐色。	⅓存

第57図　第２井戸出土遺物（２）一板石塔婆

３）　柱穴群

柱穴群（第58図）

本址は，調査区西部にて検出された。いくつか規則性があるものが見られたが，判然としなかった。

規模は，直径0.2m前後のものが大部分である。深さは0.3～0.4mを測る。

遺物は皆無である。

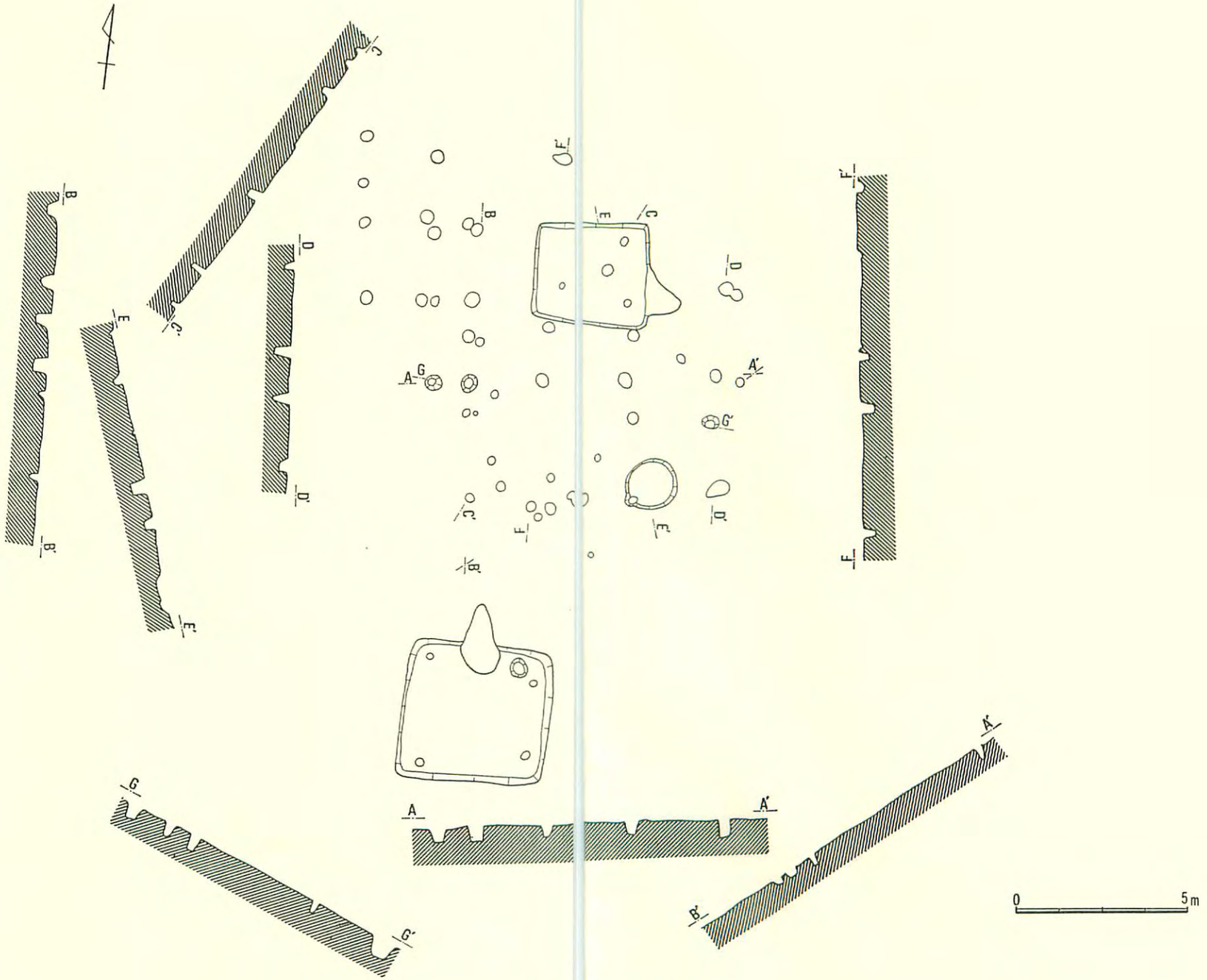
４）　溝

第１溝（第59図右）

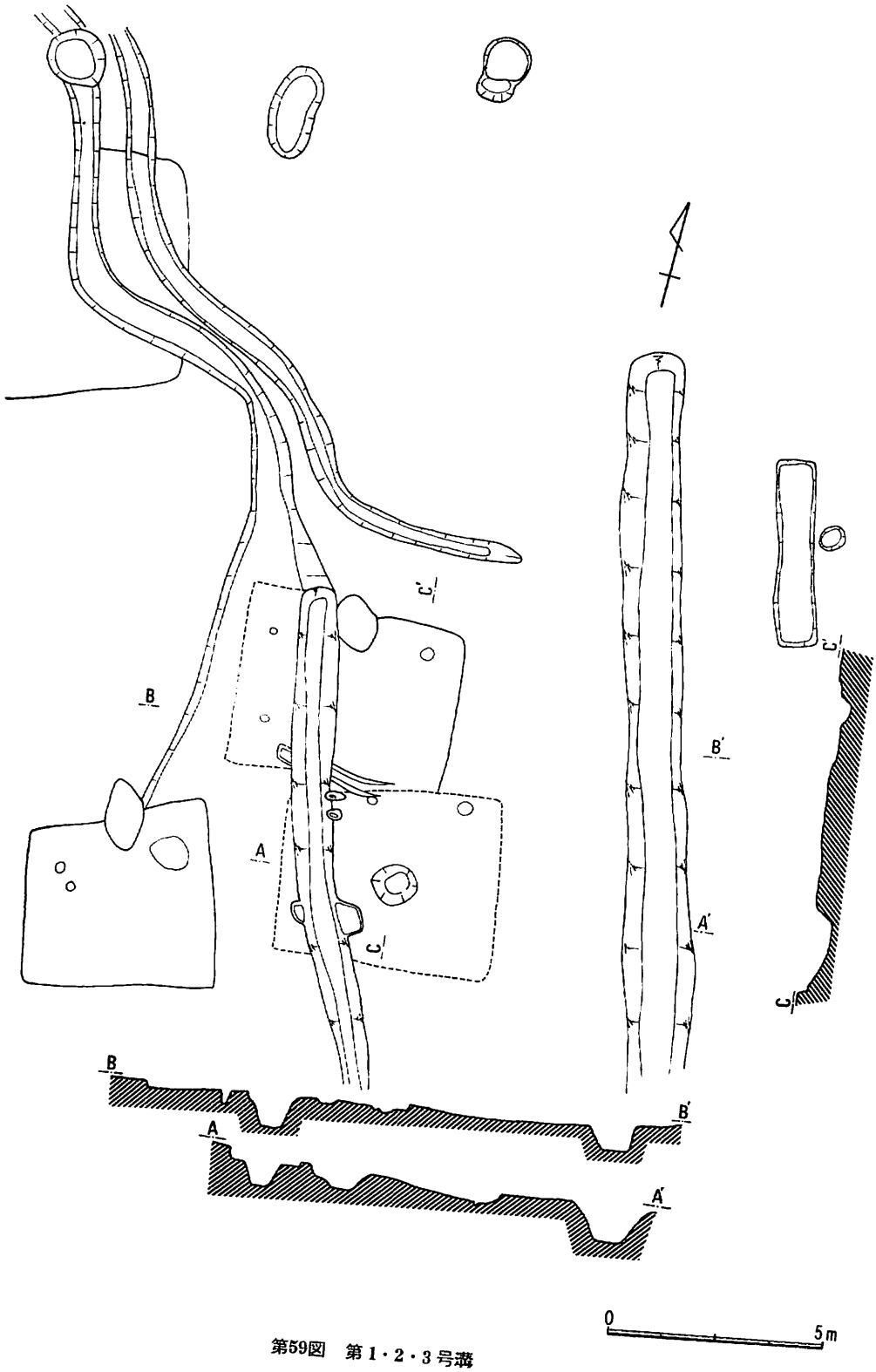
本址は，調査中央部を南北に走行している。北側は台地で，自然地形は南に向ってゆるい下りとなる。

規模は，確認された長さで17.5mを測る。南は水田面に達していると考えられる。断面は箱形で，底面は平坦である。深さは0.9mを測り，北に走行するにつれ，浅くなり，調査区中央で立上がってしまう。

遺物はなかった。



第8図 柱 穴 群



第59図　第1・2・3号溝

第2溝（第59図中）

本址は，調査区中央部を，南北にジグザグに走行する。第13・16・29号住居址と重複して，すべて破壊している。

規模は全長約30mを測る。第16号住居のあたりで幅を広げ，更にまた細く深い溝を掘り込んでいる。深さは0.8mを測り，断面形状は箱形を呈する。底面は平坦である。

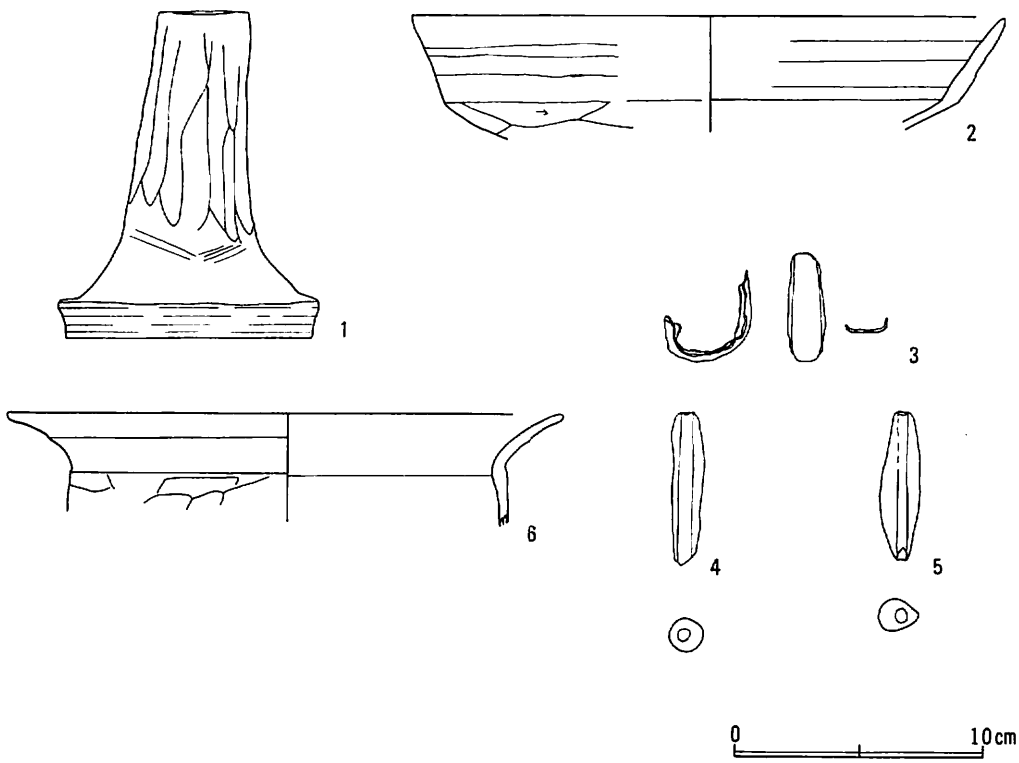
遺物は皆無。

第3溝（第59図左）

本址は調査区中央にて検出され，第3溝と平行して走行する。第13・14号住居址と重複して，これを切って構築されている。第16号住居址の北側で，東に約90度向きを変え立上がってしまう。

規模は全長約20m，幅0.7mを測る。断面形状は箱形を呈し，底面は概ね平坦である。

遺物は皆無。　（小渕良樹）



第60図　土壙・井戸・表土出土遺物

第16表　第2井戸・土壙・表土出土遺物観察表（第60図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
支柱須恵器	1 2井	底径　9.9 器高　13.2	底部平坦。上端部平坦で摩滅している。	ロクロ整形，静止糸切り。柱部は縦方向のナデ。	完存
	2 ヌ土	口径　24.0	大型。蓋の可能性もある。口縁部外斜，外面，沈線3条あり。体部との境明瞭。口縁肥厚。	口縁部横ナデ。体部篦削り。焼成良。胎土に鉱物粒含む。褐色。	破片
甕	6	口径　22.6	口縁部大きく外反。中位に稜あり。最大径は口縁部。	口縁部横ナデ。胎土に砂粒多く含む。	破片

5）木製品

1，最大径15cm，器壁の厚さ0.5cmの球体の容器である。上部径1.2cmの孔が開けられている。外面は，光沢があり，滑らかである。ヘラによる削りが一部に見られる。内面は，縦にいくつものしわがある。

色は，薄い茶色を呈する。乾燥しているので軽い。

2，最大径20cm，器壁の厚さ0.4cmの球体の容器である。上部に径2.2の孔が開けられている。

外面は光沢があり，滑らかである。縫方向の削りが顕著に認められる。内面は縦方向に規則的にしわが認められる。

色は，1と同様に薄い茶色を呈する。

3，かなりゆがんでいる。上部の一部しか遺存していない。上部に径2cmの孔が開けられている。器壁の厚さは0.5cmである。

外面は，削りの痕跡が明瞭である。内面には，規則的なしわが縦にある。

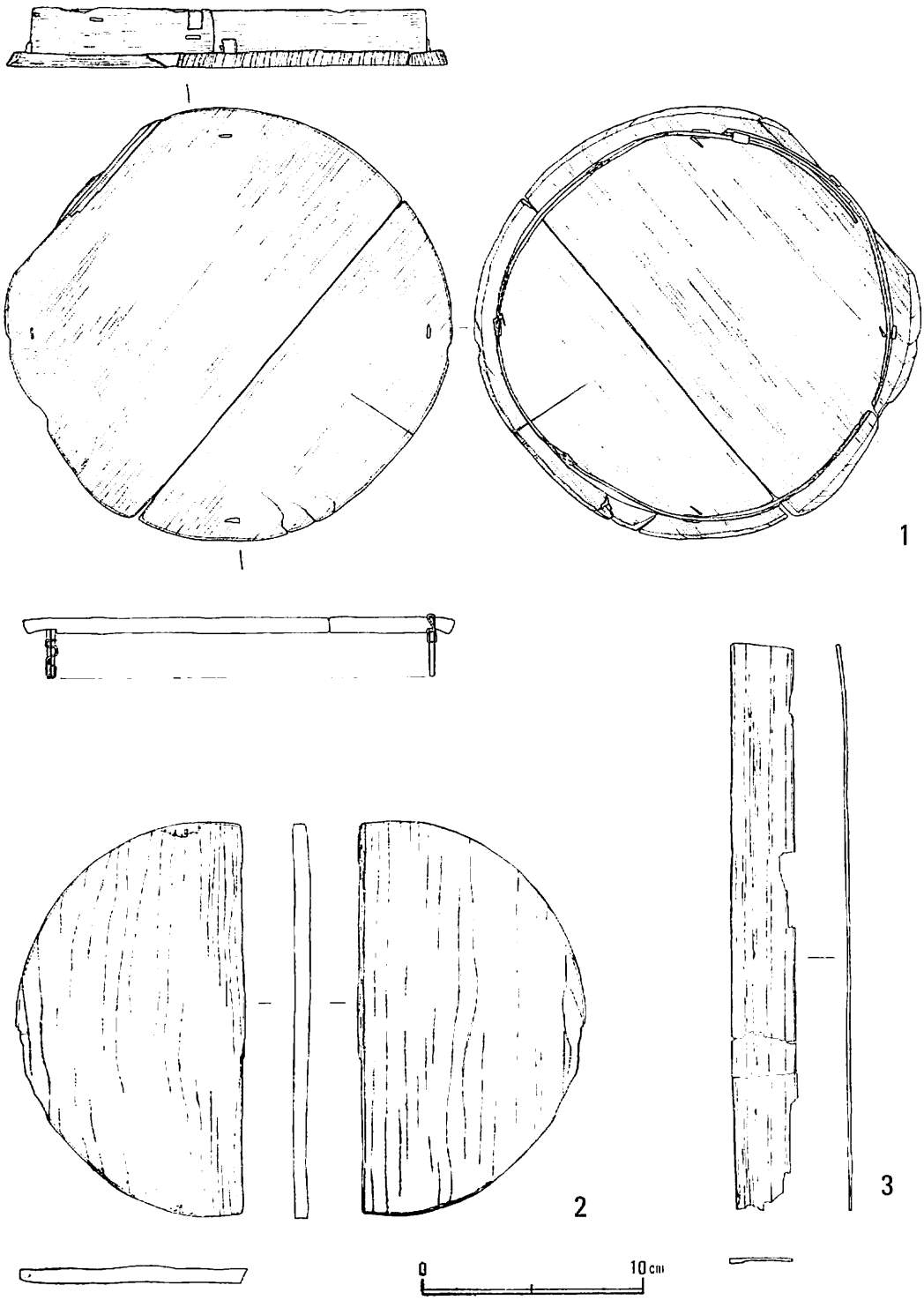
色は，薄い茶色を呈する。

4，径15cm，器壁の厚さ0.3cmの球体の容器である。上部に1cmの孔が開けられている。

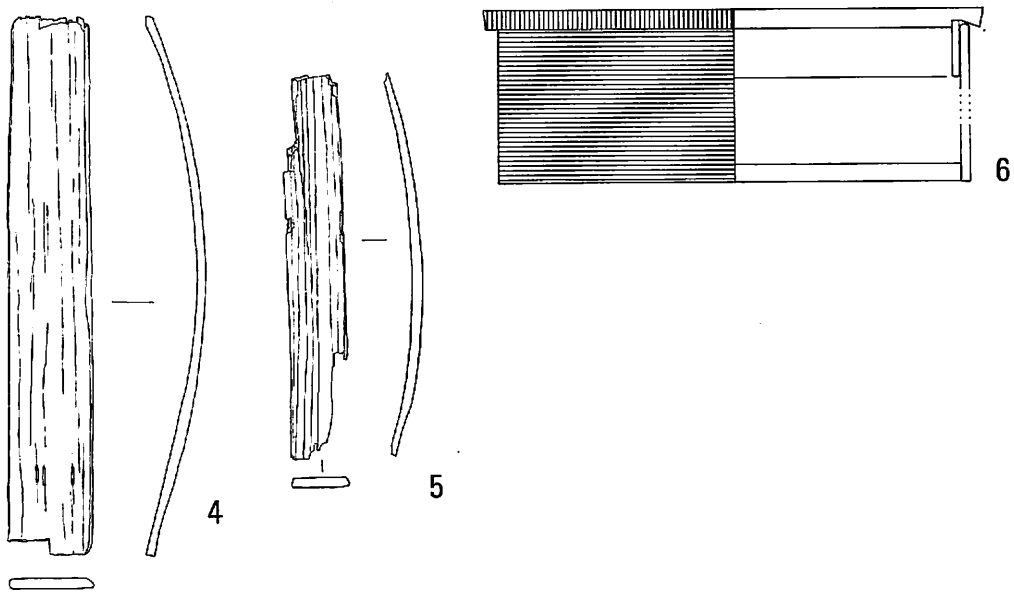
外面は，光沢があり滑らかである。削りの痕跡が明瞭である。内面には縦に規則的なしわがある。

色調は，薄い茶色を呈する。

以上，図化できた資料のほかに，破片がかなりの数出土している。図化できた1～4は，すべて半分以下の遺存であり，他の破片と接合する可能性もあろう。出土品は，みな軽く，みな軽く，もろくなっているが，これは，保存処理の結果乾燥したものと思われる。使用していた時点では，植物性が残っていて弾力のある容器であったであろうと想像される。



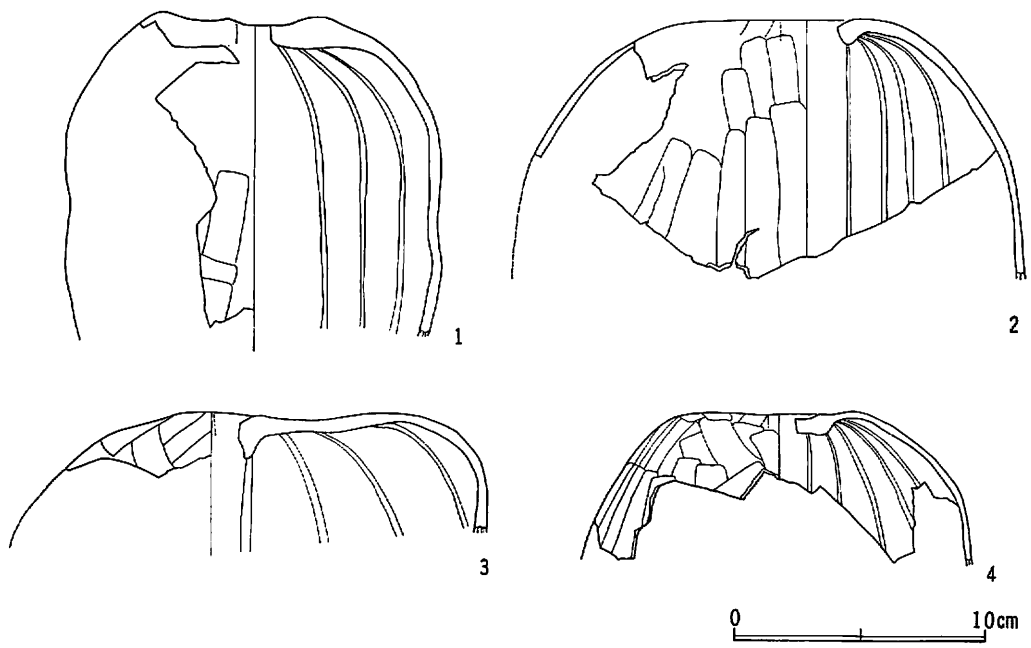
第61図　第1井戸出土木製品（曲物）



第62図　曲物側板（4.5），想定復原模式図（6）

6） 植物遺体（ひょうたん）

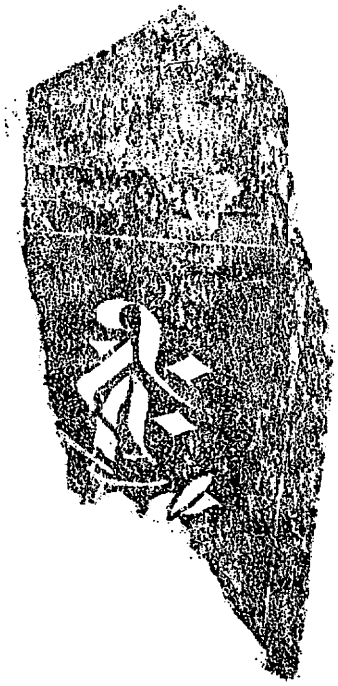
第1等井戸の堆積土の中から出土した。ほとんど軟化して形を留めなかったが，元興寺文化財研究所に委託して保存処理を行ったところ4個体分と判明した。おそらく保存用具として利用したと規定されたが，時期は不明であった。



第63図　ひょうたん実測図

7） 板石塔婆

第２号井戸から，板石塔婆が３基出土している。板石塔婆（第57図・写真47）は，基部が一部欠失しているがほぼ完形で，主尊銘文は別表（93頁）のようによみとれた。現存高は81cm，上幅25cm，下幅26cm，厚さ3.2cmであった。他の２基はいずれも断片で２（第64図・写真45）は主尊（阿弥陀），３（写真46）は，下部の二月日だけが遺存していた。



第64図　板石塔婆拓影

板石塔婆１に明記された貞治二年（1363）は，南北朝時代中頃である。井戸の開削は，遺物によって確実に把握することは不可能だったが，板石塔婆によって，少なくとも，貞治年間にはこの井戸は使用されていたと考えていいだろう。他の遺物と共に，板石塔婆がこの井戸に投棄され，井戸が封鎖された時期は不明である。

Ⅳ 考　察

発掘調査によって明らかにされたように，岩比田遺跡は，江南台地の西南端に形成された古代後半期の集落遺跡であった。出土遺物は，縄文時代早期後半・中期の土器や石器，あるいは中世後半（室町期）の遺物等も出土しているが，遺物に関わる竪穴住居址は，確認されていない。竪穴住居址の所在を中心にして推定すれば，ここには，主として古墳時代と平安時代の集落が，複合して形成されたと考えてよいだろう。

発掘範囲が遺跡の全域ではなかったために，集落の全貌を把握することはできなかったが，それでもⅢ　遺構と遺物によって報告されたように，二つの時代の竪穴住居址29ヵ所をはじめ，土壙群・柱穴群・井戸・溝状遺構等多数の遺構と遺物が出土して，岩比田遺跡の性格を理解する，有力な手掛かりは得られたのであった。最後に，出土した遺物と遺構を中心にして若干考察し，岩比田遺跡の歴史的性格を探索しておきたいと思う。

1.　出土遺物の検討

1）縄文時代の遺物

(1) 土　器

本遺跡出土の縄文式土器は，第65・66・67図に掲げた48点である。このうち遺構に伴って出土した第67図の一点を除いて，他は全て表土排除作業中，又は後世の住居址覆土内より出土したものである。これらは，早期後半の条痕文系土器群と中期後半の加曾利Ｅ式土器群に大別される。分類は以下の通りである。

第１群土器

早期後半の条痕文系土器群を本群とした。総類10点を数えるのみで，遺構に伴うものは１点もなく，全て破片である。

第１類（第65図５）

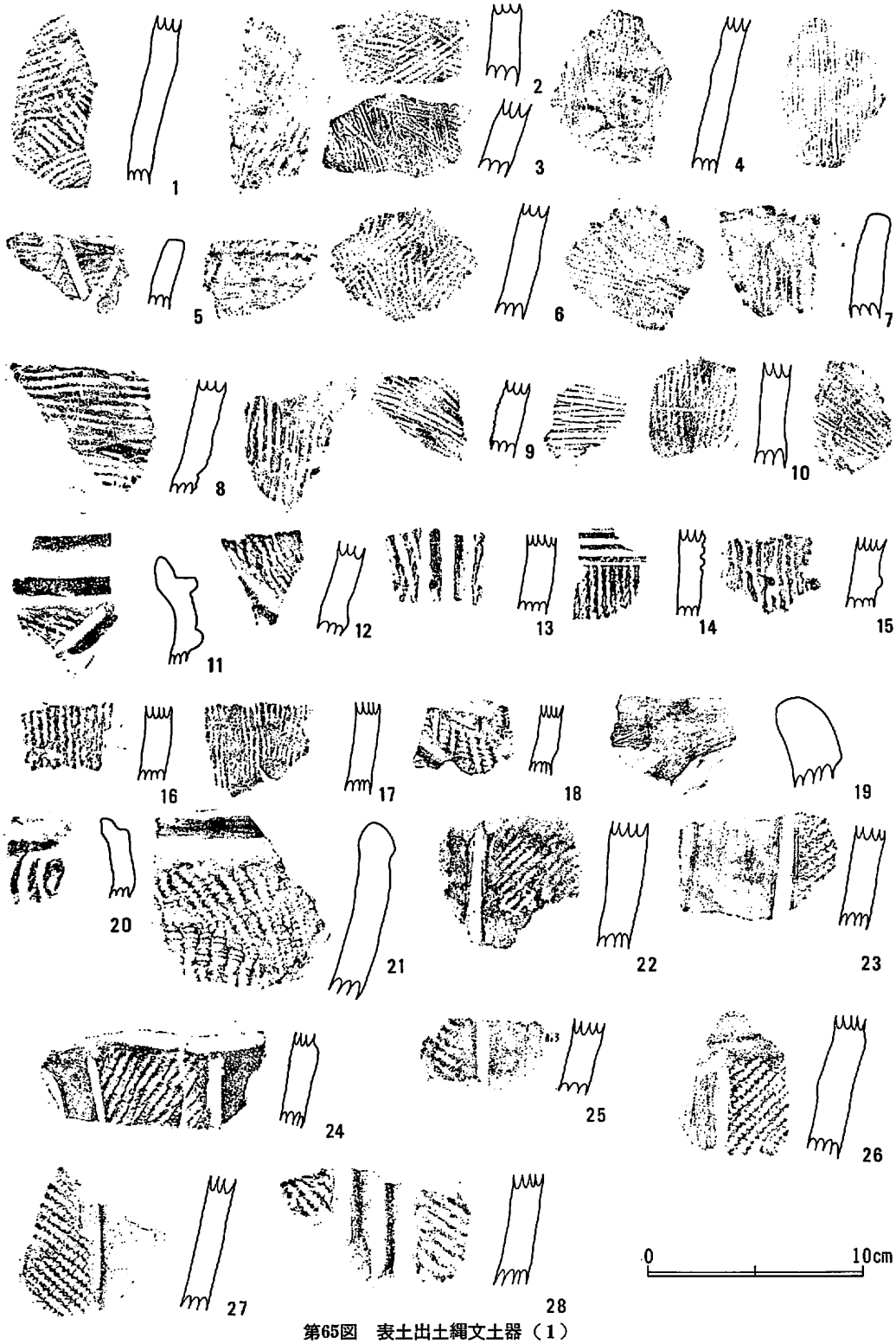
表面に，条痕文以外の装飾的文様を有するものである。文様の認められるものはこの一点のみであった。深鉢形土器口縁部の破片である。口唇部に刻目を有し，地文に横位の条痕を施文した後に，浅い沈線が引かれている。内面にも，表面の地文と同様の横位条痕が施されている。

第２類（第65図１～４，６～10）

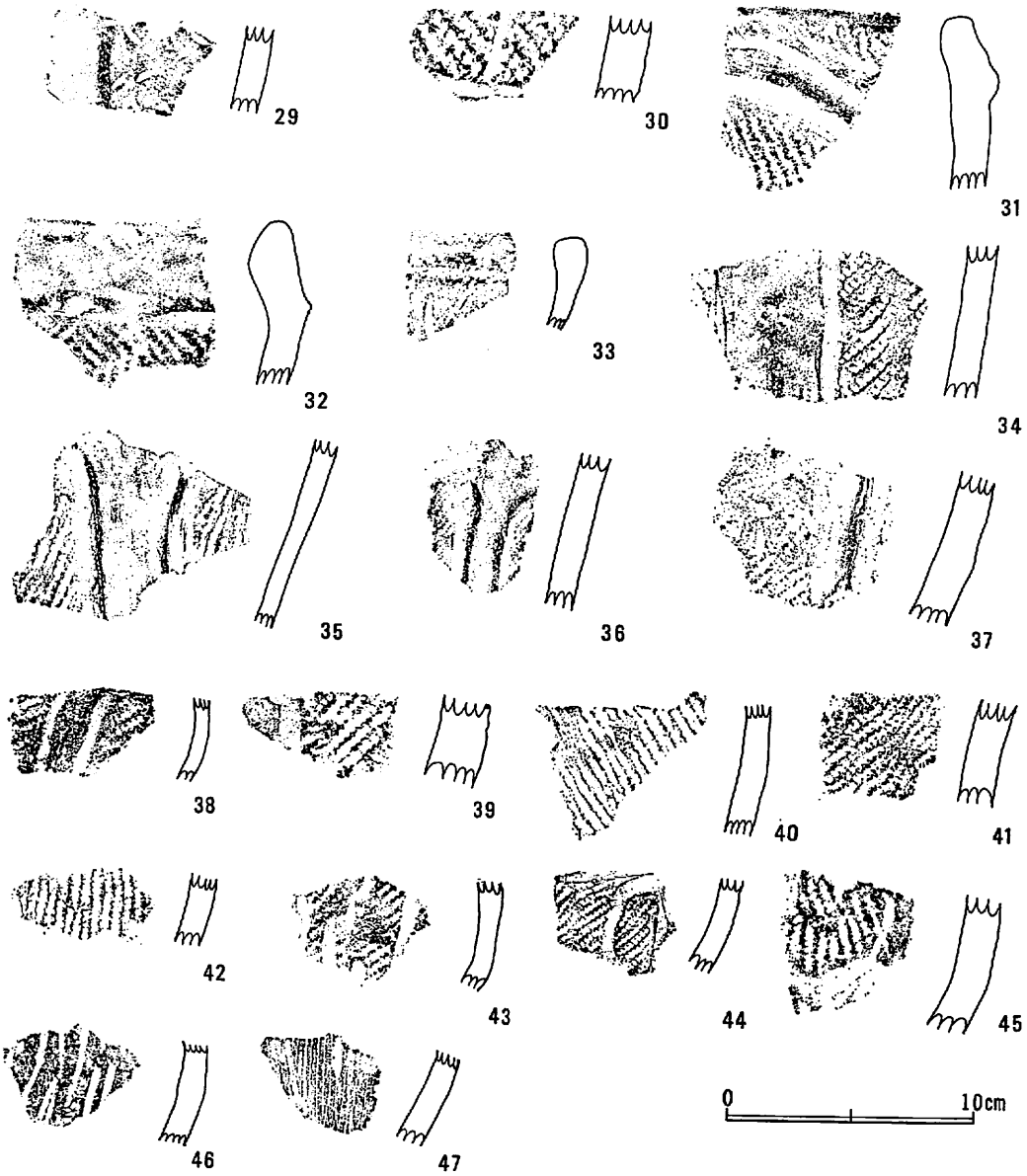
装飾的文様を描かず，ただ表面あるいは表裏に，貝殻条痕を施文しただけのものである。条痕の原体は細いハケ目文状のもの（３・４）と幅の広いものとがある施文の方向は一定していない。１・２・３・６は斜方向から交叉し，４・７・10は表面が縦位，８は表面が横位，内面が縦位である。これらは全て胎土中に繊維を含むものであるが，その量は多くはなく，比較的焼成も良好であった。

第２群土器

中期後半の加曾利Ｅ式土器群を本群とした。総数38点で，このうち遺構に伴って出土したものに



第65図　表土出土縄文土器（1）



第66図　表土出土縄文式土器（2）

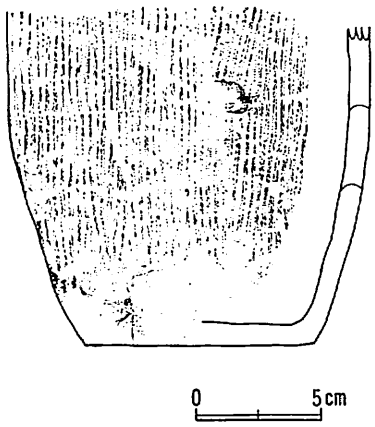
第67図の深鉢一個体がある。本群は更に次のように分類される。

第１類（第67図，第65図11～20）

加曾利ＥⅠ式に比定されるものを本類とした。第63図は，ヌ号土壙より倒立した状態で出土した唯一の胴部から底部へかけての器形を復元できた，大形破片である。文様は縦位の撚糸文のみである。

11～17は，撚糸文を地文とする深鉢形土器の破片である。

18～20は口縁部が内彎する，キャリパー形深鉢口縁部の破片である。18はＬ$\left\{\begin{matrix}R\\r\end{matrix}\right.$の付加条の縄を地文としている。



第67図　縄文土器実測図

第２類（第65図21～26・28・第66図30～31・34・39）

加曾利Ｅ式に比定されるものを本類とした。

21は，深鉢形土器口縁部の破片である。口唇部直下に一本の隆帯をめぐらし，以下，ＲＬの単節斜縄文を施している。

22～26・34・39はいずれも胴部破片である。斜縄文を地文とし，２条の沈線が下行する。沈線間は磨消されている。

28は２条の隆線が懸垂する，深鉢形土器胴部の破片である。地文はＲＬの単節斜縄文である。

30は沈線，31は隆線による文様構成である。いずれもＲＬの単節斜縄文を地文としている。

第３類（第66図38・43・44・46）

加曾利ＥⅢ式に比定されるものを本類とした。

38・43・44はいずれも深鉢形土器胴部の破片である。ＬＰの単節斜縄文と沈線による文様構成である。

46は粗い沈線のみが見られる。

第４類（第65図27，第66図29・32・33・35～38）

加曾利ＥⅣ式に比定されるものを本類とした。

27・32・35～37はいずれも深鉢形土器の破片である。微隆起線による文様区画と，磨消縄文または充填縄文による文様構成である。

29・33は微隆起線と沈線による文様構成である。

第５類（第66図40～42・45・47）

破片には，縄文の施文が認められるのみで，時期を断定することが困難なものがあるが，一応加曾利Ｅ式と判断されるものを本類とした。

47は細い条線が粗く施された，深鉢形土器胴下半部の破片である。加曾利Ｅ式後半に見られる粗製土器と見てよいものであろう。　（植木　弘）

(2) 石　器

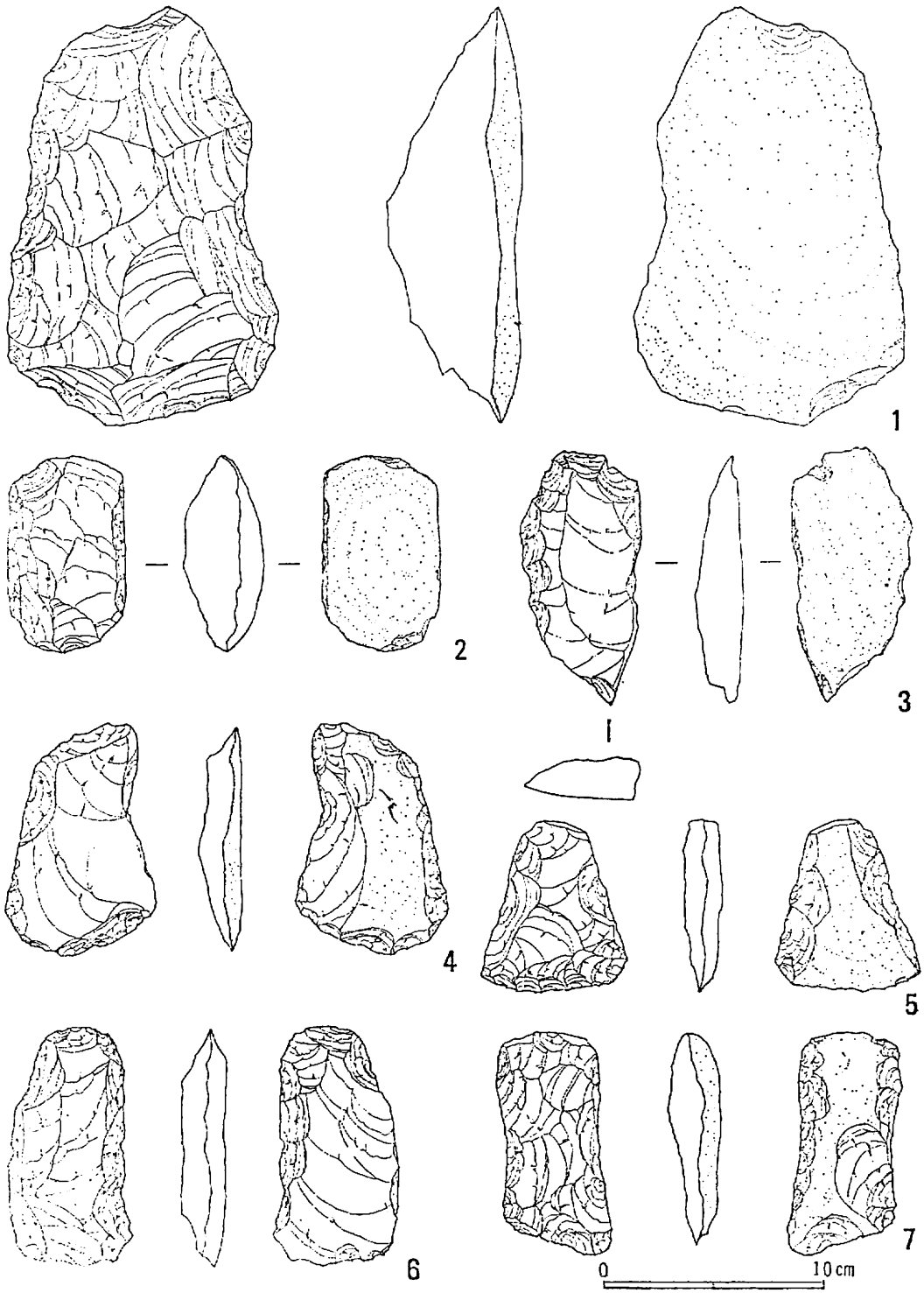
石器は，13点が出土した。出土地点はまちまちで，遺構に伴うものはない。これらはそれぞれの形態，あるいは本遺跡出土の縄文土器の状況から，早期のものと中期のものとに分かれるようである。

１，２は早期に特有の礫器である。ともに片側に自然面を残し，断面の把厚した形態を呈している。材質は硬質頁岩である。

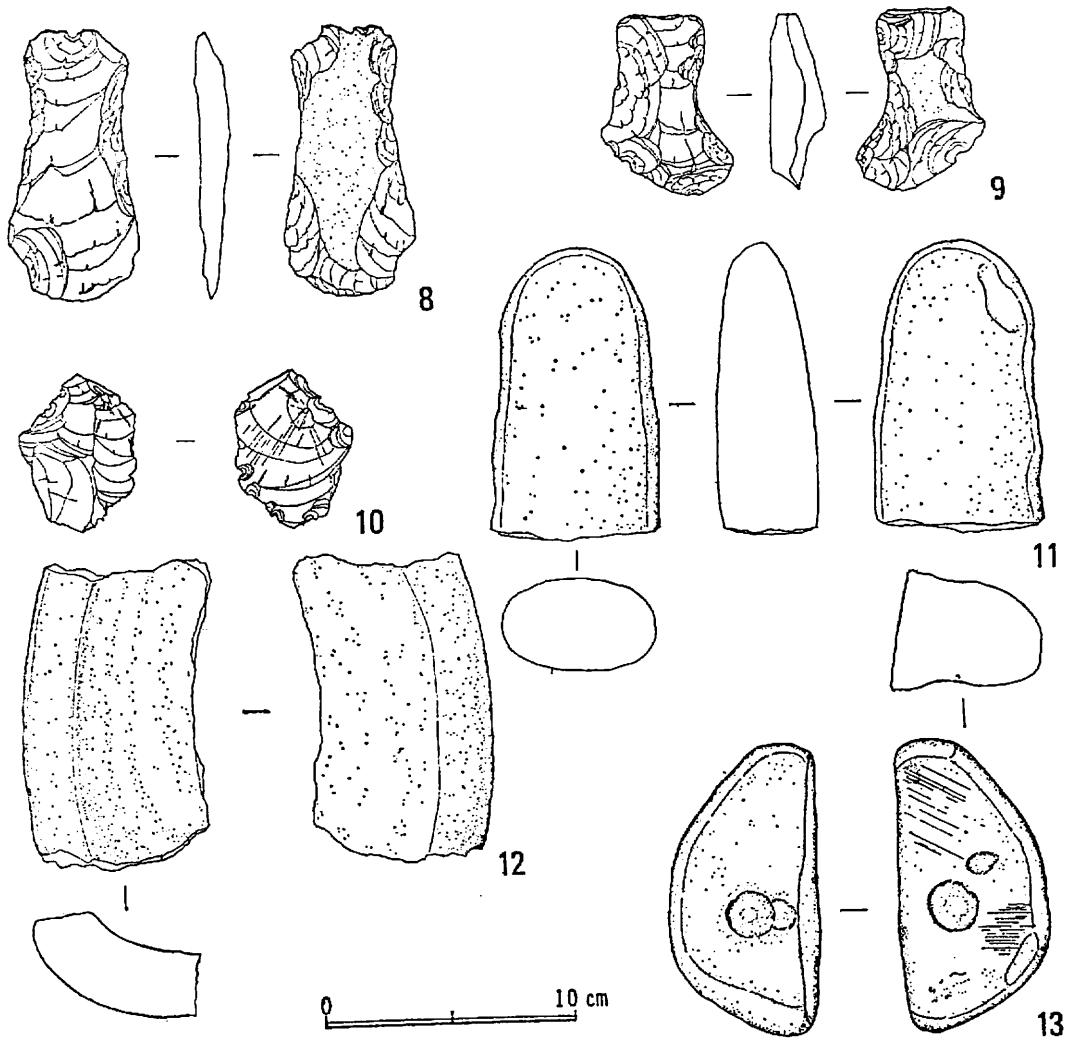
３も１・２と同様，片側には全く加工を施されず，自然面を残す形態である。１・２ほど断面は厚くない。材質は硬質頁岩である。

以上が確実に早期のものと推定される。おそらく第１群土器に伴うものと思われる。

４，５は撥形を呈する石斧である。４は上部を一部欠失している。材質は４が中粒硬砂岩，５は



第68図　縄文時代石器（1）



第69図　縄文時代石器（2）

硬質頁岩である。

6～8は短冊形を呈する石斧である。7は刃部を欠いている。材質は6・8が硬質頁岩，7は中粒硬砂岩である。

9は下方が広がる，撥形に近い分銅形の石斧である。刃部の一部を欠いている。材質は中粒硬砂岩。

以上は，中期の第群土器と同時期と見てよいものであろう。

10はチャート製のスクレイパーである。

11は下方を欠失した敲石である。材質は閃緑岩である。

12は輝石安山岩質スコリア製の石皿であるが，縄文時代の石皿とは形態を異にする。後世のものと思われる。

13は粗粒ゲンプ岩製の磨石である。元来は凹石であったと思われるが，半球状に磨られている。焼成を受けて器面の風化が著しいが，全面に擦痕が認められる。　（植木　弘）

2) 土師器と須恵器

遺構数の割には土器の総量が少ない。29軒の住居址の内図示できた遺物は14軒で，73個体である。器種は土師器甕・坏・鉢，須恵器坏・壺・蓋，円面硯，支柱，砥石，刀装具，板碑，すり鉢，土鍋，土錘，埴輪片等がある。

住居址出土遺物は，１軒あたりの出土量が少なく，遺構ごとのセット関係も欠落している器種があるが，ここでは器種別に分類を行ない，その様相及び年代について述べてみたい。

(1) 土師器

甕　25個体が図示できた。完形品は皆無で，口縁部破片が多い。胴部形態により４つに分類できる。

１類　長胴を呈する一群で，胴はあまり張らず直線的である。口縁部形態により，更に２分できる。

ａ―外反の度合が弱く，端部が丸く整形されているもの。10号住居址１。

ｂ―外反の度合が強く，端部を篦で切ったように鋭く平坦をなすもの。１号住居址１・２，９号住居址１，23号住居址１～３。

２類　球胴を呈する一群。１号住居址３・７・９，20号住居址１。

１号住居址3・7・9はいずれも底部破片で胴上半の器形を推定できないが平底風の大型の甕である。

３類　胴上半が残り，やや長胴を呈する一群。いずれも胴上半より上の破片であるが１類とは整形に明らかな差異が認められる。口縁部形態により更に二分できる。

ａ―「く」の字口縁を呈するもの。７号住居址１～７。

外反，あるいは外反して内彎するなどバラエティーがある。

ｂ―「コ」の字状口縁を呈するもの。２号住居址１，３号住居址１・２，21号住居址１。

３号住居址１はゆるく外反して，はっきりとした「コ」の字を呈さないが，内面に口縁下端と中位に弱い稜が見られ，「コ」の字を意識している。３号住居址２は，口縁中位が直立しており，「コ」の字口縁の典形である。

４類　小型甕。１号住居址４。

胴長で，口縁が短かく，反外する。

坏　図示できたのは15個体である。大まかに器形から，須恵器の模倣の段階より，その規制をはずれた段階へと推移している。

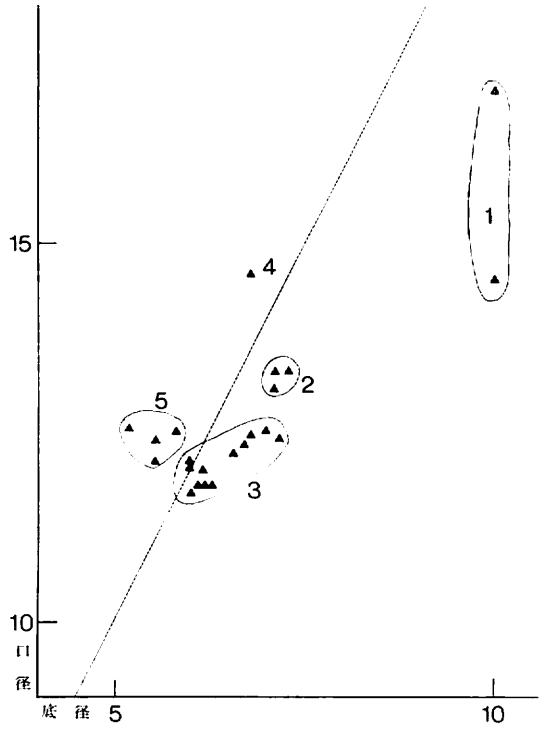
Ⅰ類　須恵器坏の器形を模倣したものである。10号住居址３・５。

丸底で，体部と口縁部との境いの明瞭なもので，段より外に口縁が出ない。須恵器坏は口縁部の立ち上がりが直立気味の内斜で，口縁部高と体部高との差が少ない段階から，口縁部が内斜して口縁部高が体部高に比較して短かくなる段階へと移行している。本類は口縁が直立気味で，体部高と口縁部高の差が少ないので，須恵器の前者の段階を模倣したものであろう。

Ⅱ類　須恵器蓋坏の器形を模倣したもので，器形によって更に２分できる。

ａ―口縁部と体部との境に稜を持つ。１号住居址６，10号住居址４，28号住居址１・１井戸１・２。

ｂ―口縁部と体部との境に，ゆるい沈線を有するもの。23号住居址４。



第70図　須恵器・坏口径・底径比図

a類は，古い段階での須恵器蓋を模倣したものの退化形態で，特に10号住居址４，１井戸２は，段の稜線も鈍く，口縁が外反するなど退化が著しく，新しい様相を示している。b類はa類とは系譜を異にして新しく須恵器を模倣したものである。

Ⅲ類　体部と口縁部との境いが明瞭でないものを一括した。底部形態により，２つに分類できる。

a―丸底であるもの。20号住居址２。

体部中位に指頭による整形が行なわれている。

b―平底風の丸底を呈するもの。２号住居址３，６号住居址１・２，７号住居址９。

土師器埦　28号住居址２。

口縁部は内斜気味に立ち上がり，口唇部はつままれている。口縁部と体部との間に

第17表　岩比田遺跡須恵器坏計測表

土器番号	口　径	底　径	器　高	底径/口径比	分　類	底　部
2―4	17.0	10.0	3.2	0.58	1	外へラ
2―5	12.4	6.8	3.6	0.59	3	糸　切
2―6	11.8	6.3	3.4	0.53	3	〃
2―7	11.8	6.2	3.6	0.52	3	〃
2―8	11.8	6.1	3.2	0.51	3	〃
2―9	12.0	6.0	3.5	0.50	3	〃
2―10	12.3	6.7	3.5	0.54	3	〃
2―11	12.5	5.8	3.6	0.46	5	〃
2―12	12.0	6.2	3.8	0.51	3	〃
3―3	11.7	6.0	3.2	0.51	3	〃
3―4	13.3	7.1	3.7	0.53	2	〃
3―6	13.1	7.1	3.6	0.54	2	〃
6―3	12.5	7.0	3.6	0.56	3	全へラ
6―4	14.6	6.8	5.7	0.46	4	糸　切
7―10	14.5	10.0	3.6	0.68	1	全へラ
16―1	12.4	7.2	3.6	0.58	3	〃
16―2	12.2	6.6	4.1	0.54	3	糸　切
16―3	12.1	6.0	3.6	0.49	3	〃
18	12.6	5.2	3.9	0.41	5	〃
19	12.1	5.6	4.8	0.46	5	〃
21―2	13.3	7.2	3.7	0.59	2	――
21―3	12.4	5.3	3.9	0.42	5	糸　切

は，明瞭な段が認められる。

鉢　10号住居址２。底部は欠失しているが，丸底と思われる。口縁部はゆるく外反する。

(2)　**須恵器**

坏　図示できたのは26個体である。底部外面の調整の有無，口径と底径との比でいくつかに分けられる。第１表は計測数値表で，これを図にしたものが第68図である。図中の斜めの線は口径・底径比0.5がの線である。これでみると３つのまとまりと，各個にはなれた一群とに分けられる。

Ⅰ類　口径・底径比が0.68～0.58のもの。２号住居址４，７号住居址10がある。

底部は糸切り後回転篦削りで器高が低い。７号住居址10は口縁部がつまみ出されている。

Ⅱ類　口径・底径比が0.53～0.54である。３号住居址４・６，21号住居址２。

底部は糸切り未調整である。

Ⅲ類　口径・底径比が0.50～0.58までの間のもの。２号住居址５～10・12，３号住居址３，６号住居址３，16号住居址１～３がある。

底部は６号住居址３，16住１が全面回転篦削りで，他は糸切りである。

Ⅳ類　口径・底径比は0.46。６号住居址４。

底部は糸切りである。

Ⅴ類　口径・底径比が0.49～0.46の間である。2号住居址11，18号住居址，19号住居址，21号住居址3。

底部は糸切りの未調整である。

口径・底径比で分類された中で，口縁部形態，体部下部形態について分類を試みたが，これといった特徴は抽出できなかった。

壺　２号住居址２。短頸壺である。口脣部は丸く整形され，やや内斜する。

蓋　20号住居址３。内面にかえりがあるが退化が著しく，わずかに突出しているにすぎない。つまみ擬宝珠状である。

以上，各器種について器形等で分類を行なってきた。更に細分類が可能と思われたが個体数の少なさにより，土器製作者個人のくせを分類する危険があり，必要最底限の分類にとどめた。

(3)　**時期区分**

次に分類された土器の時期について述べてみたい。当地域では発掘調査例が無く，直接対比できる資料が少ない。また出土土器量も少なくかなり大雑把にしか描きえられない。

甕形土器

Ⅰ類の長胴形態は鬼高期に見られる。胴中位に脹らみをもつものより胴上半に脹らみをもつもの，また胴がほとんど脹らまず直線的なものを経て真間期の胴上半肩部に強い張りのあるものへと変遷する。また口縁端部は真間期では切りおとしたように角型になり，丸より角への変遷がみられる。１－ａ類は胴中位で若干張る器形で，口脣も丸く調整されており，１－ｂ類に先行する。１－ｂ類は第２段階，すなわち胴部は脹らず直線的であるものに相当する。胴部形態を県内の遺跡でみると，加須市水深遺跡（註１）に多く見られる。水深遺跡では口脣端部は平坦であるが，胴部外面に横篦削りがすでに見られ，当遺跡１ｂ類ではすべて縦篦りであるので，若干古い様相を残している。鬼高期の良好な資料は，東松山市舞台遺跡（註２）で出土している。そこで，本類に類似する資料を

当ってみると，B区13・15号住居址に類例がみられる。胴部の張らない，直線的に底部へ移行する器形は本類と類似するが，口縁部の外反度合がゆるく，鋭さに欠ける点など，本類より前出の可能性がある。以上より本類は鬼高期後半に位置づけが可能である。

Ⅱ類は鬼高期に分化された長胴甕，丸胴甕の系譜を引くもので，鬼高後半期の上組遺跡（註3），舞台遺跡に類例が認められる。

Ⅲ類は国分期の甕である。国分期の土器編年は高橋一夫氏によってなされ（註4），口縁部形態が「く」の字状を呈するものから，「コ」の字状を呈するものへと形態変化をとらえている。本類も両者に分けられ，a類よりb類への移行が認められる。

坏形土器

Ⅰ類は東谷遺跡（註5），中道遺跡（註6），原遺跡（註7），精神場遺跡（註8）で類例がみられる。柿沼幹夫氏は本類の発生について述べられており，鬼高期中葉に新しく生まれる器形であるとされている（註9）。

Ⅱ類はすでに稜線に鋭さがなく，退化した形態を示す。Ⅱa類の中でも細分が可能で，10号住居址4・1，井戸2は稜線が鈍く，また口縁も外反するなど同類の他の器形よりくずれた形態を示す。この器形は本郷東遺跡（註10）で主体的にみられる，丸底で強く外反する器形に系譜的につながると思われる。

Ⅲ類は国分期の坏である。近年国分期の土師器について地域性が問題視され，河野喜映・福田健司両氏によって相模型，武蔵型，甲斐型等に分けられている（註11）。なかでも福田氏は土師器坏について，南武蔵型と北武蔵型とに分けられている。北武蔵型坏は粘土紐のまき上げで口縁部横ナデ，体部は手持ちの全面篦削りで，丸底を呈する。本類もその範疇に入るものである。だがしかし，丸底といえどもa類の丸底，b類の平底風の丸底に分けられる。県内での土師器坏の様相をうかがうと，入間・比企郡と児玉郡に分けられる。入間郡地域では東金子窯址群・鳩山窯址群・新開窯址等の須恵器生産を郡内に持ち，郡内で調査された集落では，須恵器坏の出土量が土師器坏を大きく上まわっており，土師器坏は系統的に追えるほどの資料が少ないが，坂戸市山田遺跡（註12），上福岡市松山遺跡（註13），狭山市城ノ越遺跡（註14）で少数出土している。いずれも丸底で体部が篦削である。児玉地域では近年，新幹線・関越自動車道の開発によって数多くの発掘調査が行なわれ，資料の蓄積がなされてきた。上里町中堀遺跡（註15）では多くの土師器坏を出土している。形態は平底風で底部は篦削りである。本庄市古川端遺跡（註16），神川村中道・西北原遺跡（註17），児玉玉町枇杷橋遺跡（註18）等でも，土師器坏の出土量が須恵器坏と出土数量が半々であり，土師器坏の需要が高かったと思われる。さて枇杷橋遺跡では，平底で体部中位まで篦削りの坏が出土している。伴出遺物で羽釜が出土しており，新しい要素を持っている。中堀遺跡でも「コ」の字状口縁のくずれた甕に共伴して，平底風の坏を出土している。両者ともに本類に比較して立ち上がりが須恵器坏に類似し，須恵器の影響を受けていると思われる。そこで器形の推移をみると，丸底で体部篦削りの鬼高・真間期以来の器形（a類）から，平底風だが丸底で体部篦削の本類bに相当する器形へ，そして中堀1号住居址の段階へ，さらに枇杷橋遺跡・上里町田中前遺跡（註19）の平底の器形へと変化をする。

本遺跡と同水系にある江南村荒神脇遺跡（註20）では，本類bと同形態の坏が多く出土しており，同時期と思われ，中堀遺跡の前段階であろう。

埦形土器

坏Ⅰ類の体部を深くした形態である。この土器には地域性の強い器形で，川越市上組遺跡（注21），同市東洋大学工学部敷地内遺跡（註22），東松山市駒堀遺跡（註23），同市舞台遺跡（註24）に類例がみられ，いずれも入間・比企地域に限られる。鬼高期の調査例が多い児玉地方で出土がみられず，入間・比企地方で発生したと思われる。前記遺跡では鬼高期後半の土器と共伴しており，本例も鬼高期後半のものである。

鉢形土器

本器形は上里町本郷東遺跡（註25）4号住居址，水深遺跡第1捨場に類例がみられる。口縁部と胴部との境いが不明瞭で，整形の差によりそれが分けられる。この器形の系譜をたどると，寄居町甘粕原遺跡（註26）4号住の14番の土器，舞台遺跡A—74号住の9，上組遺跡6号住の6～8の各埦形土器に祖形が求められる。すなわち甘粕原4号住居址14は丸底の底部より内彎気味に立ち上がって段を持ち口縁が外反する。口縁部は横ナデ，体部は篦削りである。本類はこの口縁下の段の退化した形態と思われる。前記3遺跡は鬼高期後半に比定されており，本鉢形土器は，鬼高期後半より真間期にかけての所産であろう。

須恵器は近年底部の調整，口径・底径比等により編年されている。本遺跡出土須恵器も口径・底径比により4類に分類ができた。底部調整されているものは4個体で，外周篦削りと全面篦削りがある。編年では後者より前者へと移行する。しかし本遺跡では，第3類の糸切り未調整の坏の中に，底部全面篦削り調整のものが存在する。1類は底部外周篦削りで，入間市前内出窯址（註27）1・2号窯段階のものである。2類と3類は第68図の上では明瞭に分類できるが，口径・底径比ではほぼ同じ幅でありこの差は法量の差として理解できる。同じく4類と5類も法量の差である。2・3類と4・5類は口径・底径比で0.5の線を境に分けられる。2・3類から4・5類への時間差が認められる。1類，2・3類，4・5類は，それで時間を表わし，1→2・3→4・5類と順に新しくなる。

蓋形土器

1点のみの出土である。形態はかえりが既に退化しており，陶邑古窯址群では，かえりのある蓋が第3型式で消滅する。

註

註1　栗原文蔵・中島利治「水深」埼玉県遺跡調査会報告第13集　1972年
註2　井上　肇「舞台Ⅰ・Ⅱ」埼玉県遺跡発掘調査報告書第17・18集　1979年
註3　今泉泰之「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集　1974年
註4　髙橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」埼玉考古第13・14号
註5　柿沼幹夫「東谷・前山2号墳・古川端」埼玉県遺跡発掘調査報告書第6集　1978年
註6　菅谷浩之・駒宮史朗「中道・西北原遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第23集　1974年
註7　髙橋一夫「原・清水南」上里町教育委員会　1978年
註8　梅沢太久夫「精神場遺跡」神川村教育委員会　1978年

註9　注5に同じ
註10　駒宮史朗「本郷東・愛宕」埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集　1976年
註11　河野喜映「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論」神奈川考古1号
福田健司「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」考古学雑誌64巻3号
註12　谷井　彪「山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会報告第18集　1973年
註13　笹森健一「松山遺跡の調査」埋蔵文化財の調査（1）郷土史料第22集　上福岡市教育委員会　1979年
註14　柳田敏司・増田正博「城ノ越遺跡」城ノ越遺跡調査会　1978年
註15　駒宮史朗「中堀・耕安地・久越前」埼玉県遺跡発掘調査報告第15集　1978年
註16　注5と同じ
註17　注6と同じ
註18　菅谷浩之「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第20集　1973年
註19　市川　修「田中前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第32集　1977年
註20　中島利治「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第22集　1974年
註21　注3と同じ
註22　金井塚良一　川越市史第1巻　資料編　川越市　1972年
註23　今泉泰之「駒堀」埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集　1974年
註24　注2と同じ
註25　注10と同じ
註26　並木　隆　「甘粕原・ゴンン・露梨子遺跡」埼玉県遺跡調査報告書第35集　1978年
註27　小川良祐「前内出窯址発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査報告第24集　1974年

2)　円面硯について

21号住居址から，円面硯が出土した。硯の使用面は，直径9.2㎝で，中央部がやや高く陸部を形成し，周縁は浅い海部を形成する。側面は沈線による波状文で飾っている。

伴出遺物は，須恵器坏が2個，土師器甕が1個である。他の住居址からも特殊な遺物は，出土していない。住居址も，一般的な竪穴式住居であった。

関東地方の他の遺跡から硯が出土したものを簡単にまとめると，17遺跡37例である（第2表）。

硯を出土したそれぞれの遺跡は，窯址・官衙址・集落址・寺院址等多様であったが窯址・官衙址・寺院址は，遺跡の性格上，硯の出土例は，竪穴住居よりは多い。本稿では竪穴住居址にしぼって，硯の出土を検討したい。

竪穴住居址から硯が出土した例は，7遺跡12例であった。各遺跡でのあり方について，以下に見ていく。

埼玉県富士見市北別所遺跡では，3号住居址から未使用の風字硯が出土している。この住居址は，多数の須恵器坏を出土しており，また遺跡の近くには，窯址も確認されている。従って，この住居址は一般的な住居ではなく，窯址と関係するものと考えられる。

埼玉県鶴ケ島町若葉台遺跡は，掘立柱建物址が，整然と並んだ遺跡で，官衙的な様相を持つ遺跡である。硯は，C地点の多数重複する住居址より出土している。伴出品には，銅製鈴が発見されて

いる。遺跡全体からは，多量の須恵器，墨書土器等が出土している。

埼玉県岡部町北坂遺跡は，掘立柱建物址と竪穴住居址で構成される集落址である。硯は，第5号住居址から出土しており，円面硯を呈する。伴出遺物は，須恵器坏等の日常生活具だけであるが，集落としては，鉄製の錠，「中」を示す印が出土している。

埼玉県東松山市立野遺跡では，3軒の竪穴住居址が検出された。円面硯は，その内の第3号住居址が出土した。調査された面積は，多いのにもかかわらず，3軒だけである。伴出した遺物には，塼・器種不明須恵器が多く，また全体的に須恵器の出土量が多い。この遺跡と同一台地上には，舞台・根平遺跡等の6～7世紀にかけての窯址が発掘されており，この遺跡の形成には，それら窯址との関連が考えられる。

千葉県船橋市印内台遺跡では，第124号住居址より，円面硯が出土している。この遺跡では，金銅製品（帯金具）が竪穴住居址より出土している。

東京都府中市武蔵国府では，竪穴住居址2軒より，計3点の硯が出土している。これらの竪穴住居址は，官衙隣接地である。

千葉県千葉市有吉遺跡では，円面硯が表土から出土している。集落からは，墨書土器・帯金具が出土している。

栃木県益子町星の宮ケカチ遺跡では，2軒の住居址から，それぞれ1個出土している。竪穴住居址・掘立柱建物址で構成されており，集落からは，石帯・佐波理の匙が出土している。

以上の諸例から特徴点をみると，硯を出土した住居址または集落址からは，必ずといっていいほど，帯金具・塼・石帯・匙・錠といった日常使用されるもの以外の遺物が，また一般農民の入手が不可能なものが，出土するという特徴を指摘することができる。

岩比田遺跡では，前記の特徴となる特殊遺物は，一点も出土していないが，調査区域外には，いまだ眠っている可能性が，諸例によって，大いに考えられる。とするならば，岩比田遺跡の性格の一端が示されることになろう。

本稿では，転用硯については一切ふれていないが，その出土例も多くなりつつある。定形化された硯と転用硯とでは，使用目的からすれば本来的に同じであるが，今回集成した各遺跡では，転用硯の出土が見られなかった。すなわち，定形硯と転用硯とが同一遺跡内では共伴していないことを示している。このような点に定形硯と転用硯の性格の一端が示されているようである。依って，定形硯を出す集落と，転用硯を出す遺跡との相互に比較検討を行なうことによっては，新たな問題が派生する可能性もある。とりあえず，本稿では，定形化された硯の集成と，出土のあり方について述べて，転用硯等については後日を期したい。

註

註1　坂詰秀一　1978「武蔵虫草山窯址」鳩山村教育委員会

註2　高橋一夫　1978「高岡寺院跡発掘調査報告書」高岡寺院跡発掘調査会

註3　玉利秀雄・斉藤稔　1979「若葉台遺跡群第1次発掘調査概報」鶴ヶ島町教育委員会
　　玉利秀雄・斉藤稔　1980「若葉台遺跡群第2次発掘調査概報」鶴ヶ島町教育委員会

註4　中島宏　1981「清水台・安光寺・北坂」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集

第18表　古代硯出土遺跡集成表

番号	遺跡名	県名		種類	遺構	注
1	虫草山窯址群	埼玉	窯	円面硯	粘土溜め	注1
2	高岡寺院跡	〃	寺	〃	第3建物遺構	注2
3	若葉台遺跡群	〃	集	〃	C地点複合住居址	注3
4	〃	〃	〃	〃	〃	
5	〃	〃	〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃	〃	D地点表土	
7	〃	〃	〃	〃	〃	
8	北坂遺跡	〃	〃	〃	5号住居址	注4
9	立野遺跡	〃	〃	〃	3号住居址	注5
10	〃	〃	〃	〃	表土	
11	将軍沢窯址群	〃	窯	〃	第1支群A－2号窯	注6
12	新久窯址群	〃	〃	〃	D－1号窯址	注7
13	〃	〃	〃	風字硯	A－1号窯址	
14	〃	〃	〃	〃	A－2号窯址	
15	〃	〃	〃	〃	〃	
16	〃	〃	〃	〃	D－3号窯址	
17	〃	〃	〃	〃	〃	
18	北別所遺跡	〃	集	〃	3号住居址	注8
19	武蔵国府	東京	官	円面硯	M60－SI9	注9
20	〃	〃	〃	〃	〃	
21	〃	〃	〃	〃	V9－S×4	
22	〃	〃	〃	風字硯	M39－SI23	
23	印内台遺跡	千葉	集	円面硯	124号住居址	注10
24	江原台遺跡	〃	〃	〃	005号掘立に近接する小溝	注11
25	有吉遺跡	〃	〃	〃	表土	注12
26	日秀西遺跡	〃	官	〃	掘立建物址	注13
27	ケカチ遺跡	栃木	集	〃	A地区5号住居址	注14
28	〃	〃	〃	〃	A地区11号住居址	
29	下野国府	〃	官	〃	表土	注15
30	〃	〃	〃	〃	〃	
31	〃	〃	〃	〃	SB－017	
32	〃	〃	〃	〃	SB－039	
33	永田・不入須恵窯址	千葉	窯	〃	不入2号窯址	注16
34	新開遺跡	埼玉	〃	風字硯	1号窯址	注17
35	〃	〃	〃	〃	〃	
36	〃	〃	〃	〃	〃	
37	〃	〃	〃	〃	〃	

註5　高橋一夫・今井宏　1980「児沢・立野・大塚原」埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集　埼玉県教育委員会

註6　浅野晴樹・石岡憲雄・梅沢太久夫　1981「埼玉における古代窯業の発達(3)」研究紀要第3号　埼玉県立歴史資料館

註7　坂詰秀一　1971「武蔵新久窯跡」雄山閣出版

註8　小出輝雄・高橋敦　1979「北別所遺跡第1地点」中央遺跡群Ⅱ　富士見市教育委員会

註9　雪田孝　1980「武蔵国府の調査Ⅹ・Ⅺ　府中市教育委員会

註10　石井穂　1980「印内台遺跡調査団

註11　山田友治　1980「佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ　千葉県文化財センター
註12　阪田正一「有吉遺跡第1次」千葉東南部ニュータウン3　房総考古資料刊行会
註13　上野純司　1980「我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」千葉文化財センター
註14　川原由典　1978「星の宮ケカチ遺跡」益子町文化財調査報告　益子町教育委員会
註15　大金宣亮　1979・1980「下野国府跡Ⅰ・Ⅱ」栃木県埋蔵文化財調査報告　栃木県教育委員会
註16　大川清　1978「永田・不入須恵窯址」国士館大学文学部考古学研究室
註17　松本富雄　1981「新開遺跡発掘調査報告書」三芳町教育委員会

3)　岩比田遺跡の形成

発掘した岩比田遺跡A区には，古代（古墳時代・平安時代）と中世（室町時代）の遺構が，互いに複合して存在していた。発掘範囲が台地基部の微地形に限定されたために，岩比田遺跡全体の内容は不明であったが，A区が且つては台地斜面に連接する地形であったこと，また台地斜面上の土器片の散布状況等を考慮すると，岩比田遺跡全域には，二つの時期の，かなり大規模な遺跡が形成されていたと考えてさしつかえない。

それにしても，発掘したA地域は，微地形のために，表土がきわめて浅かった。しかも南側は水田面に漸移していて，長い期間の耕作と自然の表土の流失によって，遺構はかなり攪乱されていた。そのために遺物の出土が僅少で，遺物による時期の認定はかなり難かしかったが，さいわい29軒の竪穴住居址の中，15軒はほぼ確実に，時期を比定することが可能であった。ここでは，出現時期がほぼ明瞭な15軒の竪穴住居址を中心にして，岩比田遺跡の形成について，若干検討することにしたい。

1)　遺物による竪穴住居址の分類

Ⅳ－1節で，岩比田遺跡の竪穴住居址から出土した土器を，器種別に検討した。そうしてすでに発掘された他の遺跡の土器群を参考にして，それぞれの時期を考察したが，その成果を参照しながら，まず15軒の竪穴住居址を時期別に分類しておこう。

鬼高期の住居址　甕形土器Ⅰ－a類　坏形土器1・2 a類を持つ10号住居址，28号住居址があげられる。10号住居址は坏Ⅱ a類に分類された4と，鉢形土器がともに新しい要素を持っており，坏形土器Ⅰ類が，鬼高期中葉以降の器形であることを合わせて考えてみると，鬼高期後半に比定できる。28号住居址は，埦形土器が上組遺跡6号住居址より出土しており，鬼高期後半に比定される。

鬼高期から真間期にかけての住居址　1号住居址，9号住居址，23号住居址があげられる。甕形土器Ⅰb類を主体としており，前述したが，舞台B13・15号居址より新しく，水深遺跡，本郷東遺跡より古い時期に比定できる。坏形土器は，いずれも須恵器模倣坏であるが，すでに器形は新しく変化しており，上記甕形土器同様，舞台遺跡より後出すること，真間期のメルクマールとなる盤形土器，また丸底の半球状の坏がないこと等より，鬼高期から真間期への過渡期としてとらえられる。そこで7世紀後半に比定できる。

国分期　2号住居址，3号住居址，5号住居址，6号住居址，7号住居址，16号住居址，18号住居址，19号住居址，21号住居址の8軒が相当する。基本的セットは土師器甕，同坏，須恵器坏であるが，土師器甕は性格上細片のために図示し得ないものがあり，欠落している住居址もある。前項で土師器甕は2分でき，土師器坏，須恵器坏は3分され，それぞれ新旧を把握した。共伴関係を見ると，甕3 a類と須恵器坏1類及び土師器坏3 b類，甕3 b類と須恵器坏2・3類，須恵器坏3・4類と土師器坏3 b類の3形態に分けられる。古い様相を持つものとしては，7号住居址があげられる。甕3 a類と須恵器坏1類・土師器坏が伴出している。最も新しい様相を持つものとしては，18号住居址，19号住居址があげられる。須恵器坏5類を持つ。その間には2号住居址，3号住居址，6号住居址，16号住居址，21号住居址の5軒が存在する。土師器甕3 b類，須恵器坏各類，土師器坏が共伴している。須恵器坏は各類が出土しており，中間的な様相の感を強くしている。しかし，2号住居址と3号住居址に重複がみられるなど，5軒が同時存在していたのではなく，そこには時間差が存在する。以上を総合してみると，7号住居址を8世紀後半より9世紀初頭，その他を9世紀代に比定してさしつかえない。

2）　古墳時代の集落

古墳時代の遺構は，鬼高期の竪穴住居址が5軒発掘された。(10．28．　1．　9．23号住居址)。その中1号・9号・23号住居址は若干後出と考えられたから，古墳時代には，6世紀後半以後，二時期にわたって竪穴住居群が形成されたと考えてよいだろう。

5軒の竪穴住居址によって，岩比田遺跡の古墳時代の集落構成を考察することは無理なようである。他の時期不明な竪穴住居址の中にも，おそらくこの時期に該当するものがあるかもしれないが，遺物が不明なために断定することは難かしかった。

A区に連接する板井台地の斜面には，踏査によっては鬼高期以前の土師器は採集されなかった。発掘調査によっても，微地形上から鬼高期以前の土師器は出土していない。あるいは板井地内の和田川左岸の開発は，鬼高期以降急速に進行し，その頃になって，台地南側の微地形上にも，人々の定住生活が営まれはじめたのかもしれない。そうであれば，すでに五領期や和泉期の集落を形成し，方形周溝墓や初期古墳を出現させて，活発な人々の活動が展開されていた和田川右岸地内とは，明らかに異なった開発の様相が推測されることになるが，これは今後の，この地域の研究対象の一つといえるだろう。

3）　平安時代の集落

29軒の竪穴住居址群の中で，圧倒的に多かったのは平安時代に比定された竪穴住居址であった。8世紀後半から9世紀と推定された竪穴住居址が，1軒（7号住居址）発掘されているが，これも確実に奈良時代といえるものではなさそうであった。岩比田遺跡では，古墳時代の竪穴住居址5軒を除く大部分の竪穴住居址は，平安期初頭―9世紀に出現していたと考えていいだろう。

平安時代の竪穴住居址も，出土遺物に多少の時期差があった。2号住居址と3号住居址のように重複しているものも認められた。この時期にも竪穴住居址群は，いくつかの時期差をもって出現し

ていたと推定していいだろう。

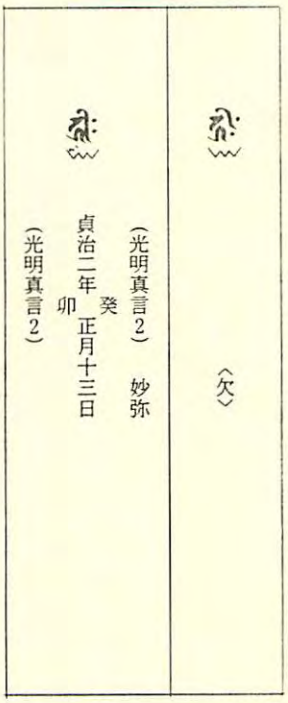
古墳時代と平安時代をうめる，その間の竪穴住居址は，発掘調査によっては確認されなかった。出土した遺物の中にも明瞭に８世紀に比定できるものは検出されなかったが，真間期の竪穴住居址の存在を考慮すると，真間期以降の竪穴住居群が，板井台地や微地形上に，古墳時代から連続して形成された可能性は考えていいだろう。

それにしても，台地斜面で採集される土器片は，圧倒的に平安時代にかかわるものが多かった。発掘調査によっても，９世紀に微形地上の竪穴住居址が増加する傾向が看取された。平安時代初期を古墳時代後期とともに，板井地内の集落形成の画期と推測して間違いないかもしれない。

4） 中世の遺構

柱穴群・土壙・溝・井戸は，中世の遺構と想定したが，井戸以外に出土遺物が皆無で，時期の認定は困難だった。しかし溝と井戸は，いずれも平安時代の竪穴住居址を破壊していたし，第１井戸からは，貞治２年（1363）の年号のある板石塔婆が出土している。微形地上には，中世に関係する建物群は検出されなかったが，連接する台地上に，この時期の遺跡が存在した可能性は充分考えられる。

井戸の中には，須恵器・鉢・焙烙・すり鉢・木製品・ひょうたん・板石塔婆等が投棄されていた。板石塔婆に明記された貞治２年を参考にすれば，少なくとも貞治年間には，この井戸はまだ使用されていたと考えていいだろう。その後ある時期（南北朝以後）に，井戸の中に各種の生活用具と板石塔婆が投入されて，この井戸の使用が終ったのである。鉢・焙烙・すり鉢あるいはひょうたん等を参考にすれば，その時期は15世紀になってからのようにおもわれる。



第72図　板石塔婆（1・2）の種字と紀年銘

5） 岩比田遺跡の性格

岩比田遺跡は，すでに詳述したように，和田川の沖積原に形成された古墳時代と平安時代の集落址である。和田川の流路の変遷によって遺跡はひどく浸蝕されていたが，当時はかなりの大集落が存在したと想定された。就中平安時代の集落は，23軒の竪穴住居址のほかに，21号住居址から円面硯が出土して，岩比田遺跡の特殊な性格を示唆していたのである。

円面硯は，関東地方の出土例を概観した（Ⅳ－３）の考察のように，総じて窯址・官衙址・寺院址からの出土が多い。集落地から出土した場合でも，帯金具・塼・石帯・匙・尾錠といった遺物が伴出して，その集落の，他の集落とは異なった性格を推定させていた。岩比田遺跡から，円面硯に伴出して，とりわけて特異な遺物は出土しなかったが，すでにかなりの部分が湮滅したこの遺跡の，消失した竪穴住居址の中に，他の遺跡から出土した遺物が存在した可能性

は充分考えられたのである。

もともと円面硯は，筆写，もしくは記録用具として，日常使用する什器類とは区別されていたはずである。円面硯が，寺院址や官衙址から多く出土し，一般の竪穴住居址からほとんど検出されなかったのは，円面硯の用途を考えれば，むしろ当然のことだったと考えてよい。

円面硯を出土した岩比田遺跡が，どのような集落だったのか，この一点の円面硯によって推定することは不可能であるが，円面硯の特殊な用途を考慮すれば，少なくとも，岩比田遺跡に織字者が居住し，また，他の集落とは異なった性格をもった集落の可能性も考えることはできるだろう。

岩比田遺跡の東方には，式内社の伝承もある出雲乃伊波神社がある。この神社が果して式内社だったかどうか，今は判然としないが，男衾郡のもう一つの出雲乃伊波比神社（赤沼）とこの出雲乃伊波比神社（板井）は，いずれも式内社を推定する確たる記録はない。おそらく，伝承された不確実な社伝や口碑によっては，この二つの出雲乃伊波比神社のどちらかが式内社だったのか，確定することは難かしいだろう。今後は，考古学や歴史地理学の成果を主にして検討しなければ，この問題の決着は不可能と考えているが，岩井田遺跡の特殊な性格を示唆した21号住居址の円面硯は，あるいは岩比田遺跡から，板井の出雲乃伊波比神社を探る有力な手掛かりをあたえたことになったといえるかもしれない。今後は周辺の同時代の集落や，最近，柴字寺内で所在が確認された寺内廃寺（第１図５）の実態を更に探索して，岩比田遺跡を，男衾郡の式内社問題の解決まで普遍することが必要だろう。その場合，おそらく男衾郡の領域の検討が問題になってくると考えているが，これらはすべて，岩比田遺跡が提示したこれからの研究課題として取り組んでいきたいと考えている。

付篇　ひょうたんの保存処理

（財）元興寺文化財研究所
増　澤　文　武
内　田　俊　秀

はじめに

当研究所に保存処理を委託されたひょうたんは，多数の破片に割れており，軟らかく，自量に持ちこたえられない状態にあった。その取扱いと形状を確保するには，一般の木製品以上に多くの困難が予想された。

これらの保存処理方法としては，出土木製品の保存処理法の適用以外には手段はないと判断した。それは，多量の含水率を有する植物製品である点が出土木製品と同様であると考えたことによる。

出土木製遺物の保存処理方法としては

1）ＰＥＧ4000の含浸法
（以下ＰＥＧ含浸法と言う）

2）凍結真空乾燥法

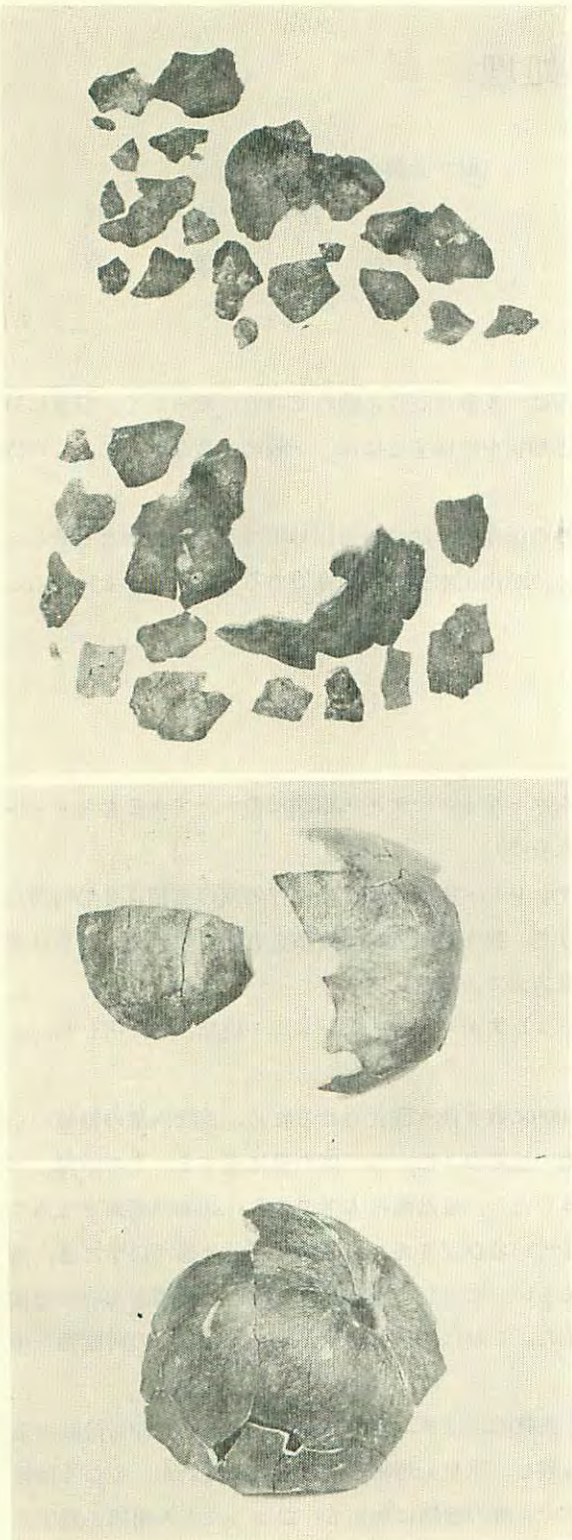
3）アルコール・キシレン・樹脂法（アルコール・エーテル・樹脂法のエーテルをキシレンに置き換え，火気による危険性を改良したもの）

の３方法がなされており，特にアルコール・キシレン・樹脂法による保存処理の実績は２年に満たない状態にあった。また，これらの３方法のうち，我々の研究所で実績を有するのは１）ＰＥＧ含浸法と３）アルコール・キシレン・樹脂法の２方法であった。

そこでこれらの２方法について検討した結果，３）アルコール・キシレン・樹脂法を採用した。その理由は下記のとうりである。

ＰＥＧ含浸法は，遺物内部の水分をＰＥＧ4000に置き換え固化させるため，遺物内部の組織の空間にＰＥＧ4000が入り込み，ＰＥＧ4000が遺物の組織の３倍から７倍の量に達する。その結果，出土遺物の比重は1.0以上となり自重が重くなることと，接着面の大半がＰＥＧ4000の表面となることは避けられない。その結果，各破片に分離しているひょうたんを原形に近い状態に戻すには，薄い断面を接着させざるを得ず，また接着がうまくいったとしてもＰＥＧ4000は比較的もろいので接着面の一皮はいだ形ではずれることが予想された。これは同時に自重が重いだけにその可能性を増すものと考えた。

一方，アルコール・キシレン・樹脂法では，最終的にはダンマル，ロジン等，40～60％溶液に遺物を浸漬後乾燥するため，遺物内組織に空間を残し，重量も遺物本来のものに近いか，もしくは軽い状態になる。接着面についてもダンマル・ロジン等の樹脂に加えて，ひょうたんの組織を残すため，破片を接着するには良好であると判断した。



第71図　ひょうたん

実績は前述のように2年間のみであるが約300例の木製品の保存処理結果と仕上り状態から，ひょうたんの保存処理を可能なものにすると判断をした。

保存処理

1）保存処理前のチェックと写真撮影

お預りした遺物について調査し，上述のような保存処理法を決定すると同時に写真撮影を行った。

2）洗浄

各破片について一点づつていねいに筆などにて表面の土や異物を洗い落とした。

3）脱色

黒褐化しているひょうたんをエチレンジアミン四酢酸2ナトリウム塩の1％水溶液にて脱色し明るい色とした。

4）洗浄

脱色によって，2）の洗浄時黒くて気がつかなかった泥など，また硬くて除去できなかった泥などを再び洗浄し取り除いた。

5）溶剤交換

ひょうたんの各破片を20％エチルアルコール水溶液に浸漬し，ひょうたん内部の水分をアルコール水溶液に置き換え，更に濃度を数段階に上げつつ最終的には約100％アルコールに置き換えた。

これらのアルコール濃度は溶液の比重の測定によりチェックを行った。

アルコールに置換後，アルコール・キシレン混合溶液を最初，キシレンの低濃

度のものから徐々にキシレン濃度を上げ，最終的には約100％キシレンに至るまで数段階を経て，ひょうたん内部のアルコールをキシレンに置換した。アルコールがキシレンに置きかわっているかどうかのチェックは浸漬したキシレン中のアルコールの有無をローダミンBの赤・着色が消失した時点をもって終点とした。

6）樹脂含浸

溶剤置換を終了したひょうたんの破片を，ダンマル・ロジン・吹込ひまし油，スタンド油，それぞれ5：2：1：1の重量比のものの40％キシレン溶液中に浸漬し，十分これらの天然樹脂を浸透させた。

7）真空乾燥

前述の天然樹脂を浸透させた資料を10mmHg以下に減圧し，資料内部に含まれるキシレン等の溶剤を除去し乾燥した。

8）接着

乾燥し，接着可能となったひょうたんの各破片を1片づつ，接着可能な部分を探し，出来る限りの復原を試みた。なお，接着剤としては，シアノアクリレート系の接着剤，アロンアルファ206（東亜合成化学工業株式会社），および磨耗し丸みのある破断面については，エポキシ系接着剤，セメダインハイスーパー（セメダイン株式会社）にガラスマイクロバルーンを混入したものを充填した。

9）仕上げ

欠落部の補填を必要とする箇所には，エポキシ系樹脂とフェノール系マイクロバルーンの混合物，アラルダイトSV 426（チバガイギー社）により行い，本体に傷をつけないよう整形した上で，接着部分，補填部分の樹脂部分のみ岩顔料とブチラール樹脂，エスレックBL（積水化学工業株式会社）により着色を行った。

また，ひょうたん本体についてはマイクロクリスタルワックスを塗布し，表面を安定させた。

10）保存処理後のチェックと写真撮影

保存処理を終了したひょうたんについて。点検した上で写真撮影を行い工程を終了した。

保管上の要望

保存処理を終了した遺物は，乾燥し，強度も増して取扱いは含水時に比べ著しく向上しているが，基本的には遺物本体が劣化していることは変りがない。また浸透した樹脂はあくまで補佐としての役割は演じるにすぎない。そこで，一般文化財と同様の取扱いをお願いしたい。

保管上，最も一般的なことであるが，

1）高温・多湿を避けること（できれば湿度は60％RH前後）。保管には冷暗所が好ましい。

2）展示には紫外線カットのライト，熱線による一時的，局部的照射を避けること。

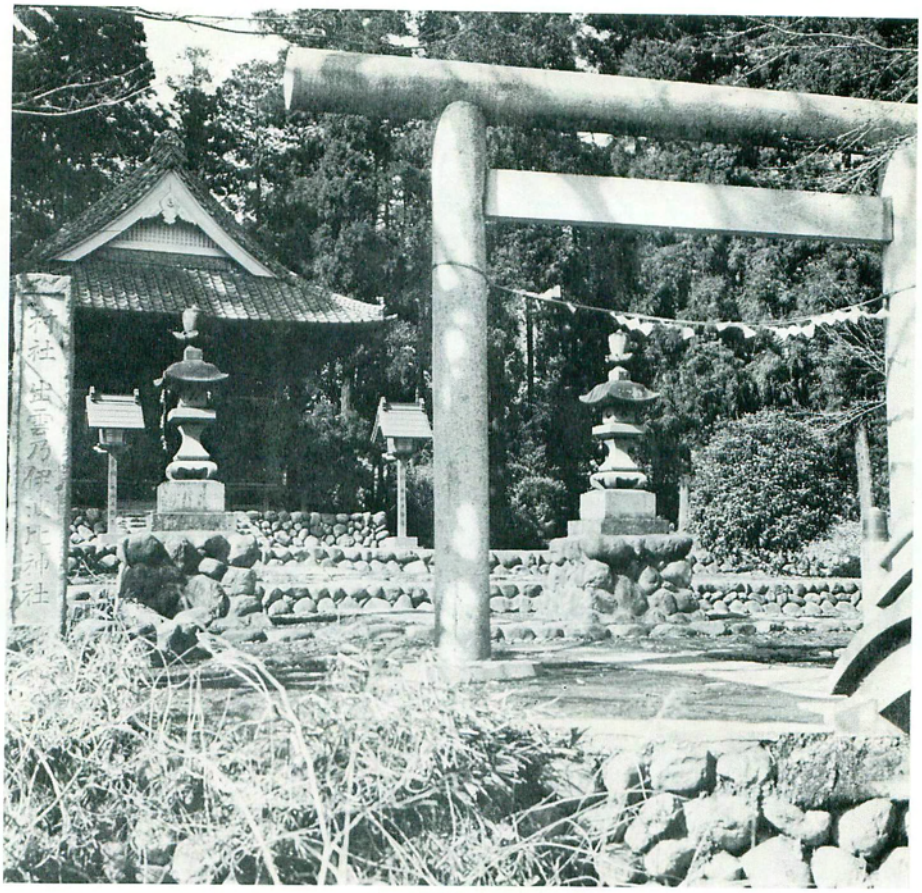
3）ほこりが付着しないようにし，もしついた場合はすみやかに柔かいもので取り除くこと。

4）水分，水滴等の付着を避けること。

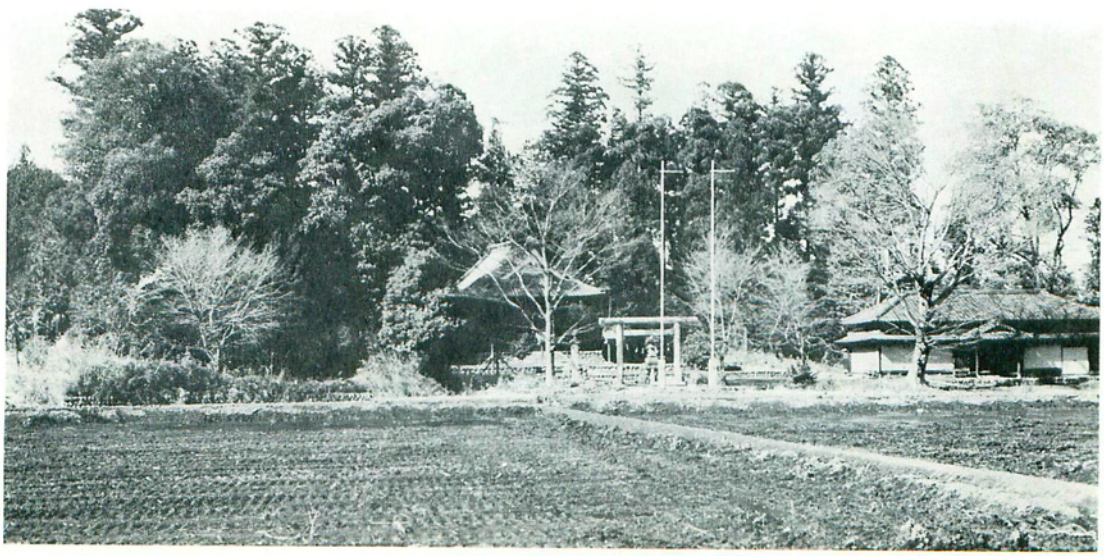
5）取扱いには不必要な力がかからないようにすること。

などを御注意頂きたい。

図　　版



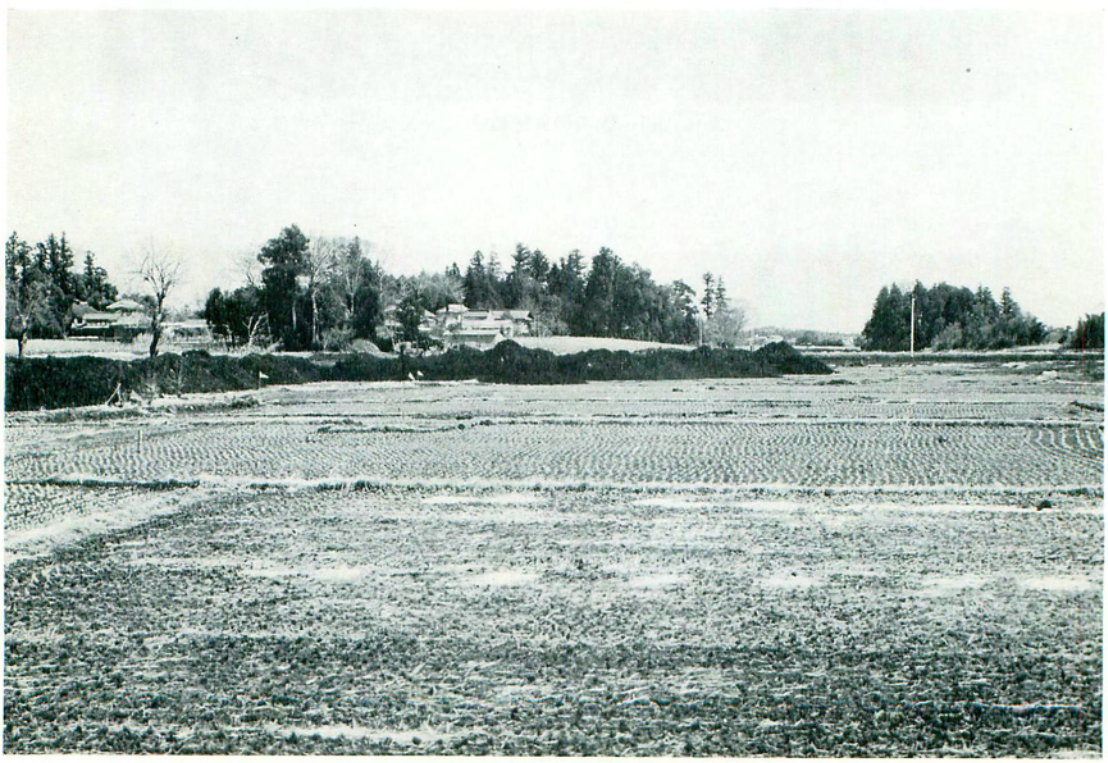
1. 出雲伊波比神社



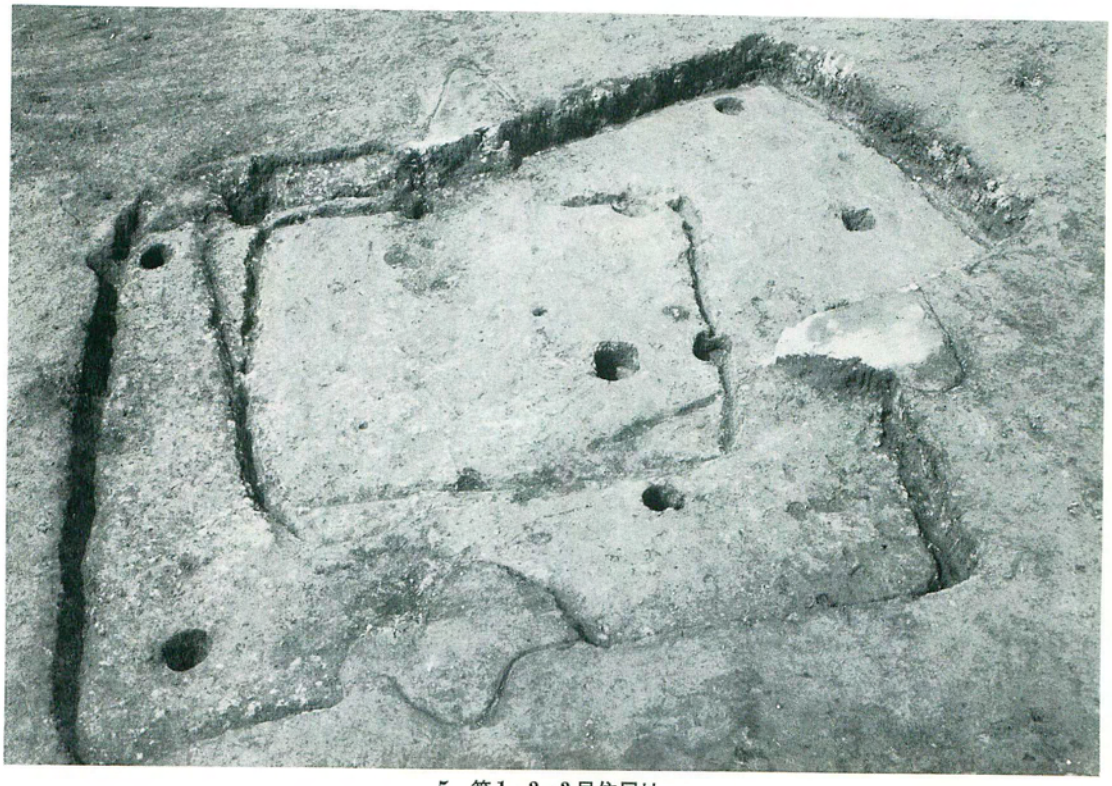
2. 出雲伊波比神社遠景

図　版　2

3. 遺　跡　全　景（南から）



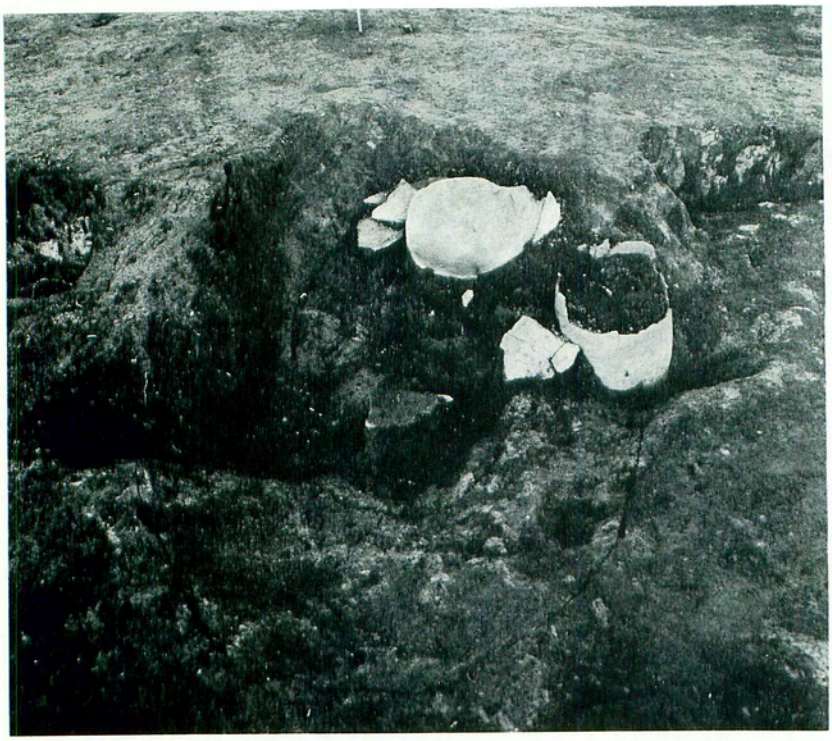
4. 遺　跡　全　景（西から）



5. 第1・2・3号住居址

6. 第1号住居址カマド

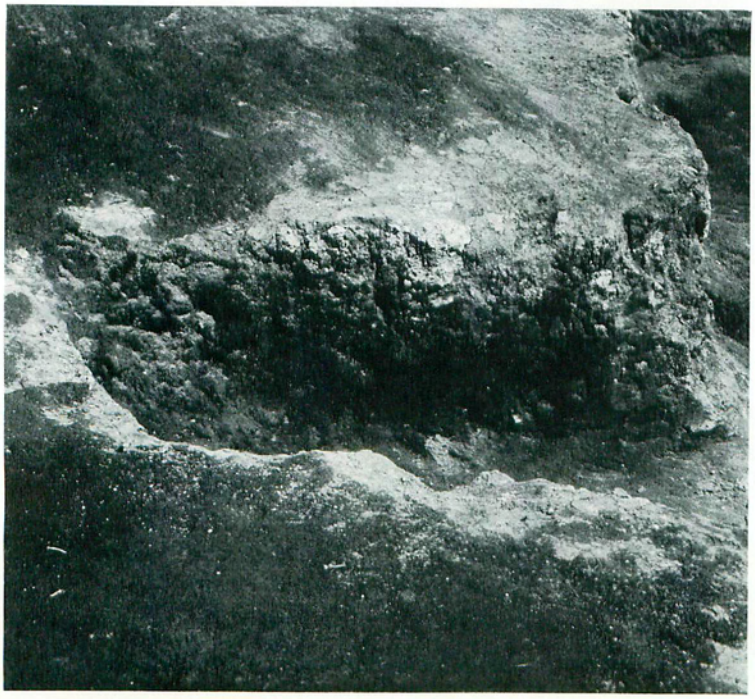
図　版　4



7. 第1号住居址カマド

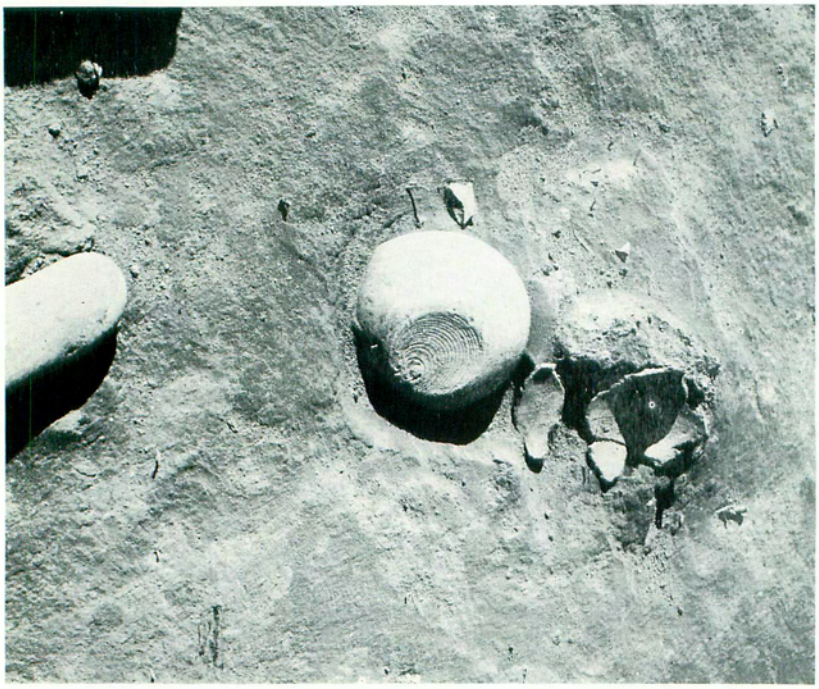
8. 第1号住居址遺物出土

9. 第1号住居址遺物出土状態

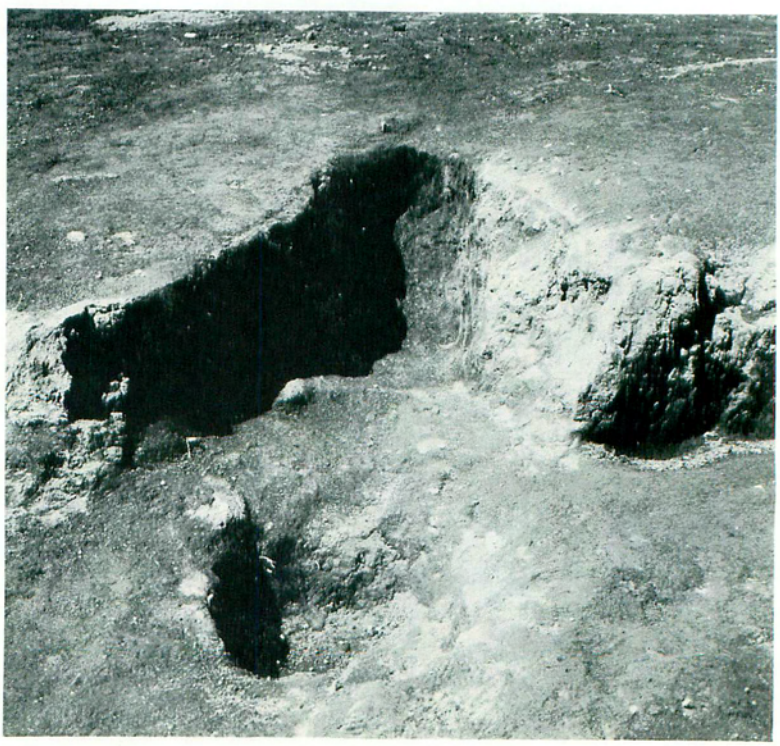


10. 第2号住居址カマド

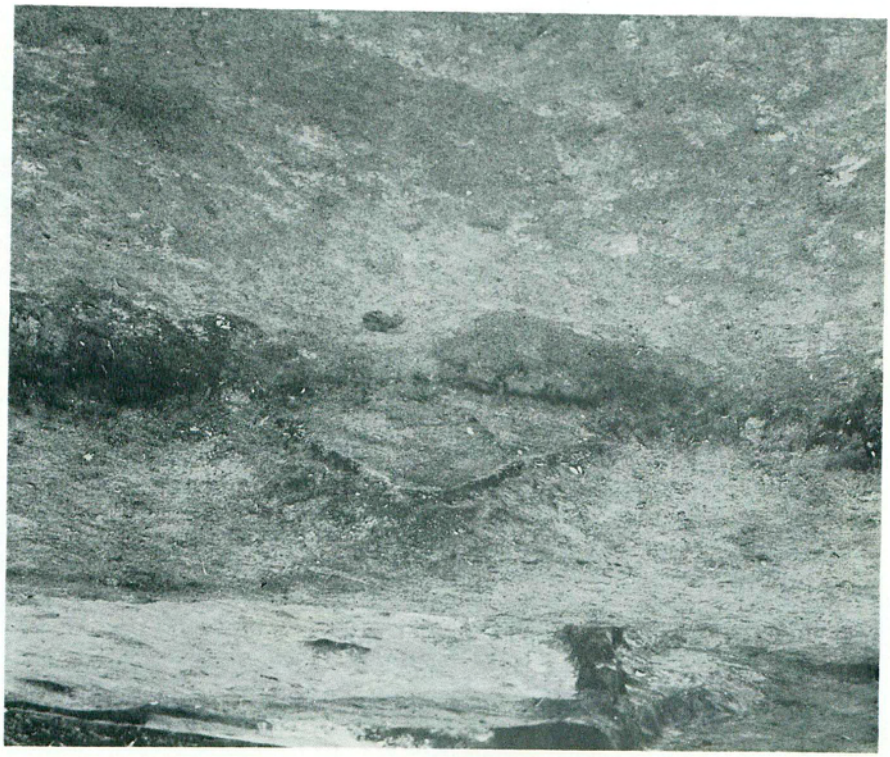
図　版　6



11. 第２号住居址出土遺物



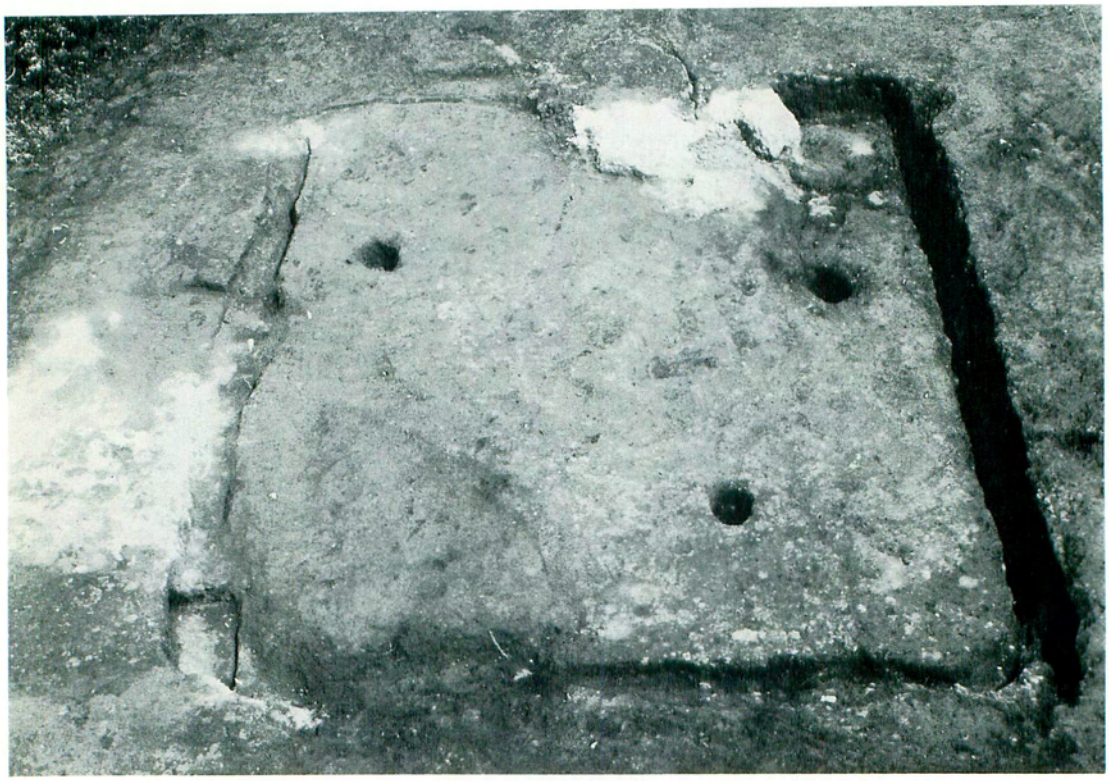
12. 第３号住居址カマド



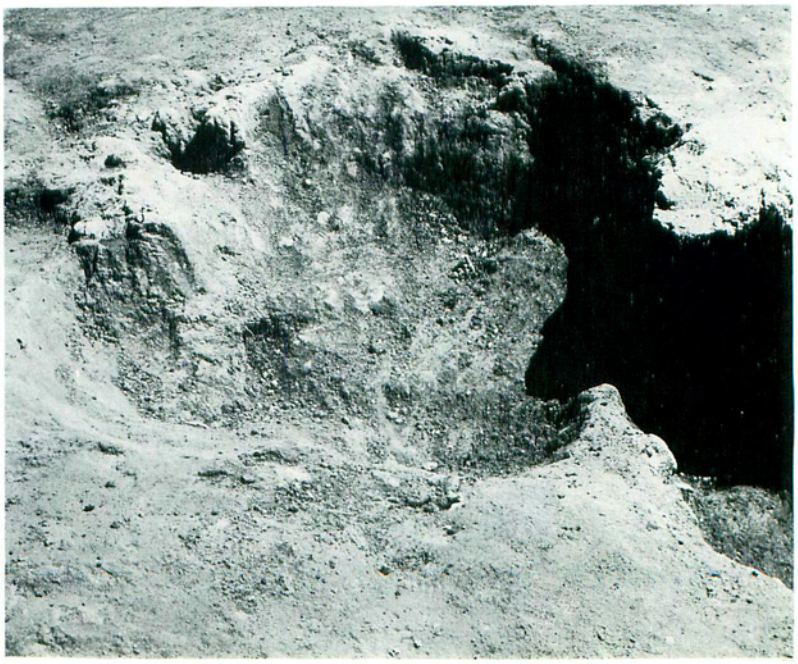
13. 第4号住居址

14. 第4号住居址
遺物出土

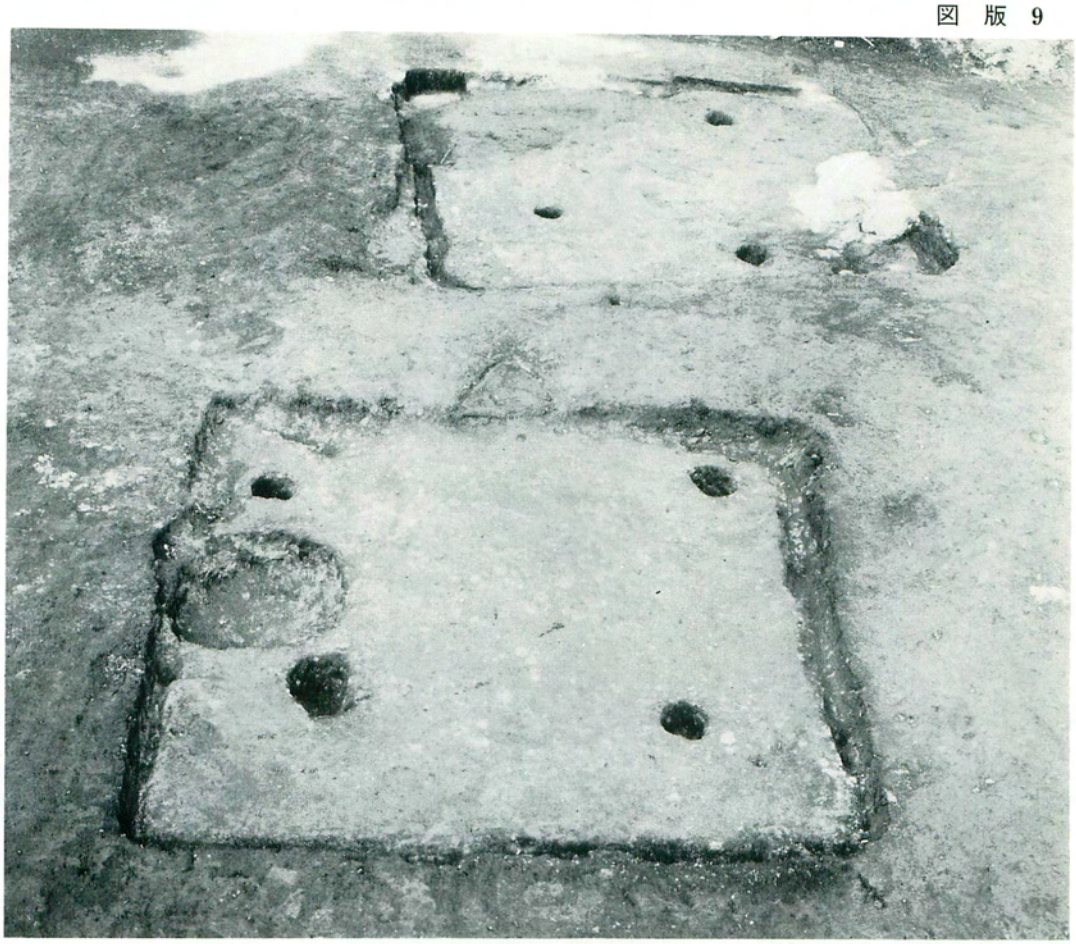
図　版　8



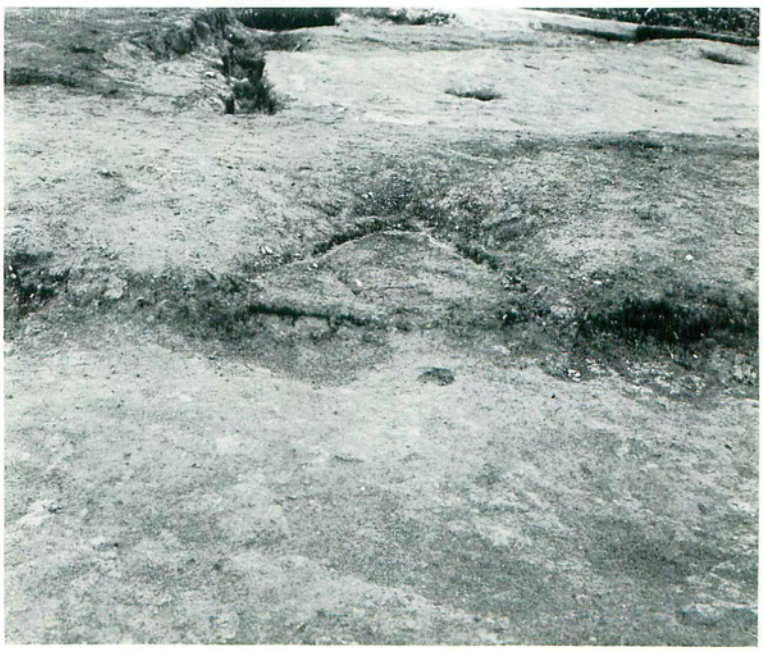
15. 第5号住居址



16. 第5号住居址カマド

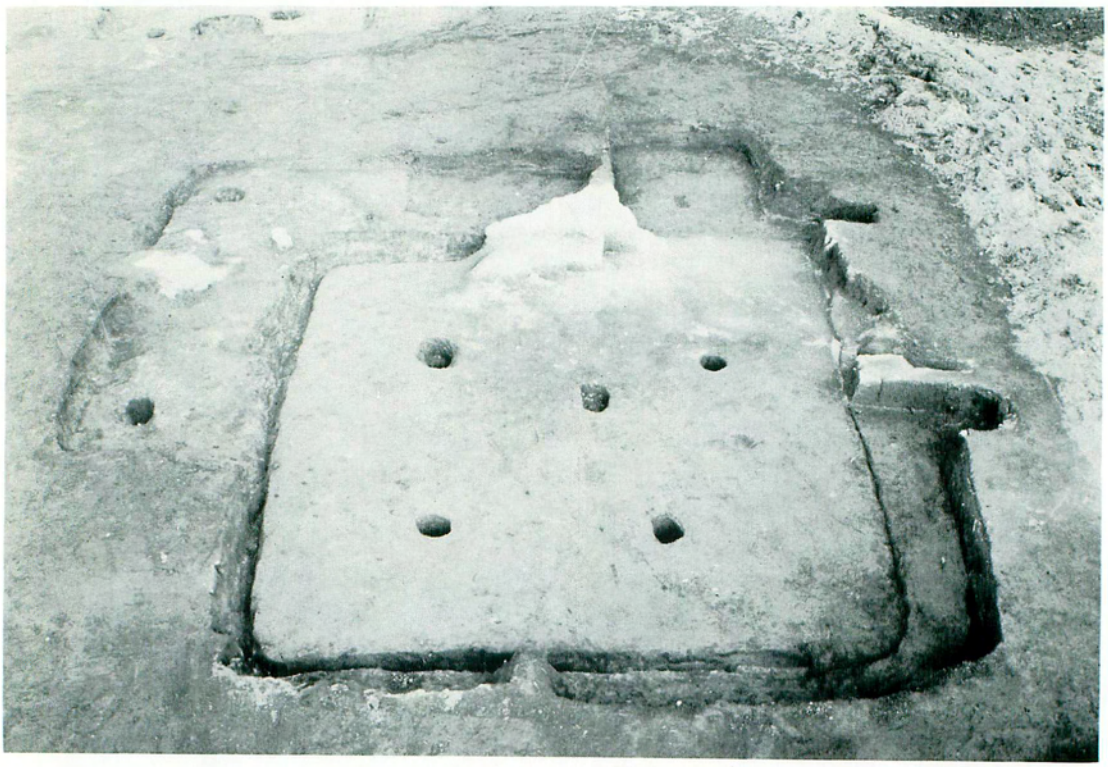


17. 第6号住居址



18. 第6号住居址カマド

図　版　10



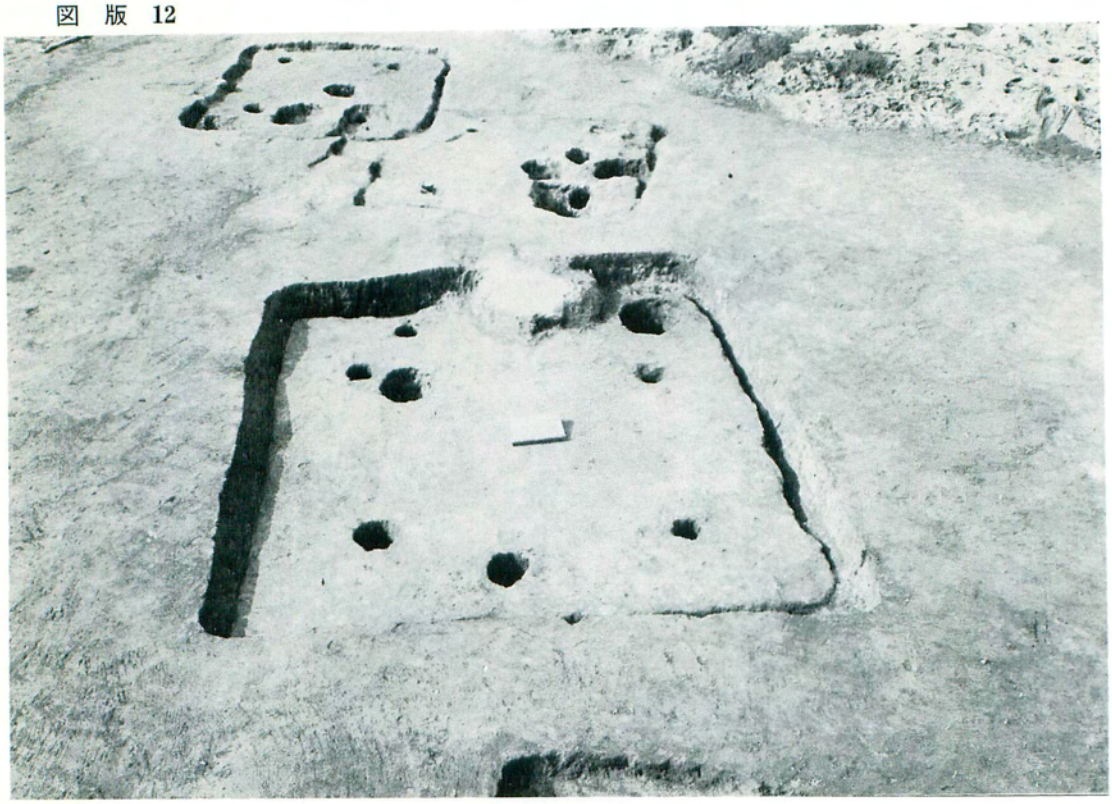
19. 第7・8号住居址

20. 第7・8号住居址カマド

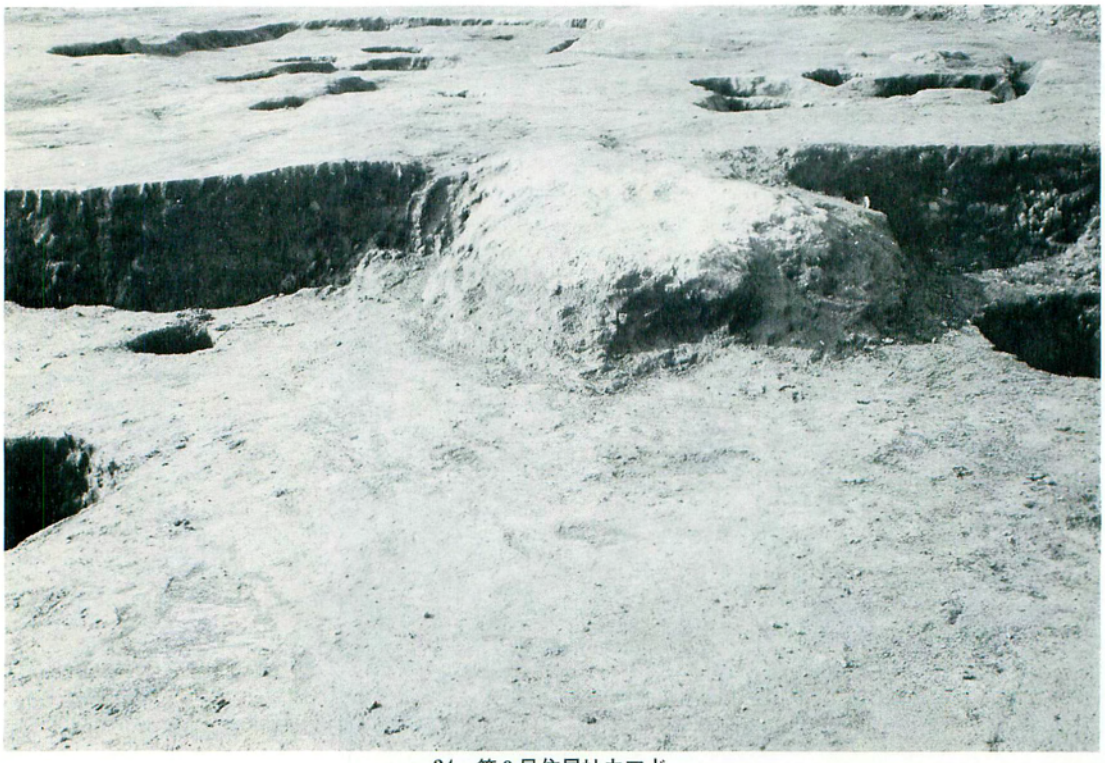
21. 第7号住居址カマド

22. 第8号住居址カマド

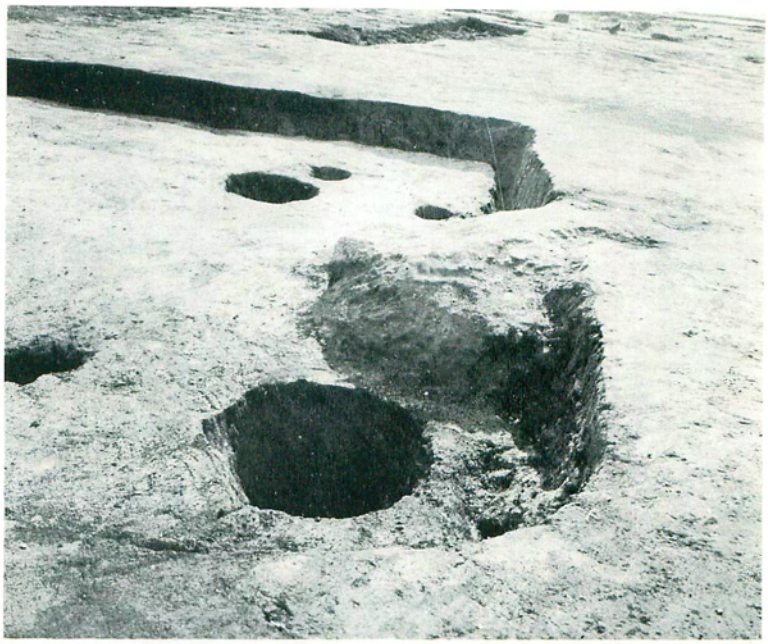
図　版　12



23. 第9号住居址



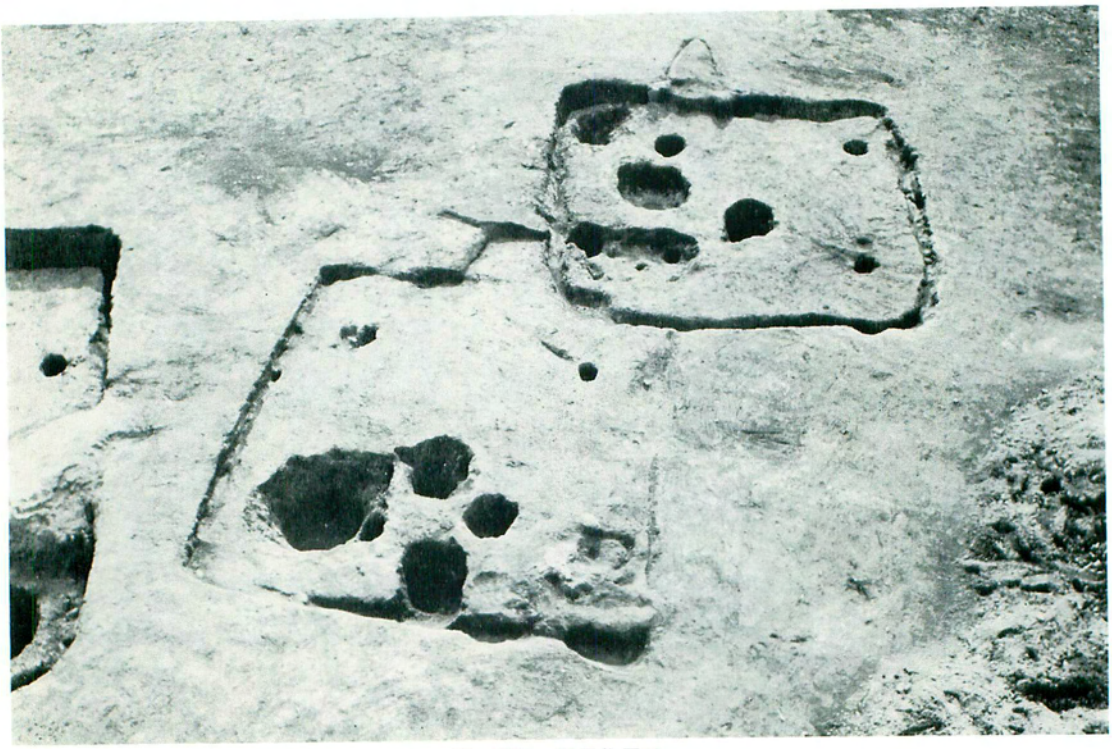
24. 第9号住居址カマド



25. 第9号住居址カマド

26. 第9号住居址カマド

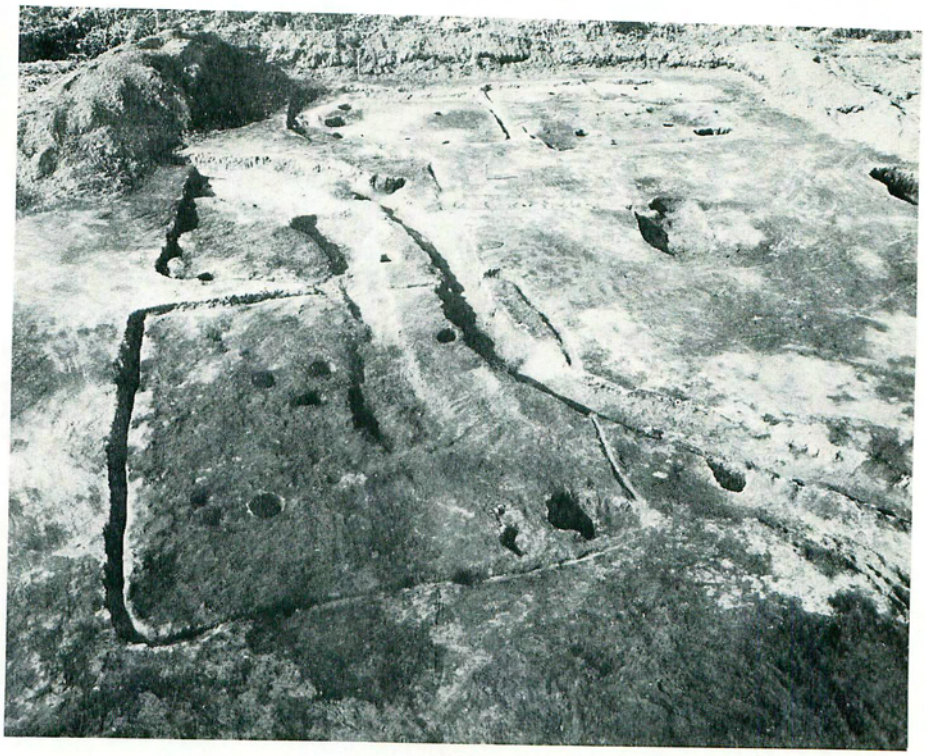
図　版　14

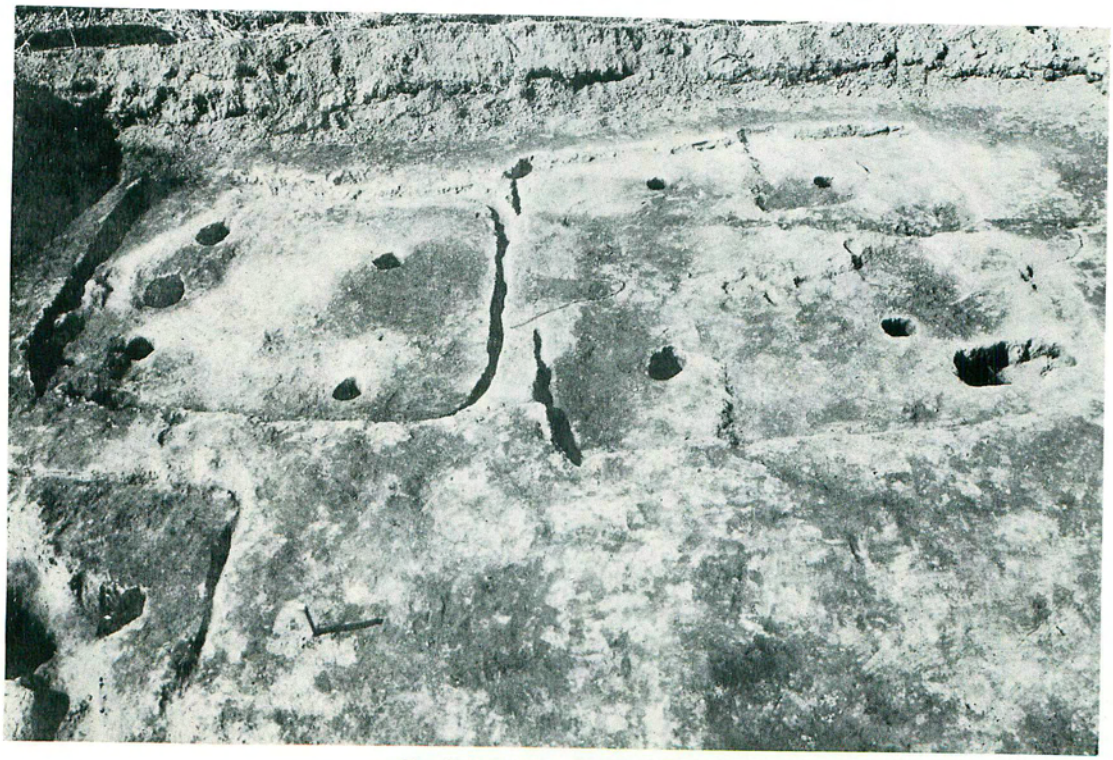


27. 第10・11号住居址

28. 第11号住居址カマド

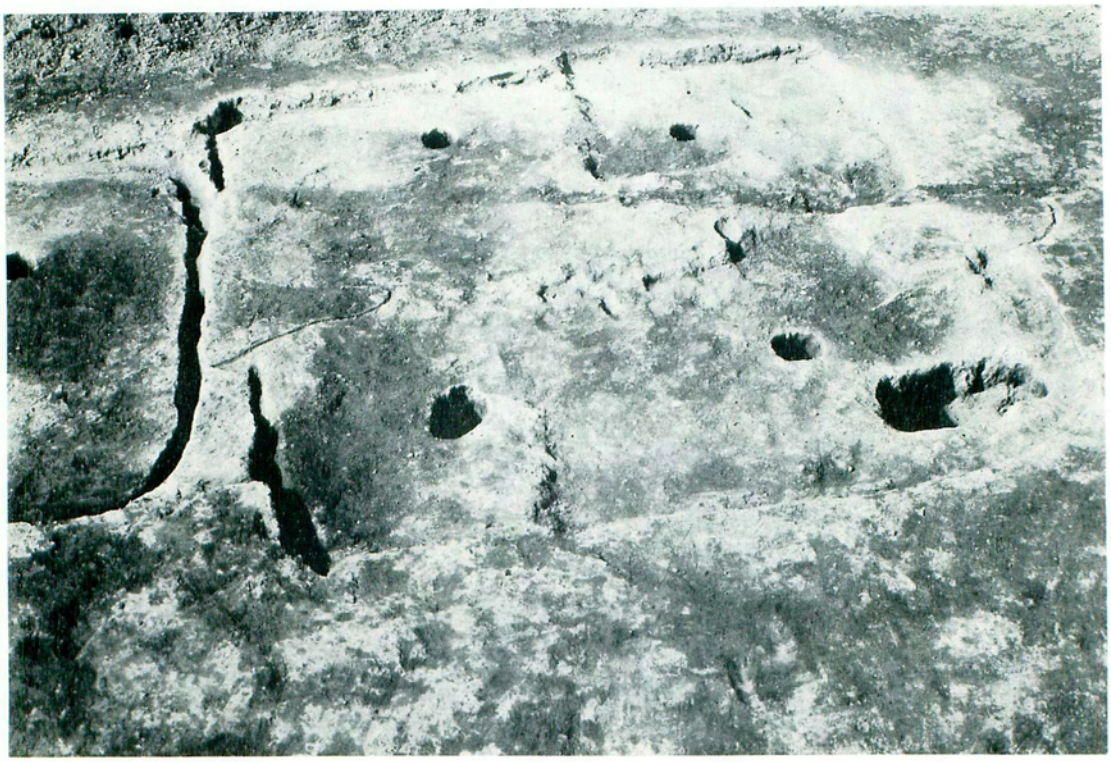
29. 中央部住居址群（手前より14号・13号，左15号，右12号）





30. 第15号（左）第12号住居址

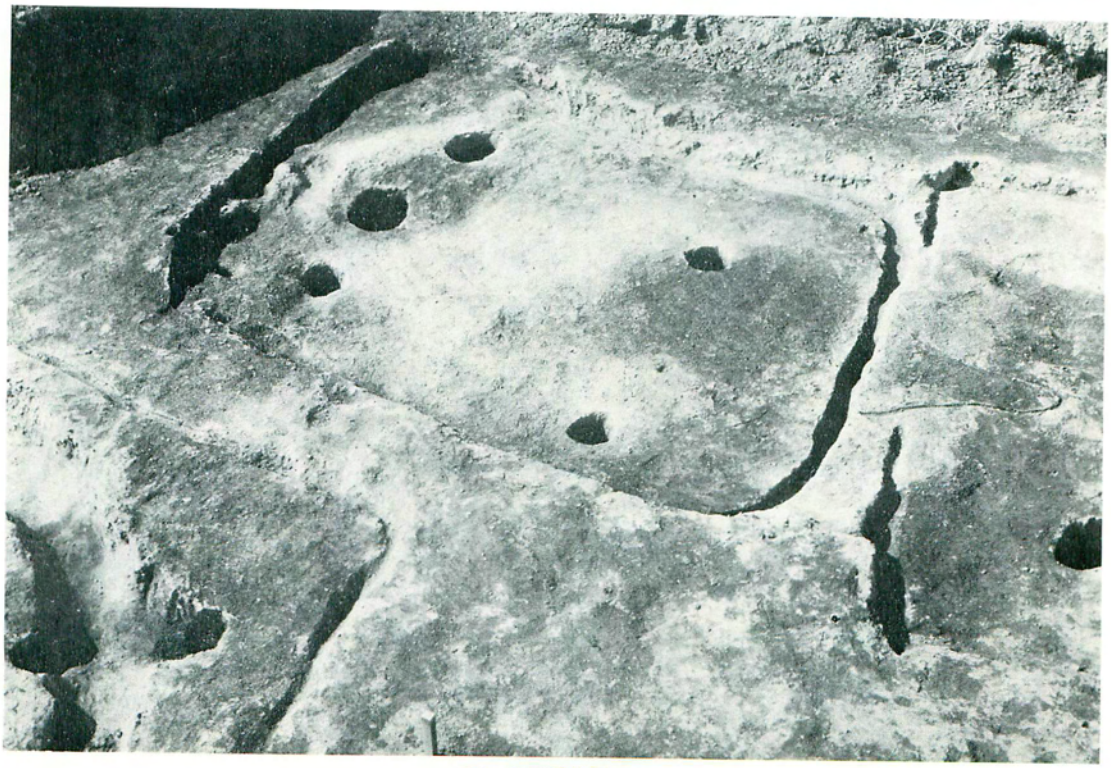
図　版　16



31. 第12号住居址

32. 第12号住居址カマド

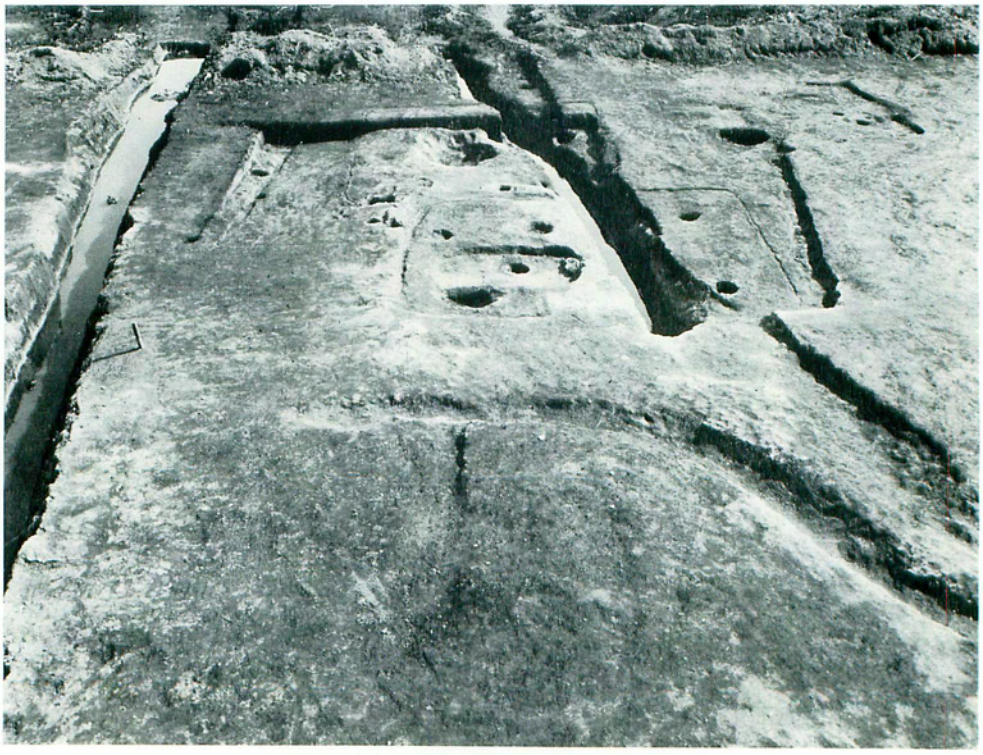
33. 第13号（右），第14号（左）住居址



34. 第15号住居址

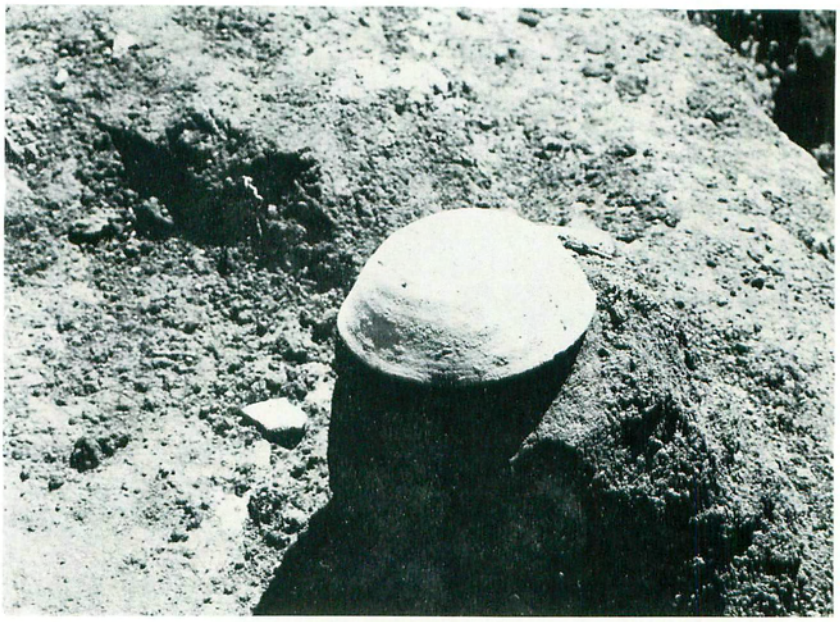
図　版　18

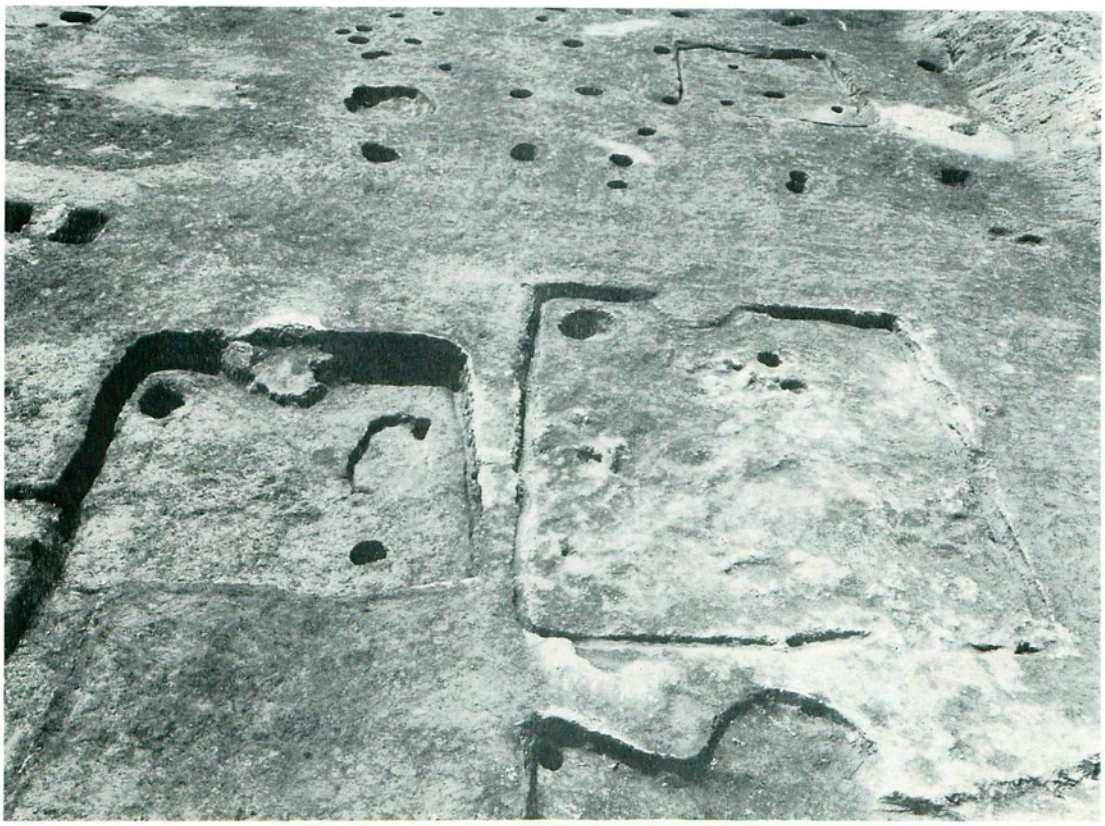
35. 第15号住居址カマド



36. 左から第１溝・第11号住居址，第25溝

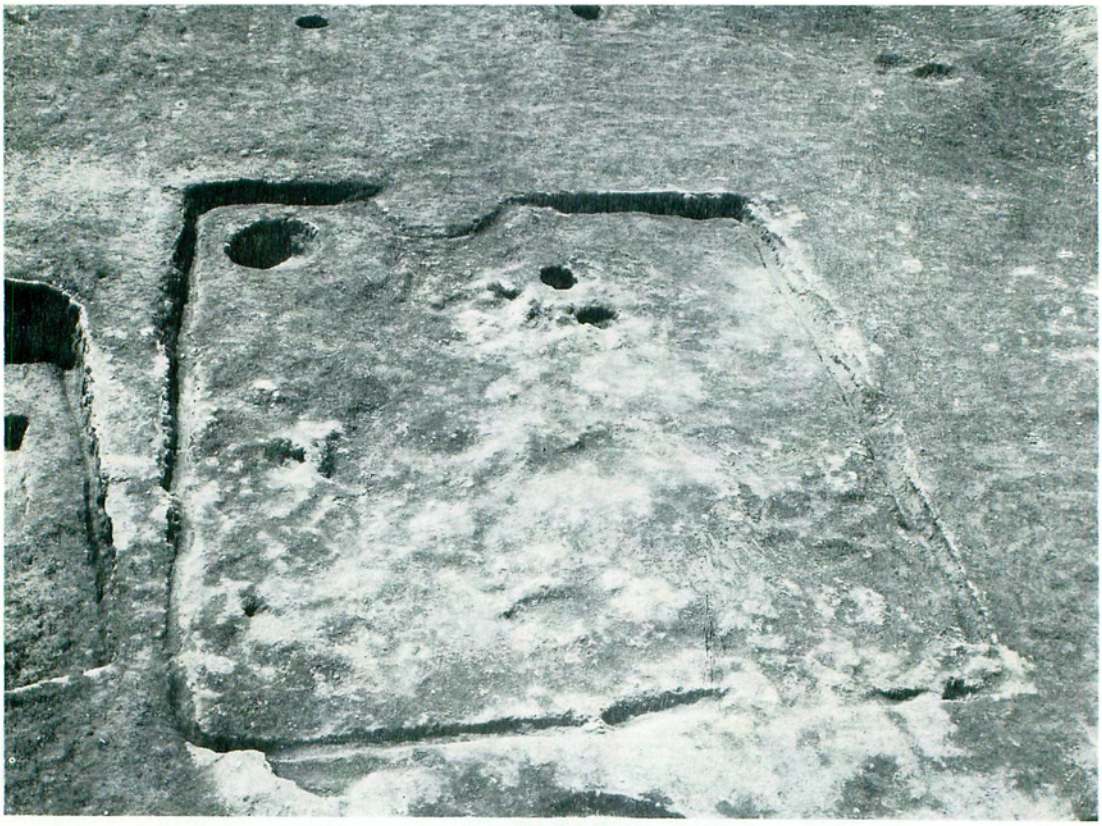
37. 第16号住居址
遺物出土



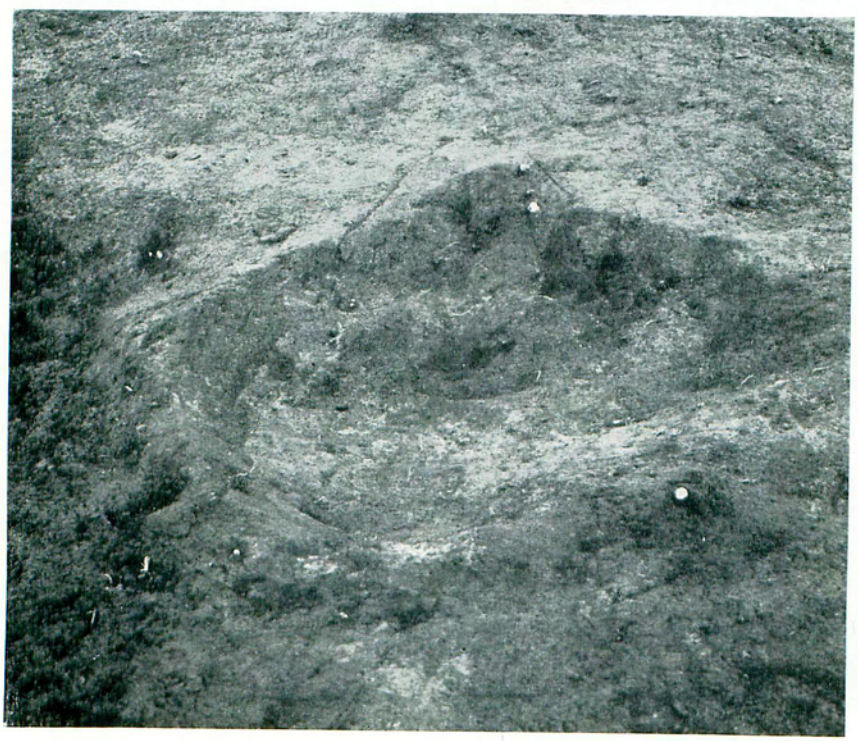


38. 西方遺構群（左）第28号，（右）第17号住居址

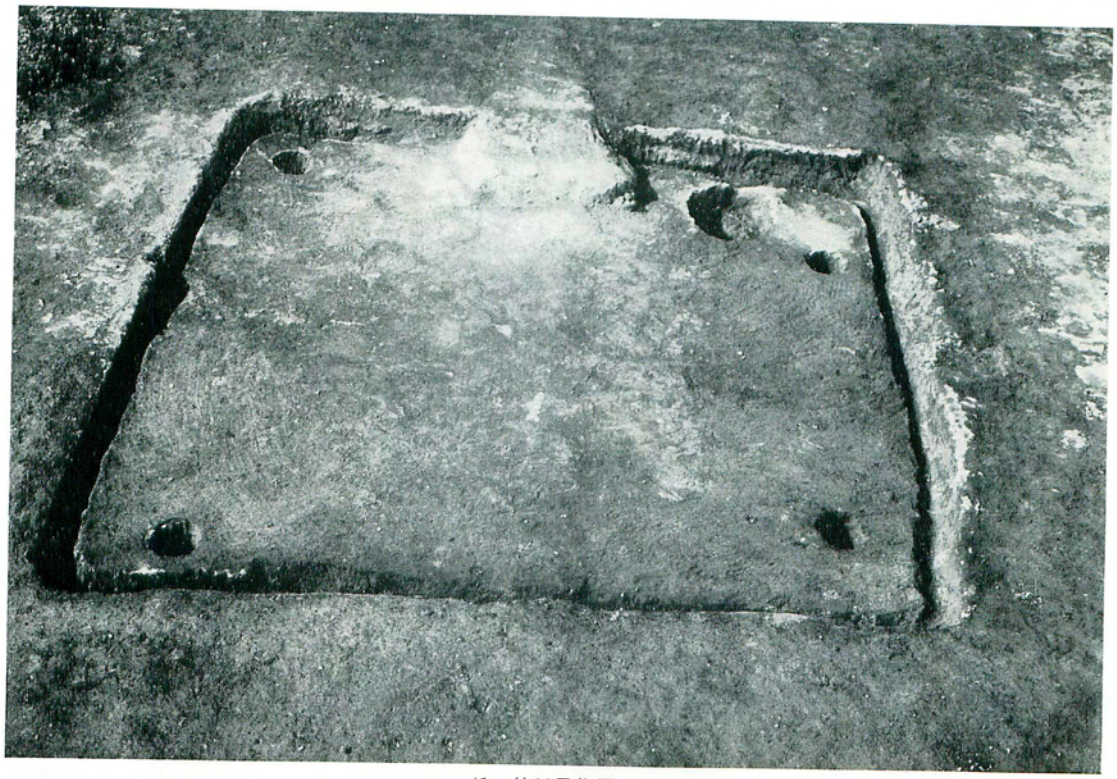
図　版　20



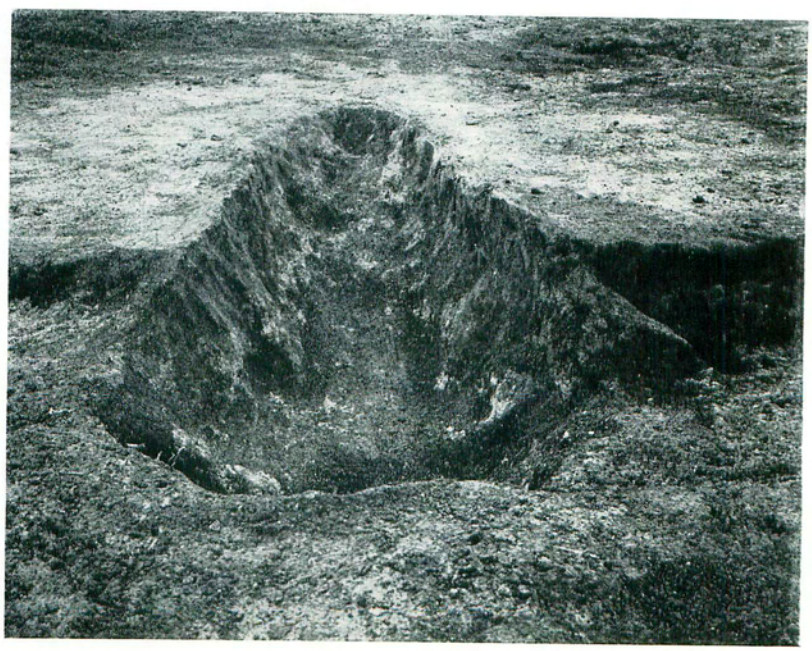
39. 第17号住居址



40. 第17号住居址カマド

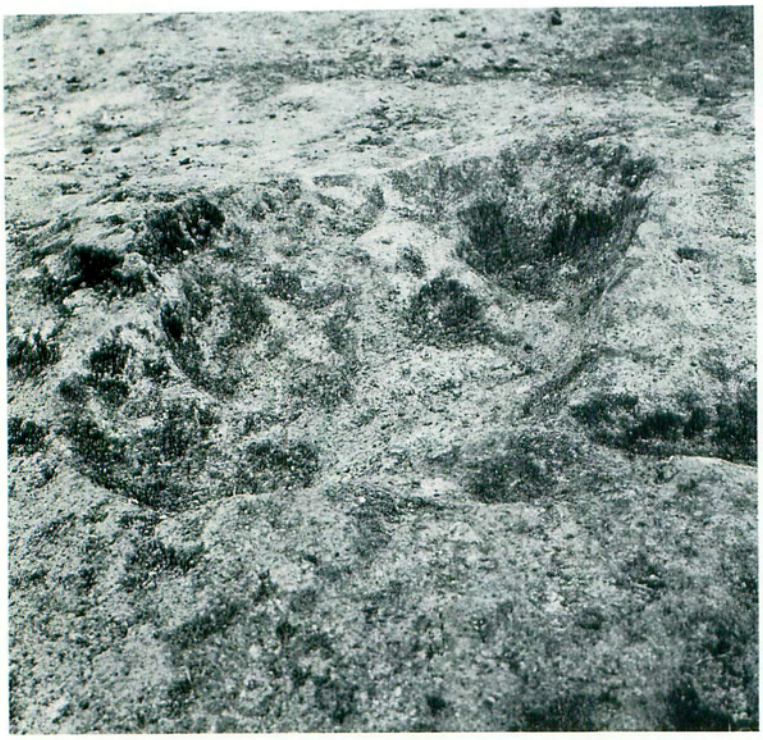


41. 第19号住居址



42. 第19号住居址カマド

図　版　22



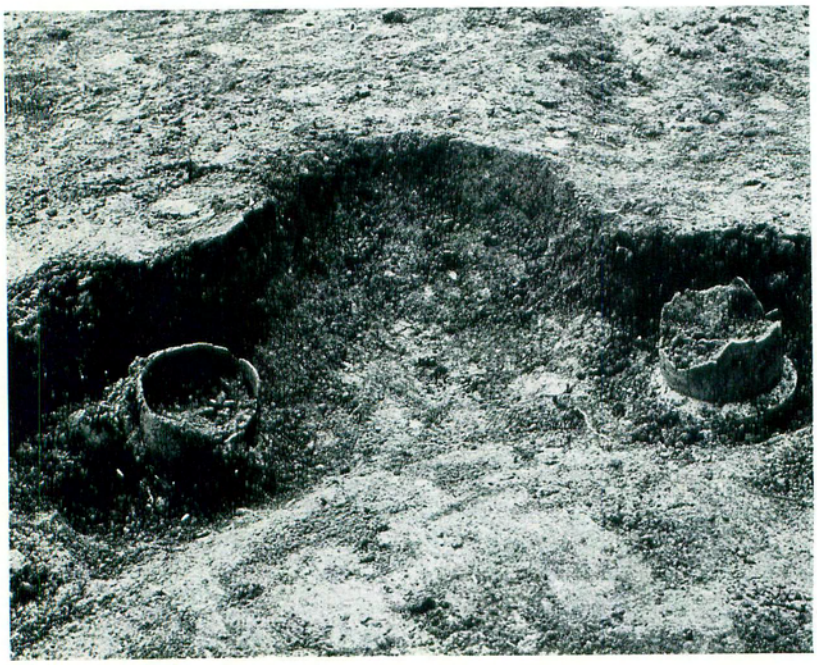
43. 第20号住居址東カマド

44. 第20号住居址
北カマド

45. 第20号住居址遺物出土状態

46. 第21号住居址円面硯出土状態

図　版　24



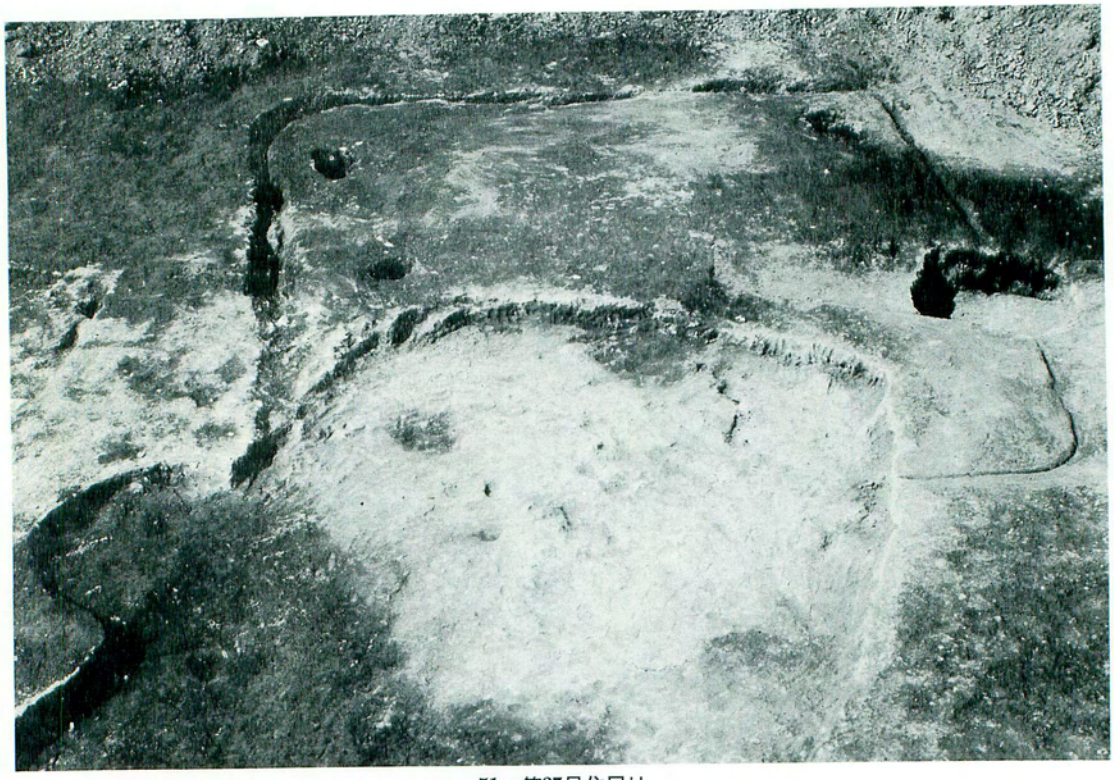
47. 第23号住居址カマド

48. 第24号住居址カマド

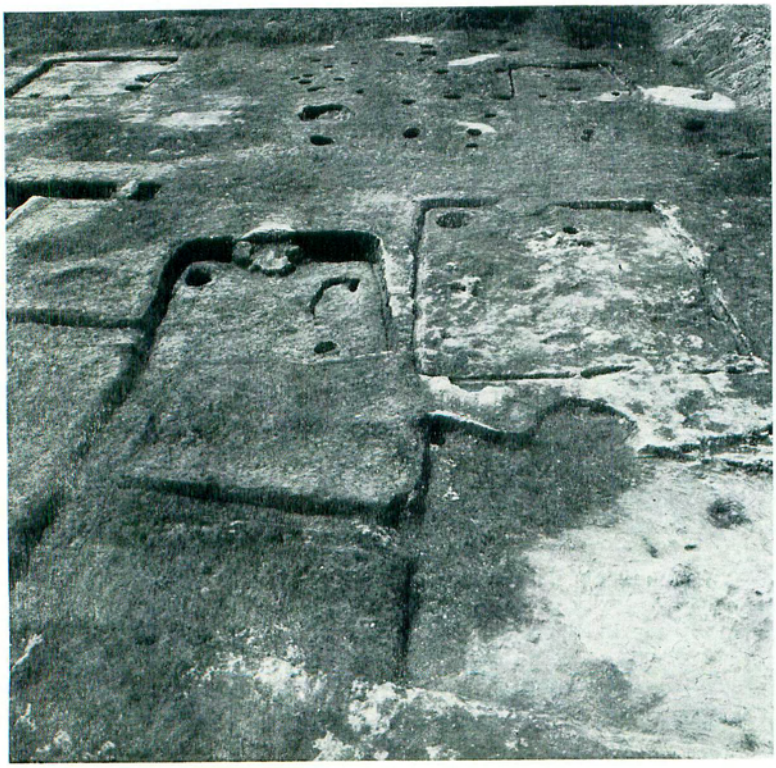
49. 第25号住居址・第２号井戸

50. 第25号住居址カマド

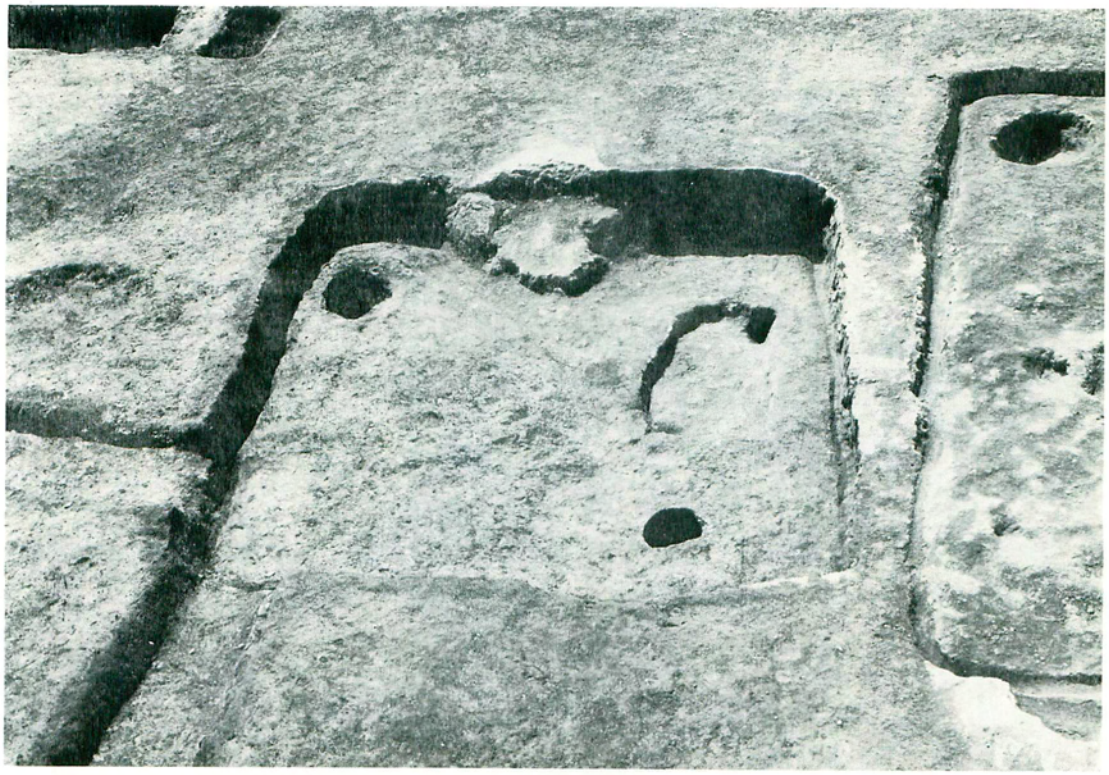
図　版　26



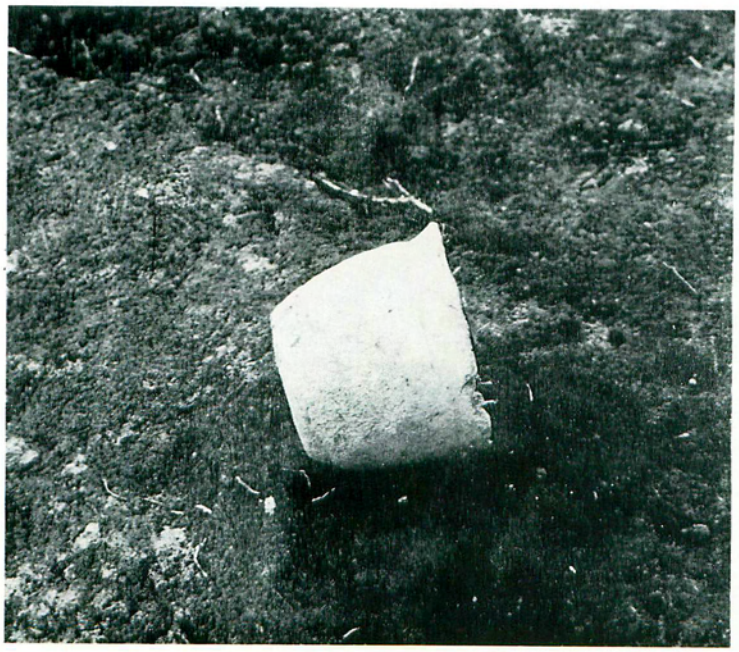
51. 第27号住居址



52. 西方住居址群

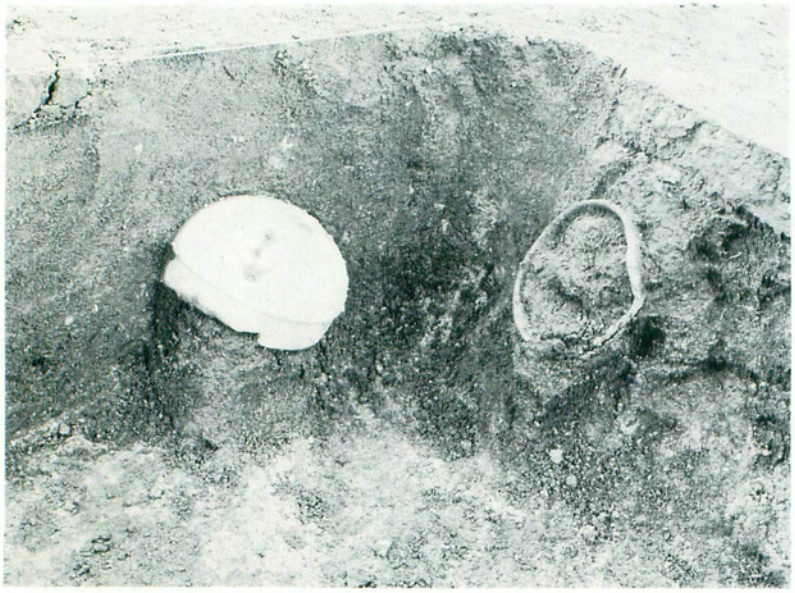


53. 第28号住居址



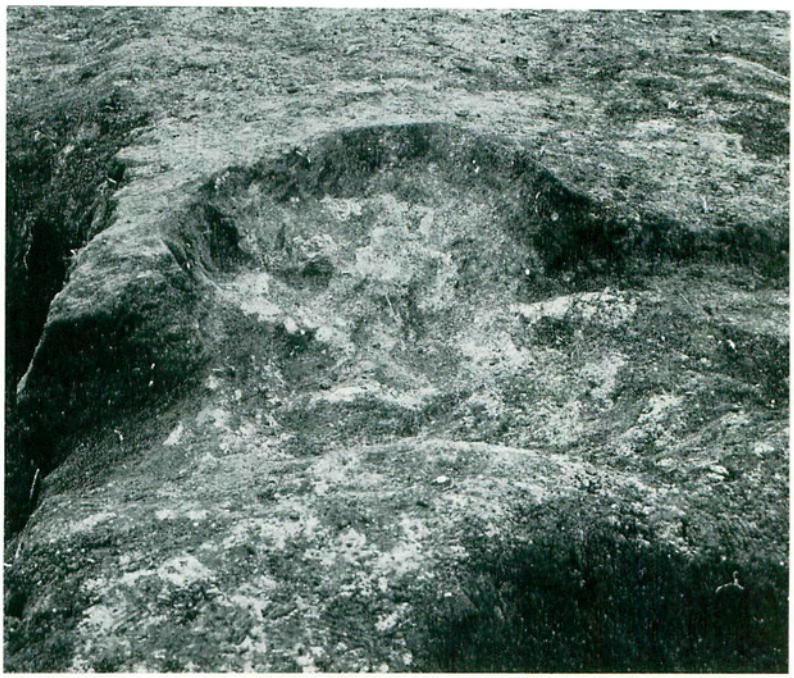
54. 第28号住居址遺物出土状態

図　版　28



55. 第28号住居址遺物出土状態

56. 第28号住居址カマド

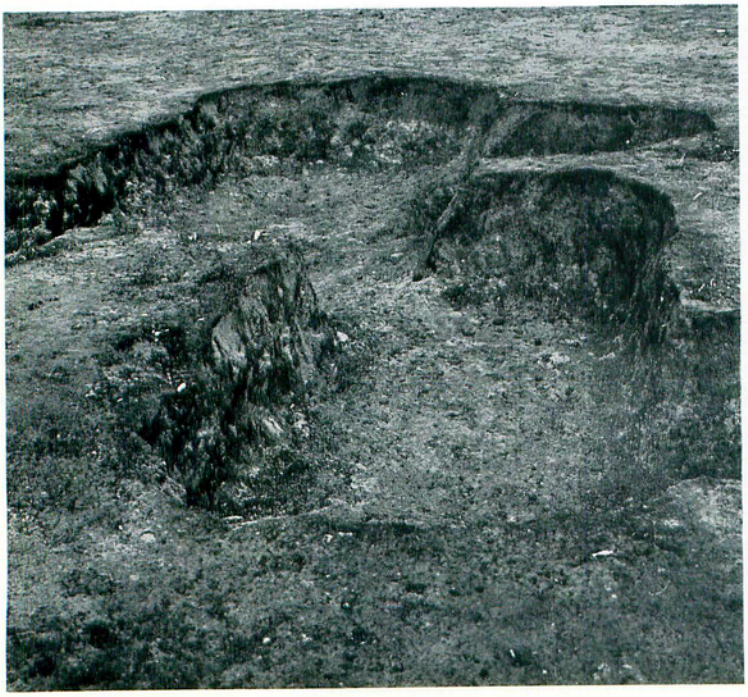


57. 第29号住居址カマド

58. 遺跡全景（西方より）

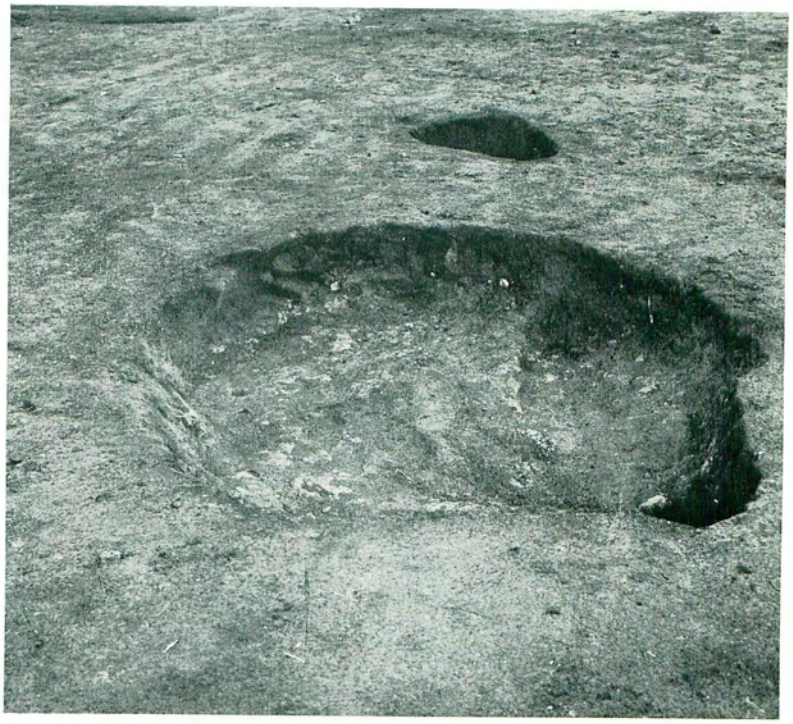
図　版　30

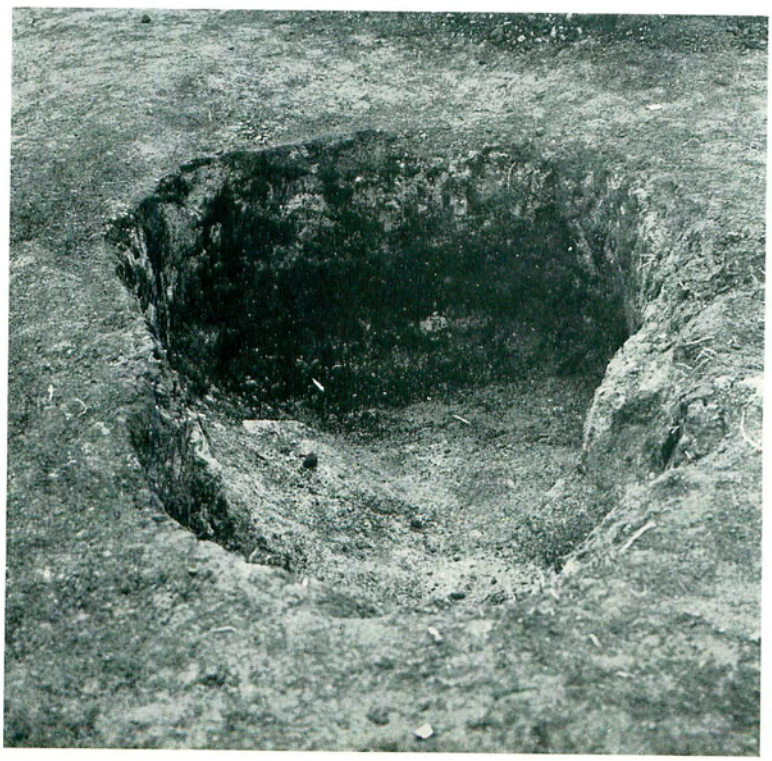
59. 第1土壙群（奥）第2土壙群（手前）



60. 第1土壙群

61. 土 壙

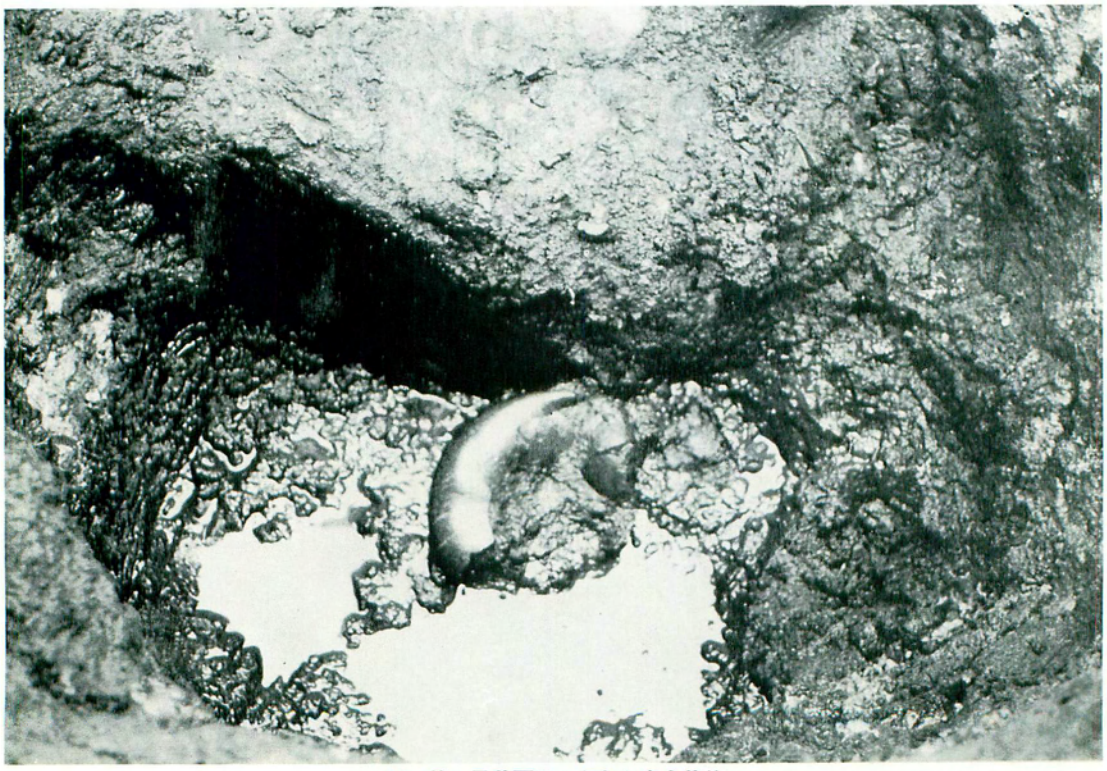




62. 土 壙

図　版　32

63. 第1号井戸

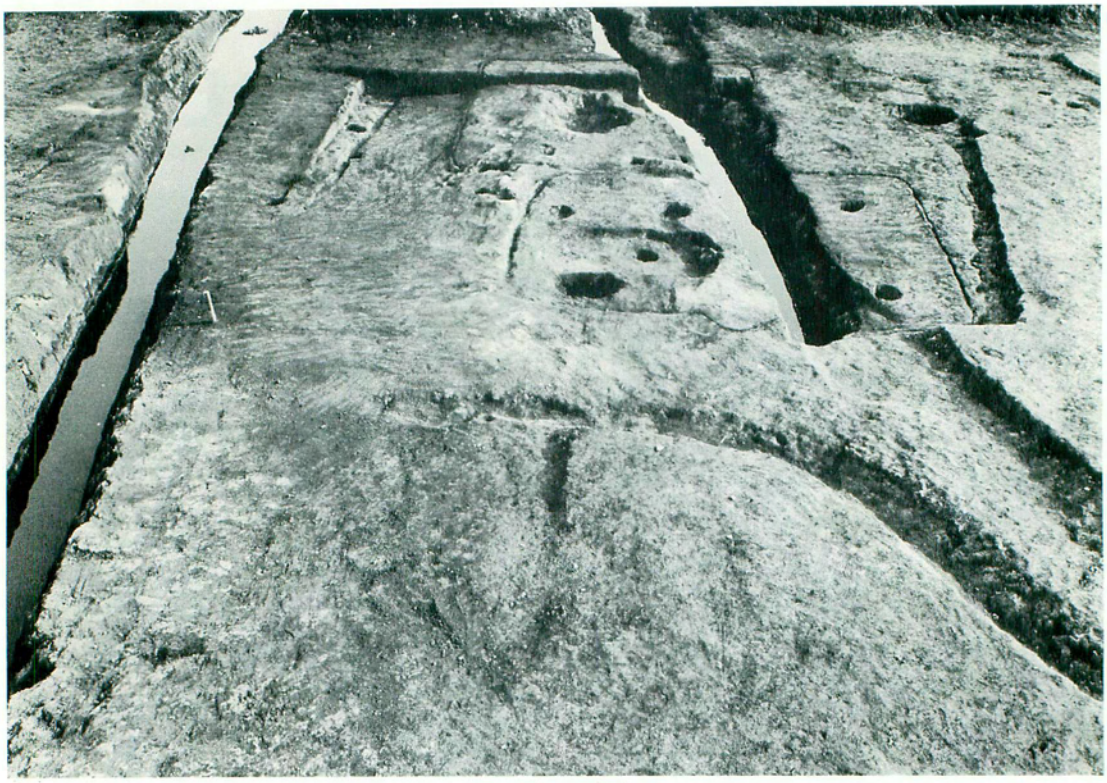


64. 第1号井戸ひょうたん出土状態

65. 第2号井戸

66. 第2号井戸板石塔婆出土状態

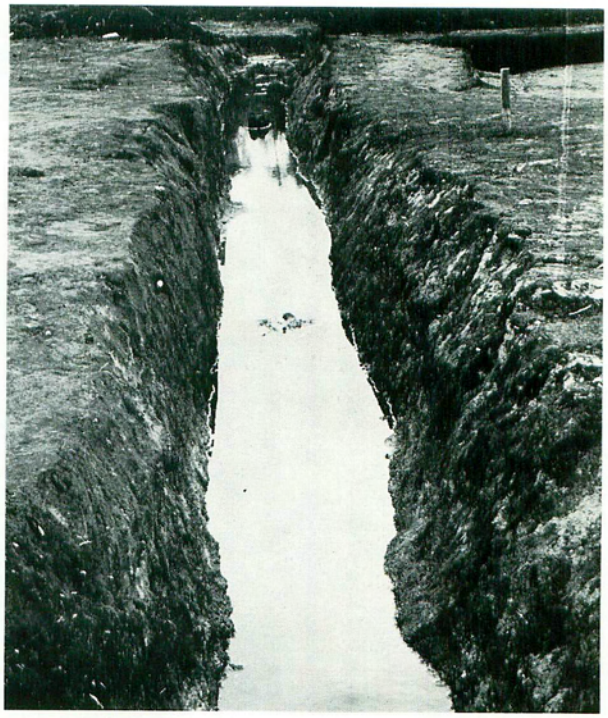
図　版　34

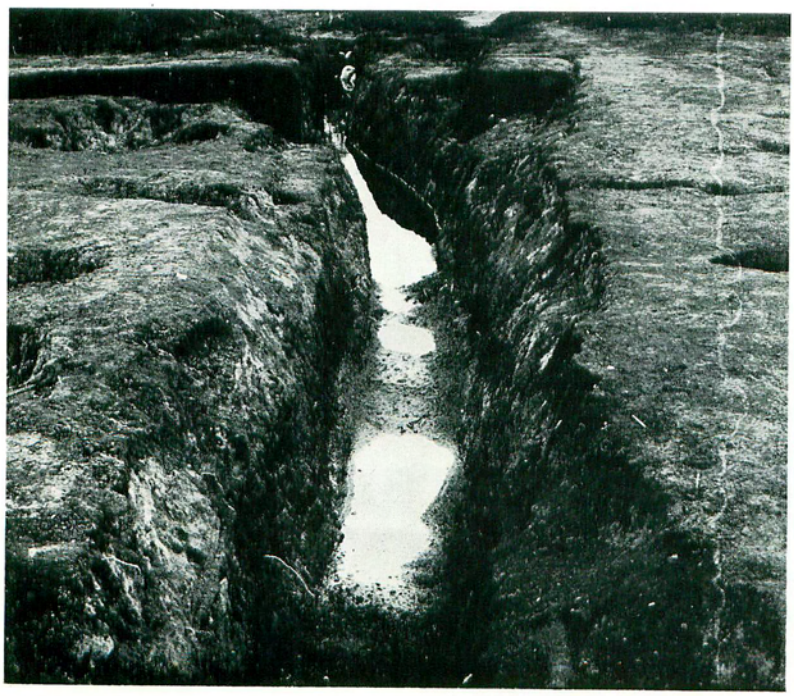


67. 第1・2号溝

68. 第1号溝

69. 第4号溝





70. 第2号溝

図　版　36

71. 第3号溝

72. 発掘風景

2住—5

2住—6

2住—7

2住—8

2住—10

2住—11

2住—12

3住—3

6住—3

6住—4

7住—10

16住—1

16住—2

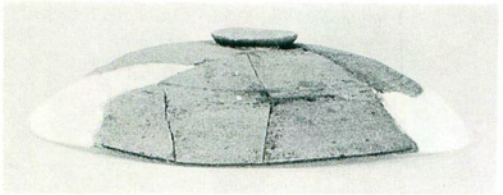
16住—3

21住—2

21住—3

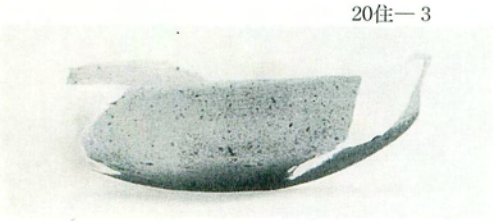
73. 岩比田遺跡出土遺物(1)　須恵器

図　版　38

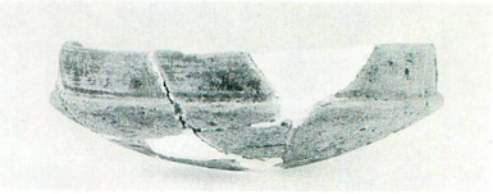


20住—3

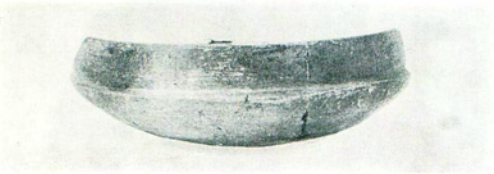
6住—2



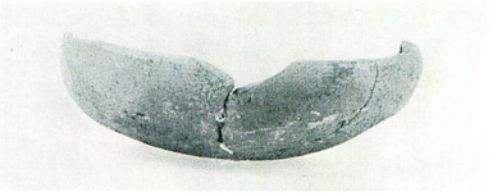
10住—4



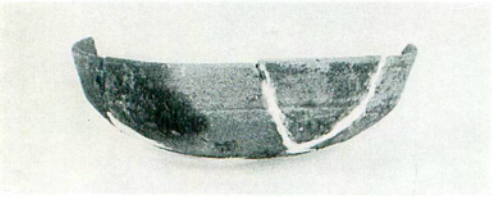
10住—2



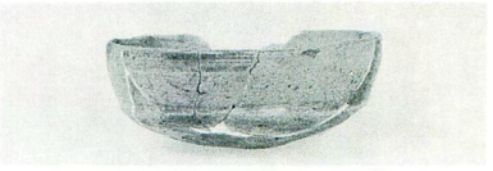
10住—3



20住—2

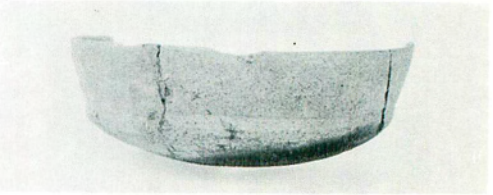


23住—4

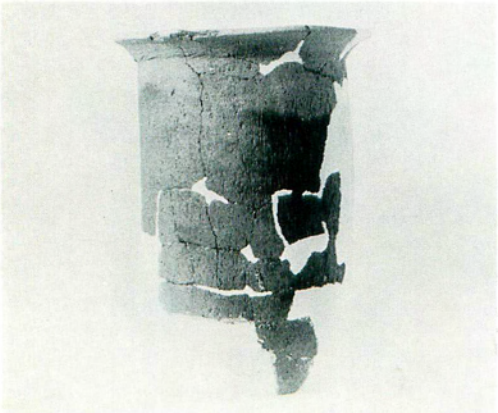


28住—1

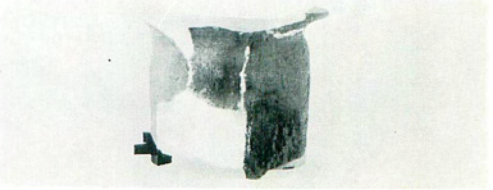
28住—2



井戸—1



1住—1



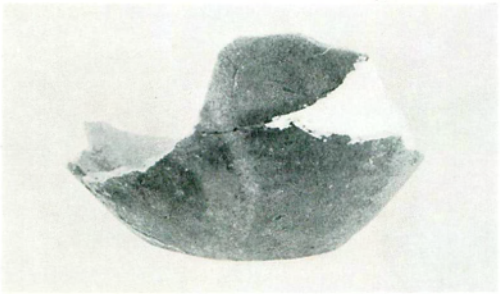
1住—2

1住—5

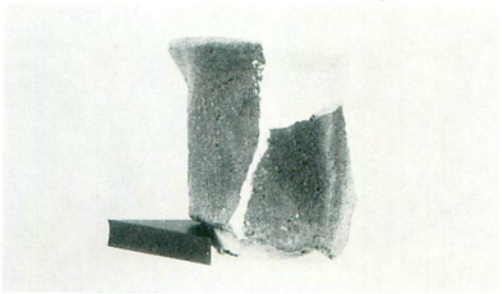
74. 岩比田遺跡出土遺物(2)　須恵器・土師器

1 住— 4

1 住— 9



1 住— 3



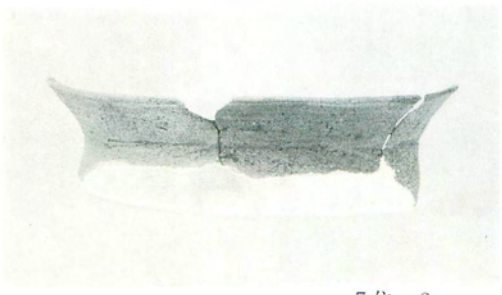
7 住—10

9 住— 1

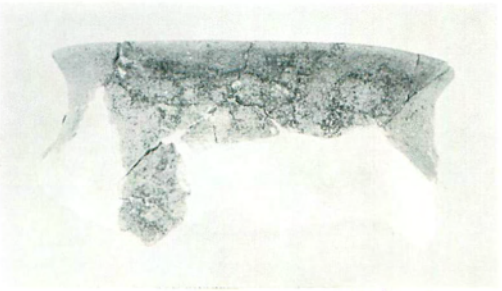
20住— 1

23住— 1

28住— 3



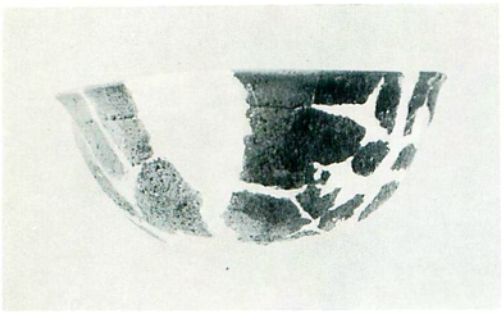
7 住— 2



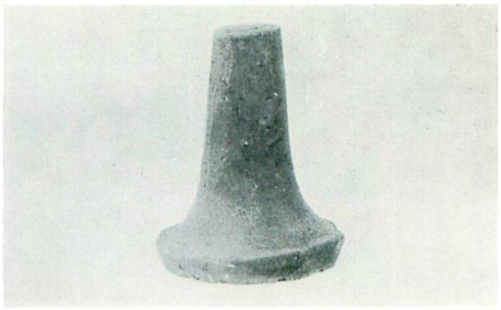
21住— 1

75. 岩比田遺跡出土遺物(3)　土師器

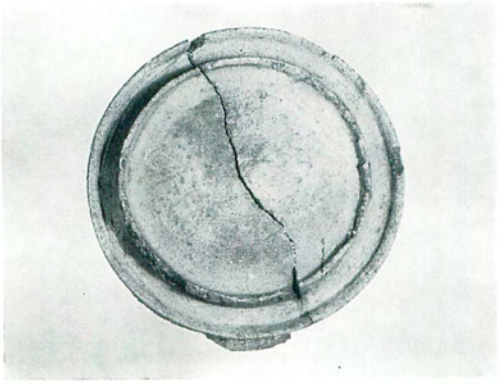
図　版　40



11住—2

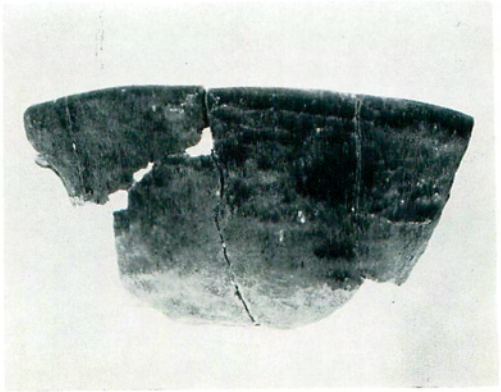


井戸—2



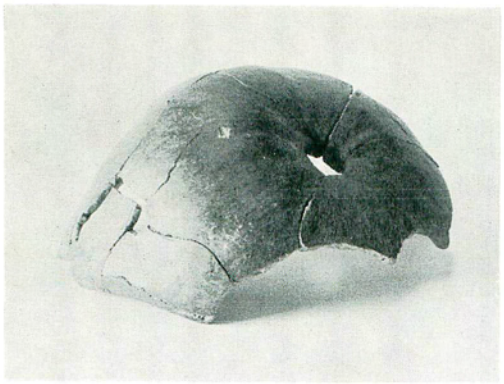
21住—4

井戸2—3



井戸2—4

76. 岩比田遺跡出土遺物(4)　土師器・支柱・円面硯・焙烙

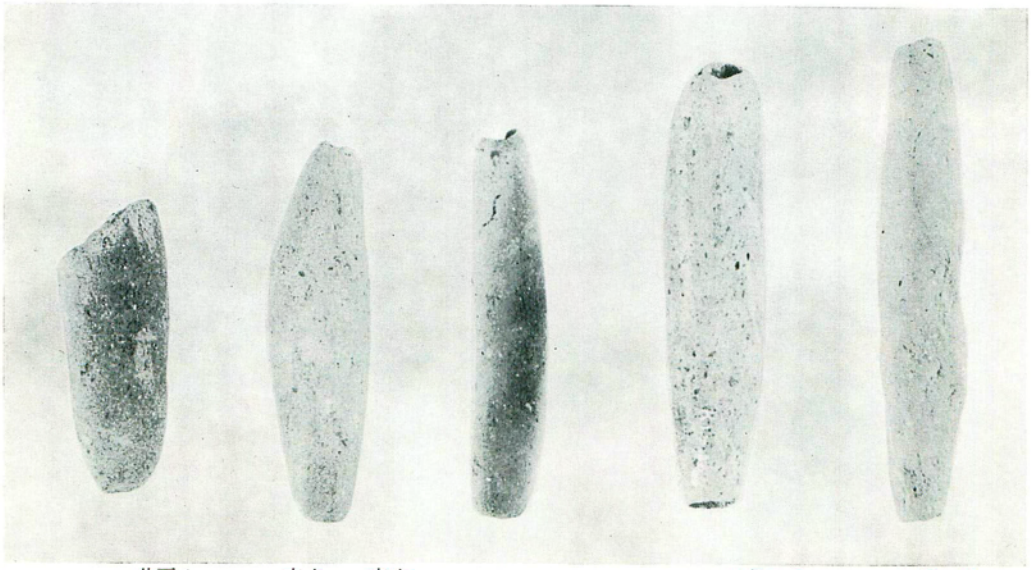


井戸 2

井戸 2

井戸 2

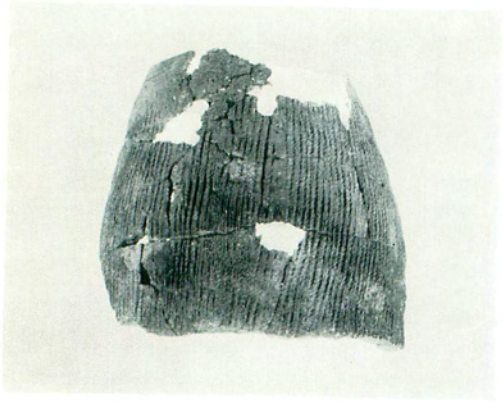
井戸 2



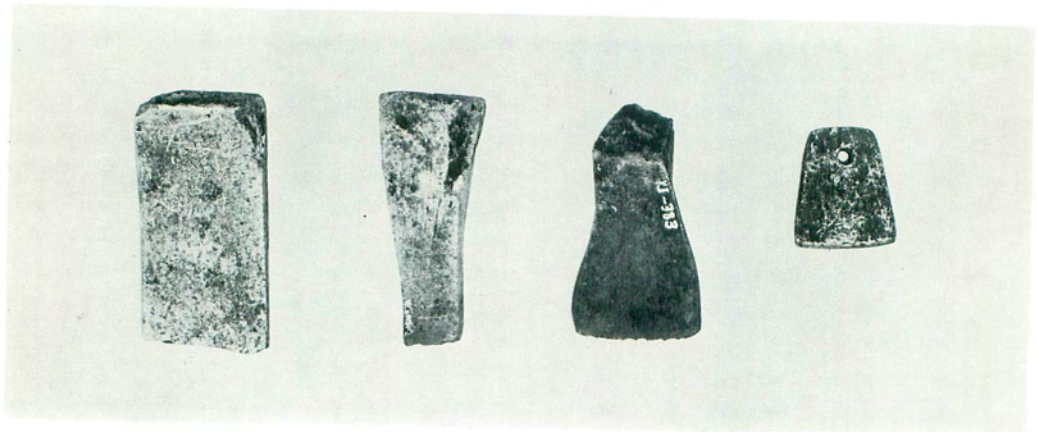
井戸 1　　表土　　表土　　9 住— 5　　1 住— 8

77. 岩比田遺跡出土遺物(5)　ひょうたん・板石塔婆・土錘

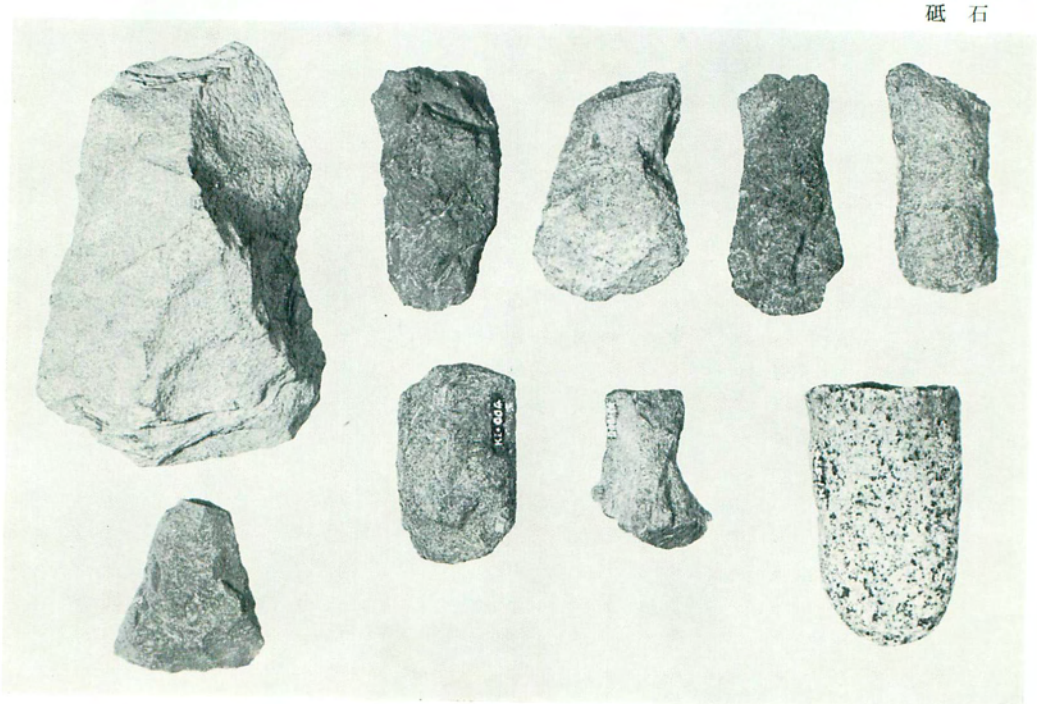
図　版　42



縄文土器



砥　石



石　器

78. 岩比田遺跡出土遺物(6)　縄文土器・石器（砥石・石斧）

本報告書の原稿は，1982年にはほとんど完成していたが，発行が遅延していた。すでに原稿を提出した執筆者と，江南町の教育委員会には種々御迷惑をお掛けしたことを，心からお詫びしたい。同時に本報告書で，執筆者が参照したすべての資料や考察が，1982年までの知見に基づくものであることを明記しておきたい。

1986年９月　金井塚良一

岩比田

――埼玉県大里郡江南村岩比田遺跡発掘調査報告――

印　刷　1983年10月24日
発　行　1983年10月30日

編　集　金井塚良一　小渕良樹
発　行　岩比田遺跡調査会
印　刷　山　陽　印　刷